

令和5年(2023年)度  
三重大学教育学部  
学校連携活動報告書

一身田・橋北校区連携校園

附属学校園との連携活動

## はじめに

今年度から、地域連携推進委員会は、学校連携推進委員会という新しい名称の委員会となりました。名称が変わりましたが、昨年度に引き続き、今年度も多くのみなさまからご指導・ご支援を頂きましたことに、心より感謝申し上げます。

令和5年度（2023年度）は、世界的に猛威を奮った新型コロナウイルス感染症が第5類に移行し、社会全体が次第に日常に戻りつつある状況下において、一身田・橋北校区連携校園と学部附属校園との連携活動が実施されることとなりました。その連携活動の成果を、この連携活動報告書という形で発刊させていただくことをたいへん嬉しく思っております。この場を借りて、さまざまな連携活動の取り組みにご協力いただきました一身田・橋北校区の小中学校・園、津市教育委員会、学部附属校園および教育学部のみなさまに厚く御礼申し上げます。また、本報告書の作成にあたり、お忙しい中ご協力いただきましたみなさま方にも、重ねて厚く御礼申し上げます。昨年度より、連携活動報告書を学部ウェブサイトにて公開させていただいておりますが、この活動内容を、多くのみなさま方にご覧いただければ幸いに存じます。

昨年度に引き続き、今年度も、これまで別々に開催されてきた一身田・橋北校区連携校園と学部附属校園との連携活動報告会（シンポジウム）を一体化して開催させていただきました。昨年度は「教育実習」をテーマとして取り上げましたが、今年度は「これからの教員養成を考える」をテーマとして、学部教員、連携校園教員にそれぞれの立場からお話をさせていただきました。教員採用をめぐるさまざまな現状を踏まえ、これからの教員養成のあり方について、理解を深めるとともに、活発な意見交換ができましたことをありがたく思っております。

最後になりましたが、附属教職支援センター総合支援室分室の事務補佐員の山田志穂さんには、今年度もまた、連携校・園との連携活動に関わる連絡調整や取りまとめをはじめ、報告会での事務作業、本報告書の作成等にあたり、多大なるお仕事をこなしていただきました。迅速かつ細やかな心配りでサポートをしていただき、全委員が無事に業務を遂行することができました。厚く御礼申し上げます。

今後とも、連携活動に関しまして、みなさま方からご理解とお力添えを賜いますなら、たいへんありがたく存じます。まことにありがとうございました。

三重大学教育学部 学校連携推進委員会 委員長 金子 淳

# 目次

## はじめに

### 第1部 一身田・橋北校区連携活動

一身田・橋北校区連携活動について.....	2
活動一覧.....	3

#### I 教育学部からの報告

1. 数学教育.....	7
2. 情報教育.....	12
3. 理科教育.....	21
4. 音楽教育.....	23
5. 美術教育.....	25
6. 保健体育.....	28
7. 技術・ものづくり教育.....	31
8. 家政教育.....	32
9. 英語教育.....	35
教育実習.....	39

#### II 一身田・橋北校区連携校園からの報告

1. 南立誠幼稚園.....	41
2. 栗真小学校.....	44
3. 白塚小学校.....	50
4. 一身田小学校.....	51
5. 北立誠小学校.....	55
6. 南立誠小学校.....	58
7. 西が丘小学校.....	61
8. 一身田中学校.....	64
9. 橋北中学校.....	69

### 第2部 附属学校連携活動

附属学校連携活動について.....	72
活動一覧.....	73

#### I 教育学部からの報告

1. 情報教育.....	77
2. 理科教育.....	80
3. 音楽教育.....	83
4. 美術教育.....	84
5. 保健体育.....	86
6. 技術・ものづくり教育.....	89
7. 家政教育.....	94
8. 英語教育.....	100
9. 幼児教育.....	102

#### II 附属学校園からの報告

1. 附属幼稚園.....	109
2. 附属小学校.....	117
3. 附属中学校.....	124
4. 附属特別支援学校.....	132

### 第3部 地域連携シンポジウム

これからの教員養成を考える.....	135
--------------------	-----

### 第4部 学生アンケート

取り組みの成果と検証.....	185
-----------------	-----

# 第1部

## 一身田・橋北校区連携活動



## 一身田・橋北校区連携活動について

三重大学に隣接する一身田・橋北校区と教育学部との連携協力は、平成18年（2006年）に始まり、今年度で18年目になりました。このように長期にわたる連携活動を今年度も中断することなく継続でき、この活動の意義や必要性を改めて認識するところでもあります。

一身田・橋北校区連携校との活動は、三重大学教育学部・研究科における教育内容の特色の一つとして、教育実践力の向上を目指すカリキュラム構成があり、教育実践力は、教育現場での体験を通して養成されるものと考えています。

一身田・橋北校区連携校・園

一身田中学校区

一身田小学校・白塚小学校・栗真小学校・一身田中学校

橋北中学校区

南立誠幼稚園・西が丘小学校・北立誠小学校・南立誠小学校・橋北中学校

## 一身田・橋北校区での活動一覧

令和5年度に行われた活動を隣接学校・園ごとに分けて、一覧表にしたものを次ページにあげた。各連携校園との間で活動計画をたて、それを取りまとめたものである。

連携活動は46であり、連携活動に関わった日数はおよそ210日で、関わった学生は述べ1022名であった。

各連携校・園の活動内容は、活動一覧の後に続いて掲載されている通りである。

2023年度 三重大学教育学部との一身田・橋北校区地域連携活動

学校連携推進委員会

依頼 No.	該当コース 担当大学教員	連携校/担当教員	教科・活動名 学年・クラス	活動内容	該当授業科目/参加学生数/実施日
1	幼児教育 富田 昌平 (授業担当者:磯部由香)	南立誠幼稚園 前川 佳織	4、5歳混合クラス10名	食育	1月18日
2	幼児教育 水津幸恵	南立誠幼稚園 前川 佳織	未就園児の会 (子育て支援)	学生と職員と一緒に未就園児の会の企画・運営をする	5月～1月(計8回)、4年生10名
3	美術教育 上山 浩	南立誠幼稚園 前川 佳織	4、5歳混合クラス10名	造形活動(手足に直接絵の具をつけて描画する活動の支援)	教職実践演習、8名、11/2
4	英語教育 中川右也	栗真小学校 石川 加奈	外国語 1・2年生	読み聞かせ・ゲームなど	10月26日、1年生10名の参加
5	数学教育 川向洋之・田中 申明	栗真小学校 高橋春佳・林裕子	算数など	キャリア教育入門(学習支援、授業補助)	6～12月末/数学教育学生
6	理科教育 平山大輔	栗真小学校 中谷 峻介 高橋 春佳	生活 1・2年生	秋の木や木の実見つけ	11月28日
7	音楽教育 上ノ坊航也	栗真小学校 林 裕子 宮本 恵子	音楽 4・5・6年生	栗真小フェスティバル発表	11月1日及び9日
8	保健体育 富樫健二	白塚小学校 大世古 夏輝	体育 全校	新体カテスト 計測補助	6月13日
9	数学教育 玉城政和・田中 申明	白塚小学校 菅原 充裕	算数など 1～6年生	キャリア教育入門(学習支援、授業補助)	6～12月末/数学教育学生
10	数学教育 田中申明	白塚小学校 増地 歩	算数授業研究	算数の研究授業及び事前・事後検討会	6月, 11月
11	情報教育 山守一徳	一身田小学校 阿部 友美	総合 4年生3クラス	郷土料理を知るプログラミング	10月11日(水) 9:40-10:25 10:45-11:30 11:35-12:20 情報教育4年6名
12	家政教育 平島 円	一身田小学校 永井真珠子	家庭科 5年生3クラス	裁縫実習の補助	9/4, 5, 7, 11, 12, 14, 25, 26, 28 10/2, 3, 10
13	家政教育 平島 円	一身田小学校 岸本美智子	家庭科 6年生3クラス	裁縫実習の補助	9/4, 5, 7, 11, 12, 14, 25, 26, 28 10/2, 3, 10
14	英語教育 中川右也	一身田小学校 黒田 薫子	外国語活動 3年生2クラス	活動の補助	7月12日, 1月21日, 2名
15	情報教育 山守一徳	一身田小学校 山路 英和	総合 2年生2クラス	食物連鎖を知るプログラミング	11月1日(水) 9:35-10:20 10:40-11:25 情報教育4年6名
16	情報教育 山守一徳	一身田小学校 前田 幸代	算数 5年生3クラス	正多角形を描かせるプログラミング	10月4日(水) 9:40-10:25 10:45-11:30 11:35-12:20 情報教育4年5名
17	美術教育 上山 浩	一身田小学校 前田幸代	図工5年生 3クラス	電動糸鋸を用いたホワイトボードづくりの支援	教職実践演習、8名、 10/5,10/10,10/12,10/17
18	保健体育 水藤弘史	一身田小学校 大西 尚子	体育科 1年生2クラスを 中心に全学年	水泳指導支援, 授業補助	6月28日, 7月3日
19	情報教育 山守一徳	一身田小学校 大西 尚子	生活 1年生2クラス	リズム演奏プログラミング	11月8日(水) 9:35-10:20 10:40-11:25 情報教育4年6名
20	数学教育 中村 力 田中申明	一身田小学校 東出祥子教頭	算数など 1～6年生	キャリア教育入門(学習支援、授業補助)	6～12月末/数学教育学生
21	情報教育 山守一徳	一身田小学校 藤田 紘平	総合 3年生2クラス	いろいろな三角形を描かせるプログラミング	7月12日(水) 10:45-11:30 11:35-12:20 情報教育4年5名
22	理科教育 理科教育講座 教員全員	北立誠小学校	理科5年 全クラス	出前科学教室	キャリア教育入門/20名/2023年12月11日
23	数学教育 肥田野久二男 田中申明	北立誠小学校 須田順也・谷中愛梨	算数など 1～6年生	キャリア教育入門(学習支援、授業補助)	6～12月末/数学教育学生
24	国語教育 守田庸一	北立誠小学校 加藤真由子	教職員	国語教育「国語の指導について」	6/20,10/24,11/24(北立誠小学校で実施) 9/8,11/15(三重大学教育学部で実施)
25	国語教育 守田庸一	北立誠小学校 加藤真由子	教職員	国語教育「全校の研究授業について」	6/20,10/24,11/24(北立誠小学校で実施) 9/8,11/15(三重大学教育学部で実施)
26	保健体育 富樫健二	北立誠小学校 小掠 陽平	全学年	体力テスト	5/31～6/2
27	情報教育 萩原克幸	北立誠小学校 松本 理沙 須田 順也 岩脇 真輔	5年/3クラス	レゴロボットを使ったパソコン指導	1月11日(木)1-6限 情報教育4年6名

28	英語教育 荒尾浩子	北立誠小学校 谷中愛梨	3年／3クラス	英語教育「学生によるフレンドシップ」	11月29日,学生11名参加
29	数学教育 森山貴之 田中伸明	南立誠小学校 田中憲希	算数など 1～6年生	キャリア教育入門(学習支援、授業補助)	6～12月末／数学教育学生
30	理科教育 平山大輔	南立誠小学校 小林	生活 2年生	秋の生物を見つけよう	10月31日、秋の遠足
31	理科教育 後藤太一郎	南立誠小学校 千種	理科3年 2クラス	昆虫を観察しよう	6月下旬から7月初旬
32	理科教育 後藤太一郎	南立誠小学校 田中山本	理科5年 2クラス	めだかのたんじょう	1学期
33	家政教育 平島 円	南立誠小学校 田中山本	家庭5年 2クラス	エプロン製作	3学期
34	保健体育 岡野 昇 加納 岳拓 國仲 寛人	西が丘小学校 横田 幸大	理科・電気の はたらき 4年2組	シミュレーション教材の有効性研究	6月中旬(13日)から下旬(30日)
35	情報教育 山守一徳	西が丘小学校 西川 耕平	算数 6年・4クラス	閏年判定をさせるプログラミング	12月6日(水) 9:35-10:20 10:40-11:25 情報教育4年6名 12月13日(水) 9:35-10:20 10:40-11:25 情報教育4年6名
36	情報教育 山守一徳	西が丘小学校 竹内 友美	総合 5年生・4クラス	概数計算をさせるプログラミング	10月18日(水) 9:35-10:20 10:40-11:25 情報教育4年6名 11月15日(水) 9:35-10:20 10:40-11:25 情報教育4年6名
37	家政教育 平島 円	西が丘小学校 竹内 友美	家庭・ミシン実 習 5年生・4クラス	ミシンを使ったエプロン作り補助	1/15, 16, 19, 23, 26, 30 2/1, 2, 5, 6
38	理科教育 栗原行人	西が丘小学校 中森 慎也	理科・地層の 学習 6年・4クラス	郷土の化石の観察	地学実験/2名/2023年12月15日
39	保健体育 岡野 昇 加納岳拓 後藤洋子	一身田中学校 山口秀人	保健体育2・3 年 10クラス	ラートの授業支援(コラボ)	9月5日～9月19日までの計15時間
40	音楽教育 小畑真梨子	一身田中学校 古市和代	音楽3年生 5クラス	合唱支援	9月4日～10月17日,4年生3名、2年生9名
41	数学教育 中西正治	一身田中学校 真川真紀	数学1～3年 全15クラス	学習支援, 授業補助	通年
42	理科教育 後藤太一郎	一身田中学校 前田笑	理科2年 5クラス	ニジマスの解剖	9～11月頃
43	家政教育 平島 円	一身田中学校 服部美由紀	家庭2年 5クラス	ニジマスの調理補助	10/30, 11/1, 6
44	数学教育 中西正治	橋北中学校 岡野 祐花	数学 1・2・3年	学習支援, 授業補助	通年
45	技術・ものづくり 松岡 守	橋北中学校 岡野 祐花	技術科2年	IchigoJamを用いた温泉卵づくりの授業	9月4日, 5日
46	国語教育 林朝子 守田庸一	橋北中学校 山下和美	国語科 1年4組	キャリア教育入門(授業の参観、教員と学生との懇談会)	2月22日／国語教育コース1年生

# I 教育学部からの報告



# 1. 数学教育講座

本年度、数学教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田小学校・白塚小学校・栗真小学校・北立誠小学校・南立誠小学校との連携による「キャリア教育入門」での学習支援・教育アシスタント活動
2. 一身田中学校・橋北中学校との連携による「教育実施研究」での学習支援・教育アシスタント活動

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

## 1. 一身田小学校・白塚小学校・栗真小学校・北立誠小学校・南立誠小学校との連携による「教育実施研究基礎」での学習支援・教育アシスタント活動

(川向洋之・小林和志・田中伸明・玉城政和・中村力・肥田野久二男・森山貴之)

### 【目的】

数学教育コースが取り組む「キャリア教育入門」は、「教育現場において、学生が、子どもの学習支援と教員の教育アシスタント活動を行うことにより、子ども理解、学校理解を深め、教職への意欲を高めること」を目的としている。

### 【概要】

1年生19名は、それぞれいずれかの小学校で、6月～7月、10月～12月の期間、毎週1時間ずつを担当した。本年度は、約16週の活動を行えた。その活動はのべ350時間を超える大きな取り組みである。

学生は、実地現場での学びの質を高めるため、実践記録をつける。それをMoodleにアップロードし、教員の指導を受けた。(図1、図2参照)

### 【成果と課題】

本年度の活動内容は、算数の授業のサポートが中心だったが、これに限らず、他教科のプリントの添削や、スロー・ラーナーの学習支援、体育や図工の実技支援、特別支援学級での支援、実技支援、運動会や学習発表会などの学校行事運営など、極めて多岐に亘った体験が行えた。休み時間には、児童と、遊びを通して触れ合うことで、学校現場における「児童の世界」を間近に見る機会となった。

学生にとっては、大学入学直後でありながら、「未来の教師」としての自己を重ねつつ、期待と不安もあったが、教職の基礎を体験的に学び取れた。

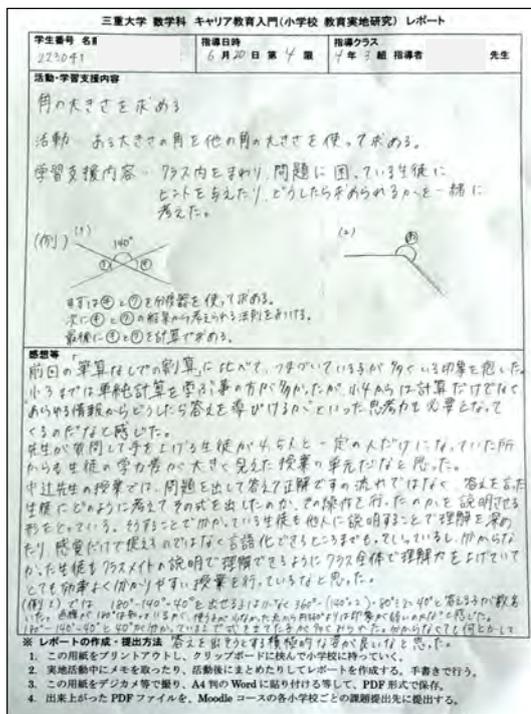


図1 学生のレポート（一身田小の受入れ学生）

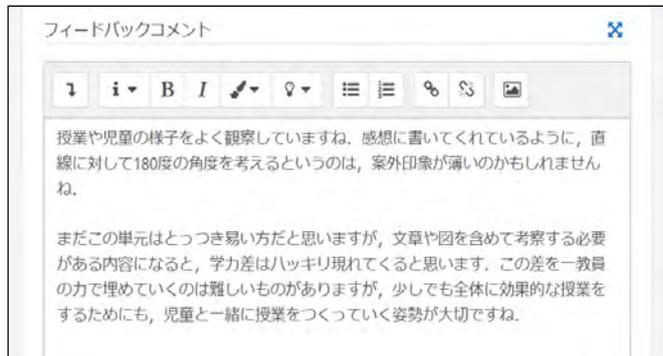


図2 大学教員からのフィードバック

## 2 一身田中学校・橋北中学校との連携による「教育実施研究」での学習支援・教育アシスタント活動

(中西正治)

### 【目的】

本コースの「教育実地研究」は、学生が中学校の教育現場に入って、数学科授業における生徒学習支援と教員の教育アシスタントの活動を行うもので、現場の数学の授業のアシスタント活動を通して生徒理解、学校理解を深め、教職への意欲を高めることが目的である。

学生にとっても意義深い取り組みであり、中学校側にとっても生徒への個別指導やスロー・ラーナー支援が充実する。大学の教員養成と中学校の数学教育の両者において大きな意義を持っている。

### 【概要】

本年度、本コース学生 21 名は、学生それぞれが自分の時間割に、週に 1 回の活動時間を組み入れ、一身田中学校 (10 名) または橋北中学校 (11 名) での数学科の授業に入り、生徒の学習支援と教員の授業のアシスタントとして取り組んだ。

学生は、実地現場での学びの質を高めるために、毎時の振り返りをフィードバックシートに書き、授業をされた先生に提出し、コメントをいただく。そのシートを大学の指導教官に提出し、指導教官はさらにコメントを書き入れ、学生に返却する。現場と大学が連携した学生の指導である。シートの枚数はのべ 320 枚を超える。平均して実地研究の回数は通期で 15 回～16 回となる。

以下、中学校での教育実地研究で、学生がどのようなことを感じ何を学び取っていったのかについて学生の感想を紹介する。



### 【一身田中学校での活動の感想】

1 学期は、生徒がどんな点でつまづくのか、生徒に対してどのように説明したらよいかという視点で活動してきました。実習で自分が授業をしてみると、生徒一人の疑問を全体に広げて深めることの難しさを実感し、ある生徒のつまずきに対して、先生がどのように全体共有して考える活動を取り入れているのかについても着目するようになりました。その中で、発問や生徒のつまずきに対して先生が全て答えを言うのではなく、生徒同士で考えられるようなヒントを出したり、班の話し合いをうまくまわせるように先生が声掛けをしたりすることで、生徒中心で学べる環境づくりをすることが重要だと感じました。これからも生徒が学ぶやすい雰囲気について考えながら、実地研究に一生懸命取り組んでいきたいです。

(AK)

教育実地研究でお世話になっている一身田中学校には、外国にルーツを持つ生徒が多くいるように感じた。話したり、計算問題を解いたりするのは言語の壁を感じることは少なかったが、方程式の利用の単元で文章題になると手が止まってしまう様子が見られた。その生徒に話を聞くと、「壺と花瓶がよく分からない」や「文章の意味が分からない」と言っていて、数学ではない言語という部分での支援が必要だと思った。

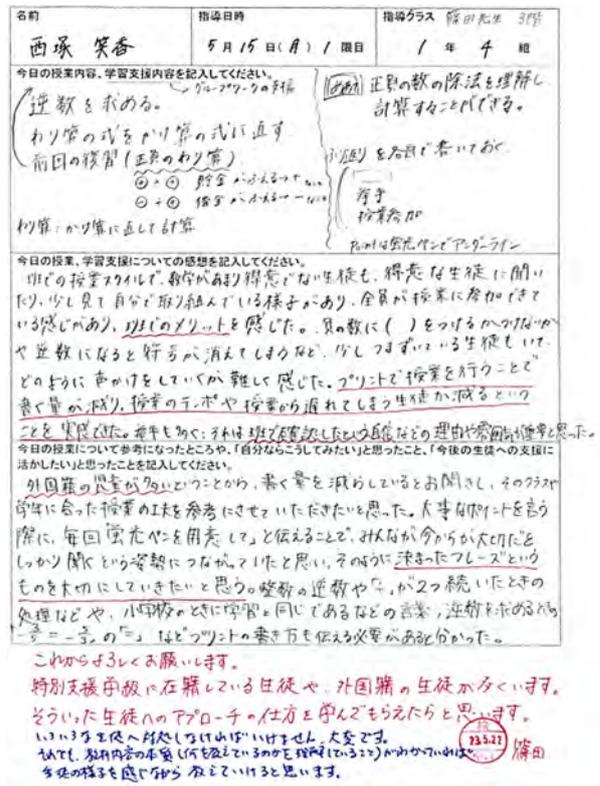


班活動を行う授業も見せていただいたが、班活動が活発な班とそうでない班があり、生徒の学びを高めるためにはどのような形態の授業が良いのかを、その場面やクラスの様子に合わせて使い分けていくことの必要性を感じた。また、班活動や意見交換を活発に行うことができるようにする課題の設定や教員の配慮も重要であると感じた。

(EN)

一年次の教育実地研究基礎での経験を踏まえて生徒の気づきを促したり、つまづきを感じている部分に対して説明したりして授業参観や生徒への学習支援を行っています。また、教育実地研究における活動の中では算数と数学の小中連携の在り方や外国人生徒との関わり方に対して教師側がどのような観点から対応しているのかを学ぶ機会があります。故に、教師として授業を分かりやすく教えることのみならず、個々の生徒に応じた指導や関わり方も大切であると考えようになり、授業参観での視点や学習支援でのアプローチが変わりました。今後も一身田中学校の教育実地研究で実際の教育現場の雰囲気を感じながら積極的に活動に努めて参りたいと思います。

(KK)



【橋北中学校での活動の感想】

私が橋北中学校の授業アシストに行かせていただいている中で、一番驚いたのが私が経験した中学校の環境と大きく異なっていることである。タブレットが全国の学校に導入されていることは知っていたが、実際にタブレット用いた授業は見たことがなかったので、ICTをうまく活用した授業がどのように展開されているのかを学ぶことができた。その中で、橋北中学校では、生徒自身に考えさせることをこだわっているように感じ、塾に行っている生徒にもなぜそのような答えに至るのかまで考えさせるいい授業が展開されていると感じた。また、授業中に暇になる生徒が出てこないように難易度の高い問題が用意されていて、生徒一人ひとりが自分のレベルに合った学習ができているのがすごいと感じた。

(YI)





教育に対する意識の向上となっている。それが、学生の教育実習の受け入れと充実につながっていることは間違いない。ただ、このような信頼関係を大学教員側のマンパワー不足により減退させていくことが心配である。

大学教員や現場の教員も入れ替わり、活動の内容が徐々に変質している。今、一身田・橋北連携活動の原点に戻り、何のための活動であるかを見直す時期に来ているのではないかと。

【謝辞】

本活動は、一身田中学校及び橋北中学校の校長先生はじめ先生方（特に数学科の先生方）のご理解の上に成り立っているものと考えております。

今後とも本活動にご理解を賜りますようよろしくお願いいたします。

三重大学 数学科 指導アシスタント フィードバックシート (橋北中学校 数学科)

名前	指導日時	指導クラス
若林 寛太	5月22日(月) 18:30-19:15	3年 6組
<p>1. 今日の授業内容</p> <p>① 前回のプリントおまけ問題 無限小数の分数表示 <math>x = 0.\overline{321}</math>          ねらて 正負の一致の長さを覚える</p> <p>② <math>1.\overline{02}</math> の何割か、一辺の長さが <math>2\text{cm}</math>, <math>3\text{cm}</math>, <math>4\text{cm}</math> の場合          辺の長さを求めること、面積は <math>0.2</math> 倍になる</p> <p>③ <math>1.0\overline{2}</math> と同じように計算 <math>\rightarrow</math> 小数は同じ</p> <p>④ <math>1.\overline{02}</math> と <math>1.0\overline{2}</math> の理由 (面積 <math>0.2</math> を求めていく)</p>		
<p>2. 関わった生徒がどのようなところでつまづいているか、難しいと感じているか、自分が具体的にどのように支援をしたか。</p> <p>・ 小数・小数の計算においてつまづいている生徒が見受けられた  <math>0.9 \cdot 0.2 = 1.8</math>, <math>0.1 \cdot 0.5 = 0.5</math> ← 間違いの例          これらの例が原因でつまづいた</p> <p>・ 間違えている生徒は筆算を書かず、暗算で解いていたため、筆算で計算してわかるように助言した</p> <p>・ 小数同士の割り算の小数点の扱いが理解できていない生徒もいる  <math>0.9 \div 0.2 = \frac{9}{10} \div \frac{2}{10} = \frac{9}{10} \cdot \frac{10}{2} = \frac{9}{2} = 4.5</math>          「<math>0.9</math> と <math>0.2</math> を <math>10</math> 倍して <math>9</math> と <math>2</math> に変換して <math>9 \div 2 = 4.5</math> と計算する」と説明した</p>		
<p>3. 全体を通しての感想</p> <p>今回は、11月を再いた掛り算の問題を中心に支援をした。正負の一致の長さや小数・小数の計算のつまづき点についても生徒が見受けられた。小数の計算上でのように指導すればよいのか分からなかった。私は小学教員・中学教員に比べて、<u>小数の計算</u>の指導が異なる点がある。自分の場合、筆算を指導した。しかし、教員側にも、自分の計算方法が必ずしも指導に通用しているとは限らない。自分の指導方法は通用してはいるが、指導で悩んでいる生徒もいる。今回の授業で、小数の計算の指導方法が異なる点も共有できた。</p>		

小数計算の指導で中学校では、いかに時間を取れるかが重要。  
 小数が苦手の子には、分数で処理できるようにしている。  
 $0.9$  や  $0.2$ ,  $0.01$  と  $10$  倍して  $9$  と  $2$  に変換して  $9 \div 2 = 4.5$  と計算する。  
 分数で  $9/10 \div 2/10 = 9/2 = 4.5$  と計算する。生徒もよく理解している。  
 例  $0.9 \div 0.2$  の割り算に  $10$  倍して  $9 \div 2$  と計算する。右の  $0.2$  は  $2/10$  と変換する。

## 2. 情報教育

本年度、情報教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 北立誠小学校（対象：5年生2限×3クラス）における「レゴロボットを使ったパソコン指導」の授業・演習
2. 一身田小学校（対象：1年生1限×2クラス）における「リズム演奏プログラミング」の授業・演習
3. 一身田小学校（対象：2年生1限×2クラス）における「食物連鎖を知るプログラミング」の授業・演習
4. 一身田小学校（対象：3年生1限×2クラス）における「いろいろな三角形を描かせるプログラミング」の授業・演習
5. 一身田小学校（対象：4年生1限×3クラス）における「郷土料理を知るプログラミング」の授業・演習
6. 一身田小学校（対象：5年生1限×3クラス）における「正多角形を描かせるプログラミング」の授業・演習
7. 西が丘小学校（対象：5年生1限×4クラス）における「概数計算をさせるプログラミング」の授業・演習
8. 西が丘小学校（対象：6年生1限×4クラス）における「閏年判定をさせるプログラミング」の授業・演習

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 北立誠小学校における「レゴロボットを使ったパソコン指導」の授業・演習

（萩原克幸）

#### 【目的】

科学技術、特に、情報技術は近年急速に発展しており、社会において必要不可欠なものとなっている。このため、情報教育の重要性は非常に高いと考えられる。初等・中等教育における従来の情報教育としては、パソコン・インターネットの活用が主である。しかしながら、それに限らず、高度な情報技術の一端に触れることは、子どもの将来における情報社会への適合性を促進すると同時に、将来的な職業選択という意味においても意義深いと考えられる。しかしながら、そうした学びの機会をどのような形で与えるかは難しい課題である。本取り組みでは、その一つの方法として、レゴ・マインドストームを教材として、教育現場

でのロボット制御の授業・実践を試みた。本取り組みでは、特に、ロボットの作成など「ものづくり」には重点を置かず、「ロボットを制御することの理解とそれを実現する「プログラミング」という情報教育的側面に重点を置く。レゴ・マインドストームは、こうした目的のためには最適な教材である。一方で、本学部情報教育専攻の学生には、ロボット・プログラミングについて子どもの支援を行うことで、子どもと触れ合う機会を与えとともに、情報教育の一環として、プログラミングという大学で学んだ高度な概念を如何に分かりやすく子どもに伝えるかという点を学ぶことが目的である。

#### 【概要と成果、課題】

自律型ロボットは、最先端の技術であるとともに、教育的な見地からは、子どもの興味を引くには十分な教材である。自律型ロボットについて学ぶことは、単に興味を引くだけでなく、初等教育でも学ぶモーター、広く普及しているセンサ、情報技術に関わるプログラミングを通じた制御の概念といった基本的な科学技術を知る機会でもある。レゴ・マインドストームは、モーターとセンサを搭載しており、プログラムにより自律的に動作するロボットである。特に、ソフトウェア上のプログラミングは、モーターやセンサなどの要素を並べることにより実現でき、この直観性は、子どもにも容易に理解できるものと考えられる。これにより、ほとんど予備知識を必要とせずに、プログラミングを通してロボットを動作させることができ、科学技術についての学びを児童の興味を引く形で提供できる。プログラミングにおける各要素は、それぞれの属性（例えば、モーターの回転方向や光センサの感度）を調整することで、ユーザーが望むロボットの動作を実現できる。教育上の重要な点は、このソフトウェア上で、プログラミングの基本である直列的処理、ループおよび分岐の概念を学べる点にある。

実践の対象は、北立誠小学校・5年生（3クラス）であり、時間数は1クラスあたり2限（1限：45分）である。ロボット・プログラミング演習は、対象児童を10グループに分け、それぞれの

課題について、担当教員が説明した後、それぞれのグループ毎に解説・実演・演習補助を学生が行った。この際、対象と授業時間を考え、ロボットは予め作成しておいた。演習では、ソフトウェア上での制御プログラミングの仕方、要素の属性の意味と設定方法、各演習課題に対応したプログラミングの概念を解説した。各演習課題は、先に述べた直列的処理、ループおよび分岐の概念を順番に学習できるような構成にしてある。例えば、前後に進行を繰り返す動作はループとして記述できること、センサ入力に対する分岐で動作が変更できることなどである。いくつかの課題は、こうした概念を駆使したアルゴリズムを考えることができるように工夫した。

体験において、児童徒が興味をもって課題に取り組んでいた点は大きい。これは、設定された目的に対して、それを実現するためのアルゴリズムを考え、プログラミングし、実際の動作を確かめられることによるものであり、結果が目に見えるトライ&エラーの過程によるものと考えられる。ただし、教材の台数が限られていることによる教育効果の低減の問題、時間制限の問題も存在した。先に述べたように、本活動は、情報教育を通じた科学・工学に対する興味づけとしても位置づけられる。さらに大きな枠では、理系離れが進む中、小学校教育における早期の理系教育の補助となる可能性も含んでいる。

実施日	時限	場所	学生
1月11日（木）	1-6 限	北立誠小学校	情報教育4年6名

## 2. 一身田小学校(対象:1年生1限×2クラス)における「リズム演奏プログラミング」の授業・演習

(山守一徳)

【目的】 津市立一身田小学校で、1年生(2クラス)を対象に、タブレットの使い方に慣れることを目的とし、Scrachを使って、音を出させるプログラミングの授業実践を行った。

【概要と成果, 課題】 2023年11月8日に45分の授業実践を行った。鍵盤に相当するキーを叩くと音が出るアプリを用意し、キラキラ星とメリーさんの羊のどちらか好きな方の曲で、楽譜を見ながら演奏させた。次に、太鼓、トライアングル、ピアノについては、スプライトをクリックした際に、楽器の音が出る状態で、トランペット、タンバリン、カスタネットをクリックした時に、音が出るように、手本を見ながらプログラミングさせた。「えんそう①」をクリックすると3拍子で楽器が鳴る状態で、「えんそう②」をクリックした時に、リズム音が出るプログラミングをさせた。

アンケートによると9割の児童が「できた」、「だいたいできた」と解答した。小数の入力が難しかったと感想に述べている児童が複数名いたが、授業の理解度と合わせて見ると、児童にとって難しく感じたものの、前向きに取り組むことができていた。

【学生の感想】 8割以上の児童がプログラミ



(a)鍵盤で演奏する画面例



(b)楽器の音を出させる画面例

図1 リズム演奏の動画面例

ングに興味を持つことができた」と回答していたことや、9割弱の児童がプログラミングをもっとやりたいと回答していたことから、授業を通してプログラミングに対する良い印象を持たせることができた」と実感した。(学生名: MO)

実施日	時間	場所	学生
11月8日(水)	9:35-10:20	一身田小学校	情報教育4年6名
11月8日(水)	10:40-11:25	一身田小学校	情報教育4年6名

### 3. 一身田小学校(対象:2年生1限×2クラス)における「食物連鎖を知るプログラミング」の授業・演習

(山守一徳)

【目的】 津市立一身田小学校で、2年生2クラスを対象にプログラミングの最初の一步を経験してもらうことを目的に、食物連鎖を題材にしたScratchプログラミングを行った。

【概要と成果, 課題】 2023年11月1日に45分の授業実践を行った。外来種が日本で増え、生態系が壊れている例として、アライグマが鼠を食べるため、鼠が減ってしまったという食物連鎖を紹介した。鼠が鼠に食べられるプログラムと、鼠がてんとう虫を食べるプログラムと、アライグマが鼠を食べるプログラムを手本見せながら児童に作らせた。松の木の伐採や餌



(a)動作画面例

(b)作成させたプログラムの例

図2 食物連鎖のプログラミング

場となる田んぼや水辺の農薬による汚染で餌となる生物が減少し、コウノトリが減ってしまったという人間による生態ピラミッドの破壊の話も教えた。

【学生の感想】 生態系が壊れてしまうことは理解できたようである。プログラムもTAに教えてもらってできていた児童が多かった。生き物の数が変わっていく動作画面をずっと眺めて楽しいと思ったようである。(学生名: HA)

実施日	時間	場所	学生
11月1日(水)	9:35-10:20	一身田小学校	情報教育4年6名
11月1日(水)	10:40-11:25	一身田小学校	情報教育4年6名

#### 4. 一身田小学校(対象:3年生 1限×2クラス)における「いろいろな三角形を描かせるプログラミング」の授業・演習

(山守一徳)

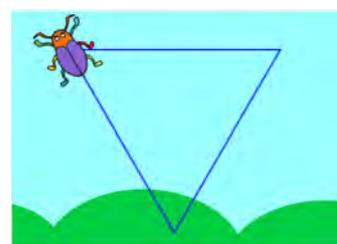
【目的】 津市立一身田小学校で、3年生(3クラス)を対象に、三角形を理解させることを目的として、Scratchプログラムを使って図形を描かせる実践を行った。

【概要と成果, 課題】 2023年7月12日に45分の授業実践を行った。直角三角形、二等辺三角形、正三角形、不等辺三角形、直角三角形の外接円を描かせた。線を描く時に始点から始めて終点が始点に戻るように描いている。直角三角形では、30度の底角の直角三角形を描く手本を与えた後、辺の長さをピタゴラスの定理を満足させる数値に変えさせ、終点が始点に辿り着けなかったら、角度の数値を調整し変更させ

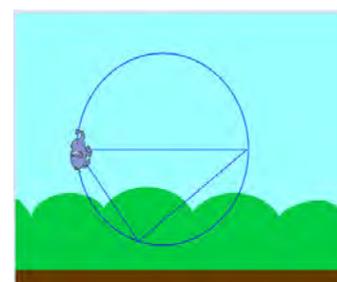
た。二等辺三角形では、角度を変えさせ、辺の長さを調整し変更させた。正三角形では辺の長さを変えさせた。不等辺三角形では、辺の長さと角度を調整し変更させた。外接円では長辺の長さと円周の長さは変更せず直角以外の角度と短辺長さを調整させた。三角形の仕組みが「とても理解できた」「理解できた」と答えた生徒は、それぞれ86%、88%だった。しかし、プログラムの理解度は低く、授業の中で不等辺三角形の変更までできた生徒はほとんどいなかった。

【学生の感想】 生徒にプログラムさせる時間が少なかった(学生名: JN)

実施日	時間	場所	学生
7月12日(水)	10:45-11:30	一身田小学校	情報教育4年5名
7月12日(水)	11:35-12:20	一身田小学校	情報教育4年5名



(a) 正三角形



(b) 外接円

図3 三角形を描く画面例

## 5. 一身田小学校(対象:4年生1限×3クラス)における「郷土料理を知るプログラミング」の授業・演習

(山守一徳)

【目的】 津市立一身田小学校で、4年生(3クラス)を対象に、現代失われつつある文化の大切さを伝えるために、日本地図を用意し県を

た箇所は、正解の得点を現すプログラム部分と解答中の残り時間を現すプログラム部分と問題数を表示させるプログラム部分である。



(a) 県を選ぶ場面の画面

(b) 郷土料理の出題場面の画面

図4 郷土料理の動作画面例

押すと県の名前と郷土料理の名前が出る形の、郷土料理を題材にしたプログラミング実践を行った。

【概要と成果, 課題】 2023年10月11日に45分の授業実践を行った。郷土料理の種類は、10種類を用意した。児童にプログラミングさせ

【学生の感想】 手本を見せてプログラムを作らせ、TAがサポートしているため、ほとんどの児童がプログラムを完成できていた。知らなかった郷土料理を知ることができて児童は楽しそうであった。(学生名: HA)

実施日	時間	場所	学生
10月11日(水)	9:40-10:25	一身田小学校	情報教育4年6名
10月11日(水)	10:45-11:30	一身田小学校	情報教育4年6名
10月11日(水)	11:35-12:20	一身田小学校	情報教育4年6名

## 6. 一身田小学校(対象:5年生1限×3クラス)における「正多角形を描かせるプログラミング」の授業・演習

(山守一徳)

【目的】 津市立一身田小学校で、5年生(3クラス)を対象に、プログラミングを経験させることを目的として、Scratchを使い正多角形を描かせる授業実践を行った。

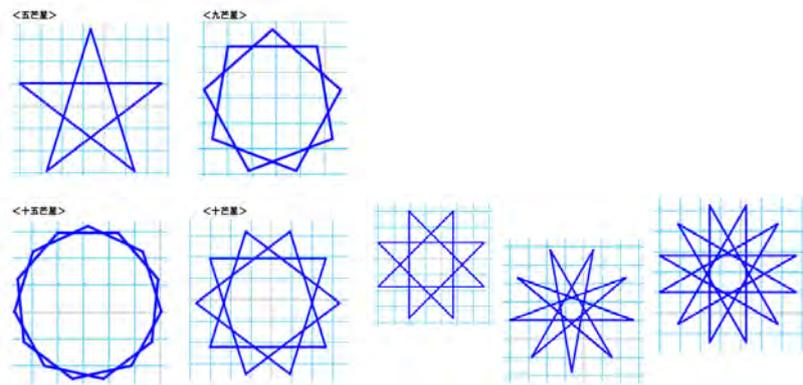
【概要と成果, 課題】 2023年10月4日に45分の授業実践を行った。正三角形を描くプログラムを手本を見せながら作成し、その後、五芒星、九芒星、十五芒星、十芒星の星形正多角形を描くように改造させた。この時、曲がる角度と繰り返す回数はどのように求めたら良いかを教えた。それができた児童には、応用問題の星形正多角形を描かせ、この時は、曲がる角

人、十芒星は40人となっており、十五芒星と十芒星まで作図できた人は少し減ったことが分かる。この原因としては、時間が足りなかったか、応用問題を作図することに切り替えたかの2つが考えられる。応用問題は約81%の子が1個以上作図できていた。

【学生の感想】 子どもたちがいろいろ試行錯誤しながら何とか作図しようと熱心に取り組んでくれていた。自分一人でブロックを移動させて正三角形を作図できるかという質問に約7割の子が肯定的であったことから、プログラム



(a) 作成させたプログラム例



(b) 与えた課題4つ (c) 応用問題3つ

図5 正多角形描画のプログラミング

度と繰り返す回数は自分で考えさせた。全69人の中で五芒星は61人、九芒星は50人、十五芒星は38

の中身もしっかり理解してもらえたのではないかと考える(学生名:MH)

実施日	時間	場所	学生
10月4日(水)	9:40-10:25	一身田小学校	情報教育4年5名
10月4日(水)	10:45-11:30	一身田小学校	情報教育4年5名
10月4日(水)	11:35-12:20	一身田小学校	情報教育4年5名

## 7. 西が丘小学校(対象:5年生1限×4クラス)における「概数計算をさせるプログラミング」の授業・演習

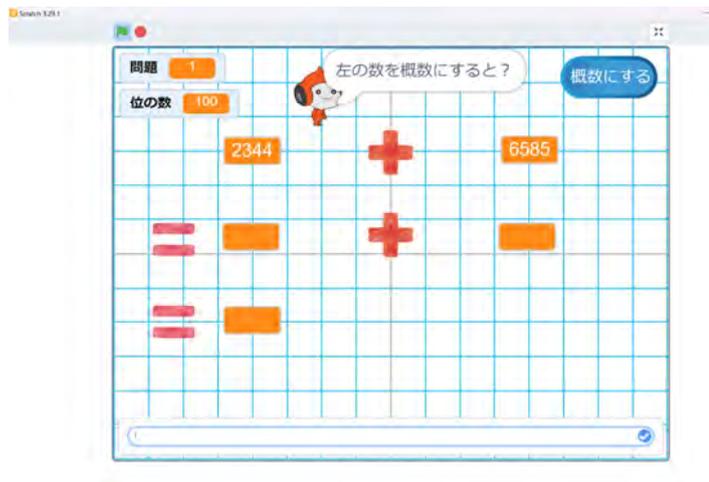
(山守一徳)

【目的】 津市立西が丘小学校で、5年生(3クラス)を対象に、プログラミング経験させることを目的として、Scratchを用いたプログラミング実践を行った。日常生活で概数を使って暗算計算し、凡その数が求められるようになることも期待し、加減乗除の概数計算を教えた。

【概要と成果, 課題】 2023年10月18日と11月15日に45分の授業実践を行った。足し算、引き算、掛け算、割り算のステップがあり、それぞれ2つの整数が表示され、概数に自分で直して、計算結果を求めさせるのと、概数がボタンを押すと自動で表示されてその後計算をするという2種類の求め方を行った。児童には概数を自動で求めるプログラムを、手本見ながら作らせた。概数の表し方として、万の位までの概数、千の位までの概数、上から1桁の概数、上から2桁の概数の4種類を使用した。割り算では、割られる数を上から2桁、割る数を上から1桁の概数を用いた。自動計算では四捨五入した時に位上げが複数回起きることがあり、その場合にも対処したプログラムになっている。

【学生の感想】 いろんなパターンの問題を解くことができるように条件をランダムで出すようにプログラムし全20問も解かせたが、少し問題量を減らすべきだったように感

じる。プログラミングについて「楽しかった!」、「またやってみたい!」などの感想もアンケートで言ってくれており、子どもたちが少



(a) 出題画面例



(b) 作成させたプログラム

図6 概数計算の動作画面例

しでもプログラミングに興味を持ってくれたのだと感じた。(学生名:MH)

実施日	時間	場所	学生
10月18日(水)	9:35-10:20	西が丘小学校	情報教育4年6名
10月18日(水)	10:40-11:25	西が丘小学校	情報教育4年6名
11月15日(水)	9:35-10:20	西が丘小学校	情報教育4年6名
11月15日(水)	10:40-11:25	西が丘小学校	情報教育4年6名

## 8. 西が丘小学校（対象：6年生1限×4クラス）における「閏年判定をさせるプログラミング」の授業・演習

（山守一徳）

【目的】津市立西が丘小学校で、6年生（4クラス）を対象に、プログラムの条件分岐を教えることを目的に、JavaScriptを用いた閏年判定を題材にプログラミング実践を行った。

【概要と成果，課題】 2023年12月6日と12月13日に45分の授業実践を行った。6年生が対象であるため、プログラムの条件分岐を教えるのに、テキストプログラミング言語のJavaScriptを用いている。

Scratchのビジュアルプログラミング言語から一歩進め、より本質のプログラミングを知ってもらうためである。プログラムさせた部分は、if文の条件式の記述部分（ $year \% 4 == 0$  と  $year \% 100 == 0$  と  $year \% 400 == 0$  の3か所）であるが、キーボード打ち込みで書き込み、入力間違いでエラーが起きるため、プログラミング経験を積ませる意図がある。また閏年判定の知識

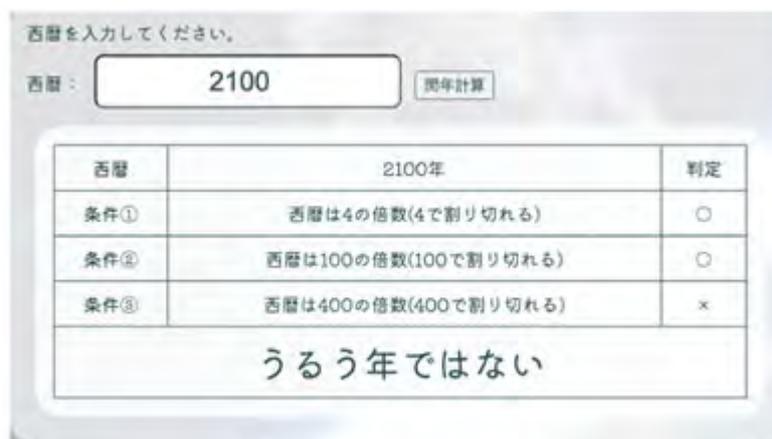


図7 閏年判定の動作画面例

を付けさせるためだけでなく、何故その判定式なのかを地球の公転から理解させようとした。

【学生の感想】テキストプログラミング言語に触れる機会を儲けることができたことは意義があると思う。難易度を低く設定したことで、進度の早い児童は時間を持て余してしまった。（学生名：KT）

実施日	時間	場所	学生
12月6日(水)	9:35-10:20	西が丘小学校	情報教育4年6名
12月6日(水)	10:40-11:25	西が丘小学校	情報教育4年6名
12月13日(水)	9:35-10:20	西が丘小学校	情報教育4年6名
12月13日(水)	10:40-11:25	西が丘小学校	情報教育4年6名

### 3. 理科教育講座

本年度、理科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 南立誠小学校・栗真小学校と連携した大学キャンパスにおける自然観察
2. 西が丘小学校における「郷土の化石の観察」
3. 理科教育コース1年生による北立誠小学校での出前科学教室

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

#### 1. 南立誠小学校・栗真小学校と連携した大学キャンパスにおける自然観察

(平山大輔)

##### 【目的】

自然に親しむ機会の減少にともない、学校園での自然体験学習の重要性は益々大きくなっている。今年度も、昨年度までに引き続き、三重大学キャンパス内の木の実拾いや生物観察を通して身近な自然の多様性に触れることを目的とした取り組みを実施した。今年度は、南立誠小学校および栗真小学校を対象に実施した。

##### 【概要と成果、課題】

次の日程で実施した。活動は屋外（三重大学キャンパス内）で行った。

- ・10月31日：南立誠小学校 2年生 9:30-13:00
- ・11月28日：栗真小学校 1・2年生 9:30-14:00

活動は、生活科の秋見つけの授業に位置付けて実施した。南立誠小学校2年生の活動では、児童数が多いため(55名)、各クラスを3つのグループに分け、それぞれのグループを平山および理科教育の学生が引率する形をとった。児童には事前に平山が作成したウォークラリー形式の冊子(キャンパスマップと取り組む課題を印刷したもの)を配布した。その冊子をもとに、児童はグループ単位でキャンパス

内を探索し、課題に取り組んだ。ウォークラリー後に、内容の振り返りを行った。栗真小学校1・2年生の活動では、事前に選定しておいたキャンパス内のいくつかの場所(正門前、総研棟Ⅱおよび生物資源学部棟裏の植栽エリア)で適宜説明を交えながら木の実拾いや植物観察を行った。

活動を通じて、身近な場所に多様な植物が生活していること、植物の生き方も非常に多様で、また、形や色などの特徴をみると、その生物の生き様について多くのことが理解できること等を、体験を通して伝えることができたと感じている。

教師を志望する学生が自然の面白さを体験によって伝える能力を養う場として、また、近隣の学校園の子どもたちの身近な自然観察の場として、本学キャンパスの積極的な活用が進むように、来年以降もできる限り積極的に取り組んでいきたい。

##### 【学生の感想】

終了後、学生たちからは、「子どもたちがとても楽しそうに活動をしているのを見て、将来自分が小学校の先生になったらぜひこういう活動をしたいと感じた」、「学生の中に、身近な植物の名前をもっと知っておくべきだと思った」、などの感想が得られた。

#### 2. 西が丘小学校における「郷土の化石の観察」

(栗原行人)

【目的】小学校6年理科「土地のつくりと変化」の単元の中で、郷土の化石を知ることが目的とし

て津市西部に分布する一志層群から産出した貝化石を含む岩石ブロックを観察した。

【概要と成果】2023年12月15日に西が丘小学校6年生4クラスを対象として化石観察の授業を行った。まず、津市美里町で採取した1800～1700万年前の一志層群産貝化石ブロックを班ごとに観察し、気がついたことをワークシートに記入し発表してもらった。その後、化石がどのような場所で見つかるか、どうして海からはなれたところから貝の化石が見つかるのかを説明した。最後に感想をワークシートに記入してもらったところ、「化石について深く知ることができた」とか「化石を見つけに行きたくなった」といったコメントが得られた。

授業実施については、最初のクラスを栗原が担当し、その後の2クラスを栗原研究室の3年生2名が担当した。化石観察の時間では全員でどのような点に着目したらよいかを指導した。学生が教育実習以外に現場で授業をする機会はほとんど

ないので、教育実習で得た経験を活かす良い機会となった。

【学生の感想】学生1（SK）人生で初めて、小学生に対して授業をさせていただきました。実習では中学生に対して授業を行っていたため、とても新鮮な気持ちになりました。小学生は中学生と違い、新しく面白い視点での意見がたくさん出てきて、その意見を使って、どんどん学びを深めさせることができるなと思った。また小学生は反応がよく、授業をしていてとても面白かった。

学生2（YO）今回、西が丘小学校での授業をさせて頂いて、小学生のパワフルさを身を持って体感しました。教育実習で私は中学生を担当させて頂いたのですが、そのときは全く違う環境での授業がとても新鮮でした。

### 3. 理科教育コース1年生による北立誠小学校での出前科学教室

（理科教育講座全教員）

#### 【目的】

理科教育コース1年生が小学生を対象とした科学啓発活動（科学教室）を企画・実践し、児童との関わりを通じて科学の面白さを伝える能力を養うことを目的とし、「キャリア教育入門」のなかで北立誠小学校への出前科学教室を開催した。

#### 【概要と成果、課題】

対象は北立誠小学校5年生（全クラス）とし、事前の準備も含め、以下の日程で実施した。

- ・7月26日：理科1年生へのガイダンス
- ・11月22日：中間報告会
- ・12月11日：出前科学教室実施
- ・1月31日：事後検討会（振り返り）

理科教育コース1年生20名が5名ずつ、物理・化学・生物・地学の4つのグループに分かれ、ブースを出展することとした。児童は4つの班に分かれ、

5時限目と6時限目で物理・化学・生物・地学の全分野のブースを体験できるものとし、そのため各ブースでの体験学習内容は20分以内で必ず終わるものとした。7月のガイダンス後は基本的に各分野の大学教員のもとでグループごとに予備実験等の準備を重ねた。11月の中間報告会では理科全員でブース内容の検討と改善を行った。当日の進行は基本的に学生主体で行った。1月に事後検討会（振り返り）を行い、良かった点や反省点、次年度の1年生に申し送ることなどを共有し、一連の活動を終えた。

#### 【学生の感想】

事後検討会では、「児童が楽しそうに取り組んでくれて、やりがいを感じた」、「たった20分間の内容なのに子どもたちに分かりやすく伝えるのは大変だと感じた」、「体験を通して子どもたちに科学の面白さを伝える貴重な機会だった」、「うまくいかなかった点は次の1年生に引き継いでいきたい」といった声があった。

## 4. 音楽教育講座

本年度、音楽教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 栗真小学校にて栗真小フェスティバルに向けての演奏指導
2. 一身田中学校における合唱指導の支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 栗真小学校における「栗真小フェスティバルに向けての取り組み」

(担当：上ノ坊航也)

#### 【目的】

小学4、5、6年生が栗真小フェスティバルにて演奏する合唱曲「銀河鉄道999」、合奏曲「ヤングマン」の演奏技術向上。発声法及び演奏法を学び、声の出し方や音の運び方に結びつけることができるようになることを目的とする。

#### 【概要と成果】

2023年11月1日、11月9日に栗真小学校の5年生及び6年生の児童を対象に演奏指導を行った。合唱指導では、はじめに児童による「銀河鉄道999」の歌唱を聞き、息の使い方の問題点を取り上げた。息を吸う際、準備が無く短い時間で胸に吸うので声が小さくなりフレーズも短くなることを説明し、発声の基礎となる息の吸い方や息の吐き方について説明を行った。8拍間かけて吸い、8拍間かけて息を吐くことを覚えたことで声量が大きくなっただけでなく、フレーズが長くなり歌詞の表現に繋げることを可能にした。また、音の三要素(音量、音高、音色)について説明することで、周りの声や自分の声を聞きながらその楽曲に合った声の出し方を心がけて歌唱するようになった。1回目の活動の際に、基礎的なことや音楽の作り方について重点的に理解したことで、

9日の活動では前回の内容を踏まえたとても良い演奏をしていた。

合奏曲は「ヤングマン」の演奏指導を行った。1人1人はとても良い音で演奏できているのだが、全員で合わせた際に縦の線が合わずバラバラの演奏になっていた。合奏の要は「打楽器」であると説明し一定のテンポで打楽器が演奏できるようにリズムを刻みながら練習を行った。また、楽器の並びが不規則でメロディーが聞こえなかったり低音が大きすぎるなどのバラつきがあったため、オーケストラの配置に倣い楽器の配置をした。この配置変更により、メロディーや周りの音が聞こえやすくなり「演奏しやすくなった」、「テンポが分かりやすくなった」という声が多く上がった。また、楽曲の中で最も盛り上がるポイントをい児童と一緒に考え、クレッシェンドやリタルダンドを活用することで表現に結びつけた。

栗真フェスティバル本番での演奏は合唱も合奏も大成功したとの報告を受けた。課題としては、1回目で学んだことを2回目で消化し、3回目4回目の活動があればさらに演奏表現などの応用に繋げることができたと感じた。

## 2. 一身田中学校における音楽科の授業における合唱支援活動

(担当：小畑真梨子)

### 【目的】

本活動の目的は2023年10月17日(火)に三重県総合文化センターにて開催された一身田中学校主催の合唱コンクールに向けての練習、および授業支援をすること、また中学校音楽科の授業で扱う「合唱」の学習を支援し、生徒の学習の経過を観察することで授業実践力の向上に繋げることを目的としている。

### 【概要】

支援の対象は、一身田中学校3年生の全クラス(1クラス35名、全5クラス計175名)を対象とし、支援期間は、2023年9月4日から10月17日にかけて活動した。支援活動に携わったのは音楽教育コース4年生の中等教育選修学生3名と2年生9名である。中学3年生1クラスにつき3名～4名の大学生が入り、主に4年生が主体となって2年生はその補助にあたる形で活動した。支援内容は、各クラスの課題曲の譜読み(音取り)の支援にあたり、活動期間の後半は発声練習、パート練習、全体練習という流れで行った。支援にあたった大学生には各回ごとに「支援活動振り返りシート」の提出を求めた。

### 【活動を終えて】

本活動に参加した学生、特に4年生はちょうど1年前の教育実習での経験や学びを活かせる場となっただけではなく、学級の実態やクラスごとの雰囲気の違いに合わせて柔軟に声掛けをおこなう必要があることを改めて実感することが出来た時間でもあり、今後の授業実践力向上に向けた学習の意欲が益々高まった。2年生は4年生を補助し連携しながら活動を行うことで次年度の教育実習に向けた準備の誘因となることが期待される活動となった。様々な生徒への支援内容を計画するにあたり、生徒たちの様子を学年を超えて共有し互いに意見を交わしながら考えることで、音楽科における教授方法等の視野を広げるきっかけとなったり、一段と興味を持つことが出来るようになった。中学校の生徒たちが合唱コンクールに向けて目標とすることや、想いや意図を汲み取りながら、専門的な観点から助言をし、一緒に音楽を作り上げていく過程は、音楽教育者になろうとしている学生にとって大変貴重な体験となった。



## 5. 美術教育講座

本年度、美術教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 電動糸鋸をもちいたホワイトボードづくり（一身田小学校5年生）の支援
2. 手足に直接絵の具をつけて描画する活動（南立誠幼稚園年中・年長合同）の支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 電動糸鋸をもちいたホワイトボードづくり（一身田小学校5年生）の支援

（担当：上山 浩）

#### 【目的】

電動糸鋸を一斉指導にて、児童が安全に思い通り使用させることの支援を主な目的とした。

#### 【概要と成果、課題】

5年生4学級それぞれ4時間の図工科の授業にて、電動糸鋸を一斉指導にて使わせて薄い集合材を自由な曲線にて切削しホワイトボードを製作する活動を支援した。

#### 【学生の感想】

NO：機械の使い方を説明している時に、遊んだり話したりせずに真剣に説明を聞いていた。3・4限目の授業では、機械を使っている児童の様子を見に来る児童もおり、その際に「上手だね」、「すごい」と互いに褒め合っているのが印象的だった。なんとしてでも、下描きの線に沿って切れるように一生懸命に取り組んでいた。授業の時間は限られているが、納得がいくまで制作させてあげたいと思った。

MO：5-1の子どもたちは板にデザインする作業を完了している子が多く、早く電動ノコギリに取り組む子が多かった。5-3の子たちは1時間目の子たちよりも比較的進みが遅く、板にデザインをしている子が多かった。しかし、丁寧にデザインしたり、先生の指導のもと改良を重ねたり、作品制作への熱意を多く感じる事ができた。共通して言えることは子どもたちの器用さは人それぞれで電動ノコギリをすぐに使いこなせる子となかなかできない子がいて、それぞれにあった指導法を考える必要があると感じた。

RK：不必要に立ち歩いたり騒いだりせず、大人し

く説明を聞いたり制作を行ったりしていた。後半の授業では、先に板を切り終わった子どもが他の子どもをサポートしている姿が印象的であった。サポートする子どもは積極的に褒めるような声かけを行っており、そのことが、お互いのモチベーションの向上に繋がっていたように思う。また、電動糸のこぎりについては、使用した経験がほとんど全くない中、短い時間で一生懸命使い方を探りながら集中して制作に取り組む子どもが多かったように思う。この学年の児童はハサミを使って紙を回し切る経験を積んでいると思うが、その経験を板をのこぎりで回し切る作業とは結びつけにくいようだった。

SK：慣れない難しい作業かつ調子の悪い機材があったにも関わらず、めんどくさがったり怖がったりせずに挑戦しようとする子どもばかりだった。イトノコギリの扱いが苦手な子に教えてあげようとする子どももいた。

AK：電動ノコギリでの制作で困難に直面した時、やる気が萎えてしまう子と逆に自分でルートを探そうと意欲的になる子に分かれていた。中でも真っ直ぐに進むだけの切り取り線は一見簡単そうに見えるが、目視なので距離が長すぎると必ず何処かで斜めにずれてしまう。ある児童はSwitch（ゲーム機）の形を作ろうとしていたが、シンプル故にむしろ難しい形状であるという予想外な場面にでくわし、下書きよりも小さな形に切れてしまい、途中で少し創作意欲が削がれてしまった様子であった。一方で、卓球のラケットやシャチといった複雑で曲線が多い形はスタート地点やルートが複数個あることが多く、

途中から教え手の提案ではなく自分でルートを選び取るようになるなど自主性が活発になる傾向にあった。

RF：児童は先生の話に耳を傾け、必要以上に騒ぐことなく安全に留意して作業に取り組んでいたように思う。友人同士で成果を認め合ったり、アドバイスをしあったりと交流が自然にみられた。順番待ちの間も、糸鋸を楽しみにする様子や少し緊張している様子が見られたが、児童同士で話すことで大騒ぎになることなく過ごせていた。危なっかしい手つきもたまに見られたが、基本的に先生から説明があった通りに糸鋸を使っていたと思う。

NM：普段電動糸鋸を使う機会が少ないからか、技量の個人差はあまりなかった。そのため、上手く切れるか不安に感じている子が多かった。また、曲線

の連続のような複雑な形では刃に対する板の向きが分からなくなる子どもがいた。1～2限の授業を受けた子どもたちは作業を重ねる中で糸鋸に慣れていき、最終的には細部も上手く切れるようになっていた。3～4限の授業を受けた子どもたちは単純な形を何度も練習してから作業に入ったため、迷いなく切る様子が見受けられた。

TY：糸のこぎりを緊張しながら慎重に使う児童が多い。木の切れ端を使って何度も練習していた。また、ホワイトボードのデザインをしたりその他学習を進めたり真面目に取り組む児童が多かった。どちらのクラスの児童も真面目な生徒が多かったがクラスの雰囲気は異なっていた。5・2の方がより明るいクラスであるような印象を受けた。切り方にも児童の性格がよく表れるように思う。

## 2. 手足に直接絵の具をつけての描画（南立誠幼稚園年中・年長合同）を行う連携活動

（担当：上山 浩）

### 【目的】

子どもたちにおいて以下を目標とした活動を行う。

- ・水で溶いたポスターカラーを触る感触を楽しみながら紙に大きな絵を表現することができる。
- ・友だちと一緒に表現活動を行うことができる。

### 【概要と成果、課題】

上山にて、必要量の13色の絵具と必要数の絵具皿を、南立誠幼稚園にて、模造紙12枚による大きな紙、会場の養生などを用意して、手足を使って共同で大きな絵を描くことを提案した。実施場所：南立誠幼稚園空き教室。概ね上記の目的に沿った活発な活動が見られた。

### 【学生の感想】

NO：大胆かつ広範囲に色を乗せている園児もいれば、自身の周囲で制作している園児もいた。具象的な絵を描いていたり、両手を組み合わせて蟹のような模様を描いていたりした。活動終盤では、自分の手足の型が紙に残るのを楽しむだけでなく、混色で生まれる色の変化を楽しむ様子が見られた。

MO：子どもたちは基本積極的に活動に参加する子が多く、絵を描くことに抵抗が少ない子が多いように感じた。

はじめはの端っこばかりに着色する子が多かったが、だんだん全身を使い紙全体に描く子が増え、表現の幅が広がっていった。また、絵の具を混ぜ合わせ新しい色を作り出す子も出てきたため、混色の気づきを得られる子も数人いた。

RK：どの子どもも一生懸命に楽しみながら活動を行っていたように思う。始めの導入で先生が赤い絵の具の入った瓶を指して「この瓶に入っているのはケチャップかな？」と聞いた際、大多数の子どもが一生懸命「違う！」という意見を伝えようとしている場面が印象的だった。例え他の子がわかっている意見や、当たり前に見える意見だとしても、自分の考えを精一杯主張しようとするのは、小学生や中学生にはなかなか見られない様子だと思う。

制作の場面では、前半では各々が好きなように感触や視覚で絵の具を楽しむ様子が多く見られたが、後半では仲間と共に体を動かしたりコミュニケーションをとったりしながら描く様子が増えるといった変

化があった。先生の指示はしっかり聞くときは聞いている様子であった。

**AK**：幼稚園児は自分から話しかけてくるイメージが何となくあったので、他の人が話しかけに言っているのを見て、自分も少し真似して色んな園児に声かけをしようと思った。しかし、向こうからすると知らない人であることに変わりはないので、あまり打ち解けられていなかった気がする。初対面の人を信用出来るかどうかは、話している内容ではなく、声をかけるタイミングや表情、声の高低差などの細かい所作で大体を判断するのではないかと考えた。まず今日は朝早く起きて眠かったので、1時間という短い時間の中ではあったが、声色と表情が硬くなっていないか注意を払うべきだったと反省した。

**RF**：子どもたちは説明をよく聞き、指導された内容を行えていたと思う。最初はみんな固まって近い場所に手形をつけていたが、やがてたくさんの色を混ぜたり、重ねたり、色を変えたりして紙いっぱい描くようになっていった。喧嘩することなく楽しく活動できていて、色を変える時には友達と違う色を選んだり、同じ色を選んだりしていた。好きな色

という括りだけでなく、いろいろな選び方でそれぞれ思い思いに描いていたように見えた。

**NM**：最初はただ手足を紙に押しつけるだけだったが、慣れてくると手を丸めたり上下左右にずらしたりして押すなど多様な表現をするようになった。他の子どもが塗った場所とつなげる、重ねる、色を混ぜるなどの工程で他者を意識していた。また、すでに色がついた場所に別の色を重ねることで色が混ざりような表現を試している子どももいた。手や足で色をつけることによる感触遊びを楽しむだけでなく、蝶や花、ブラックホールなどの具体物を表したり見立てたりすることにも取り組んでいた。終盤では色を混ぜることで自分が想像した色を表そうとしていた。

**TY**：はじめ園児等は少し遠慮がちな様子だったが、時間が進むにつれて自由にのびのびと制作していた。例えば、手の押し方を工夫したり足を使って、丸く歩いたりして工夫していた。園児等は自然と混色して、それに喜びを感じていたように見えた。個人で制作する園児ももちろんいたが、自然と5人くらいの園児等が塊になって制作する姿があった。美術を純粋に楽しんでいるように見えた。

## 6. 保健体育教育講座

本年度、保健体育教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田小学校における水泳指導支援，授業補助
2. 北立誠小学校における新体力テスト
3. 西が丘小学校におけるシミュレーション教材の有効性研究
4. 一身田中学校におけるラートの授業支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田小学校における水泳指導支援，授業補助

(水藤弘吏)

#### 【目的】

小学校1年生の体育「水泳」の授業における授業支援と補助を目的として一身田小学校内の屋外プールにて実施された水泳授業に参加した。

#### 【概要と成果，課題】

2023年6月21日，6月22日，6月28日，6月30日，7月3日の5日間を予定していたものの，雨天により6月28日と7月3日のみ，一身田小学校1年生全クラスを対象とした水泳授業に授業支援・補助として参加した。授業内ではプールを囲うように学生を配置させ，児童全体が観察できるようにした。また，実際の水遊びや水中運動の活動では児童とともにプールに入り，活動を児童と一緒にする中で，児童への声かけや，活動内容での児童対応することで授業支援した。

授業実施については，一身田小学校の授業担当教諭が行った。小学校1年生の授業では水中移動や道具

を用いた背浮き，水中にあるものを取ることなどの水遊びを実施した。学生たちは実際に小学校の水泳授業がどのように行われているのか知る機会がほとんどなく，教育実習においても経験することがなかったため，水泳授業を経験する良い機会となった。

#### 【学生の感想】

学生1(HF) 本当に貴重な機会をいただき，とても学びの機会になりました。一番の印象は，先週の授業で，行った模擬授業のように，スムーズに授業を進められないことを実感しました。水の事故を防ぐためのルールを子どもが分かるように提示すること，水が苦手な児童への声掛けの仕方など，直接子どもと関わる中で，様々な課題や難しさがあるなど，実際の水泳の授業に参加しないと学べない事をたくさん知ることができました。今回の経験を整理して，今後の授業での学びや教育ボランティアに生かせるようにしたいと思いました。

### 2. 北立誠小学校における新体力テスト

(富樫健二)

#### 【目的】

北立誠小学校における体力測定を補助することにより，子どもの体力の現状を知るとともに，教育現場における体力測定実施方法や課題点について学ぶ。

#### 【概要と成果，課題】

2023年5/31～6/2に北立誠小学校で体力測定が行われ補助を行った。測定については，高学年が下の学年の測定の手伝いをするという形になっており，上級生と下級生でペアを作って測定していた。教師が全てを指導するのではなく，児童同士で握力測定をする姿がみられた。小学生の体力測定実施につい

ての実態を知る機会となった。

測定が始まってからは、児童に対して、腕を大きく振ったり、助走のタイミングを合わせたり、記録が伸びるようにコツを伝え、児童が一生懸命に取り組む姿が見られた。また、握力測定に苦戦しているペアがいたら指導をすること、円滑に測定ができるよう案内をした。

運動が好きな児童もそうではない児童もいる中で、北立誠小学校の児童については、好き嫌いを感じさせないやんががみられた。また、安全面の確保についても立ち幅跳びでは、児童が転倒して怪我をしないためにマットを敷いて測定を行っており、配慮も欠かさず行った。

2日目の体力測定の補助を行なったが、1日目の立ち幅跳びの補助で誤りがあったとの報告があった。そこで、今一度立ち幅跳びの測定方法についての指導があった。誰か1人でも測定方法を誤ってしまうと大きな影響を与えてしまう。測定方法について認知していると思っけていても教員同士で再度確認し合う大切さを学ぶことができた。

#### 【学生の感想】

KK：小学生の測定を手伝ってみて、私が小学生の頃には、安全面の配慮は今ほど行われていなかったように感じる。実際に現場の先生方も、ケガをさせないことに重点を置いていたことが、先生方の説明や声かけからも分かった。また、実際に小学生の測定をして、体格差による運動能力の差についても感じた。小学生にとって体が大きいことは、運動能力

にも直結する。今回も、体の大きな児童と小柄な児童で記録を競争しあう姿もみられたが、かなり記録に差がみられた。実際に教育現場に立った時には、体格差で有利不利のないような体育の授業を行うことも必要になってくる。身長や体重などで記録の基準を変更したり、ルールを工夫したりすることも考えていかなければ、全員が楽しめないのではないかと改めて学んだ。

KM：実際に現場に行って児童の実態を知ることができ、いい経験になった。改めて教員になりたいという気持ちも高まった。教員採用試験に向けて、頑張っていきたい。私は体力測定の補助を行なって学んだことが2つある。一つ目は先述したように、自分自身理解しているつもりでも間違っている可能性があるため、教員同士で確認し合う必要があり、分からないところがあれば素直に尋ねる大切さである。二つ目は、教員は児童同士学びのある空間を作る必要があるということである。教師が全てを指導せず、児童同士学び合える環境を、それは授業外であっても作る必要があると感じた。教育実習では、教科指導の他に学級指導を行うことができたが、今回のような体力測定という授業や学級指導とは少し離れた指導を体験することができ、貴重な体験であると感じた。また、私は中等専修であるため、中学校の教育実習を体験したので、現地の小学校の実態にふれることができたので、良い経験であると感じた。見学ではなく体力測定の補助という体験から学ぶことは多いのではないかと感じた。

### 3. 西が丘小学校におけるシミュレーション教材の有効性研究

(岡野昇・加納岳拓・国仲寛人)

#### 【目的】

本研究は、理科授業を対象にシミュレーション教材 PhET(The Physics Education Technology Project)を道具とし、探究的な学習における学びのあり様を実践的に明らかにすることを目的とした。

#### 【概要と成果、課題】

本実践は、「電気のはたらき(啓林館)」の単元

(全9時間)について PhET を道具として位置づけた授業デザインに基づき、6月中旬から下旬にかけて西が丘小学校第4学年を対象に、横田幸大教諭(西が丘小学校・教職大学院生)が授業を実施した。

なお、本研究は三重大学の研究倫理審査委員会において、承認(No. 2023-03)を得てから実施した。

その結果、子どもの素朴概念と教科書の知識を効率的につなごうとした時は、「実験の代替 PhET」や「教科書知識の解説 PhET」として位置づき、見える世界(実験や教科書の知識)の理解を強化するための道具となっていることが明らかにされた。

一方、探究的な課題を提示した授業展開では、「実験の見方を深める PhET」や「教科書か

らの逸脱 PhET」として位置づき、見える世界と見えない世界をつなぐ道具となっていることが明らかにされた。このことから、PhET は見える世界から見えない世界へ転換する道具として位置づき、見える現象の観察を通して、見えない関係や法則を科学的なモデルで可視化していく学びの可能性が示唆された。

#### 4. 一身田中学校におけるラートの授業支援

(岡野昇・後藤洋子・加納岳拓)

##### 【目的】

中学校第2学年6クラスを対象とした体づくり運動(ラート)の授業に学生がT2として参加し、ラートの動きに合わせる、またはラートに動きをつくり出すというおもしろさを生徒が味わえるための支援について学ぶことを目的とした。

##### 【概要】

体づくり運動の授業支援に入る前に、学生8名は、ラートの講習会に参加し、安全面と技能面についてのポイントを学習し、ラート運動学習指導マニュアルを作成した。

授業支援は、9月5日から9月19日までの計15時間(5クラス×3時間)行い、各学生が3回ずつ参加した。授業後は、一身田中学校の教員からアドバイスを受れたり、大学教員とリフレクションを実施した。また、参加した授業について、自身の学びとなった場面についてエピソード記述を行い、学生間で共有したのちに、次の支援に参加するようにした。

##### 【学生の感想】

右は、エピソード記述の一例であり、下記はエ

ピソード記述に対する学生のコメントである。

・今回のこの女子たちすごいと感じたところは、姿勢を真っ直ぐにしようというところに目を向けるだけでなく、どうしたらラートが速く回ってしまうのかに目を向け、速くなる原因を見つけているところである。またそれを踏まえて、怖がっている子にアドバイスしていた。このグループを全体で共有したら姿勢の改善に繋がりが、ステップの上を歩く際の手がかりとすることができるのではないかと考えた。

・姿勢だけでなく歩幅の大きさにまで着目していた。そのことから、ゆっくり歩くための歩幅を探しラートをコントロールしていこうとしている姿が予想される。女子Dの「姿勢が前のめりになってしまうくらい歩幅が大きくなるくらいじゃない？」という発言から前のめりにならない程度の歩幅で足を出していけばラートをコントロールできるということを学んでいったと考えられる。このグループから姿勢を保持することで歩幅を制御するのではなく、歩幅をコントロールすることで姿勢を制御することができるかもしれないということを学んだ。

## 7. 技術・ものづくり教育講座

本年度、技術・ものづくり教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

### 1. 橋北中学校における「IchigoJamを用いた温泉卵づくりの授業」

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 橋北中学校における「IchigoJamを用いた温泉卵づくりの授業」

(加藤 進\*, 松岡 守)

#### 【目的】

凝固温度の違いから、卵を茹でる湯温を 65～70℃程度に保持すると、卵白だけが固まった半熟卵とは逆の卵黄だけが固まった、いわゆる温泉卵を作ることができる。温度センサの指示に従って電熱器を制御することにより温泉卵づくりをすることを通じて中学校技術・家庭科技術分野のエネルギー変換の技術、及び情報の技術（計測、制御、プログラミング）を体験的に学ぶことを目的とする。

#### 【概要と成果、課題】

9月4日、5日の二日間にわたり橋北中学校2年生全6クラスを対象に1クラスずつ実施した。実験装置の構成は次の通りである。1Lのビーカーに0.7L程度の湯と卵を入れ、これを210Wの電熱器で加熱・保持する。湯中にIC温度センサを差し込み、それから得られる温度データに基づき、電熱器の電源をオン/オフ制御する。センサからの信号入力、及び電熱器をオン/オフするソリッドステートリレーを用いた回路への信号出力は教育用プログラミングシステム IchigoJamによる。

各クラス6班構成とし、班ごとに上記の実験装置を1セットずつ準備した。そして2班ごとに制御温度を60℃、65℃、70℃と違い、加熱後に比較できるようにした。50分授業で完結する必要から、実験セット、プログラムとも完成状態にしておき、授業開始30分前に温度制御を開始、授業開始時に加藤が一通りの説明をし、その後生卵を入れて加熱開始、茹でている時間中に、温泉卵についての生徒の気づきに関わるいくつかの説明を松岡が行った。センサの線が繋がっている高温の湯が入ったビーカーを取り扱うことから、大学生は安全の確認を行いつつ生徒の操作補助を行った。

昨年度は制御にScratchとArduinoを組み合わせ

せて行ったが、今年度はIchigoJamのみとし、夏休みの宿題としていたプログラミングそのものとなっていて生徒には分かりやすい出前授業となったと思われる。温泉卵づくりそのものは一般的には技術ではなく家庭の分野に通常は入るものと思われるが、温泉卵ができる仕組みを知り、そしてそのためには適切な計測と制御が必要であるというように、技術的な側面で実は奥が深いものともいえることを体験的に学ぶ授業ができたと考える。

#### 【学生の感想】

YK：デジタルの表記でも誤差が生まれていることや、エアコンを設定しても少しの間設定温度を超えてしまうことなどを子どもたちが温泉卵を通じて学ぶことができたと思う。KA：子どもたちがゆで卵の硬さや見た目の変化に釘付けになっている姿を見て、理科のおもしろさに気づきました。お手伝いをさせていただくことができ良かったです。MS：温泉卵を使った授業だったので身近なもので実験をすることで生徒たちも興味関心が強くあったように見えました。そのため授業が楽しい雰囲気で見ている面白かったです。YK：温泉卵はコンビニやスーパーなどにも売っていてあまり珍しいものではないが、作り方の知識がある人は少なかったはずである。温泉卵はお湯の温度を一定に保つ必要があることから『温度を保つためのプログラミングが必要である』というプログラミングの意義についても学べる教材であったのではないかと考える。\*伊賀サテライト

## 8. 家政教育講座

本年度、家政講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 一身田小学校、西が丘小学校、南立誠小学校での家庭科の被服実習の補助
2. 一身田中学校での家庭科での調理実習の補助

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 一身田小学校、西が丘小学校、南立誠小学校での家庭科の被服実習の補助

(活動担当者：平島円)

#### 【目的】

家政教育コースで開講している教育実地研究では、一身田・橋北校区連携校の小・中学校の家庭科における実習補助を行うことにより、学生の子ども理解、教材研究、指導力向上を目指している。また、教育実地研究の履修者以外にも広くボランティアを募り、家庭科の授業についての知識の習得のため、活動を行っている。

#### 【概要】

##### 1. 授業科目名

教育実地研究 (通年集中)

指導教員：平島円

##### 2. 実施日

一身田小学校 6年生

9月4日～10月10日の毎週月・火・水曜

一身田小学校 5年生

9月7日～10月11日の毎週木・金曜

9月13日 (水)

西が丘小学校 5年生

1月15日 (月)

1月16日～2月6日の毎週火・金曜

南立誠小学校 5年生

2月16日、20日、22日、3月1日

##### 3. 参加人数および学年

4年生7名、3年生5名、

2年生6名、1年生4名

延べ 70名

##### 4. 活動の内容

一身田小学校では6年生、西が丘小学校と南立誠小学校では5年生対象の家庭科でのエプロン作成のために主にミシンの実習の補助を、一身田小学校で

は5年生対象の家庭科の手縫いでの被服実習補助等を行った。

#### 【成果と課題】

今年度は、コロナ禍も終わり、非常に多くの小学校の家庭科の実習時に声をかけていただいた。さまざまな学校・クラスで、現場の子どもたちと接する機会を多く得られること、異なる先生の授業方法を見られることが、連携活動の良い点であり、学生たちは大学の授業では得られない学びの場を得ていた。先生方の授業内容の説明方法や、資料等の掲示方法について見られることは、将来、教員になる学生にとって、すぐに役立つ機会となったようであった。また、子どもの発達段階による技能レベルや成長の過程、様々な性格の子どもたちについて理解することもできたようであった。しかし、そのことが教員になったときに、自分一人で授業できるのか子どもたちへの対応の難しさも考えさせられたようでもあった。また、同じ小学校でも子どもたちの様子や雰囲気クラスにより違うこともわかり、クラスごとの対応の難しさやクラスづくりの難しさについても学んだ様子がうかがえた。授業を補助するだけでなく、クラスづくりの側面も垣間見ることができたことは、今後、現場に出たときに役立つ経験となるであろう。

#### 【学生の感想】

小学校の被服実習補助を通して、家庭科教員の現場での苦労や授業における工夫を知ることが出来ました。また、児童が被服製作のどこにつまずくのか、教師はどのようなアプローチをすることが有効なのかについても学ぶことが出来ました。春からの教員生活において、実習補助で学んだことを生かしてい

きたいと思います。

(担当学生名：WO)

今回のミシン補助を通して、実習での子どもの姿を知り、実習を教員1人で行うことの大変さを感じました。子どもの進み具合の違いや、できないとやる気をなくしてしまったり、自分なりのこだわりがあったりなど、子どもによって教員の関わり方も変えていかないといけないと感じました。今後、教育現場に出た時には、今回の活動を活かして、視野を広くし、安全に実習ができるように心掛けていきたいと思いました。

(担当学生名：CW)

小学校の実習補助を通して、現場での振舞い方や児童との関わり方を学ぶことができました。また、児童一人ひとりの様子を観察することどのようなこ

とに難しさや面白さを感じているかを理解することができました。小学生の段階でどこまで技術を身につけているのかを知ることができたので、今回学んだことを、来年からの中学校での授業づくりに活かしていきたいと感じました。

(担当学生名：RN)

私は中学校の教員になりますが、実習の補助では小学校に行くことが多く、自分の勤務先とは異なる校種の子どもの様子や授業を見ることができいい機会でした。特に小学校での児童の様子を見ることで、中学生の発達段階や特性をより深く理解することができました。この経験を活かして、中学校では、生徒の個々のニーズに合った支援をしていきたいです。

(担当学生名：TW)

## 2. 一身田中学校での家庭科での調理実習の補助

(活動担当者：平島円)

### 【目的】

家政教育コースで開講している教育実地研究では、一身田・橋北校区連携校の小・中学校の家庭科における実習補助を行うことにより、学生の子ども理解、教材研究、指導力向上を目指している。また、教育実地研究の履修者以外にも広くボランティアを募り、家庭科の授業についての知識の習得のため、活動を行っている。

### 【概要】

#### 1. 授業科目名

教育実地研究（通年集中）

指導教員：平島円

#### 2. 実施日

10月30日、11月1日、6日

#### 3. 参加人数および学年

4年生6名、3年生4名、教員1名

延べ 12名

#### 4. 活動の内容

この活動は2年生対象の一身田中学校での理科と家庭科の連携授業で、家政教育コースの学生は家庭科でのニジマスの調理実習の補助を主に行った。

### 【成果と課題】

理科でニジマスの解剖を行い、家庭科でニジマスの調理を行うこの活動は、今年度久々に行われた授業であり、家政教育コースの学生が中学校へ補助に行くのも久しぶりであった。この活動においても学生たちは大学の授業では得られない学びの場を得ていた。学生たちは理科の授業から引き続き、家庭科の授業に代わるため、衛生面で注意しなければならないことを感じていた。子どもたちに配布された資料と当日の作業が異なったことから、少々の混乱があったが、教育現場では臨機応変に対応しなければならないことも考えさせられたようでもあった。小学生とは違う一面を見られたことも非常に勉強になり、今後、現場に出たときに役立つ経験となるであろう。

### 【学生の感想】

校種や学校による子供たちのレベルの差を感じた。そのため、勤める学校によって子どもたちレベルに合わせた授業の工夫を考える必要があると感じた。また、中学生でも、コンロの付け方がわからない、小麦粉で魚を包んでしまうなど、想像以上に生活経

験が少なく、細かいところまで指導する必要性、大変さを感じた。特に調理実習や被服実習は、教員一人では目が行き届かないため、他の教員と協力し合うこと、頼ることも大切にしたいと思った。

(担当学生名：NT)

一身田中学校の調理実習補助に参加させていただき、

現場でのリアルな調理実習の様子を見ることで、様々な学びを得ることができました。また、授業の補助という立場からであったため、より細かく生徒の様子や現場の先生の中學生との接し方を見ることができ、とても勉強になりました。

(担当学生名：HN)

本年度、英語教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 北立誠小学校における学生による外国語活動
2. 栗真小学校における外国語活動
3. 一身田小学校における外国語の支援活動

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 北立誠小学校における学生による外国語活動

(担当：荒尾浩子)

#### 【目的】

小学校 3 年の外国語活動で児童が色や形などを表す英語の語句や表現などを知り、オリジナルのクリスマスツリーを作るために英語でやり取りをすることに慣れ親しむのが授業目的であった。英語教育コースの学生 11 人は、外国語活動での言語活動をデザイン、実践し、児童との交流を通して、教育現場の実態をつかみ、実践力を強化するのを目的とした。

#### 【概要】

2023 年 11 月 29 日 3 時間目に北立誠小学校 3 年生 3 クラスを対象に Let's try 1 unit7 の this is for you の言語材料を用いて、クリスマス題材に語彙の言い方を学び、練習し、言語活動で使えるようにした。

活動の流れは以下である。

言語材料としては既習の ● What do you want? ● ○○, please. - Here you are. / Thank you. / You're welcome. ● This is for you. を用いた。Activity1 の Go Game では、後の活動で必要となる語彙のインプットを繰り返し行い、定着させた。指導者に注意深く耳を傾け語彙の音声にゲームを通して慣れ親しむことができた。Activity2 では単元で学んだ表現と Activity1 で慣れ親しんだ語彙を用いて、お互いに作りたいクリスマスツリーをイメージしながら英語でやり取りして、欲しいオーナメントを受け取ったり、渡したりした。

【成果と課題】班ごとに、配布されたクリスマスツリーの台紙に、それらのオーナメントを貼

り装飾しオリジナリティのあるツリーを作成することができた。児童はどの活動にも集中し、積極的に英語を使う姿勢が見られ、コミュニケーション能力の素地が十分に育成されているのがうかがえた。学生は構想の段階から英語でのやり取りの必然性が生まれる仕掛けをに工夫を凝らし、その成果を授業に反映することができた。児童への対応や活動中の指導者としての態度など、随所に教育実習やこれまでの実践的な取り組みで培った教育実践力が発揮できている様子であった。



#### 【学生の感想】

3 年生の児童は想像した以上に英語を話すことに慣れており、抵抗力のなさに驚きさえ感じて、外国語活動の意義を実感した。今回の実践を通じて、児童生徒の発達段階や、各学年における目標等をしっかり確認しながら授業を組み立てていくことの重要性を改めて確認することができた。何より自分たちの考えた活動に児童が楽しそうに取り組んでいる様子にやりがいを感じた。全く恥ずかしがることもなく英語で自分たちに話しかけてくれる児童たちがとてもかわいく感じた。1 年生の時に、新型コロナの影響で北立誠小学校で授業実践する機会を失い、とても残念であったが 4 年生最後にその機会があり、感謝している。

## 2. 栗真小学校における外国語活動

(担当:中川右也)

### 【目的】

栗真小学校に三重大学教育学部英語教育コースの1年生が行き、楽しみながら英語に慣れ親しむことができる活動を行った。

### 【概要と成果】

英語教育コースの学生1年生(10名)が10月26日(木)に英語を使った活動を行った。

学生たちは、児童の学年に合わせた活動を実施した。

### 活動内容

- ①ジャンケン列車
- ②フルーツバスケット

ジャンケン列車では、英語で歌を歌いながらジャンケンをするものであった。

フルーツバスケットは、フルーツを児童が英語で発音しながら楽しむものであった。

活動後も、窓の外から、ワン・ツワー・スリーと英語でじゃんけんをする声が聞こえ、児童みんな爆笑している様子が垣間見ることができたことから、楽しみながら英語に慣れ親しむことができた。

栗真小学校の先生方からは、活動の振り返りとして様々なコメントをいただいた。ジャンケン列車の活動については、5回ジャンケンして、何回勝ったかを英語で聞くことによって、児童みんながジャンケンを5回でき、数字の英語の学習にもなるというご意見や、フルーツバスケットの活動については、真ん中の児童が言ったフルーツをみんなで発音してから移動する、または、言われたフルーツを座ってる子たちが探して(発音しながら)指を指すなどすると、該当しないフルーツの子ももっと参加できたのでは、という有益なコメントを頂戴した。全員の活動量の確保も大切であることから、今後の課題を発見することができた。



英語の授業で一番大切な堂々と発音することができていたのは良かったという感想を頂き、緊張する中、学生たちの頑張りも認めていただいた。

活動に関しての目標として、学生たちには事前に「楽しい」というキーワードだけを提示した。たった「楽しい」1つだけであるが、それを達成するために色々な要素を考える必要があることに学生たちは気づくこともできたかと思われる。そして、その解は無限に存在し、考えて実行して内省をして、また実行してみることの繰り返しであり、そうすることによって、子どもたちも楽しそうに生き生きと活動に取り組む。

子どもと共に教師も成長しているという感じが必要不可欠であり、自分が頑張ると子どもが想像もしなかった力を発揮する場面に出会ったりすることも活動を通して学生たちは実感していたようである。

教師という職業がとてもワクワクする楽しい幸せな仕事であることが活動を通して学生たちは経験することができた。



今回の活動は、学生が教師という職業の魅力を少しでも実感することができ、いろいろな人と出会って、体験を重ね、人間味あふれる「人」に「社会人」にそして「教師」になるための成長過程であり、貴重な体験であった。本活動を実施する機会を与え、そして活動を陰ながら支えていただいた栗真小学校の先生方に心より感謝申し上げます。

### 3. 一身田小学校における外国語の支援活動

(担当：中川右也)

#### 【目的】

一身田小学校の英語の授業において、3年生を対象にALTと活動する際の補助を三重大学教育学部英語教育コース学生が行い、英語をいっしょに楽しく学ぶ支援を2回した。

#### 【概要】

英語教育コースの学生(2名)が7月12日(水)と1月21日(火)に英語を使った活動に参加をして補助を行った。

7月12日(水):1回目(3年生)

活動内容と児童の様子

#### ・指導者挨拶

ALTと”What day is it today?”や”How are you?”等の簡単なやり取りをする。

#### ・ボランティア挨拶

簡単な表現のみを用いた自己紹介と児童からの質問タイム

→児童たちは目新しさ故に興味津々であり、授業の3分の1程度がここで過ぎる。

#### ・自己紹介ビンゴ(児童に混じってビンゴ)

じゃんけんして勝った方は”What’s your name?”と相手に尋ね、名前を聞き出す。

その後負けた方も同様に名前を尋ね、Nice to meet you.(,too.)とやり取りを締めくくる。

初めのじゃんけんで勝った方は、手元のビンゴカードに相手に名前を書いてもらうことが出来るが、負けた方はできない。

→児童は楽しんではいしたが、後半からは集中力がな子が伺えた。

2回目の活動では、前回の学生を覚えている児童が多く、質問コーナーも盛り上がった。児童はABCの歌に合わせて楽しそうにダンスをし、クイズ形式の活動に積極的に参加していたため、学生が英語活動を補助することの意義を感じられた。

学生たちは児童との活動に積極的に関わり、コミュニケーション能力を発揮した。児童の興味を引きつける工夫があり、楽しい学習体験が提

くなりかけている様子であった。

1月21日(火):2回目(3年生)

活動内容と児童の様子

#### ・指導者挨拶

#### ・ボランティア挨拶

→前回来てくれたことを覚えてくれている児童が思いのほか多く、中にはテニスが好きだということまで覚えてくれている児童もいた。質問コーナーについても前回同様に楽しく盛り上がった。

#### ・アルファベットのダンス

→ABCの歌に合わせて体をアルファベットの形にしながらか楽しそうにダンスしていた。

#### ・アルファベットの仲間分け(机間巡視)

教科書に載っているアルファベットを自分なりに仲間に分ける。

→担任の先生が日本語で補足するまでは、なかなか児童の手が動かなかった。説明を補足した後、一定数の児童はグループ分けができない様子であった。

#### ・アルファベットグループ分けクイズ

学生とALTがグループ分けしたアルファベットがどういった意図で分けられているのかを答える。

→クイズ形式ということもあり、児童は積極的に手を挙げて発言していた。

#### 【成果】

2つの活動において、英語教育コースの学生2名が児童と共に英語学習を通じて交流を行った。児童は活動に興味津々で、英語活動を楽しんでいる様供されたが、児童の集中力を持続させるための工夫が課題となった。児童の前向きな参加は好ましいものであった。

#### 【学生の感想】

実習が附属小だったこともあり、公立学校での授業は良い経験になった。また、附属中の実習ではパフォーマーとしての素質に課題があったが、ここで得た経験によって自信を持てるようになり、その素質に少し磨きをかけられた。

本活動を実施する機会を与え、そして活動を陰ながら支えていただいた一身田小学校の先生方に心より感謝申し上げます。

## 2023 年度 地域連携校における教育実習の報告

(教育実習委員会委員長 富田昌平)

令和 6 (2023) 年度の地域連携校での教育実習に関して、6 月期の 2 週間実習では、一身田中学校 1 名、南が丘中学校 1 名、橋南中学校 1 名、久居中学校 1 名、朝陽中学校 1 名の計 5 校 5 名の学生がお世話になりました。また、9 月期の 4 週間実習では、一身田小学校 5 名、北立誠小学校 4 名、南立誠小学校 4 名、西が丘小学校 6 名、栗真小学校 2 名、白塚小学校 3 名、養正小学校 1 名、豊津小学校 1 名、千里ヶ丘小学校 1 名、成美小学校 1 名、桃園小学校 1 名、一志西小学校 1 名、一志東小学校 1 名の計 13 校 31 名の学生がお世話になりました。ご助力いただいた地域連携校の先生方や児童生徒のみなさん、津市教育委員会等関係する方々に厚く御礼申し上げます。

### 【経過】

令和 2 (2020) 年から令和 4 (2022) 年までの 3 年間は、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、その感染予防対策のために教育実習も実施方法・内容の変更、実習期間の短縮、実習生の行動制限など、様々な対応を余儀なくされた。

しかし、令和 5 (2023) 年度の教育実習については、早くから国による令和 5 年 5 月 8 日以降の 5 類移行などの方針が示されていたこともあり、また、学校教員養成課程の中核をなす教育実習の充実が学校現場における教員不足などの問題を踏まえても急務であるとの認識から、通常スタイルに戻すこととした。

つまり、6 月期実習は 8 日間の短縮から 2 週間に、9 月期実習は 15 日間の短縮から 4 週間に戻した。実習前後や期間中の移動制限も解除し、事前指導も対面の回数を増やした。事前活動も復活させた。実に令和元 (2019) 年度以来のことである。

学内では、まず、かつて教育実習がどのように行われていたかを思い出すことから始まった。3 年の間に学部の教職員も大きく入れ替わり、書類もアナログからデジタルへ、会議も対面からオンラインへと変化していた。また、かつての方法・内容をそのまま再現するのではなく、削るべきところは削り、修正すべきことは修正し、かつ新た

に手に入れたものの良さも盛り込みつつの再構築であるため、事態は難航を極めた。しかし、関係の先生方のご理解とご協力により、何とか大きな問題を生じさせることなく、乗り切ることができたように思われる。

教育実習を通常スタイルに戻すことは、学生にとっても実習の充実と安心へとつながった。そのことは教育実習の辞退者数にも表れており、実習前 1 か月内の辞退者数は令和 4 年度が 6 名 (6 月期 2 名、9 月期 4 名) であったのに対し、令和 5 年度は 2 名 (6 月期 2 名、9 月期 0 名) と減少した。このうち、実習期間中の辞退者数は令和 4 年度が 4 名 (6 月期 2 名、9 月期 2 名) であったのに対し、令和 5 年度は 1 名も出なかった。特に 9 月期の、多くの学生にとって初めての实習において、エントリーした学生すべてが実習を終えることができ、免許取得に必要な実習要件を満たすことができたことは、教員不足が深刻化するなかで、大きな成果であったと言える。

### 【来年度に向けて】

学生たちにとっては普通の生活が送れることや、実際に学校現場を訪問し、指導の先生や児童生徒とじかに触れ合えることの喜びを強く実感できた 1 年であったと思われる。今後はこうした喜びを教職に就く喜びへとうまくつなげていけたらと願っている。

## Ⅱ 一身田・橋北校区 連携校園からの報告



# 1. 南立誠幼稚園

本年度の南立誠幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

- ① 美術教育「手と足に絵の具をつけて表現しよう」
- ② 食育実践「バランスよく食べよう ～人形劇から楽しく学ぶ～」
- ③ 子育て支援（未就園児の遊ぶ会「うさぎ組」）

以下に活動報告を示す。

## 1. 美術教育「手と足に絵の具をつけて表現しよう」

（上山浩先生と美術教育コース学生）

### 【目的】

- ・幼児が手や足につけた絵の具を思うままに白いキャンバスにおき、絵の具の感触を思い切り楽しむ。また、そこからイメージしたり広げたり、偶然に混ざり合った色や模様を友達や教師と共有して楽しむ。
- ・自分のイメージしたことを手や足につけた絵の具を使って表現する楽しさを味わう。

### 【概要】

- ・用意するのは、大きな模造紙と鉢受け皿に薄く溶いた10色の絵の具。幼児が自分の好きな色を選びながら、絵の具を手につけ、連続で手形を押して薄くなっていくのを楽しんでつける。
- ・幼児1人又は2人に対して学生が1人ずつついてもらい、幼児のその瞬間の思いに寄り添い受け止めてもらったり、声をかけてもらったりして、自分から学生に親しみをもってかかわる。

### 【成果と課題】

・事前に上田先生と打ち合わせを行い、幼児の様子から経験させたいことを伝えた。打ち合わせの中で、“みんなで何かを描く”のではなく、自由に表現することを重視してすることにした。また、イメージしたものを描きたい幼児も出てくるのかもしれないと話をしていった。しかし、模造紙を大きく用意したことで思い思いに絵の具を広げて楽しむ幼児は、友達がイメージして楽しんで描く空間を感じながら違うスペースで楽しんでいった。絵の具を手につけることに抵抗がある幼児もいるのではと予想したが、幼児が“楽しそう”と思える活動であったことで、雑巾がけをするように絵の具を滑らせたり、蛙跳びをしながら連続で手型を押したりして喜ぶ姿もあった。個々で一通り楽しんだ後は、幼児同士頭を突き合わせて自分と友達の持っている絵の具を混ぜたり、友達が押した手形の上に自分の手形を重ねて色が変わることや「せーの」で押すことも楽しんだりしていた。学生は、幼児の視線になり「これ、カニかな？」「きれいな色になったね」等と幼児の表現を受け止めることで、幼児が描いたものについて話す姿が見られた。話をすることで幼児のイメージが膨らんだり広がったりするのを感じた。幼児が自由にダイナミックに活動できる環境があることで、表現することが楽しく自分らしさを発揮して美術活動に取り組めることを学んだ。



## 2. 食育実践「バランスよく食べよう ～人形劇から楽しく学ぶ～」

(磯部由香先生と幼児教育コース学生)

### 【目的】

- ・食事の大切さについて、考えたり学んだりしながら、基本的な食事のあり方について知る。
- ・「どのようなものを食べると力がでるのか？」とクイズ形式で指導し、食事について楽しく学ぶ。

### 【概要】

- ・学生が幼児を対象にどのような食育指導を行うか班に分かれて出し合い、その中から実践する指導案を選んで実践してもらった。

### 【成果と課題】

- ・基本的な食事について、人形やイラストパネルを使って進め、幼児にわかりやすい指導をしていた。カラフルで大きなパネルであったり、動く仕掛けがあったりしたことで、幼児は夢中で学生の話聞いていた。また、人形を動かしたり声色を変えたりしながら幼児に問いかけていたり、幼児が好きそうなお菓子のイラストを入れてあったりしたので、最後まで楽しく話を聞いていた。

食事をバランスよくとるために、4つの穴を開けてもらっており、幼児がその穴に食べるとよいと思うメニューのイラストをはめていくものであった。主食・副食・汁物と色分けがされていたが、体へのはたらきごと（血液や筋肉をつくる・エネルギーになる・体の調子を整える）などに即して食べ物、色に意味があると、より分かりやすかったと思った。

好き嫌いが多く食べることへの関心も薄い幼児もいるので、幼児が食事に興味をもてるような話を聞き、改めて食事の大切さを感じられたと考える。



## 3. 子育て支援 未就園児の遊ぶ会「うさぎ組」

(水津幸恵先生と幼児教育コース4年生)

### 【目的】

- ・うさぎ組に訪れる未就園児（0歳～3歳）やその保護者と関わる中で乳幼児理解、保護者理解に努め、子育て支援のあり方を学ぶ。
- ・地域ボランティア、幼稚園の担当職員と一緒にうさぎ組の運営を進める中で、保育現場に即した活動内容の研修向上につなげると共に、園の子育て支援の充実を図る。

### 【概要】

- ・当園では、5月中旬より開催し、6月、10月から1月まで月1～2回、木曜日の午前中に未就園児の会「うさぎ組」を実施した。未就園児とその保護者が、ままごと、ブロックなどのコーナーで遊んでいる。また、コーナーの1つとして、どんぐりマラカス作り、新聞遊び、風

船クッションなど学生が計画した活動も準備してもらった。後半の全体活動の時間では、学生が中心となって進め、体操やふれあい遊び、絵本の読み聞かせ等をしている。誕生会やハロウィン、クリスマスなど季節の行事を楽しめる内容も取り入れている。

活動内容の計画、その日に向けての教材準備や各コーナーの遊びの設定は、学生が中心となって行い、うさぎ組終了後は、地域ボランティアの方も一緒に全員でその日の反省会と次回の打ち合わせを行った。

### 【成果と課題】

- ・未就園児の遊ぶ会に参加する子どもたちは、毎回同じメンバーとは限らず、年齢に幅があり、参加人数も変動する。乳幼児の月齢差による発達差

は大変大きく、教材準備や活動の内容、子どもたちへのかかわり方などに難しさがあったと思われるが、会を重ねる中で、同じ遊びでもそれぞれの年齢ごとに楽しみ方が違うことを実感し、できるだけみんなが楽しめるように内容を考え、準備物や声のかけ方など工夫していた。教材研究や準備、環境設定の大切さを学ぶことにつながったと思う。

- ・ 学生が未就園児の子どもやその保護者に自分から声をかけてかかわる中で、子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿が見られ、保護者はそんな様子を微笑ましく見ており、親子がこの会に喜んで参加していたことを感じる。

- ・ 経験豊かな地域ボランティアさんからのアドバイスや自分たちの反省を次回での取り組みに生かして、積極的に計画、準備する姿に学生の意欲を感じることができた。

- ・ 反省会では、「スケジュール通りにこなすことに気を取られ、時間配分が上手くできなかったこ

とを反省した。全体の様子を見ながら学生全員で協力して進行することが大切だと感じた」「ボールプールを準備したが、子どもたちの目には入らず遊ばなかった。目につきやすい場所に設定することが大切だと思った」「全体活動の時に間ができてしまった。どうすればよかったのだろうか」

「制作活動では、様々な工程を作ることで、異年齢の子がそれぞれの楽しみ方ができるように工夫することができるようになってきた」「活動の面白さは何か、それを子どもたちが感じるにはどのような工夫ができるか考える必要があった」

「同じ遊びでも発達段階に応じて様々な遊び方があることが分かった。様々な楽しみ方ができる遊びを計画していきたいと思う」など、その日の子どもの様子や自分の動きを振り返った様々な意見が出た。実践を重ねながら、将来、教育現場で、実際に子どもたちや、保護者とかわる中で生かせることをたくさん学んでいることが感じられ、このことは大きな成果であると思う。

## 2. 栗真小学校

本年度、栗真小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 低学年生活科（秋みつけ）における学習支援
2. 数学科学生による教育実地研究基礎
3. 学習ボランティアにおける学習支援
4. 英語ボランティアによる英語学習
5. 教育実習生の受け入れ
6. かがやき栗真小フェスティバル（学習発表会）への参加
7. 教員を対象とした研修（国語科の授業について）への助言
8. 5年生総合的な学習の時間（防災）における学習支援
9. 4・5・6年生音楽における学習支援

以下に活動報告を示す。

### 1. 低学年生活科（秋みつけ）における学習支援

（理科教育 平山大輔先生と学生）

#### 【目的】

1・2年生の生活科単元「秋みつけ」において、三重大大学の校内で落ち葉や木の実の採集を行い、秋の自然について興味を持ったり植物について学んだりする。

#### 【概要と成果、課題】

11月28日、1・2年生の子どもたちが校外学習として、大学キャンパスを訪問した。生活科の「秋みつけ」の学習の一環として、大学キャンパス内にある落ち葉や木の実の説明を理科教育の平山教授から聞き、採集を行った。

小学校区にある大学キャンパスで、身近な木や実について、大学の教授が分かりやすく話をしてくれたので、子どもたちは興味や関心をもって自然に親しむことができた。名前を知らない落ち葉であったり、見たこともない木の実を見つけたりする度、平山教授に専門的な説明をしてもらい、よりよい環境教育の場となった。

大学のキャンパスには多様な木々が植えられており、ちょうど落葉の時期にある木々が多かったので風に吹かれて舞う葉を興味深そうに見つめる子ども

たちの姿があった。「秋みつけ」には絶好の場所となっており、子どもたちは「この葉はなんていう葉ですか。」「どんぐりはどうしてこの形ですか。」と平山教授に、疑問をたくさん投げかけていた。平山教授には、専門的な知識を交えながらわかりやすくお話していただき、たくさんの疑問に答えてくださった。

全体を通して、学生等ボランティアの参加もあり今回のような校外活動では安全面においても大変有意義であった。

昨年度の課題として、小学校から三重大大学までの往復にかかる時間が挙げられていたが、今回は昼食を三重大大学構内で行いそのまま下校という形式にしたので、子どもたちにも負担のない活動にすることができた。



## 2. 数学教育学生による教育実地研究基礎

(数学科教育 川向洋之先生と学生)

### 【目的】

各学年における学習支援や支援を必要とする児童への個別の支援体制づくりの1つとする。

### 【概要と成果、課題】

年間を通して、3名の教育実地研究基礎の学生を受け入れ、3学年にわたり毎週1時間、算数を中心にさまざまな教科の学習の児童支援をお願いした。

週1時間という限られた時間であるため、当日は担当教師との打ち合わせは無く、学生が臨機応変に自主的に活動していた。初めは、立ったり、座ったりして見ているだけであったが、少しずつ自分から子どもたちに関わる姿が見られるようになった。

3年生では、火曜日の4限目に主に算数の学習の児童支援を行ってもらった。授業中の子どもたちへの声掛け・補助などをしてもらい、子どもたちも学生が来ることを楽しみにしていた。



5年生では、金曜日の2限目に主に算数の学習の児童支援を行ってもらった。児童の机間巡視、声掛けをしてもらった。困っている子に優しく声をかけ寄り添ってくれていた。

6年生では、月曜日の1限目に主に算数の学習の支援を行ってもらった。授業中は、困っている子への声掛けや、練習問題を解く際の支援をしてもらった。

今年度は、学生が支援する学年を変えず、年間を通して同じクラスに入ってもらった。

同じクラスの児童との関わりを通して、児童理解の大切さや学級経営の重要性などについて、理解を深めてもらえるよう工夫した。また、回を重ねるごとに学生と子どもたちが打ち解けて話をする姿が見られ、自信を持って子どもたちに接する学生の姿が見られた。

課題としては、本校は小規模の単学級ばかりの学校であるため、教科や活動内容を考え支援に入ってもらっており、調整が難しい場合が多かった。また、学生の基本的な態度が気になった。自分から挨拶をするなど基本的なことを身に着けたうえで、子どもたちに接してほしい。子どもたちは、お兄さんお姉さんを良いお手本として見ていることが多い。学生のみなさんもその意識を持って、お客さんではなく、主体的に活動できるようになってほしい。

## 3. 学生ボランティアにおける学習支援

### 【目的】

各学年における学習支援や支援を必要とする児童への個別の支援体制づくりの1つとする。

### 【概要と成果、課題】

今年度は、後期に5名の学生ボランティア（学部生）を受け入れた。2年～5年の特別支援学級児童のさまざまな教科の学習について、児童支援を行ってもらった。

担任に支援の仕方を教えてもらいながら、一人ひとりに寄り添った支援をしていた。

とりに寄り添った支援をしていた。

課題としては、打ち合わせの時間をとることがほ



とんど難しい中で、学生にどのような活動をさせるかが挙げられる。子どもたちの活動内容やその目的を教員と学生の間で共通理解を図り、一人ひとりに

応じた支援体制をいかに充実させていくか、今後の課題である。

#### 4. 英語教育学生による英語学習

##### 【目的】

英語に触れることで、異なる文化や言語に興味を持ち、自ら学ぼうとする。

##### 【概要と成果、課題】

10月26日の5限目に、1・2年生で英語教育学生による英語学習を行った。

最初は、学生たちによる自己紹介があった。名前だけではなく、好きなことを紹介し子どもたちが興味を持てるような工夫をしており、子どもたちも興味津々に話を聞く姿が見られた。

ゲームはじゃんけん列車やフルーツバスケットを行った。言葉を英語で確認する際は、視覚的に理解できるよう絵カードを見せながら説明を行った。フルーツバスケットでは、一人ひとり果物のカードを首からぶら下げることで、他人から見ても自分が何の果物なのか分かるように工夫されていた。最初は英語で発音することが難しい子も、学生や周りの友だちに教えてもらい、どんどん声を出して楽しく参加することができた。学生は、困っている子に優しく声をかけ寄り添ってくれていた。

課題としては、人数が多かったので、じゃんけん列車で使う音楽が聞こえにくかった。CDを準備し、みんなに聞こえるような支援が必要だと感じた。



#### 5. 教育実習の受け入れ

##### 【目的】

本校の教育目標・教育計画に沿って、一定の期間、本校の教諭の指導を受けながら一定の教育内容を実践分担するという立場で教育にあたり、教職的資質を養う。

##### 【概要と成果、課題】

9月1日～29日の19日間、2名の教育実習生を受け入れた。

5年生と6年生の学級で実習生を受け入れ、朝の会から帰りの会までそれぞれの学級で授業づくりだけでなく学級経営の方法や児童理解の大切さ等につだれもが意欲的になる授業を意識し、授業を行う

いて指導を行った。5年生では「わり算の筆算(算数科)」を6年生では「拡大図、縮図(算数科)」の単元について、それぞれの実習生は、指導案を作成し、授業を行った。(10～15時間)

実習生は、担当学年だけでなく他学年の授業も参観することで、子どもたちと関わるための幅広い知識を身に付けようとしていた。また、教員から校務分掌の講話を受けることで、教員の仕事の裏側について知ろうとすることができた。いずれも熱心な態度で実習に励んでいた。

授業づくりでは、一人ひとりを大切にする授業・ことができた。5年生では、授業や単元の導入にゲ

ーム形式で確認問題に臨んだり、6年生では抽象的な学習内容を自作の補助教材を用いて具体的に捉えられるようにしたりと、工夫を凝らしていた。また、タブレットを意識的に活用することで、児童の主体性を引き出そうとする工夫も見られた。休み時間や行事では積極的に児童に話しかけたり、自ら行動したりと児童理解・教員としての役割遂行に努める姿が見られた。

子どもたちは、ていねいに優しく接してくれる学生を慕い、自分から実習生に質問をしたり、話しかけたりしていた。誠実に一生懸命に向き合ってくれる実習生の様子に子どもたちも心を開き、子どもた

ちと実習生の上に信頼関係が築かれたように思う。

課題は、本校は小規模校であることから、受け入れる学生数には限界があるということである。今後も少人数の良さを生かした取り組みを行っていきたい。



## 6. かがやき栗真小フェスティバル（学習発表会）への参加

### 【目的】

かがやき栗真小フェスティバル（学習発表会）において、大学のより専門性の高い活動を児童たちが体験する。

三重大との連携活動の様子を保護者・地域の方に知ってもらう。

### 【概要と成果、課題】

11月18日に行われた「かがやき栗真小フェスティバル」（学習発表会）において、社会科教育の学生に、その専門性を活かし子どもたちが楽しく学べるブースを担当してもらった。

社会科教育の学生は、「エシカルマークとは？」というテーマで、活動体験を通して子どもたちが主体的にエシカルマークについて学ぶことができた。

「エシカル」とは、英語で「倫理的な」という意味の英語の形容詞・ethical を、そのままカタカナに置き換えた言葉であり、「エシカル消費」を直訳すると「倫理的な消費」となる。つまり、「安くて良いモノ」や「自分にとってどれくらい得か」といった基準だけで選ぶことではなく、より広い視野で、「人や社会、地域、環境などに優しいモノ」を購入する消費行動やライフスタイルを指し、持続可能な社会に貢献するということである。

子どもたちは、この活動を通して、普段、自分たちが使っている鉛筆の箱、ノート、カップラーメン、

（社会科教育 宮岡邦任先生と学生）

ハンバーガーの箱、お菓子の箱などに色々なマークがついていることを知った。代表的なものに「エコマーク」「海のエコラベル」「FSC」があり、どの商品にどんなマークがあるか、子どもたちが探し、社会科の学生がマークの説明をした。

子どもたちから、「カップラーメンとハンバーガー、両方海のものを使っているのに、カップラーメンは海のエコラベルはないの？」などの質問があり、質問に対し、学生も「海のエコラベルは規準が厳しくて中々マークが見つからない。」などのやり取りをする場面もあった。また、子どもたちは、家に帰ってから、エシカルマークがあるかを探するなど、この活動に主体的に取り組んでいる様子が分かった。

課題としては、せっかく準備していただいたが、1ブースあたりの時間が短く、十分に体験できない子もいた。





## 7. 教員を対象とした研修への助言（国語科の授業について）

（国語科教育 守田庸一先生）

### 【目的】

校内研修において、教材を通して国語科の授業づくりについて学ぶ。

### 【概要、成果と課題】

「子どもたちが主体的に学習する具体的な進め方を考える」をテーマに、学習指導要領に記載されている「資質・能力」とは何なのか、言葉と思考力の力を育てるためにどのような授業づくりが考えられるのか各学年の教材を例に教えていただいた。教科書の具体的な教材をもとに教員も一緒に考え、学ぶことができた。子どもたちは、国語では何を学ぶのかを以下の3つの言葉、教材内容（教材を学ぶ）、教科

内容（教材で国語科固有の内容を学ぶ）、教育内容（教材で国語科を超えた内容を学ぶ）について教えていただいた。

また、思考を可視化することや、叙述から出発して考えることなどを教えていただいた。

教材研究をするにあたって、繰り返し出てくる言葉や、言い換えられている言葉に注目していくことがいいことも学んだ。また、ある言葉にチェックしてくる「考える音読」や、情報を家で撮影してくる、調べたことを整理してくる等、家庭学習と授業を関連づける宿題の例もいくつか教えていただいた。

## 8. 5年生総合的な学習の時間（防災教育）における学習支援

（環境教育 宮岡邦任先生）

### 【目的】

栗真地域の防災について知る。液化化現象の実験を通して、地震が起きたときや起こるまでに、自分たちができることを考える。

### 【概要と成果と課題】

9月14日（木）3，4限目、5年生に防災の授業を行った。

前半の講義では、宮岡先生が栗真地区の特徴を防災の観点から、詳しく学んだ。子どもたちは、栗真の今と昔を比較した海岸の地図を見て、昔は砂地だったところが現在は住宅地になっていることなどを知った。次に、液化化の仕組みについて学んだ後、学生の支援のもと、グループに分かれて液化化の実験を行った。

事前に3種類の砂を用意した。その中の一つは、栗真小学校のグラウンドの土である。水槽に水を加え

ながら、それらの砂を組み合わせる層を作った。そして、建物に見せたレゴを、作った土地の上に置き、水槽をガタガタと揺らして地震を起こした。すると、だんだん地面がドロドロになって、建物（レゴ）が倒れた。土の種類を変えたり、地下水の量を変えたりして、何度も実験を行った。このように、子どもたちは、楽しみながら実験を行っていた。しかし、自分たちが住んでいる地域がこうなることが分かり、怖いと言っていた。

最後に、この学習で分かったことを振り返った。

子どもたちの振り返りからは、「住んでいる地域が、液状化を起こすことが分かり、怖くなった。」「液状化で、亡くなる人がいないことが分かって、落ち着いて避難しようと思った。」などと書かれていた。

その後、この授業を新聞にまとめた。そして、学んだことを栗真小フェスティバルで、地域のみなさんに「防災」を伝える活動を行った。その中で、液状化の実験も見てもらい、栗真の地域の特徴を伝えることができた。学生たちが、積極的に子どもたちと関わってくれた。実験の手助けの他にも、子どもたちからでてきた質問に答えてくれていた。準備、片付けも率先して行ってくれた。



課題は、とくにない。夏休みから打合せを行い、こちらの希望を伝え、それに合った内容を提案してくれた。当日も学生が、よく動いていた。子どもたちも、楽しみながら学習できていた。また、それを生かして地域に発信することができた。

## 9. 4・5・6年生音楽における学習支援

(音楽教育 上ノ坊航也先生)

### 【目的】

のびやかな声で、曲の雰囲気に合わせて歌うことができる。自分のパートの役割が分かり、みんなと一緒に演奏することを楽しむ。

### 【概要と成果と課題】

栗真小フェスティバルで、4・5・6年生は演奏を披露している。今年度は、合唱と合奏を行った。

合唱は「銀河鉄道999」、合奏は「ヤングマン」であった。上ノ坊先生には、全部で2回来ていただいた。1回目の授業では、初めに上ノ坊先生の歌を聞かせていただいた。その声量と表現に子どもたちは驚いていた。次に、歌う時の息の出し方、姿勢など基本的なこと学んだ。上ノ坊先生と一緒に、呼吸の練習をしたり、実際に声を出したりした。歌詞のまとまりを理解すること、きれいな声を意識することなど、実践を通して学んだ。合奏では、それぞれの楽器の役割を学んだ。特に打楽器は、リズムを刻む要の楽器であることが分かった。子どもたちは、先生の声聞きながら、教えてもらったことをやってみようと、積極的に歌ったり、質問したりしていた。2回目の授業では、



楽器のよりよい配置を教えてもらった。メロディーがよくきこえるようになり、打楽器のリズムがとりやすくなった。

2日間とも、子どもたちは上ノ坊先生の話をよく聞き、意欲的に取り組んでいた。上ノ坊先生の指導もやさしく、子どもたちにとってもわかりやすく、とても楽しい音楽だった。楽しく学んだその成果を生かし、本番は、合唱も合奏も大成功した。

課題は、日程調節が難しいことである。今回は回の実施であったが、3回以上お願いしたい。

### 3. 白塚小学校

本年度、白塚小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

#### 1. 数学教育学生による算数科の学習支援（2・3・5・6年生）

以下に活動内容を示す。

#### 1. 数学教育学生による算数科の学習支援（2・3・5・6年生）

##### 【目的】

2・3・5・6年生に対して算数科の学習支援を行う。

##### 【概要】

数学教育学生の3名が、本校の2・3・5・6年生の算数科の学習支援に入り、児童の学習理解に務めた。

##### 【成果と課題】

一斉指導の時には、子どもたち一人ひとりの状況を把握し、問題に躓きがある児童に対して理解ができるように寄り添い、学力定着に務めることができた。個別の指導では、タブレットを使用し、現在習っている単元の学習や躓きのある単元の振り返りを行っているが、個別に応じた対応をとって児童の学びの一助になった。

また、授業後に来週の学習内容を聞きに来たり、児童がどの点で躓きがあったかを報告してくれたり、連携を取って児童を見守る姿勢が見受けられた。



年度初めに大学側からの連携活動要望リスト作成依頼があり、本校の担当者が教員に要望を聞き取り提出したが、数週間後に大学側から大学生の可能な登校日時との連絡が届いた。大学生の登校可能日時に本校の希望する教科がなかったり、どの学年も希望する日時ではなく、再度希望を取り直したりと、連携活動要望リスト作成の手順に改善すべき点があるように感じる。まず始めに、大学側から大学生の登校可能日を各小・中学校に連絡し、その日時に各小・中学校側が要望する教科と学年・クラスを各担任に聞き取り、大学側に連絡するとスムーズに行えると考えている。



## 4. 一身田小学校

本年度、本校における連携活動の取り組みは、以下の通りである。

1. 学生による実地研究  
数学教育専攻学生による教育実地研究基礎
2. 4週間教育実習
3. 教科学習への支援
  - ① 情報教育コース学生による1・2・3・4・5年生のタブレット・プログラミング指導
  - ② 家政教育コース学生による6年生・5年生の家庭科の支援
  - ③ 保健体育講座の学生による水泳指導支援、授業支援
  - ④ 美術教育コース学生による5年生図工電動糸のこぎり使用の支援
  - ⑤ 英語教育コース学生による外国語活動子ども支援、指導補助

以下に活動報告を示す。

### 1. 学生による実地研究

(担当：東出祥子)

#### ① 数学教育専攻学生による実地研究基礎

数学教育コース1年生

##### 【目的】

1. 三重大と連携協力体制をさらに強化し、学生の現場体験を核とした教育モデルを構築する。
2. 個別に支援が必要な子どもの支援体制を充実させる。

##### 【概要】

数学教育専攻学生の5名が、各学期に毎週1時間、本校の1年生から5年生のクラスへ入り子どもへの支援を行った。

##### 【成果と課題】

本校は、全19学級で480名の子どもが在籍する。一クラス35人を超える学級が7学級あり、個別に支援を必要とする子どもも多い。担任一人では、十分に支援が行き届かないという現状が続く。

授業では、算数の理解に時間がかかる子どもへ寄り添って子どもに声をかけ、個別支援をすることにより子どもが安心して学習に取り組める姿が

見られた。

また、机間指導をしながら丸を付け、作業を複数で行うことにより、より子どもと関わる時間を増やすことができた。

休み時間にも、子どもと話をしたり一緒に遊んだりして、子どもが楽しそうに関わる姿が見られた。また、学生にとっても子どもと関わり、接し方を体験するよい機会となったであろう。

一クラス35人以上在籍する学級があり、個別に支援が必要な子どもが年々増加している。この現状で、子どもに寄り添い、支援を充実させるために、実地研究の学生が子どもと関わる機会が今後もより一層増加することを望んでいる。

また、子どもへの支援と実地研究がより充実するために、支援内容を十分に学生に伝える時間を確保していきたい。

## 2. 教育実習

(担当: 大西尚子・山路英和・深見知之・黒田薫子・阿部友美)

### 【目的】

- ① 本校の教育計画に沿って、本校の教諭の指導を受け教職的資質を養う。
- ② 指導の技術向上とともに、子どもたちと関わる職業の魅力を味わうことができる。

### 【概要】

実習生5名を、5学級に配置し、学級担任を中心に実習指導を行った。教育実習計画を立て、授業、学級経営、教育活動全般を全教職員で指導を



した。

### 【成果と課題】

礼儀正しく挨拶をして、よりよい大人のお手本となり教育実習期間を過ごすことができた。児童たちと自ら進んで関わり、笑顔を忘れず、穏やかに話したり、聴いたりすることで、児童たちに安心感を与えていた。終始、実習を有意義な時間にしたいと考



え、自分から進んで子どもたちと関わり、つながりをつくったり、個々の課題をつかんだりすることができた。

また、担当した授業を行うときには、教材研究を熱心に行い、子どもたちが意欲的に学ぶことができるように努めていた。指導案で計画したように進まないこともあったが、子どもの実態に応じて授業を展開していく大切さを学ぶ良い機会となった。1日の終わりには、授業や子どもたちとの関わりはどうだったか振り返り、改善点や工夫していきたいことなどを考察して、次の日の子どもとの関わりや授業につなげていくことができた。

実習後、本当に教師になって教壇に立ちたいという思いを語った感想があったことが何より一番の成果であった。

## 3. 教科学習への支援

(担当: 大西尚子・山路英和・藤田紘平・阿部友美・前田幸代)

### ① 情報教育指導

#### 【目的】

プログラミング的思考を育成するとともに、プログラミングの学習を楽しむことができる。

#### 【概要】

情報教育専攻の学生が山守一徳先生の指導のもと、プログラミング体験を実施した。



## 1年生

音階や楽器の音でメロディーを作る学習

## 2年生

食物連鎖を楽しみながら学べる学習

## 3年生

算数科の三角形の作図

## 4年生

スクラッチで都道府県クイズづくり

## 5年生

算数科での多角形を作図する学習

### 【成果と課題】

メロディー作りや都道府県クイズなど、子どもたちが楽しんで、興味深そうにプログラミング学習に親しむ姿が見られた。また、算数の授業に学習する、三角形や多



角形をプログラミングで作図する活動は、子どもが困っているときにすぐに支援してもらえる環境があり、より深く習得することができた。

今後も、子どもたちが楽しんでプログラミングを学ぶ機会を増やせるよう取り組んでいきたい。

## ② 家庭科の裁縫実習・エプロン製作の支援

### 【目的】

家庭科において、調理実習支援やミシン縫いの基礎的な技術の定着を図ることができる。

### 【概要】

家政教育コースの学生が、5年生の子どもに対して安全なミシンの扱い方やナップサックの製作、6年生には調理実習についての学習支援を行った。

### 【成果と課題】

事前準備として、野菜を切ったり、包丁やまな板を各机に配布したりして、授業にスムーズに入ることができ

(担当：永井真珠子・岸本美智子)

た。授業中は、包丁の使い方や火の加減、片付けでは食器や道具の棚への片づけなど、子どもに寄り添って細部まで支援してもらいとても助かった。指導者一人ではできない支援や、安全の面での配慮など、技能習得が難しい場面でより細かい授業展開ができた。また、家庭科の専門的な知識を生かした助言もいただいた。今後は、学生のテスト期間と重ならないよう、教育計画を工夫し、ミシン、調理実習の時により多くの支援を計画していきたい。

## ③保健体育講座の学生による水泳指導支援、授業支援

### 【目的】

水泳指導の安全確保と個別支援の充実。

### 【概要】

水泳指導の際、子どもたちと一緒に入水して、指導の補助を行った。今年度から、クラス単位からコロナ前の学年単位の入水になり、多人数を一度に指導するため、個別の児童に学生が寄り添って支援をした。子ども支援に加えて、指導支援も行ってもらった。

### 【成果と課題】

天候に左右され中止になった日もあり、事前に計画していたより実施日数が少なくなったことは残念であった。しかし、たくさんの学生の支援があり、複数の指導者で子どもたちを見守ることができたいへん有効な取組であった。今後も継続して、できるだけたくさんの時間を計画的に支援していただけるようお願いしたい。

#### ④図工の校外写生での引率・指導支援

##### 【目的】

木製のホワイトボード作りにおいて、電動糸のこぎりの使い方を支援する。

##### 【概要】

下書きが完成した子どもから、順番に電動糸のこぎりを使用して木製のホワイトボードを切断した。学生が一人ひとりの子どもに寄り添って使い方の指導をした。

##### 【成果と課題】

5年生の子どもは、今回、電動糸のこぎりを使用することが初めてである。子どもによっては、使うのが怖いと敬遠している姿も見られる。ま



た、使い方として、板を刃に対して真っ直ぐに押すことを習得することが難しい。板に両手を乗せてゆっくり押ししたり、刃に対して真っ直ぐに押せるように板の向きを変えたりして使い方の支援をしてもらった。



#### ⑤外国活動の子ども支援・指導補助

##### 【目的】

- ・英会話に親しむ。
- ・英会話を通じて、コミュニケーション力を育成する。

##### 【概要】

学期に1回、3年生の英語活動にT2として、ALT教員とともに子どもに英会話を指導した。好きな色や食べ物などをクイズ形式で英会話を楽しみ、より多くの話す機会を持つことによってコミュニケーション力を育成した。

##### 【成果と課題】

子どもたちは、ALTの先生だけでなく、英語を話す機会が増え、英会話でのコミュニケーショ

ンを楽しんでいた。また、より自分たちに近い年齢の先生に親しみを感じ、先生のことをたくさん知りたい、聞き取りたいという意欲的な姿が見られた。



## 5. 北立誠小学校

本年度、北立誠小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 情報教育 「ロボットを使ったプログラミング」
2. 体育教育 「体力テストの補助」
3. 理科教育 「出前科学教室」
4. 国語教育 「国語科教育 校内研修 国語教育教授 守田庸一先生との連携事業」
5. 特別支援教育 「特別支援学級の児童補助」

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 情報教育「ロボットを使ったプログラミング」5年生

(担当教員：北立誠小学校 須田順也)

#### 【目的】

ロボット教材を用いてロボットがプログラミングした通りに動く仕組みを理解する。

#### 【概要と成果、課題】

1月11日、対象に三重大学教育学部の萩原先生にお越し頂き、5年生の児童を対象にプログラミング学習を行った。子どもたちは、プログラミングについて説明を受けた後、小グループに分かれ、タブレット端末でプログラミングを行い、命令通りにロボットを動かそうとする活動に取り組んだ。赤外線センサーを使って、障害物を避けて作られたコースをゴールまで進むようにプログラミングをする活動を行った。「到達させたい地点にロボットを動かす」という、一見単純に見えるロボットの動きも、命令が違っているために思い通りに動かず、プログラミング活動に戸惑う子どもたちの姿が見られた。しかし、サポートに入ってくださった学生の方が「～まではできているから、次にしたいことは何かな。」「～になってしまうのは、何が原因かな？」といったように、それぞれのグループの進捗や困り感に寄り添いながらアドバイスをしてくださったこ

とで、子どもたちはお互いにアイデアを出しながら、プログラミングをしようとする事ができた。思い通りにロボットを動かしたときは、それぞれのグループから歓声の音が上がり、とても充実した活動をおこなう事ができた。

本事業では、「考えることの大切さ」を感じさせる機会として貴重な場にする事ができた。算数等の教科での「考える」活動では、ある程度の定着度も求められるが、本活動はいくつかの操作を組み合わせるだけで「思ったとおりにロボットを動かすこと」を実現しようとする事ができるため、どの子どもたちも前向きになって論理的思考を働かせようとする事ができた。

また、プログラミングに興味をもつ子どもたちもいたことから、他の教育活動においても、プログラミング的思考を取り入れる活動を取り入れていくことが必要であると考えた。

本事業の実施にあたり、準備やご指導してくださった萩原先生、子どもたちのサポートしてくださった三重大学教育学部の皆さん、ありがとうございます。

### 2. 体力テストの補助

(担当：北立誠小学校 小掠陽平)

#### 【目的】

児童の体力測定が円滑に行われるよう支援が行われるとともに、大学生の教育現場での経験値を高める。

#### 【概要と成果、課題】

5月31日、全学年にて、三重大学教育学部の学生のサポートのもと、体力テストをおこなった。本校では、体力テストを学校行事として実施しているため、多くの子どもたちが一度に限られた時間でそ

それぞれの種目を測定・記録をする必要がある。種目の測定には、教員が立ち会うが、教師一人だけでは正確に記録できなかつたり、子どもたち全員を見守りきれなかつたりするため、大学生の補助が一人でもいてくださると、とてもありがたい。当日は、立幅飛びを中心に支援をしていただいた。

### 3. 出前科学教室

#### 【目的】

・本事業をとおして、三重大学の学生が児童に科学の面白さを伝える能力を養うとともに、児童の自然科学に対する興味関心を養う。

#### 【概要と成果、課題】

当日は、大学生が物理・化学・生物・地学の4つのグループに分かれて体験ブースを企画し、小学5年生79名に向けて体験教室を行った。各ブースでの体験時間を約20分程度とし、80分で全児童がすべての体験活動をおこなえるようにしていただいた。

物理コーナーでは「釘を使ったこのつり合いの実験」を企画していただき、工夫してたくさんのおもしろいことが付くことに成功したとき、子どもたちからはたくさんのお喜びの声があがった。化学コーナーでは「紫外線についての実験」を企画していただき、人体に

当日は、測定時は「飛んだ後は、かかとをしっかりと着地しよう」と子どもたちの記録が正確なものになるように声をかけていただいたり、「前の人が終わるまで～の線で待っていきましょう」と安全面に配慮しながら、子どもたちに指示を出して下さったりと、様々な面でサポートをしていただいた。

(担当：北立誠小学校 小掠 陽平)

に対する紫外線の効果や反応を学ぶことができた。生物コーナーでは「風を利用して、タネが遠くまで移動する仕組み」を企画していただき、子どもたちの様々な飛ばし方でタネを長時間飛ばそうとする姿が見られた。地学では「美里町で発見された化石の観察」と、普段では見ることができない化石をまじまじと眺めながら観察する子どもたちの姿が印象的であった。短い時間であるのにも関わらず、どの活動も内容豊富であり、楽しんで活動に参加し、学びを得ようとする子どもたちの姿が見られた。本活動に向けて、様々なご準備をしていただいた三重大学教育学部理科教室の先生方、企画していただいた三重大学教育学部1年生の皆さん、ありがとうございました。

### 4. 国力語科教育 校内研修 国語教育教授 守田庸一先生との連携事業

(担当：北立誠小学校 加藤真由子)

#### 【目的】

小学校国語科において、児童の思考力・判断力・表現力をどのように高め、主体的な学びに結びつけていくかについて、様々な教材の指導方法の実例を挙げながら助言をいただき、教員の授業力向上を図った。

#### 【概要】

昨年度に引き続き、本校では研修の主教科を国語とし、児童の対話を重視した授業作りについて、以下のように守田教授にご助言をいただきながら、校内研修を進めた。

○6月20日(火) 校内全体研修会  
講演「子どもたちが対話を通して学ぶ授業づくり・発問づくり」

○10月24日(金) 校内全体研修会  
3年2組公開授業・事後検討会 指導・助言

○11月24日(金) 校内全体研修会  
3年2組公開授業・事後検討会 指導・

#### 【成果と課題】

・国語における「論理的な読み」について教員の理解が進み、目指したい授業が明確になった。昨年度からご指導いただいたシンキングツールについて

ても、目的をはっきりさせて使うことができるようになった。

- ・指導要領に示されている児童の「資質・能力」をと何か、またそれをどのように伸長するかについて、具体的な教材を示していただきながら、教材

研究の仕方、発問のつくり方、授業の展開の仕方を詳しく教えていただき、教員の授業改善につながった。

- ・今後も児童が主体的に教材と向き合い、対話を通して深い学びを実現する授業を追求していきたい。

## 5. 特別支援学級児童の指導補助

### 【目的】

特別支援教育コースの1年生9名がボランティアの単位取得のために本校を選び、12月～1月にかけての午前・午後の都合の良い時間に来校した。主に支援学級の指導補助と交流学級の授業補助として、体育・音楽・図工などに入ってもらった。

### 【概要】

本校の特別支援学級は5クラス30名が在籍しており、教員5名支援員8名で運営している。知的・自情・肢体不自由の子どもたちは、国語と算数を中心に学習ルーム（特別支援学級）で学んでいるが、その他の教科は交流学級で過ごしている。一人の教員が複数の子どもたちを担当している状況なので、ボランティアとして特別支援教育コースの学生が指導補助に入ってもらうことは大変ありがたいことである。交流学級での授業は、子どものそばにいてもらい、一斉指導では伝わりにくい授業内容を個別に声か

（担当教員：北立誠小学校 喜多佐保）

けてもらい教えてもらうことで落ち着いて授業に臨むことができた」と報告を受けている。

### 【成果と課題】

年齢が近いこともあり、子どもたちは学生の名前を覚え楽しそうに遊んでもらっている姿がよくみられた。また、低学年の体育では安全面で補助に入ってもらったが、適切な言葉がけで意欲的に取り組むことができた。大学で学んだ特別支援教育の実践方法など教員と情報交換するなどして教員側の刺激にもなり、来てもらってよかった。

課題としては、単発的だったので、子どもとの関わりがあまり持てなかったことである。継続して来てもらえると将来教職に就いたときの経験値となり有意義な時間をもてるのではないかと考える。最後に服装や持ち物は良かったが、毛髪と爪が少し派手だったので、来校する前に指導してもらいたい。

## 6. 南立誠小学校

本年度、南立誠小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 数学科による教育実地研究基礎
2. 5年生理科「めだかのたんじょう」
3. 3年生理科「昆虫の観察」
4. 2年生生活科「秋の生物を見つけよう」
5. 5年生家庭科「エプロン製作」製作補助

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 数学科による教育実地研究基礎

(活動担当者名 田中 憲希)

#### 【目的】

3年生、5年生、6年生に対して、配慮の必要な児童への対応や授業の補助を行う。

#### 【概要と成果、課題】

数学科の学生が6月から12月の7か月間、3年生、5年生、6年生の授業支援を行った。

個別に支援することで、苦手な児童も学習内容を理解し、学習意欲も高まる。しかし、担任が一人ひとりに個別支援することが難しい場合がある。教育実地研修の学生に授業に入ってもらうことで、算数を苦手とする児童への個別支援をする機会を増やすことができた。学生から前向きな言葉をかけてもらったり、ノートの書き方や問題の解き方のヒントを

もらったりしたことで、意欲的に問題に向き合い授業を受ける姿が見られた。そのため課題を解き、理解することができた児童はうれしそうであり、自信につながっている姿が見られた。

一年間を通して継続して関わってもらうことで、児童との関係も深まり、児童の様子や学習状況の変化に気づいてもらうことができ、より効果的な支援につながるのではないだろうか。児童は身近な友達や大人に影響を受けやすく、年齢が近い学生には、特に興味を持つ。そのため、学生の身なりや話す内容にも敏感に反応する様子があった。今度は児童と関わる時にふさわしい服装や髪型、話す内容も考えてもらいたいと考える。

### 2. 5年生理科「めだかのたんじょう」

(活動担当者氏名 田中憲希)

#### 【目的】

1. めだかの卵の成長について観察を通して理解することができる。
2. ミエル1ミリの使い方を知り、物体の細かな観察の仕方を知ることができる。

#### 【概要と成果、課題】

後藤太郎先生からめだかの卵の観察を行うのに、ミエル1ミリという道具があると紹介いただき、使い方を教えていただきました。その道具をお借りして、実際にめだかの卵の観察を行った。

事前に解剖顕微鏡を用いて、めだかの卵の観察を

行いましたが、教科書にのっているような鮮明な観察はできなかった。しかし、今回のミエル1ミリを使うと教科書にのっているような鮮明な観察を行うことができた。児童たちは、よく見える卵に喜び、熱心に観察に取り組む姿が見られた。ミエル1ミリはタブレットのインカメラに装着して使用するので、観察した卵を簡単に写真や動画を撮影することもできた。そのため、児童が自ら血液の流れや心臓の動きなど積極的に撮影する姿も見られた。児童が普段から使用するタブレットに装着して使用するミエル1ミリは、手軽でありながらも、鮮明なものを見せ

てくれるので非常によい道具であると感じた。

一人一人が観察するために、事前に卵をスライドガラスに分ける作業に時間がかかり、児童分準備するのが大変だと感じた。観察を行うのに、PIX カメラをインストールしなければいけなく、事前に教育

委員会に要請しなければいけない。

今回、初めてミエル1ミリを使い観察を行い、鮮明に見えることがわかった。今後もめだかの卵の観察を行うときには、ぜひ使いたいと思う。

### 3. 3年生理科「昆虫の観察」

#### 【目的】

1. 昆虫の体のつくり（頭・胸・腹）について観察を通して理解することができる。
2. PIXカメラの使い方を知り、物体の細かな観察の仕方を知ることができる。
3. 昆虫の体のつくりには意味があることを知り、それについて考えることができる。

#### 【概要と成果、課題】

後藤太郎先生に来ていただき、授業をしていた。始めに、三重大学から持ってきていただいたカブトムシの模型を使って昆虫の体のつくりについて学んだ。また、その中で、昆虫についての色々な知識をクイズを交えて教えていただいた。次に、スライドガラスに貼り付けられたアリの標本を、タブレットアプリのPIXカメラを使って観察をした。（アリの標本については、三重大学教授後藤先生の標本をお借りした。）PIXカメラは、簡易式顕微鏡のようなもので、倍率を上げると標本の細部まで観察することができる。子どもたちは、観察を

（活動担当者氏名 岡崎絢子）

通して昆虫の体が頭・胸・腹に分かれていることを学習した。

昆虫の体のつくりについては、事前に理科の授業で学習していたが、さらに詳しく教えていただき、子どもたちは興味津々だった。カブトムシの模型を実際に触らせていただいたり、アリの標本をPIXカメラを用いて、普段は見られない細かな部分まで見ることが出来たりしたことで、昆虫の体のつくりについてじっくりと観察するよい機会となった。

PIXカメラは、普通の顕微鏡と比較すると、倍率の変更やピントの調節などが行いやすい。また、一人一台タブレットがあるため、待ち時間もなくじっくりと観察することができる教具である。

一方で、模型やPIXカメラなど子どもたちの興味を引くような教具がそろっていたが、じっくり観察するには少し時間が短かった。観察しながら分かったことを紙などに書いていくような時間があると、さらに学びが深まったのではないかと考える。

### 4. 2年生 生活科「秋の生物を見つけよう」

#### 【目的】

一年間の自然の変化の影響を受けて、同じように変化する植物や生き物の様子を、自然豊かな三重大学のキャンパスを、三重大学の先生や学生さんから専門的な助言を受けながら散策することで、季節を感じながら学ぶことができる。

#### 【概要と成果、課題】

2023年10月31日は、「秋みつけ」を目的として、三重大学へ出向き、自然豊かなキャンパスを、理科教育の平山大輔先生や学生さんの説明を受けな

（活動担当者氏名 小林なおみ）

がら、散策し、秋の季節の生き物や植物について学習した。フィールドワーク形態で、少人数のグループ毎に一人ずつ学生や先生についていただき実地学習した。

あらかじめ、平山先生の方で、秋の自然が観察できるポイントをマーキングし準備して頂いた。そしてそれらを記載したキャンパスマップ（「たんけん地図」）をカラーで作成して児童一人ひとりに配布して頂いた。

散策しながら見つけた木の実や葉について子どもた

ちからの質問に、平山先生や学生さんが、即座に専門的知識を持って答えていただくことができ、有意義な時間となった。子どもたちは、今まで知らなかった知識に触れ大いに喜んでいて。触ったり考えたりしながら、自然の生き物の関係を実感しながら深く学ぶ実地学習につながった。

まつぼっくりやどんぐりなど、拾ったものを持ち帰らせていただき、観察することができた。また、平山大輔先生が各クラスにヒマラヤスギの種を持たせていただいたので、秋見つけが終わった後も観察を

続けることができた。

・楽しみながら専門的な知識を学ぶ子どもの姿から、この大学連携活動を取り入れることの有効性を確認することができた。今年、春の自然活動は実施できなかったが、春と秋を比較することで、より学習が深まると感じた。今後も、自然と生き物の学習に、連携活動を取り入れると、子どもたちが意欲的に学ぶことにつながると考える。今回の連携活動に大変感謝している。

## 5. 5年生家庭科「エプロン製作」製作補助

### 【目的】

初めてのミシンでのエプロン製作実習における製作の補助

### 【概要と成果、課題】

三重大学家政教育の学生に、ミシンを使ったエプロン製作の補助をしていただきました。初めてミシンを使うので、上手く縫えないことやトラブルが起こったときに、声掛けや補助をしてもらいました。

(活動担当者氏名 田中憲希 山本京香)

そのため、児童たちはスムーズにミシンを使うことができた。また、補助の学生がいることで、すぐに質問することもできた。来てもらった学生にたくさん助けてもらうことができた。

来てもらえる日が限られていたり、人数が日によって異なったりするので、その調整が難しいと感じた。

## 7. 西が丘小学校

本年度の西が丘小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 家庭科 ミシン実習補助「ミシンにトライ」 5年生
2. 総合 プログラミング学習 5年生
3. 理科 大地のつくりと変化「津市の地質と化石」 6年生
4. 総合 プログラミング学習 6年生
5. 特別支援学級 国語・算数

以下に活動報告を示す。

### 1. 5年生 家庭科 ミシンにトライ

#### 【目的】

子どもたちは、三重大学の学生による支援により、エプロンの製作をミシンを使いながら実習をすることができる。

#### 【概要】

5年生の3学級に15時間支援に入っていた。ミシンによる縫い方の支援を子どもたちのすぐそばまで行って、支援していただいたことで安全に学習することができた。

#### 【成果と課題】

学生に縫い方を教えてもらったり補助をしてもらったりすることで活動がスムーズに進んだ。ミシンの使用は学校の授業のみでミシンに慣れていない児童が多いため、個別の支援が必要な児童が多くいる。ミシンが止まったり、糸がなくなったりしたときの対応がスムーズに進んだ。また、ミシンを縫い終わったあとの糸処理に困っている児童の支援をしてもらい製作がはかどった。同じ学生の方が何度か授業に積極的に参加してくれたことで子どもたちの関係作りにもつながった。

### 2. 5年生 総合的な学習の時間 プログラミング学習

#### 【目的】

プログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けることができる。

#### 【概要】

第5学年4クラスで、プログラミング教育の基礎として体験授業を実施していただいた。プログラミング教材を操作して、算数科の「およその数の使い方と表し方を調べよう」のプログラムを作成・実行することができた。

#### 【成果と課題】

ビジュアル・プログラミング言語を利用していることにより、直感的に操作することができ、プログラムを視覚的に理解することができた。既習事項の内容であったため、条件の入れ方を理解した児童は自分でプログラミングしながら進めることができた。「かつ」「ならば」「であれば」「のうち」などの言葉を理解して条件を当てはめていくことは難しかったが、資料に書いてある通りに当てはめていくことでプログラミングの仕組みを知ることができた。大学生に臨機応変に支援していただき、交流することができた。

### 3. 6年生 理科 大地のつくりと変化

#### 【目的】

津市美里町で採取した一志層群の貝化石の観察や地域の写真を通して、大地のつくりやできかたに興味を持つことができる。

#### 【概要】

津市美里町で採取した一志層群の貝化石をグループで観察し、化石から分かったことや気づいたこと、疑問などを発表した。児童の発表をもとに化石には様々なものがあることやその化石がどのように出来てきたかなどを分かりやすく教えてもらった。また、貝が海で生活していることから、その土地がもともと海であったことなどに気づくことができた。

#### 【成果と課題】

児童は化石を手にとって間近で見ること肌触り

や色の違いに気づくことができた。また、化石を採取した地層を大型テレビに映すことで、地域の地層がどのようになっているのかを知ることができた。地域の地層や化石について、直接見る機会は少なく、実際に津市で採取した化石を見て触ることで様々な発見をし、単元で学習した事をさらに深めることができた。



### 4. 6年生 総合的な学習の時間 プログラミング学習

#### 【目的】

プログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考力を身に付けることができる。

#### 【概要】

三重大学教育学部情報教育研究室の学生に、西暦〇〇年がうるう年かどうかを判別するプログラムについて教えていただいた。

プログラムの数字や配列が違っていると、判別できないので、子ども達は慎重に数字や文字を入力していた。学生のサポートもあり、ほとんどの児童が時間内にうるう年の判別プログラムを完成させることができ

ていた。

#### 【成果と課題】

プログラミングの考え方をを使って、条件を指定し、プログラムを書くことができた。数字や文字の入力を誤るとプログラムが機能しないということも体験できたので、今回の学習を3学期に取り組むプログラミング学習にも活かしていきたい。



### 5. 特別支援学級 国語・算数

#### 【目的】

個々に応じた学習内容に沿って、漢字や計算の基礎基本の定着をはかる。

#### 【概要】

国語、算数の授業は、様々な学年の児童が特別支援の教室に来て、それぞれ自分に合った学習を

している。一人一人の困ったところや分からない問題などを、個別に指導してもらった。計算のやり方や、国語の読解問題など、ただ答えを教えるだけでなく、



自分たちで問題を解くことができるよう、声かけ

#### 【成果と課題】

情緒のクラスの子どもたちの中には、初めての人と関係を作ることが苦手な子どもがいる。来てくれた方は、そんな子どもたちの特性をしっかりと理解し、様子をしっかりと見ながら、ゆっくりと関係を作ってくれた。距離を取り、子どもたちの居心地のよい距離を考え、優しい口調で、話かける姿が見られた。また、話しかけたそうにしている子どもの様子を察知し、「何か、お手伝いしようか？」と声をかける姿が見られた。

をしてくれた。

はじめは、警戒していた子どもたちも、分からないことがあると、自分から声をかけて、教えてもらうことができた。

また、学習も、全て答えを教えるだけでなく、ヒントを与え、自分たちが解決できるよう、支援してくれた。たくさん人数がいたので、一人で2人、3人と支援をしてくれた。普段、教員の人数が足りなくて、待たせていることもあるが、大変助かった。

## 8. 一身田中学校

本年度、一身田中学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 数学科における授業での学習支援
2. 体育科における「ラート」の授業支援
3. 音楽科における合唱活動での学習支援
4. 家庭科におけるニジマスのムニエル作り
5. 理科における授業での学習支援

以下に担当した教員による活動報告を示す。

### 1. 数学科における授業での学習支援

(真川 真紀)

#### 【目的】

三重大学教育学部数学科の学生が、授業アシスタントとして参加し、生徒の学習支援を行う。

また、学生は実際の学校現場の授業に参加することで、授業の進め方、生徒の反応などを子どもたちの支援を通して学ぶ。

#### 【概要】

学生は、各学年の数学の授業に参加し、担当教員が授業を進めている中で、机間指導をしながら困っている生徒を中心に、個人支援を行っている。

本校では、「学び合い」をテーマに授業や研修を行っているため、ペア学習やグループ活動の機会が多くなる。

「学び合い」では、生徒が課題に対して、主体的に取り組むことをめあてとするため、課題の設定や授業中の声掛けのタイミングが難しく、学生は、授業を通して、課題の設定方法やアドバイスの仕方について学ぶ。

#### 【成果と課題】

##### 成果

生徒が授業内の課題で理解できないところや、自分たちで解決できない時にヒントやアドバイスをもらうことで、生徒一人一人の学習を保障するとともに、意欲・学力向上に役立っている。生徒も年齢の近い学生に親近感を持ち、気軽に接することができている。はじめは、なかなか生徒たちとうまく接することができない学生もいるが、回数を重ねるにつれて、生徒たちとの接し方を知り、関係を築いていった。

また、授業後に学生は自分の活動を振り返るため、フィードバックシートを記入し、担当教員に提出している。

フィードバックシートには、授業の感想や、「自分ならこうしてみたい」と思ったことなどが記入されている。そのシートに対して、担当教員がコメントを返し、学生の授業力の向上につながっている。教員も学生からの疑問や意見に目を向けることによって、教材や指導方法について考えるよいきっかけになっている。

授業について、学生と交流する時間が持てるように心がけているものの、十分な時間が取れないことが多い。互いにいい刺激になるので、少しでも意見交換ができるようにしていきたい。

##### 学生フィードバックシートから

###### ▶3年生の授業の支援に入っている学生

○ヒントについて、出すタイミングとどの程度出すのかということが大切だと学んだ。

○質問の投げかけ方を変えて、1対1のやりとりにならないようにしていきたい。

○ジャンプの課題で、長方形の紙を折るというものであったが、イメージがわからない生徒もいたので、実際に折って考える時間をつくって目で確認できるようにしてみたいと感じた。

###### ▶1年生の授業の支援に入っている学生

○円錐台や角錐台という名前を知った生徒から心の底からの「へえ〜」といううなずきなどがあったので、知識に限らず図形のもつ美しさや数式の意義などを実感できるような授業をしていきたい。

○球の面の数や円錐・球の辺の数で困っている班があったのでそれを全体で共有してみたいと思った。

## 2. 体育科における「ラート」の授業支援

(北林 丈)

### 【目的】

- ・ラート運動の特性をいかした体づくり運動としてのカリキュラム開発と授業実践
- ・体づくり運動（ラート運動）における生徒の学びの支援

### 【概要】

三次元の回転が体験できる「ラート」を使用した授業実践を平成20年度から行ってきた。昨年度から再開しているが、本校教員にとっても初めての領域へのチャレンジであり、指導する教員も授業を受ける生徒も初めてということになる。体づくり運動の領域として実施していることから、①自分や仲間の心と体のつながりを感じる、②仲間とのかかわりを楽しむ、③ラートのおもしろさを味わうの3つを大きなねらいとした。

一身田中学校の保健体育科教員及び授業支援に入る学生（保健体育コース）の指導力向上等を目的として、8月30日（水）に一身田中学校体育館において実技講習会を行った。

授業は、9月5日（火）～9月26日（火）の期間で各クラス4時間（昨年より1時間多く）授業を実施した。

今年度も2年生で実践をしたが、初めてということもあり、バランス（ラートを横に置き、その上に乗ったり歩いたりする）、シーソー（二人で、立ったり座ったりした姿勢で揺れる）などを各クラス1時間行った。前半は少しの揺れでも表情がこわばったり、体に力が入り、基本姿勢が崩れてしまう様子が見られたが、三重大学保健体育コースの学生の見本やサポート、また仲間の動きから徐々に感覚をつかみ、滑らかな動きへと変わっていった。2回目の授業では、スイングや姿勢の確認、補助の仕方を学習し側方回転につながるようにした。学生による支援もあり、アドバイスを受けながら基本となる姿勢を仲間と確認し合うなど、安全に取り組むことができた。3回目の最後の授業では、スイング、姿勢の確認、側方回転とグループで進めていき、連続回転や側方回転

を2人同時に行うシンクロを行うグループもあった。

4回目は、学生の支援はなかったがそれまでに学習してきた補助を自分たちで行い、学習してきた内容を高める活動を行うことができた。

### 【成果と課題】

初めて行うラート運動に、興味関心を持って意欲的に取り組める生徒が多かった。グループで協力して練習し、アドバイスやサポートをしながら取り組むこともできていた。ラートの特性によって、生徒は自分が想像していた動きや感覚との違いに対する戸惑いや不安感、思い通りにラートや身体を操作できないもどかしさなどをたくさん感じ、自分自身の中で向き合いながら取り組んでいた。そこに仲間の姿やアドバイス、補助、コラゴ技などを通しての多くの気づき加わることで、さらに複雑な向き合い方となっていく。これらは3つのねらいにもつながる生徒の大きな学びととらえられる。また、ラートや足元を補助し合うことで、互いの信頼感も増していく。これらはラートの形状や、重心の移動、力の加減や姿勢保持といったラート運動のおもしろさとしっかり向き合ったからこそ感じたことであるといえる。

次に、ラート経験のある学生が支援に入ることで生徒が安心して活動できることにつながった点があげられる。第2学年の段階で、安全面への意識の向上や学び合う関係性づくりに働きかけてもらうことで、自分たちでの活動が増え、積極的な姿が多く見られるなど、大きな効果がみられた。他の単元にもつながるようにしていきたい。

課題としては、評価の仕方と、ラート運動の特性を踏まえた学習課題を含む授業デザインの設定、時間を経ても怖さを克服できない生徒への対応、生徒同士での確実な補助方法の徹底などがあげられる。また、来年度に向けて保健体育科教員の指導力向上を図るため、研修や研究をしていく必要がある。

### 3. 音楽科における合唱活動での学習支援

(古市 和代)

#### 【目的】

文化祭での合唱コンクールに向けた取り組みにおいて、大学生が授業に入り、パート練習や混声合唱の支援を行うことで、生徒の音楽的な表現力を伸ばす。また、年齢の近い大学生からのアドバイスによって仲間とひとつになって豊かな響きを持ったクラス合唱を作り上げる意欲を高める。

#### 【概要】

2学期当初からの約1か月、3年生各クラスの音楽授業に、パートや合唱練習の支援として教育学部音楽科の学生が参加した。

音楽を専門に学んでいる大学生が、各パートについてピアノを弾きながら音取りの支援、また発声の仕方や歌を仕上げていくにあたってのアドバイスをすることで、生徒はより自信を持って歌うことができるようになり、表現力豊かに歌えるようになっていった。

今年度はその成果を10月17日に三重県総合文化センターでの文化祭・合唱コンクールで発表した。

#### 【成果と課題】

コロナも5類に移行され、2学期は暑さもあり授業内でのマスク着用率も少なくなり、口の開け方、表情をお互いに見ながらパート練習に取り組めるようになった。1年生の頃から特にテノールが安定感のある声で歌うことができ、合唱意欲も非常に高くレベルの高い合唱ができるのではないかと期待も大きかった。

2学期から音楽科の学生が授業に参加し、各パートに1～2名の学生についてもらい声の出し方も含め、音取りの段階からゆっくり丁寧にピアノで音を弾き、一緒に歌うことを何度も繰り返し



教えてもらえることは生徒たちにとって、短時間の中で歌えるところが増え、充実した練習時間となっている。今年度は合唱指導だけでなく、指揮者やピアノ伴奏者にもたくさんのアドバイスを



してもらい、大きな自信につながっていた。

今年度は9月半ばに修学旅行、中間テストが入っていたこともあり、行事等で5クラスの授業時間数が揃わずに学生支援に入ってもらえるクラスに偏りがあった。授業数の少ないクラスには放課後の合唱練習の時間に合わせて入ってもらえただけで、練習時間すべてを合唱に充てられるわけではなく、短学活なども含むためせっかく来てもらった学生さんを待たせてしまう事も多かった。来年度は支援時間に差ができないよう時間割を調整して、どのクラスにとっても有意義な合唱練習時間の確保につなげたい。

## 4. 家庭科におけるニジマスのムニエル作り

(服部 美由紀)

### 【目的】

理科の授業で学んだニジマスの解剖実習の後に、「魚の生命を美味しくいただく」というめあてで、解剖したニジマスを引き続き利用してムニエルの調理実習を行う。教科書では切り身を使った調理法になっているが、1尾の魚の二枚開きを体験し、魚の調理上の性質などについてより学びを深める。中学生の日常生活で1尾の魚に触れる機会が少ないと思われるので、貴重な授業になるようにしたい。

また、三重大教授のオリジナルレシピであるレモンソースも作り、魚をより美味しくいただく工夫についても学ぶ。

### 【概要と成果、課題】

中学校の家庭科の食物分野では、野菜・いも、肉、魚を使った3回の調理実習が履修課題となっている。しかし、週1時間の授業数では到底叶うことはなく、それぞれの学校で授業内容をアレンジしたり、生徒の実態に合わせて実習課題を精選するなど、毎年様々な工夫が必須である。

また、本校の課題として、過去3年間にわたって調理実習が行われていなかったというのも、大きな問題となっていると思われる。コロナ禍だったという要因もあるが、中学生の生活経験の希薄化は、今後の衣食住の自立や社会生活においても、様々な問題と成りうるのではないだろうか。

調理実習の時間には、理科の解剖時には怖々と魚に触れていた生徒も、調理する段階になると、大学から提供していただいたレシピを見ながら積極的に

取り組む姿勢が見られた。難しそうだと思われていた二枚開きでも、教師の師範をしっかりと見て果敢な姿勢で取り組み、上手く出来上がると、満足そうな表情を見せていた。また、各班には大学の学生たちが付いてくれていて、その場に応じた支援をお願いできた。生徒たちにとっては親しみやすく頼りがいのある存在だったようである。また、それだけでなく、様々な場面で機転を生かしていただき、教師一人ではなかなか目が届かない実習において、大変心強かった。小麦粉をまぶしてバター焼きする工程では、最後の焼き上がりの段階でより完成に近づくので、全員がフライパンの魚に注目する様子がみられた。

また、レモンソースでは、材料に生にんにくを使った。調味料としての加工食品は見たことがあっても、生にんにくに触れることが初めてだという生徒が多く、その切り方も様々だった。それでも、にんにくの風味がよく効いたソースはムニエルによく合い、魚が苦手な生徒にも好評を得た。

生徒たちにとって初めての調理実習を終え、ふり返りのレポートには多くの生徒が達成感を感じたと記していた。また、調理に興味をもったことや、毎日の食事を用意してくれる家族への感謝の気持ちを書いてくる生徒もいた。このことから、これまでに体験できなかった調理や実習における共同作業などは、家庭科の教育課程において重要な意義があるものと感じた。

## 5. 理科における授業での学習支援

(前田 笑)

### 【目的】

ニジマスの解剖実験を行い、ヒトとのからだのつくりを比較し、共通点と相違点を観察する。

### 【概要】

ニジマスの解剖実験はコロナウイルスの影響もあり、5年ぶりに実施した。生徒はもちろん2

年生の理科を担当している2名の教員のうち、1名はニジマスの解剖が初めてだった。10月に後藤先生と打ち合わせを行い、授業は10月30日から11月6日の間に各クラス1時間ずつ行なった。

はじめに、1年次に学習した哺乳類と魚類の違いを確認した。そして、モデル図（ぬいぐるみ）を用いて肛門からはさみを入れて腹を切り、えらを外し、うきぶくろと消化管をとり出すという手順を確認した。その後、2人1組になって実際にニジマスを解剖した。解剖後はトレーに内臓を並べてスケッチを行い、共通点と相違点を観察した。

#### 【成果と課題】

モデル図は、三重大学に用意していただいたニジマスのからだのつくりを的確に再現したものであったため、生徒は解剖のイメージをもつことができた。しかし、モデル図は簡単にえらをとることができてしまうため、解剖ではえらをとらずすときに苦戦している生徒が多かった。

実際に解剖をするときには、生の魚を触ることが初めてな生徒も多かったため、触ることを嫌がる生徒もいた。中には、内臓を見ることを嫌がる生徒もいた。しかし、多くの生徒の興味・関心は非常に高く意欲的に取り組む生徒が多かった。

三重大学の学生が丁寧にえらをとるコツや、うきぶくろをきれいにはがす方法を教えてくださり、多くの生徒が失敗することなく、解剖を行うことができた。また、小腸と大腸の区別がないことや肺のかわりにうきぶくろがあることなどのからだのつくりを丁寧に教えてくださったこと

により、生徒のレポート用紙が充実したものになった。しかし、理科の授業の中でスケッチの練習をしていなかったため、上手にスケッチすること



ができなかった。生物分野でスケッチをしていくことが必要である。

ニジマスの解剖が生命分野である「動物のからだのつくりとはたらき」の学習後であったため、生徒は学習内容を確認しながら、実体験を伴った学習ができた。

## 9. 橋北中学校

本年度、橋北中学校で実施した取り組みは以下のとおりである。

1. 数学科における学習支援
2. 技術科の三重大学教授による出張授業（Scratch と Arduino を用いた温泉卵づくり）

### 1. 数学科における学習支援 田中伸明先生と数学教育コース3年生

#### 【目的】

- ・授業内容に困り感を持つ生徒の学力向上を図る。
- ・学生が学校現場での経験を重ねることで、教職に対する意識を高め、教員に必要な資質や能力の素地を養う場とする。

#### 【概要と成果、課題】

昨年度に引き続き、教育実地研究という授業の一環として、数学教育コースの学生が数学科の授業に参加し、学習支援を行った。4月当初に学生と田中伸明先生、本校の数学科教員で打ち合わせを行い、それからは1年間の中で計画を立て、学生が授業に参加した。

支援の方法としては、授業の中で生徒が課題に取り組む際に、すぐに答えや解法を伝えるのではなく、生徒の困り感（どこでわからなさを感じているか、つまづいているか）を判断することによって、答えに向かう足がかりを作るような支援を考えて、実践した。

また、授業後にはどんな支援をしたのかフィード

バックシートを提出して記録を残していった。

授業の中に大学生が入ることで、授業者がひとりするときよりも、生徒の様子をきめ細やかに観察し、支援を行うことができた。また、基本的には決まったクラスへ大学生が入ることになっており、生徒との関係を築いて支援に入ってもらうことで、生徒からも話しかけやすい存在となり、特に数学に苦手意識がある生徒の学びに向かおうとする意欲を高めることに繋がった。

課題としては、大学生と授業者が今以上に連携して生徒と関わっていくことの必要性が挙げられる。授業者が大学生に事前に授業の内容や生徒がつまづきやすいと思われるところを伝えることで、より質の良い支援を行うことができるだろう。また、フィードバックシート以外にも、大学生が支援に入るタイミングや生徒同士を繋げる声掛けができたか、授業後に振り返ることで積極的に支援に入っていけるようにしていく。

### 2. 技術科の三重大学教授による出張授業（Ichigojam を用いた温泉卵づくり）

#### 【目的】

凝固温度の違いから、卵を茹でる湯温を65～70℃程度に保持すると、卵白だけが固まった半熟卵とは逆の卵黄だけが固まったいわゆる温泉卵を作ることができる。温度センサの指示に従って電熱器を制御

することにより温泉卵づくりをすることを通じて中学校技術・家庭科技術分野のエネルギー変換の技術、情報の技術（計測、制御、プログラミング）を体験的に学ぶことを目的とする。

## 温度測定グラフをつくらう

### 【概要と成果、課題】

2年生の技術科の授業で、三重大学の松岡先生、加藤先生に来ていただき、以下のような実験を行った。

湯と卵を入れ、電熱器で加熱・保持できる実験装置を準備する。湯中に IC 温度センサを差し込み、その温度データに基づき、電熱器の電源をオン/オフ制御する。



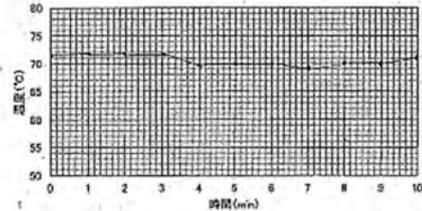
各クラスで班ごとに実験セットを 1 セットずつ準備し、2 班ごとに制御温度を 60°C、65°C、70°C と変えて設定することで、加熱後に比較できるようにする。

授業では、松岡先生、加藤先生に装置の準備や説明をしていただき、技術・ものづくりコースの大学生数名が安全の確認を行いつつ生徒の操作補助を行った。

本年度は、1 学期に、Ichigojam を使って、信号機のプログラムを学習したことで、温泉卵のプログラムをヒントを基に、考えることができた。  
※下記参照

温泉卵ができる仕組み、そしてそのためには適切な計測と制御が必要であることを体験的に学ぶ授業となった。

温度の表示	時間 (min)	温度 (°C)	LED の ON/OFF
0	0	71.20	ON / OFF
20	1	71.52	ON / OFF
40	2	71.52	ON / OFF
60	3	71.20	ON / OFF
80	4	69.92	ON / OFF
100	5	70.88	ON / OFF
120	6	70.24	ON / OFF
140	7	69.60	ON / OFF
160	8	70.56	ON / OFF
180	9	70.24	ON / OFF
200	10	71.52	ON / OFF



c) Ichigojam (BASIC) でプログラムを作る。

少し難しいので、あいているところの命令語を入れて、完成してください。

```

10 CLS           : 画面をクリア
20 C=0           : カウンターで何回ループしたかを計算
30 X= ANA (2)    : アナログ入力に 2 番 port を選択
40 T=X*32/100-60 : T は温度
50 WAIT 60      : 1 秒待つ
60 IF T<=60 THEN OUT 1,1 ELSE OUT 1,0
: これは温度が 60°C 以下ならヒーターを ON、大きければ OFF ヒーターは port 1 に接続
70 PRINT "C, T; " : (X*32)/100 : C と T を CRT (ディスプレイ) に表示
: X*32 を 100 で割った余りを求めて表示させている % は余り計算の命令
80 WAIT 120     : 2sec 待ちます。
90 C=C+1       : カウンターに 1 を足して、ループ回数を更新
100 GOTO 30     : 無限ループにする
    
```



### 【生徒の感想】

オーバーシュートを防ぐためのプログラムが重要だと思った。また、センサの精度を高めることも大切と感じた。

# 第2部

## 附属学校園連携活動



## 附属学校園連携活動について

三重大学教育学部の附属学校園として、附属幼稚園・附属小学校・附属中学校・附属特別支援学校があります。これらの附属学校園は、主に教育実習などの学生による実地研究の場として位置づけられており、教職支援センター・学校連携支援部門において、附属学校園での実地活動を活性化するための各種コーディネートや学生指導を行っています。

これらの活動に加えて、学部教員と附属学校園教員との連携による活動を進め、より質の高い教育と研究の開発によって、教員養成学部としての特色化を目指すという理念の下で、学部教員と附属学校園の教員が協働して附属学校園での授業に取り組む連携活動が展開されています。

### 連携活動の形態

A型：連携授業は本学部教員による授業

B型：連携授業は附属学校園教員と本学部教員による教材共同開発・授業協働研究および授業実践

C型：B型に異校種間連携の要素を加えたもの

D型：連携授業を含む展開

## 附属学校園での活動一覧

令和5年度に行われた活動を附属学校・園ごとに分けて、一覧表にしたものを次ページにあげた。各連携校園との間で活動計画をたて、それを取りまとめたものである。

連携活動数は53であり、連携活動に関わった日数はおよそ144日で、関わった学生は述べ295名であった。

各学校・園の活動内容は、活動一覧の後に続いて掲載されている通りである。

## 2023（令和5）年度 学部と附属学校園との連携一覧

学校連携推進委員会

依頼 No.	領域 No.	該当コース 担当大学教員	附属校園/担当教員	教科・学年・クラス	活動内容	該当授業科目/参加学生数/実施日
1	D	家政教育 瀧日 滋野	附属幼稚園 杉澤 久美子	年長	カレーパーティーの支援を通じた触れ合い	6月10日
2	D	幼児教育 富田 昌平	附属幼稚園 杉澤 久美子	未就園児コアラの会	附属幼稚園で例年実施している未就園児コアラの会への学生参加	「子どもの理解と援助」と「子育て支援」/2年生11名/10月～2月(計8回)
3	D	幼児教育 富田 昌平 吉田 真理子 水津 幸恵	附属幼稚園 杉澤 久美子		幼稚園保護者に向けてのコラムの発信	通年
4	D	幼児教育 吉田 真理子	附属幼稚園 杉澤 久美子		「夜の幼稚園」での学生による「人形劇」	キャリア教育入門/19名/7月15日, 1月24日
5	A	理科教育 伊藤 信成	附属幼稚園 杉澤 久美子	年長クラス	「夜の幼稚園」での「星を見る会」	地学講義II/6名/2023年7月15日
6	A	英語教育 中川右也	附属幼稚園 辻 彰士	年長	英語に親しむ活動	1月17日,2月20日、15名の学生が参加
7	A	保健体育 後藤 洋子	附属幼稚園 辻 彰士	年長	親子活動	10月10日実施
8	A	国語教育 林 朝子	附属幼稚園 辻 彰士	年長	毛筆体験	2月8日「筆・墨・紙を楽しもう」、学生12名が支援参加
9	B	保健体育 後藤 洋子	附属幼稚園 早川 ひろみ		自由な表現や動きを引き出すための環境・道具・関わり・動きのパターン(教材開発)	面談とオンラインにて実施
10	D	幼児教育 富田 昌平	附属幼稚園 早川 ひろみ		よるのようちえんブース運営	キャリア教育入門/1年生11名/7月15日
11	D	保健体育 岡野 昇 加納 岳拓	附属幼稚園 早川 ひろみ 奥村 彩優子	年中	年中(4歳児)親子活動	7名,11月15日
12	D	幼児教育 水津 幸恵	附属幼稚園 湯田 綾乃	年少	親子活動	幼児教育学/3年生9名/6月15日
13	B	家政教育 村田 晋太郎 瀧日 滋野	附属小学校 堀切 紋子		小中学校家庭科に関する共同研究	5月24日、6月19日、7月7日、8月1日、8月25日、12月26日、1月11日
14	B	家政教育 村田 晋太郎 平島 円 瀧日 滋野 横山 真智子	附属小学校 堀切 紋子		教職実践演習での講話	1月17日、1月24日
15	A	国語教育 服部明子	附属小学校 外国語科(井上)	外国語科6年	台湾の人々の生活や文化について知ろう	5月23日 「台湾について知ろう」授業実施
16	A	国語教育 服部明子	附属小学校 外国語科(井上)	外国語科5年	台湾の人々の生活や文化について知ろう	9月28日 「台湾について知ろう」授業実施
17	A	国語教育 服部明子	附属小学校 外国語科(井上)	外国語科 5年および6年	台湾新上小学校との国際交流活動におけるサポート	12月5日、6日(2日間)中国語によるサポート(服部)、英語によるサポート(教職大学院生2名)
18	B	国語教育守田 庸一	附属小学校 国語科(河邊・猪口・稲垣)	国語科	小学校国語科の教材・授業研究	公開研究会(2学期)の授業、および1・3学期の研究授業について、事前・事後の検討会を実施
19	D	家政教育 平島 円	附属小学校 堀切紋子	家庭科	フレンドシップ事業(小学生参加イベント)の指導	10月9日
20	B	家政教育 横山 真智子	附属小学校 堀切紋子	家庭6年	被服製作実習(かばんの製作)の授業研究	12月7日
21	A	音楽教育 上ノ坊航也	附属小学校	4年生	歌唱指導	11月10日
22	B	保健体育 岡野昇 加納 岳拓	附属小学校 体育科(長井・若林)	体育科	主体的・対話的で深い学びを実現する体育授業の共同開発	通年
23	B	国語教育 守田 庸一	附属小学校 長井直己	国語科	主体的・対話的で深い学びを実現する国語授業の共同開発	3月14日に実施予定
24	B	家政教育 村田 晋太郎 前原 裕樹	附属中学校 城所 拓磨	研究全般	本校研究への助言	4月25日、6月13日、8月1日、10月6日、12月15日、12月26日
25	B	家政教育 村田 晋太郎 市川 俊輔 水藤 弘吏 瀧日 滋野 横山 真智子	附属中学校 城所 拓磨	校内研修 1、2年生総合的な学習の時間	ファシリテーションに関する校内研修 1、2年生の総合的な学習の時間における「研究」に関する講義	12月5日、1月23日、2月26日、3月4日、3月11日
26	D	国語教育 余 健	附属中学校 楠本 涼子	国語科	方言調査の結果を生かしたオンライン授業による三重県方言の教育と継承、並びに情報教育の検討	楠本先生と余による方言予備調査等の実施、情報教育の内容の検討(随時実施した)
27	A	国語教育 国語講座教員	附属中学校 国語科	全学年	各専門領域の授業	1月25日 中1「金太郎像の変遷」(松本) 2月2日 中1「説明文を楽しく合理的に読む」(守田) 2月29日 中2「敬語の誤用(二重敬語・過剰敬語)はどうしたら防げるか」(余) 3月1日 中2「異なる訳文を比較しよう」(和田) 3月(オンデマンド) 中3「レトリックを読む」(守田)
28	B	家政教育 村田 晋太郎	附属中学校 林 歌織	家庭2年	教材の共同開発(食生活をデザイン)	4月13日、4月21日、4月24日、5月8日、5月16日、5月22日、6月19日、6月20日、6月27日
29	B	家政教育 瀧日 滋野	附属中学校 林 歌織	家庭2年	調理実験を取り入れた調理実習の実践研究	11月28日、11月29日、12月1日、12月5日
30	B	家政教育 横山 真智子	附属中学校 林 歌織	家庭1年	被服製作実習(シャツの製作)の授業研究	10月13日、10月20日、10月31日、11月7日、11月10日、11月17日、12月8日

31	B	家政教育 村田 晋太郎 瀧日 滋野	附属中学校 林 歌織	家庭2年	家計管理に関する実践研究	10月13日、10月20日、10月31日、11月7日、11月10日、11月17日、12月8日
32	B	家政教育 村田 晋太郎 瀧日 滋野	附属中学校 林 歌織		小中学校家庭科に関する共同研究	5月24日、6月19日、7月7日、8月1日、8月25日、12月26日、1月11日
33	B	家政教育 村田 晋太郎 平島 円 瀧日 滋野 横山 真智子	附属中学校 林 歌織		教職実践演習での講話	1月17日、1月24日
34	B	家政教育 村田 晋太郎	附属中学校 林 歌織	家庭3年	パートナーシップに関する実践研究	7月7日、10日
35	A	数学教育 中村 力	附属中学校 林 大輔	第一学年 出前授業	最大公約数	2月15日(木) 11:50~12:40
36	A	数学教育 森山 貴之	附属中学校 林 大輔	第一学年 出前授業	球面の幾何学	2月15日(木) 11:50~12:40
37	A	数学教育 肥田野久二男	附属中学校 林 大輔	第一学年 出前授業	水に水滴を垂らすとどうなる？	2月15日(木) 11:50~12:40
38	A	数学教育 玉城 政和	附属中学校 林 大輔	第一学年 出前授業	たし算で引き算する	2月15日(木) 11:50~12:40
39	A	美術教育 上山 浩	附属中学校 美術部	美術部	3DCG	学生参加なし、8/4,8/7
40	A	技術・ものづくり 魚住明生	附属中学校 山城 卓	技術科3年	教職実践演習での授業実践	実施日:11月27日・12月1日, 授業者:学部4年生9名, 授業実施クラス:4学級(各1時間)
41	A	理科教育 平山大輔	附属中学校 嵯峨 恭代	第二学年 校外学習・講義体験	樹木の「行動」を探る	39名の生徒が参加/2023年6月28日
42	A	理科教育 市川 俊輔	附属中学校 庄山 大樹	第二学年 校外学習・講義体験	魅力伝わる探求成果発表をつくろう	24名の生徒が参加/2023年6月28日
43	A	美術教育 上山 浩	附属中学校 庄山 大樹	第二学年 校外学習・講義体験	図工・美術教育の基礎(子どもの絵にみる発達と表現のタイプ)	32名の生徒が参加、6/28
44	A	数学教育 玉城 政和	附属中学校 須藤 淳	第二学年 校外学習・講義体験	数を楽しもう!	30名の生徒が参加
45	A	国語教育 林 朝子	附属中学校 東川 健太	第二学年 校外学習・講義体験	文字のたのしさ・おもしろさ	6月28日(水)17名の生徒が参加
46	A	家政教育 平島 円	附属中学校 萩森 喬至	第二学年 校外学習・講義体験	ご飯を科学しよう!	6月28日
47	A	保健体育 水藤 弘史	附属中学校 鈴木 将弘	第二学年 校外学習・講義体験	より高く跳べる方法を考えてみよう!	65名の生徒が参加
48	A	幼児教育 富田 昌平	附属特別支援学校 下地 栄津子	生活単元学習 小学部全体	絵本の読み聞かせ,手遊び	11月22日, 29日
49	A	保健体育 富樫健二	附属特別支援学校 田中 寛之	体育 中学部全体	様々な特性をもつ子ども達全員が参加できる運動やゲーム	2学期
50	A	美術教育 上山 浩	附属特別支援学校 田中 寛之	美術 中学部全体	新聞紙を用いた立体造形	教職実践演習、8名の学生が参加、11/16
51	A	情報教育 山守一徳	附属特別支援学校 山原 幸浩	情報 高等部1年	お釣りの最小硬貨枚数プログラミング	6月21日(水)10:40-12:00 情報教育4年5名
52	A	情報教育 山守一徳	附属特別支援学校 山原 幸浩	情報 高等部2年	生活の知恵を知ろうの三択クイズプログラミング	5月24日(水)10:40-12:00 情報教育4年5名
53	A	情報教育 山守一徳	附属特別支援学校 山原 幸浩	情報 高等部3年	歴史並べ替えプログラミング	7月5日(水)10:40-12:00 情報教育4年6名

# I 教育学部からの報告



# 1. 情報教育

本年度、情報教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 附属特別支援学校（対象：高等部 1 年生 2 限× 1 クラス）における「お釣りの最小硬貨枚数プログラミング」の授業・演習
2. 附属特別支援学校（対象：高等部 2 年生 2 限× 1 クラス）における「生活の知恵を知ろうの三択クイズプログラミング」の授業・演習
3. 附属特別支援学校（対象：高等部 3 年生 2 限× 1 クラス）における「歴史並べ替えプログラミング」の授業・演習

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

## 1. 附属特別支援学校(対象:高等部 1 年生 2 限× 1 クラス)における「お釣りの最小硬貨枚数プログラミング」の授業・演習

(山守一徳)

【目的】 附属特別支援学校、高等部 1 年生 (1 クラス) を対象に、タブレットの使い方に慣れることを目的とし、Scratch を使って、お釣りを計算させるプログラミングの授業実践を行った。

【概要と成果、課題】 2023 年 6 月 21 日に 100 分の授業実践を行った。買い物をする場面の店員役を想定し、硬貨でお釣りを返す時に、硬貨枚数最小になる

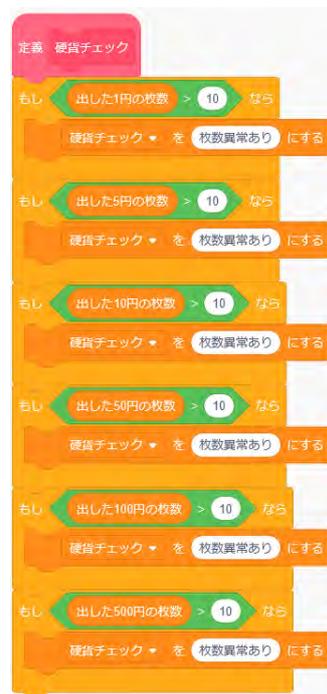
ように生徒に計算させた。生徒に作成させたプログラムは、最小硬貨枚数になっているかをチェックするプログラムである。お客さんが出したお金と品物金額を示した時、お釣りを



(a)数字で答えさせる画面



(b)硬貨を出して答えさせる画面



(c)作成させたプログラム

図1 お釣りを答えるアプリの画面例

を数字で答えさせる場面と、硬貨をトレイ上に移動させる場面を用意した。数字で答えさせるのはキー入力の練習を意図し、トレイに硬貨を移動させるのは、タッチ

パッド入力の練習を意図している。お釣りの金額を計算させるのは生活上必要な暗算の練習を意図している。プログラミングの体験をさせるために、Scratch を使い、類似のブロックを並べることで完成できるプログラム部分を作成させた。

【学生の感想】生徒は全員が Scratch によるプログラミングを経験しており、プログラム

も全員が完成させることができた。実施前に懸念していたパソコンの操作に関してもあまり困難を感じることなく行っていたため、スムーズな実践を行うことができた。一方で、授業内容に関する理解では個人差が大きく、よく理解していた生徒もいれば、わからずに進めている生徒もいた。(学生名：HN)

実施日	時間	場所	学生
6月21日(水)	10:40-12:00	附属特別支援学校	情報教育4年5名

## 2. 附属特別支援学校(対象:高等部2年生2限×1クラス)における「生活の知恵を知ろうの三択クイズプログラミング」の授業・演習

(山守一徳)

【目的】 附属特別支援学校、高等部2年生(1クラス)を対象に、プログラミング経験をさせることを目的とし、生活の知恵を知るクイズのプログラミング授業実践を行った。

【概要と成果, 課題】 2023年5月24日に100分の授業実践を行った。日常生活の助けとなるような問題を三択形式で解かせた。熱中症対策、鼻血対策、雷対策、天ぷら油消費方法、消火器の使い方、ウィルス対策、騙し請求の見分け方、特急券払い戻し条件、時速分速秒速の比較、日中気温推移の10問である。

正解の得点に従って、最後に褒める言葉を変えて言うというプログラムを先生が操作を提示しながら生徒に作らせた。その後、生徒にプログラムを改造させる内容として、猫のコスチュームを変える改造と、正解した時に、猫を回転させる、音を出す、得点を1点加算するという改造と、問題解く度に、動物をクリッ

クすると音を出す、正解以外の動物を半透明に



図2 生活知恵クイズの画面例

するという改造と、終わった時に歓声を上げるという改造と、正解数に応じて背景が変わるといった改造を用意した。

【学生の感想】7名中5名の生徒はどれも完成できたようである。TA指導もあり楽しく体験できたようであり、またプログラミングしてみたいかの質問に対し、とてもそう思うが2名、

少しそう思うが4名、あまりそう思わないが1名、全くそう思わないが0名という結果であった。漢字の読みが苦手であったため、長い文章

を読むのに時間が掛かっていた。100分の授業では知恵が付くまでいかなかったと思う。(学生名：JN)

実施日	時間	場所	学生
5月24日(水)	10:40-12:00	附属特別支援学校	情報教育4年5名

### 3. 附属特別支援学校(対象:高等部3年生2限×1クラス)における「歴史並べ替えプログラミング」の授業・演習

(山守一徳)

【目的】 附属特別支援学校、高等部3年生(1クラス)を対象に、プログラミング経験をさせることを目的とし、歴史の順番に並べ替えさせるゲームのプログラミングの授業実践を行った。

【概要と成果, 課題】 2023年7月5日に100分の授業実践を行った。歴史の問題の内容は、時代名、主要人物、戦い名称、条約名についてである。問題を解かせた後、プログラムを改造させた。正解した時に、キャラクターを回転させる、コスチュームを変える、音を出す、背景を変えるという改造と、間違った時に、音を出す、終わった時に歓声を上げるといった改造と、回答に掛かった時間を表示させ、ベストタイムを表示させる改造の8種を用意した。

【学生の感想】 高等部3年生だから高等部2年生よりもプログラミング操作が速いということはなく、生徒の障がい程度に依存するようで



図3 歴史並び替えの画面例

ある。集中して取り組めるか否かは生徒により差がある。ブロックを移動させる時に手指の動作が必要であるが、細かな動作まで難しい場合は集中力を持続させることは難しそうである。解いている様子から判断すると、歴史の問題に関しては難しいという意識が入り、興味を持って順番を覚えることに繋がらなかったと思う。

(学生名：JN)

実施日	時間	場所	学生
7月5日(水)	10:40-12:00	附属特別支援学校	情報教育4年6名

## 2. 理科教育講座

本年度、理科教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 附属幼稚園における星見の会の実施
2. 附属小学校キャンプでの観望会の実施
3. 附属中学校第二学年校外学習・講義体験「樹木の「行動」を探る」
4. 魅力伝わる探究成果発表をつくろう

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 附属幼稚園における星見の会の実施

(伊藤信成)

#### 【目的】

附属幼稚園で例年行っている「よるの幼稚園」の活動の一環として、年長の園児を対象として望遠鏡を用いた星の観望会を行っている。この活動は、園児にとっては夜空をはじめとして自然への興味喚起を、学部生にとっては望遠鏡操作技術の習熟、天文知識の習得、保護者も含めた異年齢の人々とのコミュニケーション力の涵養を目的としている。

#### 【概要と成果、課題】

星見の会は2023年7月15日(土)19:30～附属幼稚園の年長園児を対象に行なった。多くの園児にとって、望遠鏡で天体を見ることは初めての体験であり、保護者からの期待も大きい。今回は3台の小型望遠鏡を幼稚園に持ち込んで、観望を行うこととした。星見の会当日の月齢は27でほぼ新月に近かった。西の空に沈みゆく金星と火星が見えるが、火星は園児が小型望遠鏡で見るには適当ではないため、望遠鏡でみる天体として金星を選択した。なお、望遠鏡での観望の待ち時間には、保護者を含めて夏の星座の解説を行った。参加学生は2～3年生6名で望遠鏡毎に2名、星空解説1名、動線管理1名の体制で実施した。

なお、当日の金星は望遠鏡で見ると三日月様にかけて見える。金星を望遠鏡で観望した園児からは”おつき様みたいだった”、”丸くなかった”、”白かった”等の発言が多くあり、望遠居内に見える金星を確かに認識している様子が伺えた。また、望遠鏡の待ち時間には、星座の解説を行なったが、これは園

児よりは保護者に好評であった。

本活動に対する課題として以下の4点がある。

① 園児が望遠鏡を覗く際に、どうしても望遠鏡を動かしてしまうため、天体の再導入が必要となり、観望が一巡するまでに時間がかかった。

② 待ち時間の星座解説は保護者には好評であったが、園児の反応は芳しくなかった。

③ 望遠鏡は複数台用意したが、金星が西の空の低い位置にあったため望遠鏡の設置場所が限られ、当初の想定より混雑した。

④ 望遠鏡の操作になれていない2年生の場合、一度望遠鏡から天体が外れてしまった後の再導入に手間取ることがあった。

ただし、いずれの課題も例年と同様の課題であり、今年度特有のものではない。また課題ではあるものの、園児の発達段階に起因するもの、あるいは学生の技術習得の機会となるものであり、改善すべきというよりは成長の機会ととらえている。

#### 【学生の感想】

・天体を入れ直すのが大変だった。もっと望遠鏡操作に慣れる必要がある(2年)。

・星を見たときの園児の純粋な反応が見れて良かった(2年)。

・臨機応変な対応が必要と感じた。望遠鏡設置場所が離れているので、トランシーバー的なもので相互に状況を知ることができると良い(3年)。

## 2. 附属小学校キャンプでの観望会の実施

(伊藤信成)

### 【目的】

附属小学校5年生のキャンプの際に観望会を行っている。附属小学校は様々な地域から児童が通学しているため、通常時は夜間の観望会の実施が難しい。そこで、キャンプの機会を利用して観望会を行っている。この観望会では、園児とは異なる天文・宇宙への知識を持った年代層を対象としており、望遠鏡操作・天体についての説明・安全確保といった面での知識・技能の習得を目的としている。

### 【概要と成果、課題】

キャンプでの観望会は2023年7月21日(金)19:30～四日市市少年自然の家において、附属小学校5年生4クラスを対象に行った。観望会では、屋外での観望に先立って、室内でシミュレーションソフトを用いた当日の星空の紹介(附属教員が担当)を行なった後に、屋外での観望を行なった。屋外での観察では観察場所を3箇所設定し、1ヶ所を附属教員(前田教諭)が担当し、残りの2ヶ所を教育学部の学生が担当することとした。児童も1学年を3グループにわけ、各グループが時間を区切って3ヶ所を回っていくスタイルでの観察とした。学部担当の2ヶ所については、一方は星座の解説、もう1ヶ所で望遠鏡を用いた火星または月の観望を行う計画を立て、望遠鏡2台を搬入し準備を

行なった。なお、学生は2,3年生3名が参加し、望遠鏡操作を担当することとした。

しかしながら、観望会時には天候不要により一部の児童にしか望遠鏡での天体観望の機会を提供することができなかった。次善の策として、地上の風景を望遠鏡で見るという対応を行なった。星座の解説についても、星がほとんど見えなかったことから、児童からの宇宙に関する質問に答える時間とした。児童からの質問には、専ら大学教員が回答したが、恒星の表面温度、惑星の内部構造、ブラックホール、天体までの距離測定、宇宙の始まり等、質問内容は多岐に及ぶとともに、踏み込んだ質問が多数あったのが印象的であった。

### 【学生の感想】

- ・望遠鏡の操作は慣れてきたが、天気が悪かったことが残念。そんな中でもライトを振りかざす学生Aを望遠鏡で見るとの臨機応変な対応はできたと思う。
- ・附属の先生の観望会スキルが高かった。
- ・附属の児童は専門的な質問をしてくる子も多く、天体の知識をしっかりと学んでおく必要がある。

## 3. 附属中学校第二学年校外学習・講義体験「樹木の「行動」を探る」

(平山大輔)

### 【目的】

附属中学校第二学年校外学習・講義体験の講師を担当した。自身の研究紹介を通じて、生徒たちに探究活動への意欲を高めてもらうことを目的とした。

### 【概要と成果、課題】

日程と開催場所は次の通りである。

- ・6月28日：教育学部1号館302教室

講義テーマは、「樹木の「行動」を探る」とした。森の中で個々の樹木がどのような生態をもち、他の

生物や環境とどのように関わりながら生きているのかについて、カシ類とその種子を利用する昆虫との共進化に関する自分の研究の事例を中心に解説した。参加生徒は39名であった。生徒の振り返りから、「講義は本当に興味深かった。「なぜだろう」という疑問を解決する・仮説を立てる為の新しい別の視点を持つことの重要性を実感した。」といった感想が得られた。

## 4. 魅力伝わる探究成果発表をつくろう

(市川俊輔)

### 【目的】

2024年6月28日の三重大学教育学部附属中学校の校外学習にて、大学講義体験が企画されており、その1つの講義を担当した。本講義体験のねらいについて、附属中学校からは以下の通り提示されていた。

- ・大学教員の専門についての講義を通して、中学生の興味・関心を広げ、探究心を高める。
- ・中学生の探究活動の進め方や活動へのヒントを得る。
- ・新たな視点を得て、中学生の今後の活動につなげる。

附属中学校では、SDGsの観点を念頭において、特に生活の中の疑問や社会の課題について、2～6名のグループでの探究学習に取り組んでいた。本講義の対象の中学生は、探究テーマを持って活動をすでに始めていた。2024年6月30日には活動成果の中間発表会を控えており、おおよその発表ファイルを作成できている状況だった。本講義では、生徒が作成している発表ファイルを魅力が伝わるように改善することを通して、各生徒の探究活動の論点整理や、今後取り組むべき活動を明確にすることを目的とした。

### 【概要と成果，課題】

附属中学校では、生徒に「原因」「影響」「解決策」の3項目を意識させて、探究活動に取り組ませていた。探究活動中間発表の持ち時間は、各グループ3分間であり、発表後質疑応答の時間が設けられてい

た。まず探究成果発表の例を示す意味で、附属中学校の探究成果中間発表の形式に沿って、活動担当者の研究内容を提示した。

つづいて、生徒どうしでペアを組ませて、準備している中間発表ファイルを用いて、お互いに探究活動の成果発表をさせた。聞き役になった生徒には、以下の点に沿って、発表役に改善アドバイスをさせた。

- ・どのような「原因」や「影響」を、どのように「解決」しようとしているか、理解できたことを伝える
- ・わからない単語があったら、説明を求める
- ・さらにどのような説明があったらより理解できるか、伝える

その後、互いに与えあった改善アドバイスをもとに、中間発表ファイルを生徒に修正させた。最後に数名の生徒を指名して、修正したファイルを使用して探究成果発表をさせ、更なる改善に向けてクラス全体で議論した。

受講生の振り返りとして、「探究成果の中間発表ファイルについて話し合ったりしてより良い発表ができるように工夫したりした。」「探究活動の参考にできることがたくさんありわかりやすく説明してもらえたので理解しやすかった。」「大学でもSDGsを活かして研究していたりしていてすごいとおもったし、探究活動にも活かしていきたいと思った。」といった記述があり、生徒の一定の満足を得られたものと考えられた。

### 3. 音楽教育講座

本年度、音楽教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

#### 1. 附属小学校において声楽演奏と歌唱指導

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

#### 1. 附属小学校において声楽演奏と歌唱指導

(担当 : 上ノ坊 航也)

##### 【目的】

実際にテノール歌手の歌声を聞くことで、声の出し方やベルカント唱法について理解を深め、歌唱に結び付ける。

##### 【概要と成果】

2023年11月10日に附属小学校の4年生の児童を対象に声楽のミニコンサートと歌唱指導を行った。ミニコンサートでは、「鬼のパンツ」として日本で親しまれているイタリア歌曲「フニクリフニクラ」や小学校音楽共通教材である「虫のこえ」をはじめ本格的なオペラアリア、魔笛「なんと美しい絵姿」など様々な原語や時代の楽曲に触れる機会となった。また「鬼のパンツ」や「虫のこえ」では児童にも参加してもらい、一緒に歌唱する楽しさを体験した。実際に歌声を聞いた児童からは「人間からこんな声が出るなんてびっくり」や「オペラに興味を持った」という感想が多く出たので、声の出し方や声楽への関心が深まったことを実感した。

歌唱指導では第4学年音楽共通教材である「もみじ」を使用し息の吸い方や声の出し方を体験した。児童の歌声はとてもまとまりがあり、優しい音色で

歌唱することが出来ていた。音程や声の明るさも良く、歌詞の意味なども十分に理解した演奏が出来ていたが、声量の小ささやフレーズを意識した息の運びが不十分であるように感じた。これらを改善するためベルカント唱法の基礎である息の吸い方(腹式呼吸)を練習した。胸に浅く吸うと、直ぐに空気がなくなりフレーズが短くなってしまうので、たっぷりと時間をかけ8拍間で息を吸い、次の8拍で息を拍練習を行った。はじめは4拍くらいで吸いきってしまったり、すぐに息を吐ききってしまったが、回数を重ねるごとに落ち着いてお腹に吸えるようになり、一定した量で吐けるようになっていった。お腹に息を吸って、その息をフーっと吐くだけだと理解しただけで、見違えるように児童の出す声は変化した。また、2小節で区切られてしまっていたフレーズも4小節に伸びたことで、歌詞の聞き取りやすさや全体的な流れがとてよ良くなった。

1回の指導でも声が大きく変化することを実感したので、今後も継続して行っていきたい。また、他の学年でも実施していくことが今後の課題である。

## 4. 美術教育講座

本年度、美術教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 附属中学校美術クラブ3学年合同での夏季の活動「3Dアニメーション制作」を行う連携活動
2. 附属特別支援学校中学部合同での美術科「新聞紙の塊を用いて生き物をつくる」連携活動

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 附属中学校美術クラブ3学年合同での夏季の活動「3Dアニメーション制作」を行う連携活動

(担当：上山 浩)

#### 【目的】

Art of Illusion 3.0.3 を用いて3DCGアニメーションを制作することで、子どもたちのイメージに合わせて立体的な形体、動きや視点の位置などを設定させ、具現化した喜びを味あわせる。

#### 【概要と成果、課題】

生徒数のコンピュータなど必要な準備は全て上山が

用意した。子どもたちには、3DCGソフトの使い方を講義し、自由な3Dアニメーションの作成を提案した。実施日時：8/4, 8/7 (各3時間)。実施場所：附属中学校美術室。概ね上記の目的に沿った活発な活動が見られたが、活動時間が不足気味であった。

### 2. 附属特別支援学校中学部合同での美術科「新聞紙の塊を用いて生き物をつくる」連携活動

(担当：上山 浩)

#### 【目的】

手軽な方法により立体的な表現を行い、その表現に親しみを感じる。

#### 【概要と成果、課題】

新聞紙をきつく丸め大量のセロテープでぐるぐる巻きにした立体をつないだり重ねたりしながら、最終的に目を取りつけることで架空の生き物を作り出す活動。「子ども達もすぐ生き生きと楽しそうに制作していて、この子はどんな子?という問いかけにも答えているところを見ると、それぞれ思いを込めることができた」との感想を得た。概ね狙い通りの成果をえたが、子ども個々の状況に対応することの難しさが改めて顕在化した。

#### 【学生の感想】

NO：活動の始めは球体を作っていただけだったが、その球体をつなげてできた形を生き物や食べ物に見立て、こだわりを持って制作していた。新聞紙を丸めながらセロハンテープで固定するという動作が難しそうだった。そのため、生徒が新聞紙を固め、私が固定するという方法をとった。どのような作品にしたいのかという意味を理解するのが難しかったが、完成した作品を動かして遊んでいる様子が見られてよかった。

MO：生徒によって特性や性質が、他の学校と比べて大きく違うため、その子に合わせた対応を行う必要性が多くあったように思う。思うままに作る子が多いため、そのまま子どもの思うままに作らせるか、ある程度手助けをして、綺麗な作品に近づける

か迷うことが多かった。私自身は、できるだけ子どもの思うままに制作をさせたいと考えているが、隣の特別支援で働く先生はかなり手を加えていたため、特別支援学校では他の学校よりも手助けを積極的にこなっていくほうが良いのかもしれないと感じた。

AK：普通学級の子どもたちと明らかに違う点は、一人一人がある特定の行動や分野に対して非常に強いこだわりを持っていることであった。先生の話聞くタイミングでも気にせず楽しそうに歌を歌っていた女子児童は、歌の内容からテレビのコマーシャル等の音楽から気に入っているものや印象的なものをインプットして口ずさむという行為に人一倍夢中になっている様子から、家でも身の回りで流れている歌に一際強く関心を持っているのではないかとあくまで推測だがそういった傾向を感じ取った。活動で様子を見ていた男子児童は、手で持っても並べてもインパクトのある大きなライオンを作っていたが、一連の行動を見ていると新聞紙の塊をテープで囲んで寄せ集めるという同じ行為を1時間以上も続けており、普通なら途中で飽きるであろう作業でも平気そうに集中して取り組んでいた。ライオンと答

えたのは咄嗟に思い浮かんだ直感によるものであり、他の児童と同様に、何を作っているかよりも制作の過程で楽しいと思った瞬間を頭の中で自主的に切り取って大切にしているようにも見えた。

NM：好きな動物や芸能人などを思い浮かべ、表したいものを考えていた。接着するときにはセロハンテープの向きや貼る位置と接着が必要な部分が合っておらず、パーツがくっついていないときがあった。セロハンテープで固定する際に、新聞紙を抑えてもらうこともあった。最初は新聞紙を片手で押さえていたため抑えきれない部分もあったが、作業を繰り返すうちに両手で抑えて支えることができるようになった。目のパーツを貼る際には、位置をイメージして貼っていた。両面テープの剥離紙をスムーズに剥がしていた。

TY：同じ学年であっても、各生徒によって体調が全く異なっていた。制作に集中して取り組める生徒もいれば、じっとできない生徒もいた。授業冒頭は緊張している雰囲気があったが、制作に入ると多くの生徒が没頭していてかなり大きな作品を制作していたり、独創的な作品が多かった。

## 5. 保健体育教育講座

本年度、保健体育教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 附属幼稚園における年長児親子活動
  2. 附属幼稚園における年中児親子活動
  3. 附属小学校における主体的・対話的で深い学びを実現する体育授業の共同開発
- 以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 附属幼稚園における年長児親子活動

(後藤洋子)

#### 【目的】

10月10日(火)に附属小学校の体育館で、年長クラスの親子活動を実施した。活動内容は親子で触れ合うとともに、身近にある物を活用して遊ぶこととした。活動計画を作成するに当たって、これまでと同様に附属幼稚園の年長クラス担当教諭と打合せを行い、コロナ渦の影響が残る中、精一杯体を動かす活動が十分に確保されにくいことや単発のイベントに終わるのではなく家庭での活動に繋がることを願って運動を選択した。更に自分で遊びや活動を考えるヒントとなることを願って活動を提供することとした。また、社会生活では「好ましくない行為」とされることが多い「破く」「投げ捨てる」「奪う」等の活動を敢えて「遊び」として取り上げてみた。「遊び」としての活動と日常生活とを切り替えられることを狙った。

#### 【概要と成果、課題】

活動時間は60分程度で、活動終了後に保護者とスタッフで活動の振り返りを行った。使用した道具は園での活動で使用している柔らかいボール(ソフトゴムク)と新聞紙で、以下の4種類の活動を展開した。

- (1) ストレッチ：親子で様々な姿勢でストレッチをする。
- (2) ダンス：次週に開催される運動会で踊るダンスを保護者と一緒に踊る。

- (3) ボールを使った活動：親子で向かい合って座ったり立ったり、様々な姿勢でボールを渡したり貰ったりする。親子で1人がボールを体に挟み他方がそれを獲る。保護者が向かい合って座り、子どもがその間に座る。保護者がボールを転がし、こどもはそれに当たらないように足や腰を上げたりして通す。
- (4) 新聞紙を使った活動：新聞紙の端を破いて尻尾とし、しっぽ取りゲームをする。親子で新聞紙の両端を持ち、振ったり回ったり鍋返しをしたりする。親子でタイミング良く新聞紙を投げ上げて体の様々な部位で受け止めたり、投げている間に親子で場所交換等の活動をする。音楽に合わせて新聞紙をヒラヒラさせたり破いたりして、円の中央に集まって投げる。

親子でペアを組んだストレッチから開始したことで、スムーズに活動に入ることができた。ボール転がしでは保護者が子どもの様子を見ながら、徐々に難しい課題に挑戦させようとする姿が見られたり、指示を出したり子どもが要求をしたりする場面が見られ、自然とコミュニケーションが取られていた。

最後の振り返りでは、幼児期の運動について解説したり、展開した各活動の意図を説明したりした。また、今回紹介した活動を基に、創意工夫して新しい活動や遊びを見つけ出すことを勧めた。

## 2. 附属幼稚園における年中児親子活動

(加納岳拓・岡野昇)

### 【目的】

新型コロナウイルス禍を経験した幼児がコミュニケーションにかかわる発達に影響が出ているという現状を受け、スキンシップによる「心地よさ」や「情動共有」、共同注視による「目的の共有」や「意図の共有」を軸とした運動遊びを行うことを目的とした。

### 【概要】

4歳児を対象とし、附属小学校の体育館で11月15日(水)の9:30-10:15に実施した。当日に向けて、9月末までに学生7名が個人で企画案を作成した。10月7日までに全体で企画案を作成し、10月中は学生と教員で検討を重ねた。10月30日(月)に附属幼稚園の先生方と打ち合わせをし、11月からは学内でリハーサルを行った。当日の1週間前には2度現地でリハーサルを行った。

活動は、接触を伴いながらリズムを合わせて動く同調遊びと親子がお互いの動きを感じながら動く協調遊びからなる活動Ⅰと、非接触でモノを介して風船をそれぞれで打ち上げる中で、一体感が生まれる遊びと親子で落とさないように風船を投げたり、打ち合ったりする協調遊びからなる活動Ⅱの二つから構成した。

### 【成果と課題】

子どもが遊びに参加するためには、一つ一つの遊びの意味を理解できるような環境やルールにするとともに、4つの活動を括る一つの世界(今回であれば、バイキンマンに連れ去られたショックパンマンをアンパンマンと一緒に助ける)を子どもたちと共有する環境や展開となっているかが重要であった。

### 【学生の感想】

・背景からスキンシップと共同注視というキーワードで企画案を作成したが、遊びを考えていくうちにその軸から離れていってしまうということがあった。遊びをもとにした軸なのか、軸を基に考えられた遊びなのか分からなくなることがあった。

・考えられる危険性なども、自分なら絶対に怪我をしない場面であっても、幼稚園児の立場から物事を考えてみるととても危険だと思う部分があつた。自分視点ではなく、自分が接する相手の視点に立って物事を想像し、考えることがとても重要だということがわかった。

・モノと一緒に運ぶモノを介した人との関わり、人に触れてモノを介さない関わりなど様々であるがそれぞれが偏らないように活動を考えていく必要があるということに気づくことができた。この気づきというのは中心的なおもしろさを貫くという部分と似ているところがあり、活動がどのような意味で行われているのかについて考え活動に意味を持たせるというところが共通している部分である。

・子どもは役割を演じることで同一人物であっても関わり方が違うという一面を見て、表情や動きという視覚で捉えやすいと考えて、言葉を少なくして色や図形や見本を使つての説明が納得しやすいと考えた。また、あまり複雑になりすぎないように簡単にシンプルなものでもねらいや目的を達成することができる活動が望ましい。

・世界観としてこれらが対峙しているという約束事の基で、実践が存在している。バイキンマンは常に邪魔しに来るのに対処するということが世界観となる。これは授業における単元の課題とも同じなのだと感じた。課題という約束事をどのように教師が崩さないかが大事である。

### 3. 附属小学校における主体的・対話的で深い学びを実現する体育授業の共同開発

(岡野昇・加納岳拓)

#### 【目的】

授業デザインの検討―実践（・観察）―リフレクションを実施することで、「主体的・対話的に深い学び」を実現する視点を得るとともに、学びに向かう人間性と体育の関係性について検討することを目的とした。

#### 【概要】

各学期に2本ずつ、計6本のデザインの検討、授業実践と観察、リフレクションを実施した。各学期に実施した授業実践は次の通りである。1学期は、1年生「リズム遊び（即興的なダンス）」と2年生「マットを使った運動遊び（ペア転がり）」、2学期は、1年生「鬼遊び（タグ取り鬼）」と2年生「多様な動きをつくる運動遊び（3人による縄跳びリズム走）」、3学期は1年生「ボールゲーム（ネット型）」と5年生「保健（救命教育：命のリレー）」であった。なお保健は、附属小学校だけではなく三重大学医学部附属病院救命救急・総合集中治療センターと連携したものであり、附属小学校の5年生3ク

ラスに加えて、四日市市の小学校4校とオンラインで接続して授業を行った。

#### 【成果、課題】

今年度の実践は、全て対人または集団での運動であった。1学期のリズム遊びやマットを使った運動遊びでは、運動を繰り返すことで動きが変化するだけではなく音楽に対する理解や自分の身体に関する理解が変化すること、相手の動きをきっかけに自分の動きや運動に対する認識が変化していくこと、2学期の鬼遊びや多様な動きをつくる運動遊びでは、他者と協調するための役割（リーダー：先導とフォロワー：追従）の見方について議論した。3学期のボールゲームと救命教育では、児童が世界をどのように見ているのか、そこからどのように環境を切り分けたり、関連付けたりするのが焦点となった。

また、これらの実践は生徒指導提要にある発達支持的生徒指導の内容と密接にかかわっており、学習指導と生徒指導を一体とした実践であることも確認した。

## 6. 技術・ものづくり教育講座

本年度、技術・ものづくり教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

### 1. 教職実践演習での授業実践

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 教職実践演習での授業実践—学校現場における今日的課題の解決に向けた授業の取組について—

(魚住明生)

本年度も技術・ものづくり教育講座では学部4年生の必修科目である教職実践演習での授業実践を附属中学校で行ったので報告する。

#### 【目的】

教職実践演習は平成25年度より教員養成課程における集大成の科目とし位置づけられたもので、文部科学省はその目的を、大学の授業を通して身につけた実践力が教科教育に必要な理論と統合され、確かな実践的指導力として形成されているかを確認することとしている。このことを受け、技術・ものづくり教育講座では、まず実際に学校現場での授業を参観し、現場教員との協議や対話を通して、教科教育における今日的な課題を把握し、次にその解決に向けて教材研究を行い、さらにそれを基に学校現場において授業を実践することで、成果と今後の教職での課題を明らかにする取組を行っている。また、附属中学校では、技術科への生徒の関心・意欲をさらに高めることを目的として、この教職実践演習の授業実践を大学と連携して行っている。

#### 【連携活動の概要】

次に、本活動の概要を以下に示す。

- ① 本講座から依頼し、本年度の取組について附属中学校担当教員と協議する。(大学教員、本校担当教員)：9月
- ② ①での協議を基に、授業実践の日程と対象学年を附属中学校担当教員と検討する。10月
- ③ 学生が構築した授業実践案について附属中学校担当教員と共に検討する。(大学教員、附属中学校担当教員)：11月
- ④ ③で検討した授業実践案を基に、附属中学校にて学生が授業を行う。(学生、大学教員、附

属中学校担当教員)：11月27日(月)・12月1日(金)

- ⑤ 授業実践を含めた教職実践演習全般の振り返りを通して、本取組の成果とこれからの教職における課題を協議する。(学生、大学教員)：12月5日(火)

なお、本授業はPBLで実施していることから、Moodleを用いて、各種資料の配付や課題の提示・提出、情報の共有などを行った。このことにより、学生が主体的に取り組める学修環境を整えた。

#### 【授業実践の概要】

本年度、以上の活動を学生は3つのグループに分かれ、それぞれ附属中学校で授業を行った。各グループが実践した授業での今日的課題と題材名、授業構想を以下に示す。

#### A グループ

##### 《今日的課題》

これからの変化の激しい時代を生き抜くことができる力を身に付ける。

##### 《題材名》

紙ストロー・プラスチックストローについて学ぼう

##### 《授業構想》

グループで設定した今日的課題は「これからの変化の激しい時代を生き抜く力を楽しみながら身に付けること」である。生徒にとって身近である給食の牛乳パックのプラスチックストローを取り上げ、どのような材料のストローを使うと良いか「環境面」

「経済面」「消費者面」の3観点を踏まえながら配付した資料やインターネットの情報を基に他者と協力しながら考える授業を構想した。つまり、班で協力してストローに使う材料の特性や社会・環境に与える影響を調べ話し合うことが「他者との協力」、プラスチックが持つ問題を踏まえてどのような材料のストローを使うと良いか理由を含めて決断する活動が「課題に取り組もうとする姿勢の育成」に当たると考えた。また、生徒にとって身近である牛乳パックのストローを取り上げたこと、そして発表シートに得た情報を付箋で貼っていき班としての意見をまとめていく活動が楽しい授業に繋がるのではないかと考えた。

## B グループ

### 《今日的課題》

限られた時間の中で誰一人取り残さない教育の達成

### 《題材名》

ネットワークを用いた双方向性のあるプログラミングの演習

### 《授業構想》

グループでの構想では課題を達成するための方法として、グループを作り、すぐに聞き合える環境を作ることを考えた。そして、授業案としては通常の授業より少し難しい課題を設定し、全員が達成するための支援や、全員が取り組むことができる手法について話し合った。具体的には全員が達成をしつつもできる生徒が飽きない、深められる課題の設定や、教材研究を進め、生徒が自主的に行えるようなマニュアルの作成、短時間でチャットを行っている仕組みを理解するための方法について考えた。また、講義での検討から、全員が課題に対して十分に取り組み、理解を促す方法である、発表と発表者の教員の指名という方法について学んだ。

## C グループ

### 《今日的課題》

学子どもたちの生活を結び付け、子どもたちの未来に繋げる技術の授業

### 《題材名》

めざせ エネルギーマスター！！

### 《授業構想》

グループで考えた今日的課題は技術の授業が自分たちにとって身近なものだと考えている子どもたちが少ないということである。そこから私たちは「子どもたちの生活を結び付け、子どもたちの未来に繋げる技術の授業」を、エネルギーマスターゲーム（略してエネスター）を扱った授業展開をすることで課題解決することに決めた。エネルギーゲームを通して、発電に関する問題と自分の普段の生活との関連を考えられるようになると考えられる。また、発電に関することだけではなく環境問題などの他の社会問題に関して自分自身で問題意識を持ち、その問題について自分なりの意見を持てるようになると考える。ゲームのマスの内容はS+3Eの視点でつくられているため、政府がどのような意図をもって今後の発電を計画しているのかを理解できるとともにそれに対して最後の発問、「2030年の目標に賛成か反対か」を問うて考えさせることで自分自身の考えを持つことができるようにする。エネルギーゲームを通して、子どもたちがそれぞれの発電方法の特徴を理解し、それについてゲームをしながら話し合ったり、自分自身が直面した問題やニュースなどで目にしたことなどを思い出して発言したり、ゲームを通してこれからの日本のエネルギー問題について考えるなど、日本のエネルギー問題を自分事として考えることができれば仮説は検証できたと言える。検証方法はアンケート調査で行うものとする。

### 【学生の振り返り】

#### OAグループ学生の振り返り

・授業を受ける生徒がどう感じるのかという生徒の目線に立つことを忘れてはならないと改めて学んだ。教師の独りよがりの授業にならないように、そして教材研究をしっかりと行うという当たり前のことを再確認できた。授業実践の内容は本番までに二転三転してきたが、中心となる今日的課題を意識しながら周囲の意見やアドバイスを取り入れつつ、どのような教材、授業内容が生徒にとって良いものなのかグループで何度も話し合うことができたのではないかなと思う。グループで1つの授業を考えることの難しさを感じた。必ずしも全

員が同じ意見を持っているわけではなく、全員の意見を寄せ集めて1つの方向性に決めることは大変だったが、そこで大切なのは対話の積み重ねであると学んだ。何を生徒に伝えたいのか、身に付けさせたいのか共通の認識を持ちながら、自分の考えを伝えながらもメンバー個人の考えも理解し、異なる意見をすりすり合わせていくことでよりよい決定をしていくことができるのだと実感できた。どの職業でも他者と協力して仕事を進め、様々な人々と関わりをもちながら働く。相手の目線に立つこと、意見を尊重し合い対話を重ねることがこれからの私にとって大事なことだと感じた。

- ・今後教職の道には進まないのですが、営業職に進むためこれからも人前に出て話したり、何かを伝えたりする機会が比較的多くあると思います。そのため、今回の授業、そして3年時の教育実習は人前に立つとても良い経験であったと思います。また、今回は自分たちの教材研究が至らなかったことが原因でもあるのですが、何度も指導案や資料、授業内で使うパワーポイントをグループで話し合っ、作り直していました。このグループで話し合っ、作り直してより良いものをつくりあげようとする取り組みはこの授業を通して得ることができたかけがえのない経験であると思います。
- ・教職実践演習では、他者と協力して一つのものを作っていくことの難しさを学んだ。それぞれの考えを上手く組み合わせることがとても難しかった。一人で作るよりも、大変で時間がかかることを学んだので、これからの社会生活で、他者と協力して一つのものを作っていく際には、積極的に話し合い、時間に余裕を持たせて物事を進めていくこと、念入りな準備をすることを心がけたいと思った。また、人に頼ることも大事だということも学ぶことができた。私たちの班は、実践の授業案にとっても苦戦した。どのような活動を入れて、どのようなことを学ばせたら良いのか、分からず自分たちの考えに自信が持てなくなる時があった。その時に、他の班の人から声をかけてもら

った。私達の班は他の班よりも授業実践の日が遅く、早く終えた班の人が授業案について相談に乗ってくれた。そのこともあって、何とか授業実践の日までに授業を完成させることができ、授業後の反省会では山城先生にお褒めの言葉を頂くことができた。この経験をしたことで、自分たちの悩みを他者に相談することの大切さを改めて実感した。これからの社会生活でも、分からなかったり悩んだりすることがあれば、一人で抱え込まず人に相談することも心がけていきたいなと思った。

### ○Bグループ学生の振り返り

- ・まず、分かりやすい資料作りの難しさを感じた。今回の授業ではスモウルビーに関する、スクラッチと異なる操作についてマニュアルの作成を行ったが、それぞれの説明や、読み進めやすさ、理解のしやすさ等と様々な点で課題があったと考えた。また、進め方について作成した一方で、トラブルやエラーが有った時の対処法などもあるとより分かりやすくなると考えた。そして、人へと分かりやすく伝えるための方法について考える必要があると思った。次に、細かな確認の徹底が必要だと考えた。授業で、1回目ではアンケートの設定に関して、2回目ではGoogle ドライブがアプリとして入っているときのIpadの動きが予想できていなかったことなどから生徒が戸惑う場面が有り、今後このような細かなことからの徹底が必要だと考えた。また、これら以外に行うべきことに素早く取り組むことが必要だと考えた。
- ・成果は、軸がぶれていることに気付くにくいという自分の一側面を知れたことで、課題は、目標が本当に適切か考えること、である。今回、最初に誰一人取り残さないという授業課題を決めて取り組みをスタートしたのに、授業内容の細かいことを考えていくうちにその細かいことに気をとられて、最初の課題がおざなりになってしまうことがあった。細かい所に集中して道がそれてしまわないよう、たまには全体を見ることも必要だと思った。また、細かいところに気をとられていることに気付く全体を見るきっかけになるのは他人からの意見を聞いた時が多かった。人からのアドバイ

スを参考にするという意味でももちろんだが、それだけでなく、自分の視点を切り替えるためにも人から意見をもらうことは大切だと思った。また、授業実践の振り返りで、そもそもテーマに無理がある、という意見をいただいた。達成できる可能性が0ではないにしても、例えばもう少し細かく段階を踏めるように小さい目標から始めるなど、目標自体が適切かどうかを考えることも大切だと学んだ。今後の社会生活でも、この授業や4年間で理解・経験したことを活かしていきたい。

- 授業をする上で準備の大切さを実感した。1回目の授業での反省は机間指導の際に、どの視点で見えていくのか、どうヒントを与えていくのかをあまり決めて授業に臨めていなかった。その反省を生かして、机間指導の視点を決めて指導に臨んだ。また、1回目のクラスでできたことを当たり前他のクラスでもできると思い込んでしまい、最初のチャットを作ることで多くの生徒が躓いていた。決めつけずに、授業に臨み、そこの指導の仕方を怠ってしまった。逆に良かったなと思った点は、自分は机間指導の時に、できない子を教えるよりも、先にできる子を見つけて、その子が理解することで、ほかの子へと理解を繋いでいけると思い、そのような判断をした。もう一点は、最初のチャットを作る時に、バラバラのブロックを生徒にQRコードを配る予定だったが、上手くできないことを想定して、紙の媒体も用意して、実際にできないことがあったので、紙を用意していたよかったと思った。

### OCグループ学生の振り返り

- 私は教職実践演習全般を通して自分の苦手を克服ができたように思う。私は教育実習で導入を考えることがとても苦手だった。児童・生徒を引き付けるためにとりあえず楽しいことを提供できればいいと考えていた。しかしいつかの授業で魚住先生の「若さを強みにした授業ではいつか子どもたちの意欲が下がる時がある」というような言葉を聴いて、いい導入とは何なのか、面白い授業とは何かを一生懸命検討した。またメンバーの辻さ

ん、人見さんと話し合いを重ね、新しい意見や考え方を吸収もしながら、今回は私の苦手である導入を担うことになった。今回の授業ではエネルギーゲームをエネルギー問題に対する危機感を持った状態で取り組んでほしかった。なのでアンケートの結果を提示し子どもたちに「このままだとやばいかもかもしれない」と思ってもらえるような導入を行った。教員採用試験の2次試験の模擬授業で導入の練習をたくさんしたこともあり、話すスピード、話し方、目線など今の私なりの力を出し切ることが出来たと思う。導入の時間は短かったが、1時間を質のある授業にするために欠かせない導入にしたかったので自分自身にとってもとても濃い導入となったと感じた。課題としてはやはり発問づくりに関してである。今回も目標はとにかく自分事として考えることであつたが、「今後のエネルギー問題はどのようにしていくべきか？」と発問をしてしまうとどうしても「授業の中のただの質問」ととらえられてしまいがちであると思った。辻さんと人見さんとたくさん考え最終的には「2021年と2030年の電源構成のグラフを比べてこの目標に賛成か反対か（理由とともに）」を問う発問とした。賛成か反対かを考えることで自然と自分の考えを持つことができるようになることを目指した発問であつた。この発問を考えるためにはたくさんの教材研究を行い、さらに目標などをはっきりさせておく必要がある。来年からはこれらを全て自分1人で行わなければいけない。限られた時間の中で子どもたちが目標の姿になることができるような発問を考えることが今後の大きな課題であるなと思った。

- 私は小さい頃から子どもたちを笑顔にしたいという思いがある。そのため、この授業で学んだ子どもたちについて考えることをこれからの未来でもいかしていきたい。子どもについて考えれば考えるほど、より良いものになっていく。考える時は、その方法だからもてる視点や子どもの立場になって考えることを大切にしたい。自分は将来も子どものためにできることを探して挑戦していく。そこでは、限られた時間しかない場合もあ

る。そのような限られた時間でも全力で子どもたちを笑顔にするものを作りたい。また、これからも自分に合った子どもたちを笑顔にできる方法を探していきたいと思う。

- ・今回の授業実践を通して、何人かで意見交換しながら、何を生徒に学ばせたいのか、授業を通して生徒がどのような姿に成長してほしいのか、導入・発問はどうするかなどをしっかり考えて授業を作っていくことが大切だと感じた。1人で授業を作ってしまうと視点が偏ってしまうが、何人かの様々な視点から授業を検討していくことでより良い授業を作っていけるのだと学んだ。また、資料作りの重要性を感じた。教員からの説明の時間を少なくし、生徒が考えて議論する時間を増やすためには、資料を充実させることが必要だと分かった。今回は資料が少し多かったように感じたため、生徒たちにとって必要な情報のみをもっと厳選して載せていくことが課題であり、その資料を読み取って話し合いができるような力を生徒たちにつけさせていきたいと感じた。また、生徒は1

人1台タブレットを持っているため、気になったことは生徒自身で調べさせても良いと思った。今回の授業実践を生かして、今後も授業を作っていきたい。

#### 【成果と課題】

本取組も昨年度に続き、今年で6年目であることから、附属中学校と連携を円滑に進めることでできた。生徒においては授業を行う学生とは初対面ではあったにも拘らず、とても熱心に授業に取り組み、本教科への関心・意欲を高めることができたようだ。また、教職を目指す学生においては、本活動をとおして本教科における今日的課題に真摯に向き合うことで、今後の教職での課題を明確に把握できたと思われる。ただ、残念ながら、教職以外の職に就く学生においては、卒業のための単位修得が目的となり、本授業の趣旨を理解していない学生の行動・姿が見受けられた。来年度以降、検討する必要がある。最後に、本授業実践を受け入れていただいた附属中学校の先生方には心より感謝も申し上げます。

## 7. 家政教育講座

本年度、家政教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 附属小学校教員からの小学生参加イベント（料理教室）への助言
2. 附属中学校での家庭科での実践研究（調理実験，家計管理，パートナーシップ）
3. 附属小学校および中学校での授業研究（被服製作実習）
4. 附属小学校および中学校での共同研究
5. 教職実践演習における家庭科についての授業
6. 附属幼稚園での保育体験活動を通じた触れ合い
7. 附属中学校における総合的な学習の時間の授業支援

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 附属小学校教員からの小学生参加イベント（料理教室）への助言

（活動担当者名：平島円）

#### 【目的】

家政教育コースで開講しているキャリア教育入門および教育実地研究では、小学生が参加するイベントを企画・運営し、イベント当日には子どもたちと触れ合うことにより、学生の子どもも理解、教材研究、指導力向上を目指している。また、授業履修者以外の家政教育コースの学生も参加した。

#### 【概要と成果，課題】

##### 1. 授業科目名

キャリア教育入門（通年集中）

教育実地研究（通年集中）

指導教員：平島円

##### 2. 実施日

令和5年8月初旬、10月9日

##### 3. 参加人数および学年

4年生6名、3年生2名、2年生12名、

1年生12名、教員3名

##### 4. 活動の内容

『米粉でまっ茶蒸しパンとクッキー作り！～お米との暮らしを守るために！～』というテーマで、小学校3・4年生24名を対象に、料理教室イベントを10月9日に開催した。このイベントは、子どもたちが米について学べる調理，レクリエーションや

解説をする活動であった。イベントの企画途中の8月初旬に、附属小学校の堀切先生にイベント企画についてのご意見をうかがった。また、イベント当日の10月9日には、ご参加いただき、学生の様子を見て、子どもたちへの接し方についてのアドバイスをいただいた。

#### 【成果と課題】

イベントの企画を担当した2年生は、子どもの技能や知識にあうように、調理方法，レクリエーションや解説などを工夫して企画していた。しかし、教育実習に行く前の1・2年生にとっては、子どもたちの目線で考えることや、子どもたちにわかりやすく話をすることが難しく、どうしても学校での授業のようになってしまっていた。堀切先生から、具体的な資料の提示方法、強調すべき内容や話し方などの助言をいただいた。その後、子どもたちは学びながら楽しめるイベントに改善した。また、イベント当日には、子どもたちがどのように感じたのか、子どもと接する機会をもつことでの学生が成長することなどのお話をしていただき、今後の教育実習につながる課題についてもご助言いただいた。

4年生も1・2年生への助言者として参加している企画ではあるが、1・2年生の考えをくみ取り、

的確な指示を出すことは難しい。このような状況下で附属小学校の先生から助言をいただくことでより良いイベントにすることができた。

#### 【学生の感想】

10月9日に教育実地研究の一環で小学3・4年生向けの料理教室を開催しました。2月下旬から企画を練り、8月に附属小学校の堀切先生に企画へのアドバイスをいただきました。その内容は、「子どもが活動しやすいように学生の配置や準備物を工夫すべき」、「子どもが残念な気持ちにならない

よう配慮すべき」などで、私達では気付かない現場で児童たちと関わっているからこそその見方が多くありました。いただいたアドバイスを基に、より子どもたちが活動しやすく、楽しさを感じられるイベントになるよう工夫を重ねました。イベントは成功に終わり、保護者の方から感謝の言葉もいただきました。私達は、子どもたちと関わることの楽しさや、責任を感じることができました。

(担当学生名：NM)

## 2. 附属中学校での家庭科での実践研究（調理実験、パートナーシップに関する研究）

(活動担当者：瀧日 滋野、村田 晋太郎)

#### 【調理実験に関する研究の目的】

中学校家庭科において、調理実習で作る料理に直接関連する調理実験を行い、調理実験の在り方について検討することを目的としている。

#### 【概要と成果、課題】

附属中学校において、第2学年4クラスの生徒を対象とし、2023年11月下旬から12月下旬に実施した。授業の題材は「魚を美味しく食べるためにはどうすればいい？」であり、魚の特徴や調理に関する知識や技術の習得や実生活に活かす力の定着を図った。魚の臭みとり実験を調理実習（サバのみそ煮）の前に実施したクラス(以下、実験前クラス)と、実験を調理実習の後に実施したクラス(以下、実験後クラス)に分け、実験前と実験後の調理実験の効果の比較を行い、それらを踏まえて調理実験のあり方について検討した。

#### (授業の概要)

題材に入る前に事前アンケートを実施した。実験前群の授業展開は、第1時に魚についての講義、第2時に調理実験と調理実習、第3時にパフォーマンス課題と事後アンケートを実施した。実験後群は、第1時に魚についての講義、第2時に調理実習、第3時にパフォーマンス課題、事後アンケートの順に進め、その後に調理実験を実施した。

調理実験は、生のサバの切り身を①水のみ、②水と塩、③水とみそ、④水とみそと酒で煮た4種のサバの魚臭と食べた時の味を比較する実験であった。

パフォーマンス課題を実施し、実験での臭みとりの観点を、どのように活かして解決してくるかを見た。また、この課題は、冬休みに実践してくることを求めた。

調理実習の前に実験をしているか否かによって、調理に対する科学的理解の興味や意識の向上に差は見られなかった。しかし、調理実験をすることで、魚の臭みを取るの意味や理解を深めていたこと、実際にパフォーマンス課題に魚の臭み取りを取り入れて解決を図っていたことから、調理実習の前に、実習内容に関連した調理実験を行うことの意義が示された。しかし、実験前クラスの結果から、調理実験の考察を深める時間をしっかりとる必要性が明らかになった。少ない家庭科の授業時間数で、深い学びへとつなげるための工夫が今後の課題である。

#### 【学生の感想】

今回の実践を通して、教材研究の大切さや授業の目的をしっかり決めておくことの大切さを感じました。調理実験を行うことで、生徒が実験結果と関連させながら考えて調理実習を行っている様子を見

て、喜びを感じたと共に、深い学びへつなげるためには改善する部分が多くあることに気付かされました。教育現場でより良い授業を行えるように、今回の体験を生かして積極的に実験を取り入れた家庭科の授業を実践していきたいです。

(担当学生名：CW)

#### 【パートナーシップに関する研究目的】

日本では、性役割の意識が根強く残っており、法律上同性婚は認められていない。主要7カ国の中でも同性婚が認められていないのは日本だけである。また諸外国を見ると、セクシャルマイノリティであることで罰則を受けなければならない法律を持つ国もある。この研究では、中学生に対して、日本と諸

外国のパートナーシップについて理解させ、自分事としてこの現状を捉えることができる授業を開発し、学習効果を検証することが目的である。

#### 【概要と成果、課題】

授業前に比べて、授業後の方が、パートナーシップに関する知識の理解が高まった。また、日本の現状に対する問題意識も高まった。今後この現状を改善したいと考える生徒も増え、日本のパートナーシップに関する状況に対する当事者意識が芽生えたとと言える。この授業は、パートナーシップに関する現状を理解し、この現状を自分事として捉えることができる点において効果的であったと言える。

### 3. 附属小学校および中学校での授業研究（被服製作実習）

(活動担当者氏名：横山真智子)

#### 【目的】

附属小学校と附属中学校の家庭科教員とともに、被服製作に関する授業において児童生徒の学習に役立つ教材及び題材を開発し、その活用実態に応じて改善を図りながら、効果的な指導のあり方について検討することを目的とする。

#### 【概要と成果、課題】

(附属中学校)

2023年10月～12月にかけて、布の特徴を調べる実験1時間と、伝統的綿織物を用いたTシャツの製作実習5時間の授業を計画した。実施にあたって、実物見本や手順に沿った標本、大型モニターや生徒の端末で視聴可能なスライドおよび動画の製作を行った。また、授業前後のミシン縫い等の知識・理解の定着度と生活意識の変容を比較するため、アンケート調査を実施した。

授業実践前は、「わき」を縫ってからそで口を「わ」にして縫う手順を計画していたが、家庭科教員と検討し生徒の実態を鑑み、先に平面のままそで口を縫い、その後「わき」を縫い合わせる手順へと変更した。

授業実践の結果、ミシンを用いた製作に関する基礎的な知識や技能の向上が確認された。また自由記

述の分析から、生徒たちは1枚の布からシャツを製作したことの達成感や喜びを感じていたことが明らかとなった。生活意識については、「アイロンを自分でかける」「選択の表示を見て買う」「フェアトレードの商品を選びたいと思う」「環境問題を解決するには、自分の買い物の仕方を変える必要があると思う」が上昇するなど、一定の効果が見られた。課題としては、事前に制作した動画のデータのネットワークの容量不足により、生徒に個別配付できず、十分に効果を検証できなかったことである。今後は一斉配付が可能な教材となるよう圧縮するなどし、活用効果を検証したい。また、曲線部分の困難さを軽減するTシャツの構成や製作手順について継続して検討していきたい。

(附属小学校)

2023年12月7日の5・6時間目に附属小学校6年C組の家庭科の授業を3年生3名の学生と参観した。「目的にあったふくろの製作」に向けて、前時までに新聞紙で試作したかばんの型紙をつくり、製作計画を立てる授業であった。当日までに、家庭科教員の助言を受けながら、ひもの長さやひものつけ方が異なる3種類の手さげタイプの袋と、「まち」の異なる見本を4種類製作した。また、くつ袋、給食袋

などを想定した巾着型の袋見本を提供した。授業において、ゆとりや縫いしろなどを考慮して寸法や手順を決める際に、具体物があることで児童はイメージをもちやすく思考を働かせる様子が見えた。

目的に沿った袋の計画の授業における教材を製作し、実際の授業において児童の活用する様子を参観したことで、学生たちは教材の効果や改善点を考えることができた。

#### 4. 小中学校家庭科に関する共同研究

(活動担当者：村田晋太郎・瀧日滋野)

##### 【目的】

附属小学校、附属中学校の家庭科教員と連携して、子どもの生活実践へとつながる新規性のある授業デザインについて検討することを目的としている。

##### 【概要と成果、課題】

定期的に参加メンバーで授業検討会を開き、授業デザイン、授業実践および振り返りを実施した。検討した授業は、小学6年生の衣生活、食生活、環境、中学2年生の消費生活であった。

今年度は、生活実践へとつながる新規性のある授業をデザインすること、小学校家庭科と中学校家庭科の連携を図ることで家庭科の授業を多角的に検討し系統性を持たせること、を目指して進めてきた。生活実践へとつながる新規性のある授業については、常に実生活を意識させる課題設定や解決を授業で行

い、最終的に家庭での実践までつながった授業がデザインできた。新規性については、私服で授業を受けて体感的な涼しさの検証、プログラミング的思考による調理実践とその改善、中学生が考えるひとり暮らしの家計管理など、これまで実践報告のないオリジナリティある授業を実施することができた。児童・生徒から、自分事として生活と結びつけながら、課題発見や解決に向けて取り組む姿が見られた。一方で、個別性をどこまで考慮しながら全体の授業を展開するかについては、今後検討する必要がある。小学校、中学校には家庭科教員は1名ずつであるが、これまで以上に連携回数を増やして研究することで、それぞれの立場から意見交換ができた。しかし、小学校から中学校への系統的な学びのデザインについては十分に検討できなかったため、引き続き検討を重ねていきたい。

#### 5. 教職実践演習での講話

(活動担当者：平島円，村田晋太郎，横山真智子，瀧日滋野)

##### 【目的】

教員養成の学びの集大成として位置づけられている教職実践演習において、家政教育コースでは、附属小学校、附属中学校の家庭科教員と連携して進めてきている。今年度は、小学校、中学校の教育現場の現状と児童・生徒対応の実際に関する講和の聴講とグループワークを通して、学生に確かな実践的指導力の形成を促すことを目的としている。

##### 【概要と成果、課題】

家政教育コース4年生に対して、附属小学校、

附属中学校の家庭科教員から、それぞれ90分ずつ、児童・生徒指導、進路指導、学級経営、学年経営、教科指導について説明いただいた。

小学校、中学校それぞれの発達段階に応じた事例を取り上げ、グループワークを中心に指導方法や課題解決について考えた。小学校、中学校それぞれの発達段階に応じた事例を取り上げ、グループワークを中心に指導方法や課題解決について考えた。学生からは、これまでの教職に関する学びや経験を生かした提案や考えが出され、多角的に検討することがで

きていた。また、それらの意見に対して、家庭科教員から共感も得られたり、新たな知見・助言をもらったりしながら、充実した時間となった。

#### 【学生の感想】

事例から「何が問題なのか」「自分ならどう解決するか」をグループで話し合いながら考えた。クラス内でのトラブルや児童会の取り組みなど、これから自分も直面する可能性のある内容について班ごとに様々な意見が出て、とても参考になった。ベテランの先生も、はじめのころは分からないなりに模索して、「子どもと向き合おう」という気持ちを持って進んできたのだとわかって、自分も頑張ってみよ

うと感じた。

(担当学生名：WO)

学校では、保護者や先生方など関わる人は多いが、生徒の気持ちをしっかりと聞いて生徒の意思を尊重することが大切だと思った。しかし何か問題が起こった時には、自分だけで判断するのではなく周りに頼ることも重要と知った。同じような事例であっても正解はなく、その子に合った方法を見つけていかないといけないので、1人1人としてしっかり向き合っていきたい。

(担当学生名：CW)

## 6. 附属幼稚園での保育体験活動を通じた触れ合い

(活動担当者：瀧日滋野)

#### 【目的】

附属幼稚園で毎年開催されているカレーパーティーに参加し、カレー作りの支援や遊びを通して幼児と触れ合うことを目的としている。

#### 【概要と成果、課題】

附属幼稚園では、年長児がカレーを作り、卒園児である小学1年生を招待して一緒に味わうカレーパーティーが実施されている。学生は、家政教育コースで学んだ調理の基礎や幼児に関する知識を活かしてカレー作りのサポートと遊びを行った。具体的には、野菜を洗う、野菜を切る、煮込む、ルーを入れる、盛り付ける、であった。カレーパーティーの後に、園庭や教室で年長児と遊んだ

子どもたちが体験することを大切にし、安全に楽しく調理ができるよう関わり方を学生各々が工夫していた。そのため、子どもたちは、慣れない手つきでも一生懸命楽しみながら取り組んでいた。半日間一緒に過ごすことで、子どもたちの表現力の豊かさ

に触れ、時にはこだわりの強さを実感しながら、子どもの発達の特徴について体験を通して理解することができた。また、触れ合い後の振り返りから、感情を素直に表してくれる子どもたちの姿に、教員を目指して学ぶ意欲も高まった様子が伝わった。

#### 【学生の感想】

子どもたちは初めてと思えないほどフレンドリーに話しかけてくれました。事前打ち合わせの日に一度会ったことを覚えていてくれて、子どもの記憶力の凄さに驚きました。子どもは自分中心の話し方や行動が多く、幼児の特徴を実感することができました。また、順番を守ったり、できるまで待っていたり、大人が伝えたことを受け止めている年長さんの姿に感心しました。

(担当学生名：CI)

## 7. 附属中学校における総合的な学習の時間の授業支援

(活動担当者氏名：村田晋太郎、市川俊介、水藤弘吏、瀧日滋野、横山真智子)

### 【目的】

大学教員による自身の専門分野を反映した「研究とは何か」「良い研究問いの立て方」というテーマの教育動画の制作と、これを基にした中学生向け問いだてワークショップの実施が中心となる。この活動は、生徒の探究心を刺激し、学問に対する理解と興味を深めることを目指す。

### 【概要と成果，課題】

本連携活動では、大学教員が研究分野に基づいて制作した教育動画を用いて、附属中学校の生徒に研究の本質と研究問いの重要性に関する知識を提供した。動画は、科学的手法の基礎か

ら具体的な研究例、問い立ての技術まで、生徒が理解しやすい形で構成されている。動画視聴後、生徒は自身の興味から問いを立て、ワークショップで研究計画の概要作成に挑戦した。

ワークショップでは、生徒がグループ分けされ、それぞれの問いについて討議し、その問いに答える方法を模索した。大学教員がサポート役として参加し、生徒の思考プロセスを促進した。この過程で、生徒は研究を進める上でのスキル、例えば問いの深掘りや情報収集法、実験計画の立案法を学んだ。大学と附属中学校間の教育内容の充実による有益な交流が確認され、継続的な連携の可能性が期待される。

## 8. 英語教育講座

本年度、英語教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

### 1. 三重大学教育学部附属幼稚園における英語にふれる活動

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 三重大学教育学部附属幼稚園における英語での絵本の読み聞かせと世界の国旗

(担当：中川右也)

#### 【目的】

5歳児の年長園児が楽しみながら英語に慣れ親しむこと、そして英語教育コースの学生は、実践を通じて英語での活動を設計する方法や理論を身につけることを目的とした。

#### 【概要と成果】

2024年1月17日と2024年2月20日に、三重大学教育学部附属幼稚園の5歳児年長を対象に、「英語の絵本を聞いて、読んで、歌って、作ってみよう！」と「世界にはどんな国があるのかな？：英語で学ぶ世界の国旗」という2つの英語活動を実施した。

2023年1月17日の「英語の絵本を聞いて、読んで、歌って、作ってみよう！」の活動には、三重大学教育学部英語教育コースの1年生（10名）が参加し、2024年2月20日の「世界にはどんな国があるのかな？：英語で学ぶ世界の国旗」には2年生（5名）が参加した。

「英語の絵本を聞いて、読んで、歌って、作ってみよう！」の活動では、まず絵本を英語で読み聞かせ、その後学生と共に読み進め、最後にギターの生演奏に合わせて歌う内容であった。後半では、園児がそれぞれの絵本を制作し、友達に内容を伝える表現活動も行われた。



『世界にはどんな国があるのかな？：英語で学ぶ世界の国旗』の活動では、世界の国旗を通して、国旗に使われている身近な色や動物などを英語で確認した後、最後に自分の国旗を作るという内容であった。



上記の2つの活動を実践するために、学生は教材作成から計画を立てながら、事前に練習を何度も繰り返した。その結果、活動当日は、その練習の成果を活かしながら、園児に寄り添い支援することができ、大きな成果を得ることができた。言語材料は、園児にとって身近なものを中心にし、英語がわからない場合に備えて、どのように伝えればよいか、創意工夫を凝らす必要性を学生たちは気付くことができた。さらに、園児が楽しく英語を学ぶには、どうしたらよいか、といった英語

教育の本質的な問題にも目が向けられるようになったことが大きな成果の1つである。

**【謝辞】**

英語教育コースの学生に、貴重な実践の場の提供を賜りました三重大学教育学部附属幼稚園の先生方に心より感謝申し上げます。

## 9. 幼児教育

本年度、幼児教育講座で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 南立誠幼稚園における「未就園児の会」
2. 附属幼稚園における「未就園児の会 コアラの会」
3. 附属幼稚園における「よるのようちえん」
4. 附属幼稚園における「ペープサート劇の公演」
5. 附属幼稚園における「親子活動」
6. 附属特別支援学校小学部における「みんなであそぼうの時間」

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 南立誠幼稚園における「未就園児の会」

(担当者：水津幸恵)

#### 【目的】

幼稚園における未就園児の会を運営することを通して、子育て支援事業や就園前の子どもおよび親子についての理解を深める。未就園児が楽しめる遊びや活動を、園の先生方や地域のボランティアの方と相談・振り返りを繰り返しながら継続して計画・実践することを通して、実践力を養う。

#### 【概要と成果、課題】

幼稚園が子育て支援の一環として実施する「未就園児の会」の計画・実践を1年間行った。実施メンバーは、園長、民生委員、地域ボランティアの方、幼児教育コース4年生10名（前半5名、後半5名）であった。幼児教育コースの学生は、授業「教育実地研究」として、先に述べた目的のもと活動内容の計画と実践に取り組んだ。活動内容は下記の表の通りである。

回	月 日	テーマ
1	5月18日	親子で遊ぼう
2	6月6日	風船で遊ぼう
3	10月19日	秋を感じよう
4	10月26日	ハロウィンを楽しもう
5	11月9日	おへやで体を動かそう
6	11月30日	新聞紙で遊ぼう

7	12月14日	クリスマスを楽しもう
8	1月25日	ありがとう！またね。

各回とも、自由遊び30分、全体活動を30分の計1時間程度行った。自由遊びでは、季節や育ちに  
応じた制作コーナーを準備するなどした。全体活動  
では、手遊び、ふれあい遊び、絵本の読み聞かせ、  
リズム遊び、風船遊び、スケッチブックシアターな  
どを実践した。活動終了後は、園の先生方、地域・  
保護者のボランティアの方と毎回振り返りを行い、  
次回の活動の改善につなげた。

#### 【学生の感想】

学生1 (TY) 未就園児の子どもたちとのかかわり  
なので、子どもたちが安心して楽しめて、親子で楽  
しく活動できることを軸に実践を考えました。実践  
を行ってみて感じたことは、子どもの発達年齢によ  
って楽しいと感じるものや興味関心をもつものは異  
なるということです。実際、私たちが思いつかない  
側面から「楽しい」を見出して遊ぶ子どもたちの姿  
に何度も驚かされました。そのため、子ども一人一  
人の姿を丁寧に読み取り、その子に合った遊びの環  
境をつくることの重要性について学ぶことができました。また、子どもたちが安全に遊ぶための環境構  
成や全体活動での遊びへの繋ぎ方など活動の中で多

く学ぶことができ、今後の実践に生かしたいです。学生（IM）異年齢保育の中で、どの年齢の子も楽しめるような遊びを準備するのが難しかったです。同じ1つの遊びでも発達年齢によって楽しみ方が異なることに配慮し、子どもの姿を想像しながら準備することが大切なのだと学びました。準備においては全員が意見を出し合いながら教材研究を行い、より子どもにとって安全で楽しく遊べるものになって

いくことが感じられ、保育者同士の連携の大切さを改めて知りました。そして、保護者の方が家庭では見られない子どもの新たな姿に驚いたり、嬉しそうに笑っている様子が印象に残りました。私が保育現場に出たら、保護者の方へ園での子どもの様子を丁寧に伝えていこうと思いました。

（担当学生：幼児教育コース4年生10名）

## 2. 附属幼稚園における「未就園児の会 コアラの会」

（担当者：富田昌平）

### 【目的】

幼児教育コースで2年次後期に開講されている「子どもの理解と援助」と「子育て支援」では、附属幼稚園の未就園児の会「コアラの会」での実践を通して、乳幼児の心理及び発達理解をふまえた保育実践（絵本、紙芝居、手遊び、ふれあい遊び、劇、歌、ダンスなど）に関する基本的な知識と技能、及び、子育て中の保護者への理解や支援に関する基本的な知識と技能を体験的に学ぶことを目的としている。

### 【概要】

コアラの会には、近隣に居住する就園前の幼児とその親25組が参加し、月1~2回のペースで実施している。運営スタッフは、幼稚園教員、地域ボランティア、保護者ボランティア、そして幼児教育コースの教員と学生たちである。授業では、見学を含む全8回に参加し、全体での遊び・活動の企画・運営を担当した。

回	月 日	テーマ
1	10月3日	とんぼをつくって遊ぼう
2	10月17日	スタンプングを楽しもう
3	11月7日	マラカスをつくろう
4	11月21日	粘土で遊ぼう
5	12月19日	クリスマス会を楽しもう
6	1月16日	凧をつくって遊ぼう
7	1月30日	新聞紙で遊ぼう

8	2月6日	今日はお別れ会
---	------	---------

学生たちは、コアラの会がない日は学内に集まり、実践の計画・準備及びふりかえりを行った。ふりかえりの時間は、実践終了後すぐに運営スタッフ全員で行うものと、1週間後に学内に戻って記録されたビデオ映像を視聴しながら行うものとの2回である。それにより、次の実践に向けての課題や反省をより明確化するとともに、学生間による問題意識の共有化を図った。例えば、11月21日に行われた実践は以下の通りである。

- ・うた「はじまるよ」
- ・手遊び「パンダウサギコアラ」
- ・ふれあい遊び「ひつつきもつつき」
- ・紙芝居「ばけばけどーん」
- ・うた「おわりだよ またね」

### 【成果と課題】

学生たちは、最初は子どもや保護者にどのように接してよいかわからず、戸惑ったり緊張したりなど消極的な姿が見られた。しかし、子どものことをよく見て、子どもの興味や欲求がどこにあるのか、その行動にはどのような意味があるのかを自分なりに考えながらかわり、そのことを保護者と共有していくうちに、徐々に戸惑いや緊張もほぐれ、積極的な姿へと変わっていったように思う。経験を積み重ねるうちに子どもに対する理解も関係性も深まり、かわり方も学び、保護者との関係も徐々に構築して、最終回では手ごたえを

得ているような姿が確認された。

子どもに対する実践も、当初は一方的な計画に基づく一方的な遊びの提供や展開が目だったが、自ら実践したことで得ることができた気づきや発見、実践直後あるいは翌週のふりかえりの時間における反省を踏まえて、それらを次の実践の計画へと活かしていった。こうした実践と理論の

往還の積み重ねを通して、実践に対する知識や技能も深まり、実践の力量も高まって、最終的にはそれなりに納得のいく実践が行えるようになっていった。今後の実習に向けて、自信と課題が得られたと思われる。

(担当学生：幼児教育コース2年生11名)

### 3. 附属幼稚園における「よるのようちえん」

(担当者：富田昌平)

#### 【目的】

幼児教育コースの1年次前期の授業「キャリア教育入門」では、毎年、三重大学教育学部附属幼稚園で7月に開催されている「よるのようちえん」の遊びのコーナーの企画・運営を担当させてもらっている。授業を通して、幼児期の子どもの実際的な姿についての初歩的な理解を得るとともに、身近な環境と積極的・自発的にかかわる中で主体的な活動としての遊びが充実し展開していき、その経験を通して様々な人生に大切な意味を学ぶという幼児教育・保育の本質についての初歩的な理解を得ることを目的としている。

#### 【概要】

1年生11名で3, 4, 5歳児が楽しめる遊びのコーナーについて話し合い、アイデアを出し合った。附属幼稚園の先生とも相談し、最終的に次の3つのコーナーを設定することとした。また、当日は2年生11名が補助要員で参加した。

学生は3つのチームに分かれて、計画を立て、準備を進めた。実施日時は7月15日(土)の18時から19時20分頃であった。

ビリビリマイクをつくろう！	紙コップとアルミホイルで声を反響させるマイクを製作する遊び。
パイロットになろう！	紙皿で作ったフリスビー(表裏に飛行機の絵が描かれたもの)を的に向かって

	投げる遊び。
宝さがし	ちぎった新聞紙とスズラテープを敷き詰めたビニールプールの中から紙粘土で作った宝物を見つける遊び。

子どもの年齢によって遊び方やかわり方、進め方などを考えながら工夫した。

#### 【成果と課題】

遊びのコーナーは、いずれも場の設定の仕方や遊びを十分に楽しむための展開の仕方やかかわりの工夫などの点において、まだまだ課題が多く見られたが、初めての子ども向けの遊びの企画・運営を通して、子ども及び幼児教育についての初歩的な理解を得るという当初の目的はそれなりに達成できたように思われる。以下、学生による感想の一部である。

「よるのようちえんで遊びのコーナーを計画し、実際に実践してみて、やはり準備の段階で想定していたことと実際とは大きな差があることがわかった。特に、子どもの年齢によって製作できる範囲が大きく異なっていたことや、遊びの説明に対する理解度に違いがあったことなどが印象的で、各コーナーで子どもへの対応に苦戦した。子どもたちと実際にかかわって初めて分かることも多く、難しさも感じたが、子どもたちが自分で作ったビリビリマイクで歌を歌ったり、もら

ったライセンスカードやメダルを見せ合ったりしている姿を見て、大変さ以上にうれしさを感じ

た。この経験をこれからは活かしていきたい。」  
(担当学生：幼児教育コース1年生11名)

#### 4. 附属幼稚園でのペープサート劇の公演

(担当者：吉田真理子)

##### 【目的】

乳幼児期の子どもに向けて学生自身が実際に演劇を実施することを通して、言語的・造形的・音楽的表現に対する視座を高め、子どもの表現理解に役立てることを目的とした。またその際、題材となる絵本や昔話などの児童文化に関する知識を深めるとともに、子どもの反応を通して子どもの感性に触れることもねらいとした。

##### 【概要】

###### 1 授業科目名

表現ⅠA、表現ⅠB、表現ⅡB

###### 2 受講者数及び学年

前期は幼児教育コースの4年生全員(10名)と3年生全員(9名)であり、後期は3年生全員(9名)のみであった。

###### 3 公演時期、学生の担当時間数

(1) 前期 7/15：幼児教育コース4年生全員

絵本『パンどろぼう』(柴田ケイコ著)を題材に、週に1コマで半年間取り組んだ。

(2) 前期 7/15：幼児教育コース3年生全員

絵本『いっすんぼうし』(複数の出版社から抜粋)を題材に、週に1コマで半年間取り組んだ。

(3) 後期 1/24：幼児教育コース3年生全員

絵本『おしゃべりなたまごやき』(寺村輝夫著、長新太イラスト)を題材に、週に2コマで半年間取り組んだ。

###### 4 活動の内容

それぞれの題材となる絵本をもとに、各自の役割(①脚本班、②制作班、③音楽班、④演技、⑤照明、⑥黒子 ※役割は重複あり)を決め、劇づくりに取り組んだ。

当日までの活動内容として、①脚本では、劇に合うように、絵本のセリフや場面を考え直した。②制作では、段ボールなどの身近なものを使いながら、登場人物や背景を制作した。③音楽では、ドアの音などの効果音や暗転時の挿入歌などを考え、実際の楽器を使用したり録音したりしながら準備した。④声の配役を決め、当日までに抑揚などの言語表現を練習した。⑤場面に合わせながら照明の使い方を考えた。⑥スムーズな場面転換や登場人物のリアルな動きを考えて練習した。

当日の流れとして、前期は、4年生が3歳児に『パンどろぼう』、3歳児が4~5歳児に『いっすんぼうし』を披露した。後期は、3年生が3歳児に『いっすんぼうし』、4~5歳児に『おしゃべりなたまごやき』を実施した。

##### 【成果と課題】

『パンどろぼう』に関しては、どろぼうをするときや逃げるときにワクワク感をどうつくるかということに難しさを感じていたようだった。『いっすんぼうし』に関しては、主人公が苦難を乗り越える状況や鬼とたたかう迫力をつくることに難しさを感じていたようだった。『おしゃべりなたまごやき』は、題材となる絵本がシンプルだったので、それを劇にするときに付け加える要素が多くて苦労していた。

いずれの演目でも、当初の目的どおり、学生は子どもに伝わる表現の難しさを感じる機会になっていたが、それ以上に、学生同士で協力しながらやり遂げるというグループワークの難しさや楽しさを味わっていたようだった。

## 5. 附属幼稚園における「3歳児親子活動」

(担当：水津幸恵)

### 【目的】

附属幼稚園における3歳児親子活動の内容を計画・実践することを通して、保育実践に関する基本的な知識と技能を身に着ける。2年次後期の附属幼稚園での未就園児の会「コアラの会」での経験をもとに、3年次9月の幼稚園実習を見据えて、学生間で意見を出し合い、幼稚園の先生方に助言をいただきながら、協力して実践を行うことを経験する。

### 【概要と成果、課題】

2023年6月15日(木)に、附属幼稚園3歳児クラス(とり組10名、はな組10名、計20名)において、親子で触れ合って遊べる遊びを計画・実践した。幼児教育コースの3年生9名は、授業「幼児教育学」の一環として、先に述べた目的のもと活動内容の計画と実践に取り組んだ。当日の活動内容は以下の通りである。

ねらい：ねらい：親子でたっぷり触れ合ってゆったりと遊ぶ時間を楽しむ。身近な素材(ポリ袋)を使ってさまざまに遊ぶ面白さを感じる。	
時間	活動の流れ
10:30	○ダンス「ロケットペンギン」
10:40	○不思議なマントで変身しよう ・手をつないでジャンプなど ・動物に変身してふれあい遊び
10:50	休憩
10:55	○マントを使って遊ぼう ・親子で揺らしたりくっついたり離れたりする ・トンネルにしてくぐる
11:10	○大型絵本
11:20	終了

活動内容としては、子どもたちが普段の園生活の中で楽しんでいるダンスを楽しんだ後、45Lポリ袋を「不思議なマント」に見立て、身に着けて高くジ

ャンプしたり、さまざまな動物に変身して親子で触れ合い遊びをしたりした。また、ポリ袋の両端をもって揺らしたりくっついたり離れたりするなどの様々な動きを楽しんだり、ポリ袋をつなげて大きなトンネルをつくり、くぐって遊ぶことを楽しんだりした。最後に大型絵本の読み聞かせを行った。

### 【学生の感想】

学生の振り返りの一部を抜粋する。

・マントをつけての親子活動では、思っていた以上に、ジャンプすることを楽しむ姿が見られました。また、ハグをしたり、ハイタッチをしたりなど保護者の方と触れ合う活動や、ジャンプしたり走ったり、マントの下をくぐったりと体を動かすことを特に楽しんでいるなど感じました。保護者の方も、子どもたちの笑って楽しんでいる姿を見て、子どもと一緒に楽しんでいる様子が見られて良かったです。

・今回の親子活動では音楽をBGMとしてしか使用していませんでしたが、ロケットペンギンを楽しそうに踊る姿を見て、マントを付けてダンスを踊ったり、音楽に合わせて体を動かしたりする遊びも楽しんでもらえるのではないかなと考えました。また親子活動前日の実習の事前指導での保育参観では、先生のピアノの後に合わせて動物のまねっこ遊びをしている様子も見られたので、ピアノの高い音や低い音、速い、遅いなどメリハリをつけることで、もっと動物になりきって楽しむことができたかなと思いました。

・子どもたちとはかかわりながら活動していましたが、保護者の方ともっと会話していたらよかったですと感じました。子どもが楽しむ姿を保護者の方と共有するのも楽しい時間の一つになったのではと思いました。

(担当学生：幼児教育コース3年生10名)

## 6. 附属特別支援学校小学部における「みんなであそぼうの時間」

(担当者：富田昌平)

### 【目的】

附属特別支援学校小学部では、集団活動「なかま」の時間に手遊びを実施している。子どもたちの「やりたい」気持ちを育むために、様々な工夫を取り入れた授業づくりを行っているが、今回は次の2点を目的に、幼児教育講座の教員・学生との連携授業を行った。①普段よく知っている本校教員以外の先生と出会い、触れ合う中で、人と関わる力を育む。②手遊びなどの活動を通して、みんなで活動することの楽しさを味わい、集団活動に参加する力を育む。なお、この連携授業は4年次後期の「教職実践演習」の中に位置付けられ実施した。

### 【概要】

11月22日(水)と29日(水)の2回、附属特別支援学校遊戯室での2限目「集団活動 みんなであそぼう」の時間に実施した。対象は特別支援学校小学部の子どもたち18名(各学年3名)であった。担当の先生からは事前に、子どもたちは模倣したり先生の様子を見て楽しんだりして参加することができること、当該年度は「集団学習」と「音体」の授業で様々な手遊びに取り組み、経験していることを伝えられていた。

授業では、自己紹介を行った後、小学部の先生が普段行っている手遊びを2つ行い、以下のような遊びを行った。

11/22	①まねっこ遊び「ぴよぴよちゃん」 ②リズム遊び「やおやのお店」 ③大型絵本「にんじんとごぼうとだいこん」
-------	--

11/29	①まねっこ遊び「ぴよぴよちゃん」 ②集団あそび「いすとりゲーム(アレンジ ver.)」 ③大型絵本「どうぞのいす」
-------	---

まねっこ遊びは2回目にはいくつか変化を加えた。また、音楽に合わせて体を動かす遊びやバルーン遊び等、普段行っている遊びにも参加させてもらい、授業後には1時間ほど教室内と授業の様子を見学させてもらった。

### 【成果と課題】

学生たちは新型コロナウイルス感染拡大の影響で、特別支援学校での見学の機会がなく、当然子どもたちともかかわる機会もなかったため、今回は非常に良い機会となった。子どもたち一人ひとりの個性と必要な支援についての十分な理解もないままに実践を計画し実施したが、これまで学んできた幼児教育・保育に関する専門的な知識や技能、あるいは実習等での経験をふまえて、特別な支援が必要な子どもたちとも十分にコミュニケーションをとることができ、また充実した遊びを展開することができていたように思われる。学生たちの多くは卒業後に幼児教育・保育の現場に就職し、そこで特別な支援の必要な子どもとの出会う機会は多々あることが予想される。したがって、今回の連携授業は学生たちの将来にとってもよい機会になったと思われる。

(担当学生：幼児教育コース4年生10名)

## Ⅱ 附属学校園からの報告



# 1. 三重大学教育学部附属幼稚園

本年度、三重大学教育学部附属幼稚園で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 年長親子活動
2. 年中親子活動
3. 年少親子活動
4. 筆体験(年長)
5. 英語で遊ぼう(年長)
6. 人形劇
7. コアラの会(未就園児保育)
8. 大学教員による保護者向けコラムの発信

以下に活動報告を示す。

## 1. 年長 親子活動～ボールと新聞を使って～ 保健体育講座 後藤 洋子先生

(担当：辻 彰士)

### 【目的】

1. 親子で触れ合って遊ぶ。
2. 身の回りの物を使い、体を動かして遊ぶ。
3. 他の親子と関わることを楽しむ。

### 【概要】

10月10日(火)、年長にじ組33組の親子を対象とし、親子活動を実施した。保健体育科教育講座の後藤洋子先生を活動のリーダーとし、ボール(ソフトギムニク)と新聞紙を用いてできる親子での遊びを提示しながら楽しんだ。

①親子でストレッチでは、触れ合いながら体を伸ばした。互いに引っ張り合ったり、タイミングを合わせたりと、向き合い感じ合いながら体と気持ちをほぐした。②親子でダンスでは、幼児が運動会で踊るダンスを親子で一緒に楽しみ、気持ちのほぐしと共に参加者の一体感が高まることを期待した。③親子でボールでは、体のあちこちに挟んだボールを取り合ったり、相手の転がしたボールをラインから出ていく前にキャッチしたりと、ゲーム性のある遊びを行った。④親子で新聞では、③のゲーム的な楽しみを含むしっぽ取りを楽しんだ後、音楽に合わせて新聞紙を破ったり投げ上げたりする活動を行った。全体を通じて、工夫次第でいろいろな楽しみ方がで

きること、身の回りの色々なものが遊ぶきっかけになり得ることを伝えた。

活動後には、後藤先生から保護者に向けてお話をいただき、親子ともしっかりと体を動かすこと、特に柔軟の大切さについて伝えた。

### 【成果と課題】

- ・各家庭で身近なものを使って遊ぶという発想、その具体例を示すことができた。また同じクラスの親子同士が集まって遊ぶことで、互いに親睦を深める機会にもなった。
- ・活動後に大人のみの時間を過ごすよう試みたところ、短い時間ではあったが向き合って腰を据えて話すことで活動を落ち着いて振り返る時間になったように思う。一方で、保護者からの自由な意見や質問などを引き出すには至らず、そこを工夫することでこの親子活動が一層大きな意味をもつと感じた。
- ・附属小・中学校の体育館を会場として借りている、各校での使用頻度があがっていることで確保が難しい現状もある。
- ・継続的な遊びの発信について、さらに充実させる余地がある。

## 2. 年中 親子活動～親子活動からコミュニケーションを学ぶ～

保健体育科 岡野昇先生 加納岳拓先生 保健体育科 4年生 8名

(担当：奥村 彩優子)

### 【目的】

1. 親子で動いたり触れ合ったりしながら、一体感を味わったり、相手の動きに合わせてたりすることを楽しむ。
2. 活動を通して親子で体を動かす心地よさや楽しさを感じる。
3. コロナ禍によって保護者以外の他の子どもと触れ合う機会が制限された5歳児を対象にコミュニケーション能力を高める。

### 【概要】

対象は、附属幼稚園年中4歳児23名の親子である。入園当初からコロナ禍で、マスク着用、友達と密着することに制限がかかった子ども達である。また、コロナ禍を経験した5歳児はコミュニケーション能力が遅れていることがいわれている。コミュニケーション能力を高める方法の1つとしてスキンシップを大切することが上げられている。家庭でもより意識して親子でスキンシップをたくさんとってほしいという願いがある。そこで上記のような目的で、保健体育科の学生に親子活動を企画立案してもらう。親子活動でやったことを家庭で試したり、自分なりに考えて遊んだりできるよう、クラスだよりに親子活動の様子を記した。また、遊びをすることで安心・安定した気持ちや経験できることをわかりやすく書いておくようにした。

～活動内容～

幼児を引きこむためにアンパンマンの世界を演出し、親子で協力をし、バイキンマンに捕まったアンパンマンを助ける活動を行っていく。1つ1つクリアしていくことでバイキンマンの元気がなくなっていく。

#### ①アンパンマンとノリノリ

・音楽に合わせて親子で触れ合ったり動きを真似したりする。

#### ② アンパンマンの願いです

・バイキンマンに騙されないようにアンパンマンの

指示を聞き、手を繋いだりハイタッチをしたり親にしがみついたりする。

#### ② 元気のもと（ボール）を集めよう

・割り箸で作られた棒でボールを挟み息を合わせて運ぶ。

#### ③ 優しくデリバリー

・親子で両端を持った新聞紙にボールを置き、落とさないように運ぶ。

### 【成果と課題】

広い空間や世界観があることで子どもたちの意識も上がり、主体的に活動を行っている姿が見られた。親と子が達成感を共有している姿も見られ、のびのびと体を動かすことを楽しんでいる様子があった。また、親が子の動きを見たり声を掛けたりしながら合わせていく姿が見られコミュニケーションをとる機会が設けられていた。しかし、活動の内容が親子に伝わらず、学生が意図した活動になっていなかったものもあった。振り返りの中で広い空間や見本となる学生がいることで成り立った活動であったので、自宅で再現が難しかったという声があった。

### 3. 年少親子活動の計画と実践 幼児教育講座 水津幸恵先生 同コース3年生

(担当：湯田 綾乃)

#### 【目的】

- ・親子で触れ合う嬉しさや、体を動かす楽しさを感じる。
- ・親子でたっぷり触れ合っただけでゆったりと遊ぶ時間を楽しむ。
- ・身近な素材（ポリ袋）を使ってさまざまに遊ぶ面白さを感じる。

#### 【概要】

対象は、附属幼稚園年少3歳児20名の親子である。5月22日（木）に年少親子活動に向け、水津先生と内容を打ち合わせた。その後、話し合いを元に学生が考え、計画したものをもとに、6月7日学生と担任で打ち合わせを行い、親子活動の前日（14日）に本園でリハーサルを行った。

子どもたちの実態に合わせ、なりきることを楽しみながら、親子でじっくり触れ合い関わられるような活動を計画してもらい、学生の中で活動ごとに進行役を決め、幼児や保護者の様子を見ながら進めてもらった。

#### 活動の流れ

事前準備として幼児1人1人が選んだ好きな色のポリ袋に家庭で絵を描き、持ち寄った。

- ① ポリ袋をマントに見立て、「不思議なマント」を身に着ける。
- ② 保護者と手をつないでジャンプをしたり、保護者の手の高さに合わせてハイタッチをしたりなどの動きを楽しむ。
- ③ 不思議なマントでうさぎやへびなどの動物に変身し、保護者の周りをまわってハイタッチや足の下をくぐる。
- ④ マントを外し、親子でマントをもち音楽に合わせて離れたり、くっついたり、上下左右に揺らす（大・小）ことを楽しむ。
- ⑤ 保護者同士でペアになり2枚のマントを重ねてもち、その下を幼児が通る「トンネルくぐり」をする。

#### ⑥ 大型絵本をみる。



#### 【成果と課題】

保護者が園に来て一緒に遊べるのが幼児にとっても嬉しく、活動を楽しみに参加できた。

ポリ袋をマントとして身に着けることに少し違和感をもったり、いつもの園生活と違うことで様子を見ていたりする姿もあったが、教師や学生の誘いかけで楽しく活動できていた。

活動の中で、一つ一つに時間をとったことで、親子で息をあわせて揺らしたり、くぐり方を工夫してみたりと、子どもたちから色々な楽しみ方を見出す姿もあった。

トンネルくぐりでは、自然と保護者同士でつながって長いトンネルができ、一体感を感じられる活動となった。

保護者から親子活動についての意見をもらい、水津先生や学生と共有した。活動後ポリ袋を家庭に持ち帰ったが親子活動後の遊びの提案や家庭での様子を伺う機会を設けたりなどして次につなげることができなかった。



#### 4. 毛筆体験～筆でかいてみよう～

#### 国語教育講座 林朝子先生と学生

(担当：辻 彰士)

##### 【目的】

1. 筆や墨などに触れる。
2. いろいろな線をかいてみるなど、筆でかくことの楽しさを味わう。
3. 絵、文字等で表現して楽しむ。

##### 【概要】

年長にじ組 33 名を対象に 2 月 8 日 (木) に実施。実際に筆を使う様子を見せてもらい、一本の筆から様々な太さの線がかけることや、一筆でどれだけ線をかき続けられるかなど、幼児の興味を引き出した。また、好きな絵、年の初めにちなんだ西暦 (数字)、干支、また自分の名前の中でかける字などを提示し、幼児が抵抗感なく好きなものからかき始められるようにした。

幼児 2～3 名に学生が 1 人つき、道具の使い方だけでなく、かきたい思いが膨らむような会話をした。

活動の最後には、2024 年のカレンダーに筆で自由にかきたいもののかいた。カレンダーは後日、作品として自宅に持ち帰り、また複数かいた作品の中から 1 枚選んで保育室に掲示した。

##### 【成果と課題】

- ・毛筆に触れ、興味をもち、実際に墨汁をつけてかいたことは、幼児にとって楽しい経験であっただろう。習い事で毛筆に触れている幼児もいる一方、今回が初めての幼児ももちろんいるため、よい機

会であった。

- ・例えばひらがななどの文字に限定せず、活動の入り口を“線→かきたいもの (絵も含む)”にしながら、数字やひらがなの例も示したことで、どのよう児も苦手意識を強く感じずに活動には入れたのではないかと感じた。対象となるクラスの幼児の特徴や興味 (字が苦手な子が多い、数字にこだわりをもつ子がいるなど) をとらえて実践できたことが重要であった。
- ・学生の存在が近く、会話の中で幼児のかきたいイメージが膨らんでいるようにみえた。教員を目指す学生にとって、幼児期の“やりたい”という思いに触れたり引き出したり驚いたり迷ったりすることは、その後の学びに影響することだと感じた。
- ・1 月中に行えると、カレンダーづくりという計画がさらにいきると感じた。



## 5. 英語であそぼう

### 英語教育講座 中川右也先生と学生

(担当：辻 彰士)

#### 【目的】

1. 英語に触れてあそぶ活動を通して、英語に親し  
みを感じ、表現することを楽しむ。
2. 知らないこと、初めてのこと(言葉や活動)に興  
味をもって取り組む。

#### 【概要】

年長にじ組33名を対象に、計2回の活動を行った。

①「英語の絵本を作ろう！」(1月17日)

②「いろいろな国の国旗があるね」(2月20日)

①では、「Brown Bear」の絵本を英語で読んでもらい、生き物や数、色など身近な英語に触れながら楽しんだ。そしてその英語を幼児自ら口にしたり動きで示したりしながら、学生と一緒にオリジナルの絵本作りを行った。最後には学生のギター伴奏に合わせて皆で歌を歌った。

②では、国旗をもとにリズムに合わせて色や形などに触れ、その後、オリジナルの国旗作りを楽しむ予定。

#### 【成果と課題】

- ・作品作りでは、5~6人の幼児に1~2名の学生がつき、英語を交えながら会話ややりとりをした。幼児の様子に合わせて日本語も使いながらかかわったことで幼児が安心し、結果的に英語を言ってみたり聞こうとしたりする姿につながったように感じる。
- ・事前に幼児に聞いてみたところ、「ハロー」「サンキュー」などは知っているという答えが返ってきた。当日には、戦隊ものが好きな幼児が色の名前を聞いたことがあったり、動物の名前も比較的なじみがあったりした。「Brown Bear」の題材はそういった点で適していると感じた。
- ・学生は事前に何度も練習を行い、言葉のかけ方や進め方を練ってきたこともあり、テンポよくすすんでいった。前で全体に対して関わる学生だ

けでなく、幼児の傍から一緒にそれを見る学生がもう少し機能すると落ち着く幼児もいるのではないかと感じた。もちろん今年度考慮されていなかったわけではないし、出会ってすぐなので注意が分散することも考えられる。そのため、その年の幼児の様子について共有しながら、考えていけるとよりよいのではないかと感じた。

- ・前年の反省にもあがったが、園側の担任の中には英語での活動に苦手意識をもつ者もいる。活動の様子や楽しさを共有しておけると、どの担任が立ち会ったとしても気後れせずに関われるだろう。



## 6. 人形劇

幼児教育講座 吉田 真理子先生  
幼児教育コース3年生 9名  
4年生 10名

(担当：杉澤 久美子)

### 【目的】

- ・ 学生が作成した人形劇を観劇し、お話しの世界を楽しむ。
- ・ 劇の中の歌や音楽、演出などに興味をもち、園の活動の中で活かそうとする。
- ・ 幼児の興味関心を探り、話の内容や構成等について工夫しながら人形劇を創り上げ、上演する。

### 【概要】

幼児教育講座の吉田真理子先生の指導の下、幼児教育コース3年生、4年生の学生が作り上げた人形劇を園児が見せてもらう貴重な機会となっている。

例年、夏と冬2回の観劇の機会があり、夏は「よるのようちえん」(登園日)に行われており、今年度もこの機会に行われた。冬の観劇は3年生のみの取り組みで1月24日に行われた。

### 【成果と課題】

従来は全園児が遊戯室に集まり観劇する人形劇であったが、コロナ禍を経て2部制となったこともあり発達段階に応じた内容の人形劇に仕上がっていた。

劇の内容はもちろん、制作物や挿入される音楽、語り、話の構成等、工夫されており、園児は興味をもって話しに引き込まれ、感動を味わっていた。

上演する学生も園児の反応に手応えを感じている様子が伺えた。併せて反省や課題を出し合い、幼稚園教員にも聞き取りをすることにより次に活かそうとする真摯な姿勢が見られた。

1月は3年生のみの取り組みとなり、9名で2本の劇を行った。物語の選定、制作、脚本、構成、練習等々、短期間での取り組みは学生にとっては大変なことだったと思うが、当日は素晴らしい表現を見せてくれた。園児にとっても教育実習生が見せてくれる人形劇であったことに殊更親しみを感じ、十分に楽しむことができた。今後もこの活動を継続して行っていくとともに、幼稚園として観劇によって受けた感動を幼児の豊かな遊びや生活に生かしていけるような保育計画を立案していきたい。



## 7. コアラの会（未就園児保育）

幼児教育講座 富田 昌平先生

幼児教育コース2年生 11名

(担当：杉澤 久美子)

### 【目的】

- ・就学前の幼児に向けて計画的な遊びと場所を提供する。
- ・親子が集う場、相談できる場、子育て仲間としてつながる場の提供及び親子の育ちを支援する。
- ・就園前の幼児の発達を定期的に観察、援助することにより、この時期の幼児に適切な遊びを計画し、保育者の援助について考察する。

### 【概要】

平成13年度に発足したこのコアラの会(未就園児保育)は、平成17年度から大学授業と連携する形で年間15回の計画で行われている。(表1)年度当初に入会希望者20組を募集し、5月から2月までの活動である。会の運営は園長、専任担当教員のほか、地域ボランティア、保護者ボランティアで行われ、幼児教育講座富田先生と学生は後期からの参加となっている。後期からは学生が、未就園児親子が全員で集まる時間での保育計画たて、行うことで幼児の実態や保育計画の立案、進め方について学ぶ機会となっている。

少子化や保護者の就労状況、またできるだけ早い段階から集団生活を経験させたいという保護者の気持ちもあり、募集年齢よりも早い年齢からの希望が多くあった。年齢の小さい子どもたちが多くなることで、計画していた活動内容を見直す必要に迫られた。そのような状況の中、みんなで一緒に過ごす時間のもち方や内容、絵本やお話の選択等、ひとつひとつの活動について幼児の発達段階と照らし合わせ協議を行い、多くの反省と気づき、学びを得ることができた。協議会で出た反省、気づきをもとに次の回の計画を立案し、実際の場面で活かすことができたことが大きな成果である。参加する幼児、保護者にとっても非常に満足感の高い活動であった。

学生にとって未就園児の子どものみならず保護者と関わり、話すことによる学びは大きい。

社会状況の変化に伴い、保護者のニーズや幼児の置かれている状況も変化してきていることも考慮し、活動内容を精選し、未就園の時期に必要な活動、援助について今後も検討を重ねていく。

### 【成果と課題】

	日程	内容	備考
1	5/16	ミニ入園式 幼稚園のお庭を散歩しよう	
2	5/30	園庭の遊具や砂場で遊ぼう マットで遊ぼう	
3	6/13	風船で遊ぼう	
4	6/27	かたつむりを作ろう	
5	7/11	しゃぼん玉で遊ぼう	
6	7/18	水遊びをしよう	
7	9/5	絵の具で遊ぼう	
8	10/3	トンボを作って遊ぼう	幼児教育コース学生参加
9	10/17	スタンプングで遊ぼう	↓
10	11/7	どんぐりなど拾った自然物で遊ぼう	
11	11/21	ねんどで遊ぼう	
12	12/19	サンタの帽子を作ってクリスマス会を楽しもう	
13	1/16	ビニル袋の凧であそぼう	
14	1/30	新聞紙で遊ぼう	
15	2/6	お別れ会	

表1. 年間計画（令和5年度版）



学生による活動の様子

## 8. 保護者に向けたコラムの発信

家政教育講座 瀧日 滋野先生

(担当：杉澤 久美子)

### 【目的】

- ・大学との連携活動について保護者に伝えることを通して幼稚園での連携活動への理解と協力を促す。

### 【概要】

幼稚園で行われている学部との連携活動について、携わっていただいた学部の先生にコラムを書いていただき、保護者に向けて発信する。コラムの内容は連携活動の内容に関わることやご自身の専門分野の視点から幼児教育を見ての考え等であり、保護者も興味をもって読んでもらえるものとなっている。

### 【成果と課題】

今年度は新たに家政講座の瀧日先生に「カレーパーティー ～家政学から見る子どもの発達～」とい

うテーマでコラムを執筆していただいた。幼稚園で長年続くカレーパーティーの行事に学生と共に参加してくださった瀧日先生の視点からこの行事がもつ意味や子どもにとっての大切な経験等が記されたコラムが保護者に発信されたことは、保護者の幼稚園教育に対する理解を促すという意味においても貴重なものとなった。

今年度は国語教育講座、英語教育講座の先生方にも執筆をお願いする計画である。幼児期はその後の学習の基盤、土台を作る時期である。だからこそ幼稚園はすべての講座とつながりながら連携活動を行っていきける可能性があると考え。次年度以降も学部の様々な講座の方との連携活動を計画、実践し、コラムの発信を継続していきたい。

## 2. 三重大学教育学部附属小学校

本年度、三重大学教育学部附属小学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 「台湾について知ろう」(6年生)
2. 「台湾について知ろう」(5年生)
3. 小学校国語科における個別最適な学びおよび協働的な学びの実現(第6学年)
4. 主体的・対話的で深い学びを実現する体育授業の共同開発(第5・6学年)
5. 歌唱指導(本物のオペラに触れる)(第4学年)
6. 「生物と環境」における探究学習で地域の生態系について学ぶ(第6学年)
7. キャンプにおける天体観測(第5学年)

以下に活動報告を示す。

### 1. 「台湾について知ろう」(6年生)

(井上 大)

#### 【目的】

本年度、本校では台湾の新上国民小学と交流を行った。6年生については、4月から教育用 SNS 「Padlet」を用いて交流を行った。しかし、台湾の文化や歴史、子どもたちの生活の様子など、コミュニケーションを図る上で大切な要素である相手の国の背景を、多くの子どもたちがほとんど知らないことがわかった。そこで、台湾の事情により詳しい、三重大学教育学部准教授である服部明子先生に来校していただき、6年生に対して「台湾について知ろう」という内容で、ご講演をいただくこととなった。

#### 【概要と成果、課題】

5月24日(火)4限目に小学校体育館において、6年生92名に対してご講演いただいた。子どもたちは台湾の文化や歴史、台湾の人々の暮らしについて、熱心に耳を傾ける様子が見られた。講演後のアンケートにおいても、「台湾の文化や学校の様子などについて楽しみながら学ぶことができましたか。」では92%、「自分の国や他の国の文化や伝統、観光地、食べ物などを知っていることは、英語の学習や国際交流に役立つと思いますか。」では93%の児童が肯定的に捉えていた。また、「服部先生のお話を聞いて、初めて知ったことや感想、心に残ったことなどを書きましょう。」では、右のよう

- ・私は、海外のことはあまり知らなかったから、交流する台湾のことを知れてよかったなと思いました。交流会でおすすめの観光地などを聞きたいです。
- ・初めて知ったことは、九份と十份があることがわかった。心に残ったことは、台湾の言葉の中にも今も日本で使っている言葉が使われていて嬉しいなと思ったので、台湾の言葉も覚えたいなと思いました。
- ・服部先生は外国のことについていろんなことを知っていてすごいと思った。
- ・台湾は日本に似ているところもあれば違うところもあり、おもしろいなと思いました。
- ・台湾ってすごく日本に近いのに知らないことがたくさんあって興味深いと思いました。

な記述が見られた。

子どもたちの感想にもあるように、やはり専門の知識を持った方にご講演いただいたことにより、台湾のことについて、子どもたちが多くのことを知ったり、考えたりしたことがわかった。そこで学んだことを、Padletでの交流にそこで得た知識を実際に活かしたり、12月に新上小学校の子どもたちが

来校した際に、積極的にコミュニケーションを図る姿が見られたりした。次年度も新上小学校との交流



が続いていくので、服部先生と引き続き連携しながら、よりよい交流を目指していきたいと考える。



## 2. 「台湾について知ろう」（5年生）

（井上 大）

### 【目的】

本年度、本校では台湾の新上国民小学と交流を行った。5年生については、12月に新上小の子どもたちが来校して交流することとなった。しかし、台湾の文化や歴史、子どもたちの生活の様子など、コミュニケーションを図る上で大切な要素である相手の国の背景を、多くの子どもたちがほとんど知らないことがわかった。そこで、台湾の事情により詳しい、三重大学教育学部准教授である服部明子先生に来校していただき、5年生に対して「台湾について知ろう」という内容で、ご講演をいただくこととなった。

### 【概要と成果、課題】

9月28日（木）3限目に特別支援学校ひまわり棟ホールにおいて、5年生92名に対してご講演いただいた。子どもたちは台湾の文化や歴史、台湾の人々の暮らしについて、熱心に耳を傾ける様子が見られた。講演後のアンケートにおいても、「台湾の文化や学校の様子などについて楽しみながら学ぶことができましたか。」では91%、「自分の国や他の国の文化や伝統、観光地、食べ物などを知っていることは、英語の学習や国際交流に役立つと思いますか。」では94%の児童が肯定的に捉えていた。また、「服部先生のお話を聞いて、初めて知ったこと

- ・台湾では、気候が北と南で異なり、食事が様々な事が日本と似ていると思いました。
- ・台湾の教科書(1年生の国語)の文字が全くわからなくて、やはり日本とは違うんだなと実感した。
- ・台湾の字は少し日本と字が似ていたから、日本と台湾は共通しているところがたくさんあるんじゃないかなと思った。
- ・今までうっすらとしか知らなかった台湾の文化などを知れて、とても楽しかったです。
- ・台湾のことはあまり知らなかったけど、知ったから早く合いたいと思った。
- ・台湾は日本とちがいがけど、文化も全然違うからびっくりしました。
- ・交流が楽しみだと思った。

や感想、心に残ったことなどを書きましょう。」では、右のような記述が見られた。

子どもたちの感想にもあるように、やはり専門の知識を持った方にご講演いただいたことにより、台湾のことについて、子どもたちが多くのことを知ったり、考えたりしたことがわかった。そこで学んだことを、Padletでの交流にそこで得た知識を実際に活かしたり、12月に新上小学校の子どもたちが

来校した際に、積極的にコミュニケーションを図る姿が見られたりした。次年度も新上小学校との交流

が続いていくので、服部先生と引き続き連携しながら、よりよい交流を目指していきたいと考える。



### 3. 小学校国語科における個別最適な学びおよび協働的な学びの実現（第6学年） 「宮沢賢治研究会」

（河邊 大輝）

#### 【目的】

#### 「小学校国語科における個別最適な学びおよび協働的な学びの実現」

1. 擬音語、擬態語、比喩や反復などの表現が醸し出す響きを味わい、言葉に対する感覚を豊かにすることができる。
2. 複数の作品を比べて読み、人物像や物語の世界観を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりすることで、作者宮沢賢治のものの見方や考え方について自分の考えをもつことができる。
3. 宮沢賢治作品の情景や言葉の使い方に興味をもち、作品の世界観を自分なりに味わい深めながら、作者の考え方や生き方を理解しようとする。

#### 【概要】

宮沢賢治の複数の作品を個人で読み深め、報告書を作成するという「宮沢賢治研究会」を設定することで、子どもたちに読むことの必然性をもたせると同時に、個別最適な学びおよび協働的な学びの実現をねらった。

宮沢賢治は、文豪、偉人、教師など様々な肩書で語られ、その名前は今日、多くの人に知られており、その作品は小学校国語科の教材として多く採用されている。しかし、本校の図書室で宮沢賢治の作品を

借りる子どもは非常に少ないという現状がある。宮沢賢治の様々な作品を読み、その世界観を自分なりに捉えたうえで、報告書を作成して紹介し合う。それらの活動を通じて、宮沢賢治の世界観を味わい深めることをねらいとした。

#### 【成果、課題】

単元の始めに子どもたちに『ちくま日本文学003 宮沢賢治』という本を配付した。一人一人の手元に複数の作品が掲載された本があり、宮沢賢治作品の世界観が奥深いものであるということにより、子どもたちの読書活動の質と量を保証した。また、並行読書による単なる重ね読みではなく、一人一人が宮沢賢治作品の世界観を味わうということにつなげることができたと考える。

単元の導入で読みの視点を問うと、それまでの学習経験から多くの視点が出され、その中から宮沢賢治作品を読み深めるために、八つの読みの視点にまとめることができた。これは、小学校1年生から積み重ねてきた国語科における読解教育の成果であると考えられる。一人一人が異なる読み手である子どもたちに、読み方を教えることの大切さを実感した。単元を進める中で、子どもたちの読書量には差があり、世界観について対話するために自分の考え

を言語化する中で子どもたちの間にずれも生じた。その「差」や「ずれ」がある読者共同体の中で対話し、読み方の情報交換をし合うことに、国語科における個別最適な学び、協同的な学びの可能性があるのでないかと感じた。

また、テキスト、自分、仲間との質の高い対話を

生み出し、自分の考えを伝え合うよさを実感させる必要があることを改めて感じた。これからも国語科の特質を生かした授業改善を図り、他者と協力して様々な視点で文学を読み深めていくよさを実感させながら、豊かな読書活動につなげていけるような授業を展開していきたい。

#### 4. 主体的・対話的で深い学びを実現する体育授業の共同開発(第6学年)

(若林 徳亮)

##### 【目的】

身体活動を主とする体育科で主体的・対話的で深い学びを実現するには、児童が運動する過程で、身体を介して、どのように文化的価値を味わい、他者と関係を築いているかを検討する必要があると考える。そこで体育授業のデザイン検討、実践(観察リフレクションを通して体育科で主体的・対話的で深い学びを実現する視点を得るとともに、学びに向かう人間性と体育の関係性について検討することを目的とした。

##### 【概要】

1学期に「リズム遊び(1年生)」、「マットを使った運動遊び(2年生)」2学期に「鬼遊び(1年生)」「多様な動きをつくる運動遊び(2年生)」3学期に「ボールゲーム(1年生)」「保健:救命教育(5年生)」を実践した。全てペアや小集団での運動で相手や人数を変更させることで多様な他者や状況に応じて、試行錯誤させることを重視した。1学期の「リズム遊び(1年生)」ではペアの相手と同調し自他一体となって踊る様子や友だちと踊ることで新たなリズムや音楽を知覚する様子が見られた。「マットを使った運動遊び(2年生)」では、ペアの相手が変わることで、安定した回転が崩れ、新たな回転の技を探索しようとする姿が見られた。2学期の「鬼遊び(1年生)」では、場あたりの動き、しっぽを取る速さを競い合うゲームから、3者で間合いを図り合うゲーム、さらには相手を誘い込み合うゲームへと変容した。「多様な動きをつくる運動遊び(2年生)」は、合目的な運動において、リーダーとフォロワーの役割を切り替えたり、新たなリーダーやフォロワーとしての

機能を探索したりする姿が見られた。3学期の「ボールゲーム(1年生)」では、ペアでボールをラリーする中で、ボールだけを追う姿から、相手を意識して自分の動きを調整する姿が見られた。「保健:救命教育(5年生)」では、命を救うために、第一発見者から、医師まで、各々が状況に応じて、心肺蘇生の役割を担い、命をつなぐリレーを行っていることを学んだ。この授業は三重大学医学部附属病院救命救急・総合集中治療センターと連携し、附属小学校5年生3クラスと、四日市市の小学校4校とオンラインで接続して行った。

##### 【成果と課題】

実践における児童の姿から他者とともに運動することで他者と協調する力を養うだけでなく、文化的価値を味わい個人内で新たな技を探索していくことが明らかとなった。また1人ではできない課題を設定し他者の立ち位置を取らないといけない制約をかけることで、自己の役割や課題を発見したり、他者とのバランスを取ったりしながら運動していることが明らかとなった。その際、相手や人数を変え、うまくいかない体験をさせることでより複雑な連携や他者への柔軟な対応ができるとともに、結果的として学びも深まっていくこともわかった。さらに、児童が対象世界との関係において、「今-ここ」でどのように世界を認識しているのかを捉え、環境をデザインしていくことが重要であることも明らかとなった。最後に、今年度の実践は、文化的価値を味わい、学びを深めるとともに、他者との協調性を育むための実践でもあり、生徒指導提要の発達支持的生徒指導の内容に該当する実践であったことも確認された。

## 5. 歌唱指導（本物のオペラに触れる） 上ノ坊航也先生と萩野真紀先生

（野口 智世）

### 【目的】

1. 本物のオペラに触れる鑑賞の活動を充実させ、児童の豊かな情操を育む。
2. 発音や呼吸の仕方に気を付けて『もみじ』を歌い、響きのある美しい発声で歌う技能を身に付ける。

### 【概要】

2023年11月10日に、上ノ坊先生と萩野先生が附属小学校へ来校し、4年生（全96名）に、歌唱指導を行うという取り組みを行った。上ノ坊先生による自己紹介後、『鬼のパンツ』『虫の声』の鑑賞と歌唱から始まり、『魔的』等を鑑賞した。その後、4年生全員で『もみじ』を歌った。その際、発声の仕方や息つきについて、上ノ坊先生から指導を受けた。

### 【成果と課題】

『鬼のパンツ』の鑑賞では、上ノ坊先生の「おにーのパンツはいいパンツ、つよいぞー。」歌の後に、「つよいぞー。」と子どもたちの合いの手を入れた。子どもたちは、鑑賞しながらも、リズムよく合いの手をいれ、歌声の響きを感じ取っているようであった。子どもたちは上ノ坊先生の話声と歌声の響きの違いに驚いていた。マイクで話をしている時とは違い、歌を歌っている時に全くマイクを使用しない歌唱の姿を目の当たりにして、「いったいどうしたらそんな大きな歌声が出るのだろう。」「どうすればそんなに歌声が響くのだろう。」という驚きの表情で子どもたちは鑑賞をしていた。本物の歌声の心地よさに聴き取ったり感じ取ったりしている様子であった。

『虫の声』の虫の鳴き声の部分で歌う活動を行う中でも、子どもたちは体育館に響く歌声を出そうとしている姿が見られた。また、オペラとミュージカルの違いについても話を聞くことで、子どもたちは、歌唱について様々な形態があるということについても興味を示していた。

モーツァルトの『魔笛』では、話のあらすじについて説明を受けた後の鑑賞であったため、子どもたちはイメージを膨らませながら、聴いている様子があった。

最後に、全員で歌った『もみじ』では、息つぎの大切さを指導された子どもたちは、実践を通して息継ぎの技能を身に付けていくことができた。「鼻から4秒吸って、スーと音を出しながら息を吐くこと」「吸った空気は胸に入れるのではなくて、お腹が膨らむようにすること」これらは、この取り組み後も音楽の授業で行っている。

子どもたちは、授業後の感想で、「マイクを使っていないのに、あんなにすごい響きができるなんてすごいと思った。」「私も息つぎの仕方を教えてもらったので、ずっと続けたいと思います。」「魔的のオペラを見てみたいと思いました。」と感想を書いており、本物のオペラに触れる鑑賞を行うことで、歌声の響きの美しさを感じ取り、自分も美しく歌ってみたいという思いをもったようであった。



## 6. 「生物と環境」における探究学習で地域の生態系について学ぶ(第6学年)

(前田 昌志)

共同研究者：平山 大輔 先生

### 【目的】

附属小学校では、身近な生態系について探究する環境教育を進めています。学校にある池を起点に、身近な生態系や地球環境について学ぶ6年生理科「生物と環境」の授業を紹介します。

附属小学校の中庭には人工の池、通称「亀池」があります(図1)。その池には、多様な生物が生息していません。かつては鯉や亀が生息していましたが、現在はその面影もありません。6年生が「水中の小さな生物の観察」を通してこの現状に問題意識をもち、亀池をフィールドとして「生物どうしのつながり」を考えました。身近な環境を題材とした学びですが、子どもたちは生態系のバランスを保つことの難しさに直面します。教科書では単純化されている「生物と環境」の内容について、学校周辺の生物の相互作用、食物連鎖、外来種の影響、生物の生活史といった観点から、複雑かつ難解な生態系について探究を進めました。



図1 亀池の生態系調査

### 【成果と課題】

亀池の生態系について探究する過程で、子どもたちは「専門家の話を聞きたい!」という思いをもつようになりました。子ども自らタブレット端末でメールを送り、アポイントを取って教育学部・平山大輔教授(生態学)に来ていただくことになりました。

子どもたちはミクロの世界の生態系が、マクロな世界である地球環境、そして人間生活にまで広がることに気付くことができました。子どもたちは終始、

食い入るように平山教授の話を聴いており、時間がオーバーしても質問が絶えないほどの熱中ぶりでした。



図2 平山教授による出前授業

### (児童の感想)

- ・本当に自分たちの要望で平山教授に来てもらって嬉しかったです。私たちでは、わからないことや専門的なことをたくさん学べたので、いい授業になったと思いました。特に私が印象に残ったことは、「雄一、完璧な生態系が『地球』だと聞いたこと」でした。46億年前からずっとずっと進化し続けてきた生態系を完璧に再現することはできませんが、亀池を地球に少しでも近づけるために頑張ろうと思います。
- ・多様な生態系にしようと思ったら、それに合った環境をつくらなければいけないということが分かりました。生態ピラミッドができあがることはかなり難しく、生物の出入りを可能にする環境が亀池の生物を多種多様にするにつながるのが分かりました。



図3 平山教授の話を聞く児童

## 7. キャンプにおける天体観測（第5学年）

（前田 昌志）

共同実施者：伊藤 信成 先生

### 【目的】

第4学年理科では、夏の星や冬の星について学習をするが、夜間観測を行うことができず、観察は家庭学習に任されている状態である。夜間に児童を学校に集めて、星空観望会を実施している学校もあるが、本校は離れた地域から通う児童が多く、アクセスの難しさや安全確保の面から開催は現実的ではない。また、教員の働き方改革から、児童を夜間に集め、イベントを開くことは難しい。このような状況の中、本校では10年以上、宿泊体験学習の夜間プログラムに観望会を位置づけている。

今回、夏の星座や惑星、月の観察を通して、天体に対する興味・関心をもたせることを目的とした。

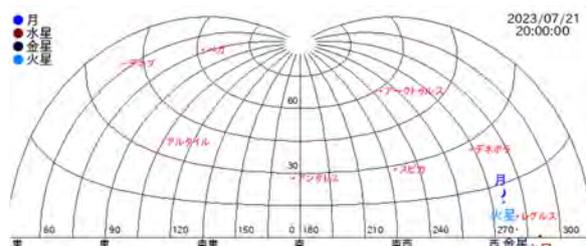


図1 当日見える星空

### 【成果と課題】

前半は当日に見える星空について講話を行った。体育館の壁にプロジェクターで投影し、児童とやりとりをしながら進める形とした(図2)。



図2 前半の講話の時間

講話のメインテーマ「納得がいかない星座」では、様々な星座の形について「本当にその形に見え

るのか」という視点で講話を行った。子どもたちからは、適所で笑いが巻き起こり、温かい雰囲気での学習することができた。

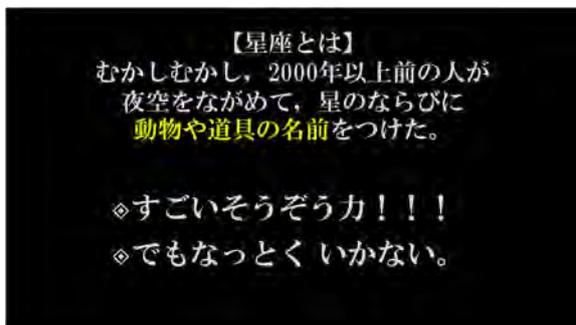


図3 星座についてのスライド



図4 はくちょう座

後半は、クラスごとに分かれて星空観察を行った。しかし、雲が多く、明るい星を見るには条件があまり良くなかった。そこで、タブレット端末に疑似的な天体画像(図5)を映し、それを覗くことで、望遠鏡の特徴に気付くことを目的とした。子どもたちは「望遠鏡で見ると、小さいものでも大きく見える」「左右反転して見える」など、その特徴に気付く反応が見られた。天候に恵まれなくても、それに対応した観望会を実施することができたのは成果であった。



図5 望遠鏡で見た木星の画像

### 3. 三重大学教育学部附属中学校

本年度、三重大学教育学部附属中学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 松本昭彦教授による、古典「金太郎の変遷」
2. 守田庸一教授による、「説明文を合理的に・楽しく読む」
3. 中学生のための数学セミナー
4. インドネシアの学校の生徒とのビデオ通話による協働授業
5. 外国語教育メディア学会（LET）中部支部第101回秋季研究大会シンポジウム口頭発表
6. 美術部3学年合同夏休み3Dアニメーション体験
7. 本校研究への助言
8. ファシリテーションに関する校内研修
9. 総合的な学習の時間における「研究」に関する講義
10. グループワークスキル向上のためのワークショップ

以下に活動報告を示す。

#### 1. 松本昭彦教授による、古典「金太郎の変遷」

（三重大学教育学部 松本昭彦教授

三重大学教育学部附属中学校 小泉晶子）

##### 【目的】

1. 古典が時代とともに変化し、現代に引き継がれてきたことを知る。
2. 変化の理由を考えることにより、今に生きる古典の持つ意味を知る。

##### 【概要】

2024年1月25日（木）、大学の松本先生に  
来校いただき、1年生2クラスで古典の授業をして  
いただいた。生徒たちは「金太郎」の容姿が時代によ  
って大きく変化していることに驚き、変化の理由を  
真剣に考えていた。

##### 【成果、課題】

学習者にとって難しく感じられることが多い古典  
であるが、なじみのある「昔話」を題材に、絵や写  
真、現在の「金太郎」の資料を用いて、終始わかり

やすく知的な興味を引く授業をしていただいた。ま  
た理由を生徒がグループで協力して、変遷の理由を  
考え発表したり、先生が解説をしたりする場面で  
は、自分自身にとっても気づくこと、学ぶことが多  
い授業であった。

・雷が描かれていて、細かい部分まで工夫されてい  
てきちんと理由があるのだなと思いました。（生徒  
感想）

金太郎は現代に近づくにつれて人々の身近なものに  
なっているんだなと感じました。（生徒感想）

1時間という限られた時間であったため、じっくり  
と全員が考え、より深い学びができたのではないか  
と考えられる。1回だけの授業でなく、連続で行  
う、学期ごとに継続的に行うなどの工夫が必要であ  
ろう。

#### 2. 守田庸一教授による、「説明文を合理的に・楽しく読む」

（三重大学教育学部 森田庸一教授

三重大学教育学部附属中学校 小泉晶子）

##### 【目的】

1. 論理に着目して、説明文を合理的に読むことが  
できる。
2. 既存の知識を活用したり他者と交流したりする

ことによって、文章中に述べられていない内容を補  
って読むことができる、

##### 【概要】

先に「読み方」を示し、教材の読みに適応をさせ、説

明文「オオカミを見る目」について、対比・類比、具体—抽象、主張—根拠といった既習の論理に着目しながら、読みを深めていた。

#### 【成果、課題】

小学校で学習をした教材から、対比・類比、具体＝抽象、主張—根拠といった論理をすでに知っている、「読む」時に使っていることを意識しながら、「オオカミを見る目」を読むことができていた。説明的な文章において小学校から今までの学習してきたことに納得をしていた。合理的に読むことが、楽しく読むことにつながり、さら筆者の主張が文章上のことだけでなく、自分の生活と照らし合わせたり、紐づけて考えるきっかけとなったりするものであることを知ることができた。

・前まで「論理」という言葉の意味を知らなかったが、具体的な例を挙げて教えていただけたので、

理解できました。(生徒感想)

・先に確認してから問題を解くことで、自分がどこを見つかるのが苦手なのか、自分がどのくらいできるのかを知ることができ自信につながりました。(生徒感想)

守田先生の授業についても1時間という限られた授業であったため、生徒がじっくりと考え、中学校での既習の説明的文章について考えを上げたり、深めたりすることができたのではないかと考える。連携授業の時間をどのように確保していくかが今後の課題である。

なお、今後、第2学年4クラスを対象に、2月29日(木)余教授、3月1日(金)和田准教授による授業を予定しており、第3学年では守田先生に授業を行っていただくことで、調整中である。

(2月14日現在)

### 3. 数学

三重大学教育学部 玉城 政和 三重大学教育学部 肥田野 久二男 三重大学教育学部 森山 貴之  
三重大学教育学部 中村 力 三重大学教育学部附属中学校 林 大輔

#### 【目的】

大学教員によるセミナーを実施し、数学の奥深さを知るとともに、身近な数学の不思議や数学を使って表すことのよさを実感する。

#### 【概要と成果、課題】

4人の大学教員による「中学生のための数学セミナー」を実施した。4人が異なる分野を担当し、「代数学」「幾何学」「解析学」の基礎基本やその入門としての題材を扱い、中学1年4学級で授業を行った。



A組では、中村先生が担当し、最大公約数の求め方を通じて「整数論」の授業を行った。小学校で学習する商と余りの関係と、最大公約数の性質を関連付けて、最大公約数の効率的な求め方を考察した。最



B組では、森山先生が担当し、球体を地球と見立てながら、球面上における図形の性質を考察した。三角形の内角の和について、平面上での捉え方と球面上での捉え方の違いを、透明な球体の模型を用いてグループで操作活動を行った。



C組では、肥田野先生が担当し、インクの滲む様

子について、微粒子のランダムな動きがどのようなものか考察した。起こりうる可能性がどの程度かを考えながら、微粒子がその場所にどの程度あるか数え上げた。



D組では、玉城先生が担当し、補数の考え方をを用いて、「ひき算」を「たし算」で求めることを考察した。計算機にこの仕組みが応用されていることを体験的に学習した。

題材としては中学生でも楽しめるものであったため、数学の奥深さを実感するよい機会であったと思われる。高度な思考を要する題材では、心地よい難しさを感じる生徒がいる一方で、思考停止する生徒も一定数存在していたと思われる。そういった生徒への対応が課題である。

#### 4. インドネシアの学校の生徒とのビデオ通話による協働授業

(三重大学 中川 右也 三重大学教育学部附属中学校 英語科教員)

##### 【目的】

本研究の目的は、タブレット端末を利用した国際交流プログラムが、生徒の英語運用能力の向上にどの程度効果的であるかを検証することである。また、国際交流が生徒の英語学習に対するモチベーションや自己効力感にどのような影響を与えるかを明らかにすることも目指している。

##### 【概要】

生徒は日々一生懸命英語を学び、授業の中で積極的に使おうとしているが、日本ではその学びを実世界の状況に適応する機会がまだまだ少ない。英語でのやり取りを中心とした授業を展開してはいるが、英語を本当の意味で使うというリアルな場面がどうしても設定できずにいた。

そこで、オンラインでのビデオ通話による国際交流を計画し、生徒の英語運用能力に及ぼす影響と、実際の英語を使用する機会に対する生徒の反応を検討した。具体的には、インドネシアの学校との協働授業を行い、生徒が英語を使う実践的な場面でのどのような経験をし、どのような学習効果が見られたかを分析した。

##### 【成果】

国際交流が終わった直後、生徒から「もっと英語を話せるようになりたい」、「語彙が不足している」、「上手く発音ができなくて言いたいことが伝わらなかった」という声が上がった。英語でやり取りを行うためには、主に「発音」、「語彙」、「文法」の力が必

要であるが、国際交流でのやり取りを通して、それらの必要性を実感している様子だった。国際交流に参加したことで、自身ができることとできないことが明らかになり、不足している部分を次回までに何とかしようという意識が生まれ、英語学習にさらに積極的に取り組もうとする姿勢が見られた。



図1 国際交流で自己紹介を楽しんでいる様子



図2 国際交流で附属中学校の良さを伝えている様子

## 5. 外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部第 101 回秋季研究大会シンポジウム口頭発表

(三重大学 中川 右也 三重大学教育学部附属中学校 吉水 慶太)

### 【目的】

発表の目的は、1人1台のタブレット端末を利用した国際交流プログラムの裏側で、教員がどのように動いていたのかを提示することで、ビデオ通話による国際交流を汎用的なものにすることである。

### 【概要と成果、課題】

生徒が国際交流を楽しんでいる間、教員は裏方として1時間動き回ることになる。まず、Zoomのメインルームと20のブレイクアウトルームを開き、画面共有により両国の生徒にルームナンバーを伝える。その後、全ルームに教員用アカウントで入室し、画面収録を行う。実際には、計3回の第1回目は生徒に画面収録を指示したが、全てが失敗に終わったため、第2回目、第3回目は教員が行うこととなった。教員が画面収録をするために、1人で10台以上のパソコンを使用するという状態になったため、今後この課題は人員を増やすなどして改善すべきである。また、各国の教員が常に連絡を取り合い、空室のブレイクアウトルームがないか、困っている生徒がないかを確認し、その都度対応する必要がある。私たちは1つのフロアに最低教員1名を配置した。実施するとき使用する教室の数にもよるが、教室が多ければ多いほど必要な教員も増える。次回からは、国際交流の計画段階で学校全体を巻き込み、教科に関係なくできるだけ多くの教員と協力して行いたい。

### 【生徒の声】

Aさん「貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。まず、私たちの英語が通じるということに感動しました。英語が世界共通言語だというのは有名な話ですが、海外に行ったことすらないので、理解し合える言語があるというのはとても心強く思えました。また、日本のことがとても有名なことにも驚きました。日本のアニメ、ゲームはもちろん、曲から食べ物、日本の都市についても知っているとのことでした。抹茶を飲んだことがある、三重県を知っている、小学校3年生の頃に日本に行ったことがあると話してくれたのが特に驚きで

した。また、相手が頷いて聞いてくれているかどうかで、安心感が随分と違いました。たとえ国が違っても、「つまらなさそうだな」「楽しんでくれているな」という感情は伝わってくるものですね。もし、またこのような機会があったら、次はもっとリスニング力を高めて挑みたいです。今まで、「話すこと」に目を向けがちでしたが、聞き取ることが何より大切ですね」



図 1, 2, 3, 4

発表に使用したスライド

## 6. 3D アニメーション制作

(三重大学教育学部 上山 浩教授・三重大学教育大学附属中学校 石田 國代)

### 【目的】

Art of Illusion 3.0.3 を用いて 3DCG アニメーションを制作することで、自分のイメージに合わせて立体的な形体、動きや視点の位置などを設定し、具現化した喜びを味わう。

### 【概要】

1 日目 (8/4)

ガイダンス 10 分

基礎理論の講義 20 分

- ・3DCG の基本理解 (資料映像)

基本実習 1 (立体配置と動画の概念) 40 分

- ・モデリングウインドウの理解
- ・基本形オブジェクトの配置・移動・回転

基本実習 2 (立体配置と動画概念) 60 分

演習課題【色ガラス回転】

- ・オブジェクト配置
- ・アニメーション設定の基本
- ・レンダリング設定

基本実習 3 (立体形成) 30 分

- ・平面と押出・旋回

2 日目 (8/7)

基本実習 4 60 分

演習課題【歩く金属体】

- ・関節動作の設定  
(回転原点移動, オブジェクトリンク)
- ・アニメーションパレット操作

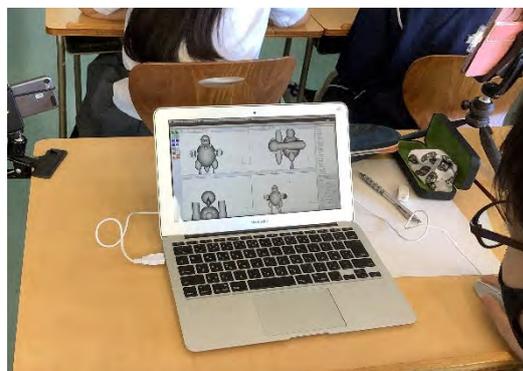
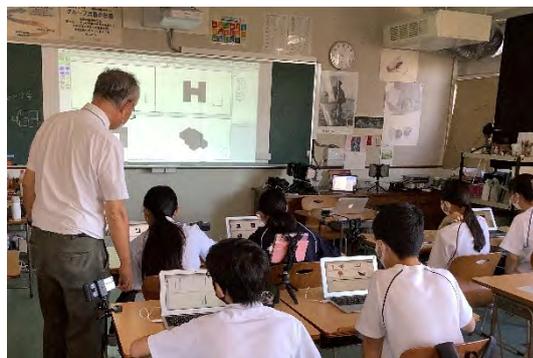
自由制作 110 分

- ・球体等からの変形

(拡大・縮小, 自由変形)

- ・幾何学形体の組み合わせ (積み木, 演算)

【成果, 課題】夏休み中の 2 日間の日程で行った。美術部員の参加者が 14 名であった。もう少し時間が欲しいという意見は例年聞かれるが前年度の制作で意見があったが、生徒がそろって登校できる日が少ないため本年度も 2 日間の開催となった。生徒たちは始終集中し制作しており、自分がモデリングしレンダリングした CG 画像を見て感動している様子であった。事後のアンケートによると、普段個人でアニメーション動画など制作をしている生徒にとってはとても興味深いものだったようである。他の作品を色々見たいとの意見もあった。制作方法の説明が分かりやすいとの意見やの時間を十分とったが、もう少し時間が欲しいという意見が多かった。また、難しいけれど興味深く楽しかったという意見があった。



## 7. 本校研究への助言

(三重大学教育学部家政教育コース 村田晋太郎准教授  
三重大学大学院教育学研究科 前原裕樹准教授  
三重大学教育学部附属中学校 城所拓磨)

### 【目的】

「社会の変化に対応できる生徒の育成」を研究主題とした本次研究に助言をいただくことをねらった。村田晋太郎准教授からは主に総合的な学習の時間で育てる資質・能力および探究学習の進め方について、前原裕樹准教授からはカリキュラム・マネジメントの観点からそれぞれ助言をいただく。

### 【概要と成果、課題】

4/25, 6/13, 8/1, 10/6, 12/15, 12/26 の日程で、直接来校またはオンラインミーティングにて本次研究のについてご助言をいただいた。本校では総合的な学習の時間をSTEP (Save The Earth Projects) と呼称し、SDGs の 17 の目標を達成するための探究

学習をカリキュラムに取り入れている。本年度は3年という研究計画のうちの最終年度であるため、生徒たちがより深く探究学習に取り組めるよう実践的なご助言をいただくことができた。

またその集大成を11月4日の教育研究発表会で発表するにあたり、三重大学教育学部附属中学校研究紀要(第31集)を発刊した。研究紀要の発刊に際しても、多大なご助言と文言の添削を行っていた。

本校の研究を推進していくためにも、大学の先生方と連携をしていく必要性は大きい。他校の研究会や学会に、可能な限り同行することが望まれる。

## 8. ファシリテーションに関する校内研修会

(三重大学教育学部家政教育コース 村田晋太郎准教授  
三重大学教育学部家政教育コース 瀧日滋野准教授  
三重大学教育学部家政教育コース 横山真智子講師  
三重大学教育学部理科教育コース 市川俊輔准教授  
三重大学教育学部保健体育コース 水藤弘吏教授  
三重大学教育学部附属中学校 城所拓磨)

### 【目的】

NPO 法人 bankup ファシリテーターの丸毛幸太郎さんを講師に迎え、生徒にとってより良いファシリテーションを行うための研修会を開催する。

### 【概要と成果、課題】

令和の日本型学校教育で求められるファシリテーターとしての教員の在り方が挙げられている。本校研究の核として位置付けているSTEP(総合的な学習の時間)では、教師のファシリテーターとしての力量が常に問われているため、体験的な研修会を通してその資質・能力を向上させることをねらいとした。

12/5に事前打ち合わせを行い、それを基に講師の

丸毛幸太郎さんにファシリテーションにおける重要な要因についてのレクチャー動画を作成していただいた。その動画を視聴したうえで1/23の研修会を実施したことで、研修会当日は教員が活発に議論する姿がよく見られた。より良いファシリテーションを実際に行っていくうえで、それぞれが体験的に多くのことを学ぶことができた。

総合的な学習の時間のみに関わらず、各教科指導においてもファシリテーションスキルの向上が求められている。本研修会での学びが今後の教員の資質・能力に影響を与えることが期待される。

年度毎に教員の入替わりがあることから、年に一度はファシリテーションに関わる体験的な研修会を開催することが望ましい。



## 9. 総合的な学習の時間における「研究」に関する講義

(三重大学教育学部家政教育コース 村田晋太郎准教授  
三重大学教育学部家政教育コース 瀧日滋野准教授  
三重大学教育学部家政教育コース 横山真智子講師  
三重大学教育学部理科教育コース 市川俊輔准教授  
三重大学教育学部保健体育コース 水藤弘史教授  
三重大学教育学部附属中学校 城所拓磨)

### 【目的】

本校の STEP（総合的な学習の時間における生徒の探究学習）において、生徒がより主体的に深く学ぶことができるよう、考える機会とする。

### 【概要と成果、課題】

本校では総合的な学習の時間を STEP（Save The Earth Projects）と呼称し、SDGs の 17 の目標を達成するための探究学習をカリキュラムに取り入れている。本次研究では学年・学級を越えた 76 のグループがそれぞれ研究テーマを考え、探究学習を進めてきた。しかし、研究テーマ設定そのものに難しさを感じる生徒が少なくないのが現状である。

次年度以降も総合的な学習の時間を核としたカリキュラムを展開していくうえで、生徒がより主体的に探究するためには、そもそもの「研究とは何か」について知ることが重要であると考え。

生徒たちは 2/26, 3/4 に村田晋太郎准教授をはじめ 5 人の大学の先生方の事前収録動画を視聴する。研究の意義や方法、倫理観を含め、研究とは何かを知り、自らの探究学習に大いに参考にできることが期待できる。さらに、3/11 には実際に 5 人の大学の先生方に来校していただき、生徒が研究テーマを考える授業に参加・助言をしていただく予定である。

## 10. グループワークスキル向上のためのワークショップ

(三重大学教育学部学校教育コース 中西良文教授 三重大学教育学部附属中学校 城所拓磨)

### 【目的】

生徒が実際の体験を通してより良いグループワークとはどのようなものかを考える機会とする。

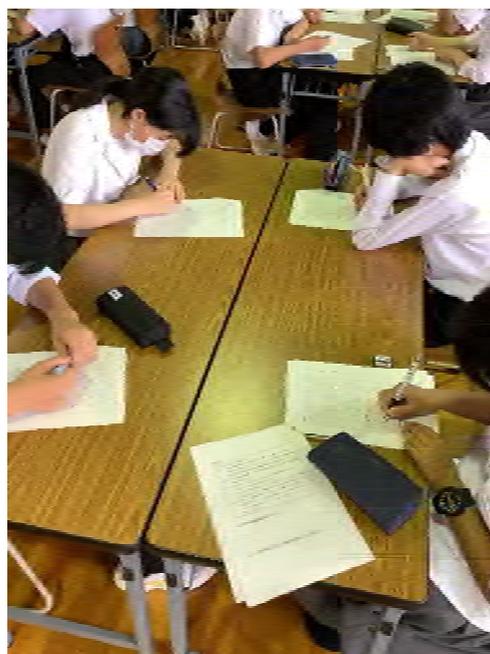
### 【概要と成果、課題】

教員にとって、また生徒にとっても各教科等の学習においてペアワーク、グループワークはなくてはならない学習形態となっている。しかしペアやグループになっただけではその意味を為すことはない。

本校では総合的な学習の時間に主体的に深く学ぶことをねらった探究学習を設定しているが、ここではグループでの活動が極めて多い。より良いグループワークとはどのようなものかを知ることが重要であるため、6/28 に中西良文教授にお越しいただき、1年生を対象としたワークショップ形式の授業を行っていただいた。

グループワーク時に陥りやすい状態について、ジグソー学習法でそれぞれの生徒が考え、活発に議論することができた。

生徒自身がグループワーク時に大切にしたいことを体感することはできたが、教員もまた与える課題を精選し、吟味することが重要であることも学ぶことができた。



## 4. 三重大学教育学部附属特別支援学校

本年度、三重大学教育学部特別支援学校で実施した取り組みは以下の通りである。

1. 小学部全学年 学生先生による集団活動「みんなであそぼう」(幼児教育コース 富田昌平先生)
2. 中学部全学年 美術「新聞紙でいきものをつくろう」(美術教育コース 上山浩先生)

以下に担当した大学教員による活動報告を示す。

### 1. 小学部全学年 集団活動「みんなであそぼう」 富田昌平先生・幼児教育コース4年生のみなさん(学生先生)

(活動担当者 小学部教員全員)

#### 【目的】

1. 普段よく知っている本校教員以外の先生と出会い、触れ合う中で、人との関わる力を育む。
2. 手遊びの活動を通して、みんなで活動することの楽しさを味わい、集団活動に参加する力を育む。

#### 【概要】

日時：第1時：令和5年11月22日(水) 2限目

第2時：令和5年11月29日(水) 2限目

対象児童：小学部全員(18人)

場所：小学部遊戯室

○第1時：

①はじまりのあいさつ、富田先生と「学生先生」の紹介とあいさつ

②小学部教員によるリズム運動

③「学生先生」による遊び、読み聞かせ

まねっこ遊び「びよびよちゃん」

リズム遊び「やおやのお店」

大型絵本「にんじんとごぼうとだいこん」

④おわりのあいさつ

○第2時：

①はじまりのあいさつ、富田先生と「学生先生」とのあいさつ

②小学部教員によるリズム運動

③「学生先生」による遊び、読み聞かせ

まねっこ遊び「びよびよちゃん」

集団遊び「椅子取りゲーム」

大型絵本「ねずみのいもほり」

④おわりのあいさつ

#### 【成果と課題】

小学部の子どもたちは繰り返し活動することで見通しや関わる人に対して安心感をもって参加することができる様子があり、同内容の授業を2回実施した。活動に慣れるとともに、本校の教員以外の先生と関わる機会を作った。学生先生の方々に活動を用意していただき、小学部で普段行っているリズム運動にも一緒に参加していただいた。対面の時点で、学生先生との交流を楽しみにしている子どもや、冒頭のリズム運動を通して親睦を深める子どもの姿が見られた。学生先生によるまねっこ遊びや手遊びでは、笑顔でリズムに乗ってまねをしたり、一緒に歌いながら手を動かしたりし、活動後も子どもたち同士で遊ぶ等、手遊びやまねっこ遊びに興味関心を持った様子だった。また、第1時では活動を見ているだけで手遊びをする様子になかった児童が第2時では、学生先生や周りの児童の動きをみてまねをしようとする姿があった。

活動の内容によっては、ルール等があり、参加することが難しい児童の姿もあったので、打ち合わせの際、より具体的な子どもの実態を伝える必要があると感じた。しかし、



子どもたちが新たな出会いをしたり新しい活動を経験したりする貴重な機会となり、子どもたちのやっ

てみようという意識を育む活動につながった。

## 2. 中学部全学年 美術「新聞紙でいきものをつくろう」 上山浩先生

(活動担当者 高見杏優)

### 【目的】

新聞紙をつなげたりまとめたりして、自由に形を変えながら自分がイメージした生き物を作ることを通して、材料の性質をいかした作品作りや構想ができるようにする。

### 【概要】

令和5年11月16日(木) 2・3限

中学部全学年(13人)

本校 生活訓練棟「ひまわりの家」

活動の流れ

1. 本時の目標や活動内容を確認する。
2. 新聞紙を使った生き物の作り方を知る。
3. 新聞紙を使って生き物を作る。
4. 後片付けをする。
5. 鑑賞・写真撮影をする。
6. 活動を振り返る。

活動の内容

丸めた新聞紙をセロハンテープでつなげたりまとめたりして、自分がイメージした生き物の形にする。生き物の形ができれば、目のシールを貼り付ける。完成した作品は、一つずつ作った生き物を紹介しながら鑑賞する。

### 【成果と課題】

- ・新聞紙という材料が扱いやすく、生徒が自分で形を変えやすかった。そのため、一人一人がイメージした通りの生き物になるように取り組むことができた。
- ・イメージした形になるまで新聞紙をくっつけたり並べたりするという作り方のため、生徒に

とってやり直しをする必要性を感じる場面がなく、意欲を保って作り続けることができた。

- ・たくさんの新聞紙を使うことで、簡単に大きな作品を作ることができたため、作品を完成させた時に高い満足感や達成感を得られることができた。
- ・貼り付ける目は様々な種類のものを用意しておくことで、生き物の表情についてもイメージして作品を作ることができた。
- ・セロハンテープの扱いはやや難しい生徒がいた。くっつけた新聞紙が離れないようにしっかりくっつけるためには支援が必要な場面があった。
- ・新聞紙の特性上、作品が同じ形を保ち続けることが難しかった。そのため、長く飾っておくには適さなかった。
- ・生徒が十分に活動するために、多くの新聞紙を丸めたものを用意しておく必要があった。そのため、準備に時間が必要だった。



# 第3部

## 地域連携シンポジウム



令和5年11月30日

各位

2023 学校連携シンポジウム「これからの教員養成を考える」  
開催のお知らせ

三重大学教育学部学校連携推進委員会  
委員長 金子 淳

錦秋の候、貴職におかれましてはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。平素は本学の教育・研究活動に対しご支援ご協力をいただき、誠にありがとうございます。

昨年度に引き続き、一身田橋北校区・附属学校園・教育学部における学校連携シンポジウムを以下の通り開催いたします。本年度のテーマは「これからの教員養成」です。皆様のご参加をお待ちしています。

記

日時 2023(令和5)年12月1日(金) 15:30～17:00

開催方法 オンライン開催

<https://mie-u-ac-jp.zoom.us/j/81886392983?pwd=V3gzcjVqYtTbktXaW12ajcvZVd0UT09>

ミーティング ID: 818 8639 2983      パスコード: 406622

時程

15:30～ 開会の挨拶      金子淳（三重大学教育学部・学校連携推進委員会・委員長）

15:35～ 地域連携校から見たこれからの教員養成  
青木利斉（津市立一身田中学校・校長）

15:55～ 数学教育コースの学校連携活動  
田中伸明（三重大学教育学部・附属企画経営室・副室長）

16:15～ これまでの／これからの連携活動と教員養成  
守田庸一（三重大学教育学部・教職支援センター学校連携支援部門・部門長）

16:35～ 意見交換

16:55～ 閉会の挨拶      宮岡邦任（三重大学教育学部・副学部長）

# 地域連携校から見た これからの教員養成

一身田中学校 青木利斉

2023学校連携シンポジウム  
これからの教員養成を考える

R5.12.1

1

## 地域連携校から見たこれからの教員 養成

- 1 本校と三重大学との連携の経過
- 2 学校経営と三重大学との連携
- 3 公立小中学校の現状と課題
- 4 教員養成として公立小中学校のすべきこと、連携小中学校のできること

2

## 1 三重大学との連携の経過

### ① 私と三重大学の連携

H18 → H21		H27 → H29		R5 →	
教諭		教頭		校長	
<ul style="list-style-type: none"><li>・ H18～一身田中と教育学部が連携開始（現代GP）</li><li>・ H19～一身田中学校区（1中・3小・1幼）が連携開始</li><li>・ H21～一身田中・橋北中学校区が連携開始</li></ul> <p style="text-align: right;">・ R2（2020）.3～ COVID-19 ・ R5～18年目</p>					

3

## 1 三重大学との連携の経過

### ② 今年度（R5）の連携の成果

- ・ 中学生の姿
- ・ 教員の姿
- ・ 大学生の姿

4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19

## 1 三重大大学との連携の経過

### ② 今年度（R5）の連携の成果

- ・数学科 授業支援（年間）・H18～
- ・音楽科 クラス合唱支援（授業・放課後練習・合唱コンクール）・H19～、（コラボ音楽祭・H18～）
- ・保体科 ラートの授業支援（2年5クラス×3時間／全6時間中）・H19～
- ・理科 解剖の授業支援（2年5クラス）・H18～
- ・家庭科 調理の授業支援（2年5クラス）・H18～

20

## 2 学校経営と三重大学との連携

### ① 連携校が感じる連携事業のメリット

生徒・保護者の期待

- ・ 特色のあるカリキュラム
- ・ 専門性の高いもの、本物、実物に触れる

教員の資質向上（大学との協働）

- ・ 授業力の向上
- ・ 専門性を高める、教科の本質を学ぶ
- ・ 新しいことへの挑戦、学びの場

21

## 2 学校経営と三重大学との連携

### ② 校長の役割（学校経営）

先生たちへ、そして子どもたちへ

- ・ 「何のために」……価値づけ、意味づけ
- ・ 「火をつける」……新しいことへ挑戦する経験
- ・ 「不易流行」……これまでの経験から「不易」を伝える

22

### 3 公立小中学校の現状・課題

#### ① 全国的な課題「教員の確保・なり手不足」

- ・ 休暇取得者の補充
- ・ 常勤が補充できず、非常勤
- ・ 補充されずに・・・
- ・ 授業時数が確保できない・・・
- ・ 余裕がなくなり、子どもたちを十分に見られない・・・
- ・ 「受験者数の減少は深刻」

23

### 3 公立小中学校の現状・課題

#### ② 数の問題と教育の質の問題

- ・ 高い専門性が求められるのに・・・
- ・ 教科指導・学習指導、生徒指導・生徒理解、人権教育、・・・
- ・ 教師としての使命感
- ・ 働き方
- ・ メンタルヘルス

24

## 4 公立小中学校のすべきこと・連携小中学校の 校のできること

### ① 子どもたちの声、大人の声

- ・ なりたい職業
- ・ 生徒の声①「教師になりたい」
- ・ 生徒の声②「教師はイヤだ。きついから」
  
- ・ 保護者・地域の方の声「先生は大変ですね」

25

## 4 公立小中学校のすべきこと・連携小中学校 校のできること

### ② 連携に参加する学生の皆さんへ

- ・ 学校現場の魅力を伝える、見てもらう
- ・ 役割、活躍の場を提供する（学校も助かること）
- ・ 無理をしないこと、計画的に行うこと

26

## 4 公立小中学校のすべきこと・連携小中学校のできること

### ③ 連携を生かして

- ・「家庭科の教員がいなくて、授業時数が確保できない。授業ができない」（中学校）
- ・「採用数が少ないので、小学校で採用試験を受ける」（大学）

普通学級15（学年5学級）の中学校……週12.5時間

普通学級9（学年3学級）の中学校……週7.5時間

27



28



R5.10.30~11.6 2年理科・家庭

29



R5.10.30~11.6 2年理科・家庭

30

 三重大学

## 数学教育コースの連携活動

三重大学教育学部  
数学教育講座  
田中 伸明

### I. 連携活動の 概要・目的・意義

- 学生が、一身田・橋北校区の小・中学校の**教育現場**に**毎週1時限**ずつ入らせていただき、**児童・生徒の学習支援**と教員の**教育アシスタント**活動を行う。
- 学習支援・アシスタント活動を通して、**学校理解**と**子ども理解**を深める。
- 教育現場の**先生方の実践**に触れ、**その願いや思い**にふれ、**教育の素晴らしさ**を実感し、**教職への意欲**を高める。



### II. 連携活動の 教育課程上の位置付け

- 1年次は、共通教育・大学基礎科目「**キャリア教育入門**」(2単位)の第8回～第15回部分を充当。
- 3年次に、教育の基礎的理解に関する科目「**教職実践演習**」(2単位)の第5回～第15回部分を先取りし、4年次は本活動で得た学びを省察する。

3年次の**教育実習**までに  
**豊富な現場体験**を積むことが望ましい!



大学側の  
教員組織

- 2020年度まで  
数学教育専門の教員A・B(2名)で、1年次と3年次をそれぞれで担当。ただし、3年次の「**数学科教育法**」を担当した者が3年次、もう1名が1年次を担当。
- 2021年度から  
1年次は、数学教育専門の教員Bがコーディネーターとなる。数学科専門の教員C・D・E・F・G・Hがそれぞれの小学校を担当。  
3年次は、「**数学科教育法II**」を担当する数学教育専門の教員が中学校を担当。

**コースを挙げての取組に!**

### III. 年間スケジュール

- 4月中旬：ガイダンス
  - ・目的と意義の共有
  - ・具体的な活動内容の説明
  - ・注意事項  
検温・体調管理、あいさつの徹底、荷物の置き場、準備物・服装等、欠席の場合の連絡、コンプライアンスの徹底
  - ・担当校の分担  
1年次は、一身田小、栗真小、白塚小、北立誠小、南立誠小、  
3年次は、一身田中、橋北中  
各自がそれぞれ入らせていただく学校を決定
  - ・登校可能時限の調査



登校可能時限の  
調査

「教育実地研究」登校可能時限調査 (75期)						
(一身田)小学校						
小学校	月	火	水	木	金	大学
1時間目	加藤2			影多1		1:30~15
8:40~9:25 (南)	亀井2			南川2		9:50~
9:45~9:30 (-東)	南川3					10:20
10:50~9:35 (白北)						
2時間目						2:30~15
9:35~10:20 (-東南)						10:30~
10:40~10:25(白北)						12:00
3時間目						
10:40~11:25 (-東)						
10:45~11:30 (白北南)						
4時間目						
11:30~12:15 (-東)	加藤1			坂司2	坂司3	
11:35~12:20 (白北南)	亀井1					
11:40~12:25 (南)	影多2					
	南川1					
5時間目						3:30~15
13:40~14:25 (-)						13:00~
13:45~14:30 (白北南)						14:30
13:55~14:40 (南)						
6時間目						4:30~15
14:30~15:15 (-)						14:40~
14:35~15:20 (白北南)						16:10
14:45~15:30 (南)						

※詳しくお願ひ致します。  
 ・学生は、「」の心名です。(※は男性です)  
 ・登校可能時限の中から、各学生につき**1時間以上**、お集議になりたく存じます。  
 ・各期の集の集字は単独編です。可能ならばできる範囲でよくて下さい。  
 ・まれに学生の時間割が変わってしまうことがあり、登校可能時限の変更をしなければならぬことがあります。その場合は、その時点で変更のご相談をさせていただきます。



### 活動内容報告 2022年度 三年次 中学校

三田中学校 教育実習生レポート (過去年度 報告書)

【目的】  
本コースの「教育実習研究」は、中学校の教育実習を通して、多様な実践力に育つための教育実践。多様な実践力に育つための教育実践。多様な実践力に育つための教育実践。多様な実践力に育つための教育実践。

【内容】  
本コースの実習には、学生それぞれが自分の実践に、週ごとの実践報告を提出し、一週間の実践報告を提出し、実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。

【成果】  
本コースの実習には、学生それぞれが自分の実践に、週ごとの実践報告を提出し、一週間の実践報告を提出し、実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。



### 活動内容報告 2023年度 三年次 中学校

城北中学校における教育実地研究活動

【目的】  
本コースの実習には、学生それぞれが自分の実践に、週ごとの実践報告を提出し、一週間の実践報告を提出し、実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。

【内容】  
本コースの実習には、学生それぞれが自分の実践に、週ごとの実践報告を提出し、一週間の実践報告を提出し、実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。

【成果】  
本コースの実習には、学生それぞれが自分の実践に、週ごとの実践報告を提出し、一週間の実践報告を提出し、実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。



### 活動内容報告 2023年度 三年次 中学校

73期数学教育コース 教育実地研究 城北中学校

【目的】  
本コースの実習には、学生それぞれが自分の実践に、週ごとの実践報告を提出し、一週間の実践報告を提出し、実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。

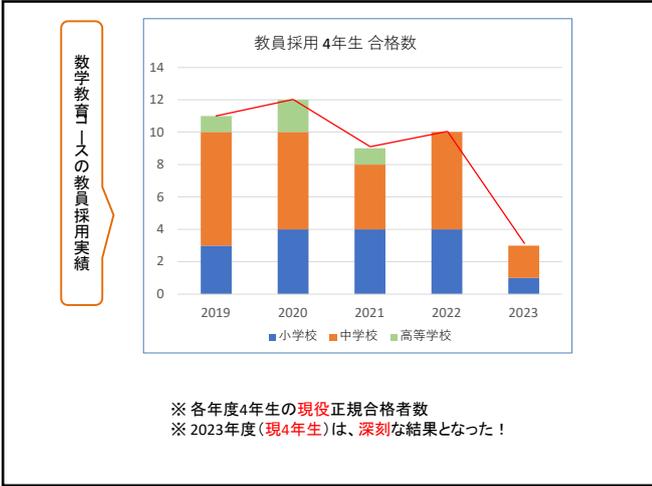
【内容】  
本コースの実習には、学生それぞれが自分の実践に、週ごとの実践報告を提出し、一週間の実践報告を提出し、実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。

【成果】  
本コースの実習には、学生それぞれが自分の実践に、週ごとの実践報告を提出し、一週間の実践報告を提出し、実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。実践報告の提出を促す。



### V. 成果と課題

- 学校理解・観察と実践  
理論と実践の往還、教育実習の充実へ資する
- 教師の願い・思いを知る  
教育の素晴らしさを実感、教職への意欲の高まり・充実した職業人生への基礎
- 児童・生徒との触れ合い  
子ども理解、「可愛さ」→「ともに成長」、心豊かに、教職のやりがい
- 毎時レポートの作成  
自分を客観的に見る・指導する先生方の側も学ぶ
- 教職への就職実績の向上  
数学教育コースの実績推移、教師不足への対応

### 数学教育コースの採用試験実績

教員採用4年生 合格数



- 1年次の活動:  
・4月休講、5~8月オンライン講義、10月から一部対面  
・小学校での実地活動は、11月~1月末に 計8~9回の登校  
・活動内容自体も限定的
- 3年次の活動:  
・依然、コロナは「2類相当」  
・手厚いケアの不足
- 4年次:  
・コース内での情報不足  
・団体戦を構えられず

## V.まとめ

- 学校連携活動が、学生の夢の実現と教育現場の課題解決につながる。
- 大学教員側の組織としてサポート人材が必要。
- 学校現場・教育学部・教育行政による「教育実践・教員養成・教員採用」の一体化が望まれる。

## 数学教育コースの連携活動

三重大学教育学部  
数学教育講座  
田中 伸明

# これまでの／これからの 連携活動と教員養成

三重大学教育学部・教職支援センター学校連携支援部門  
守田 庸一

一歩田・横北校区連携活動及び教員養成・長期実習実績表

年度	2023.11.現在																			
	2004 11月	2007 2月	2008 5月	2009 8月	2010 11月	2011 2月	2012 5月	2013 8月	2014 11月	2015 2月	2016 5月	2017 8月	2018 11月	2019 2月	2020 5月	2021 8月	2022 11月	合計		
連携活動	2	5	5	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	10	10	10	9	9		
連携活動数	112	289	308	600	899	979	649	469	663	437	662	588	580	700	355	444	246	8510		
参加学生数(人)	11	19	24	32	34	40	39	36	35	35	38	32	32	27	24	23	28	30	644	
参加学生数(教)	7	9	10	12	13	14	13	14	14	14	14	14	14	12	11	13	13	226		
関心→実践	100	140	144	171	401	262	169	142	136	150	146	100	109	年主	91	66	66	2444		
関心→実践率	10	38	43	39	37	34	76	78	74	39	77	81	77	71	41	33	46	1130		
小規模教員養成(学修)																				
一歩田中学校					10	22	11	9	7	12	3								74	
横北中学校					15	12	11	9	8	1	1								57	
一歩田小学校											6	5	6	5	5	5	5	5	38	
栗原小学校											2	2	2	2	2	2	2	14		
白旗小学校											2	2	2	3	3	3	3	19		
前以津小学校											2	4	4	4	3	3	3	4	32	
北以津小学校											3	3	3	3	3	3	3	4	25	
西以津小学校											4	4	4	4	4	4	4	5	32	
計					10	37	25	27	16	22	25	22	21	20	0	21	21	24	231	
長期実習(学修)																				
一歩田中学校											0								1	2
横北中学校											6								1	1
一歩田小学校											6								6	6
栗原小学校																			0	0
白旗小学校											2								2	2
前以津小学校											5								5	5
北以津小学校											5								5	5
西以津小学校											6								6	6
計											10	2	12	0	0	0	0	1	1	27
長期実習(教員実習)																				
一歩田中学校																				
横北中学校																				
一歩田小学校																				
栗原小学校																				
白旗小学校																				
前以津小学校																				
北以津小学校																				
西以津小学校																				
計																				
長期実習(長期実習)																				
一歩田中学校																				
横北中学校																				
一歩田小学校																				
栗原小学校																				
白旗小学校																				
前以津小学校																				
北以津小学校																				
西以津小学校																				
計																				
長期実習(長期実習)																				
一歩田中学校																				
横北中学校																				
一歩田小学校																				
栗原小学校																				
白旗小学校																				
前以津小学校																				
北以津小学校																				
西以津小学校																				
計																				

	2006		2007		2008		2009		2010		2011		2012		2013		2014		2015		2016		2017		2018		2019		2020		2021		2022		2023		合計数	
	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	10年目	11年目	12年目	13年目	14年目	15年目	16年目	17年目	18年目	19年目	20年目	21年目	22年目	23年目	24年目	25年目	26年目	27年目	28年目	29年目	30年目	31年目	32年目	33年目	34年目	35年目			
連携校園数	2	5	5	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	169
参加学生数(延べ数)	112	289	358	630	869	579	649	469	463	437	662	588	580	760	355	444	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	266	8510	
参加大学教員数	11	19	24	32	34	40	39	36	35	35	38	32	32	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	544	
取組コース数	7	9	10	12	14	15	13	14	14	13	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	14	226	
フォーラム参加者数	100	140	144	171	401	252	159	142	136	130	130	146	120	109	99	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	65	2444	
取組プログラム数	10	38	43	89	87	84	76	78	74	59	77	81	77	71	43	39	46	58	1130																		1130	
一身田中学校	9	12	10	15	14	11	13	13	7	7	9	11	11	11	9	4	1	3	5	184																184		
一身田小学校	1	12	17	14	9	7	8	8	7	6	10	7	8	9	9	5	8	13	158																	158		
東真小学校		6	5	8	15	14	11	9	8	7	5	7	6	6	11	8	10	6	142																	142		
白雫小学校		3	4	2	1	1	1	4	2	2	7	4	8	8	4	6	3	8	68																	68		
白雫幼稚園		5	7	8	5	6	8	3	5	7	6	6	6	6	6	6	6	6	78																	78		
橋北中学校																			73																	73		
南立誠小学校																			116																	116		
北立誠小学校																			146																	146		
西が丘小学校																			72																	72		
南立誠幼稚園																			56																	56		
北立誠幼稚園																			46																	46		
複数校園合同																			17																	17		
<b>取組プログラムの主な内容</b>																																						
学生による授業・学習支援	3	10	14	25	26	22	32	30	33	28	37	36	36	62	32	33	35	494																			494	
学生による校庭行事・活動支援	1	4	6	7	4	9	7	7	4	3	6	11	20	4	3	1	4	101																			101	
学生による研究活動(卓論など)				1	4	5	4	—	1	2	2	3	—	2	—	2	2	29																		29		
大学教員を中心とした授業実演	3	10	16	26	29	32	27	25	27	19	24	25	9	—	—	—	—	273																		273		
授業研究・研修	3	11	4	22	12	11	6	10	3	4	3	6	7	3	5	2	4	116																			116	
地域・PTA活動・講演会等				1	6	1	—	1	3	—	1	—	—	—	—	—	—	13																		13		
子どもを対象とした活動				3	2	4	5	5	4	4	3	3	3	3	2	1	1	46																		46		
カルチャースクール回教	6	6	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18																		18		
<b>4週間教育実習(中学校)</b>	—	—	—	—	—	10(男)	22(男)・15(女)	11(男)・12(女)	9(男)・11(女)	7(男)・9(女)	12(男)・8(女)	3(男)・1(女)	1(男)	—	—	—	—	132																			132	
<b>4週間教育実習(小学校)</b>	—	—	—	—	—	—	—	2(男)	3(北)・4(南)	—	2(南)	—	—	—	—	—	—	159																			159	
<b>2週間教育実習(小学校)</b>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5(北)・5(南)	2(白)	6(男)・6(女)	—	—	—	—	—	24																			24	
三重大大学連携サポート組織							学習サポート室																															
						</																																

## 第4部 学生アンケート



# 令和4年(2022年)度 三重大学教育学部 地域連携活動報告書

一身田・橋北校区連携校園  
附属学校園との連携活動



⑥ 「児童」「生徒」に「接する」「支援」「活動」「必要」

これを踏まえると、このアンケートで書かれた内容を、簡単にまとめると以下のようなことになる。

授業の一環というきっかけで参加したが（質問3）、参加前と参加後で変化したのは、実際の学校現場や教員のことを知れたことや、園児・児童・生徒と関わる機会があり経験できたことだと思ふ（質問4）。ここで得られた経験は、自分にとつて、学校にまつわるいろいろな大切なことを知ることができたのは意味のあったことだと思ふ（質問5）。さらにいろいろなことを経験・体験できる活動があればまた参加してみたい（みたかった）と思ふ（質問6）。

\*1

機械学習により、364次元を3次元に次元削減を行ったためである。もちろん、主成分分析を用いて次元削減を行った場合は参与率から、ある程度、軸を推定できる。しかし、主成分分析は非線形データの次元圧縮に弱い。それが影響しているかどうかはわからないが、ここでも結果が良好ではなかった。今回は、非線形データに強いt-SNE (t-distributed Stochastic Neighbor Embedding)、そしてUMAP (Uniform Manifold Approximation and Projection for Dimension Reduction) で試し、もっとも結果が良かったUMAPを採用した。

まず、目につくのは、図2でハイライトしているように、4年生（濃い赤色）、3年生（濃い青色）の「授業」「一環」である。実際のアンケートの記述を見て確認したところ、参加しようと思つたきっかけや動機は、「授業」の「一環」で参加した、という記述が多かった。すなわち、参加しようと思つたきっかけや動機で、もっとも多かった理由は、「授業の一環」だったということになる。もっとも、図1と図2からはどの単語がどれだけのようにつながりを持っているのか、ということがわかるものの、図に記載された30の言葉が、それぞれどのようなつながりを持っているのか、ということまでにはわからない。それゆえ、図3において、その言葉のつながりを3次元上に可視化した。（なお、ここで示されている軸は、機械学習により新たに生成されたものであるため、その軸が何を意味しているかは説明できない\*1）。ただし、この図の重要な点は、それぞれの言葉がどの位置にプロットされているか、である。つまり、この図は、それぞれの言葉の位置関係を可視化し、把握しやすくしていることに意味がある。（念のため、付記するが、これはあくまで探索的なデータ解析であるため、この結果は、必ずしも絶対的なものではなく、あくまで一つの見方であることを付け加えさせていただく。）

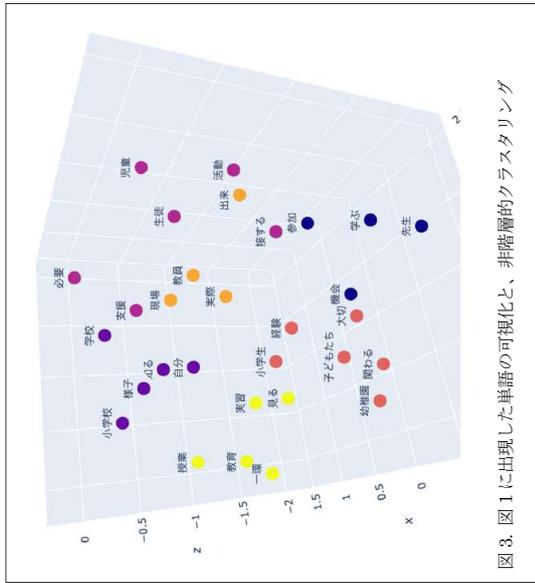


図 3. 図 1 に出現した単語の可視化と、非階層的クラスタリング

全体的に6つのグループ（クラスター）から構成されていることがわかる。そこから、4つの質問項目も含めて、このアンケートに記載された内容を簡単にまとめると、以下のようなになる。

- ① 「自分」が「学校」「小学校」の「様子」を「知る」（紫色のグループ）
- ② 「授業」の「一環」もしくは「教育」「実習」で「学校を」「みる」（黄色のグループ）
- ③ 「幼稚園」「小学生」の「子どもたち」と「関わる」「経験」が「大切」（褐色のグループ）
- ④ 「現場」の「教員」「実際」「出来る」（オレンジ色のグループ）
- ⑤ 「先生」として「参加」して「学ぶ」「機会」（青色のグループ）

#### 4—B

- 先生の姿を見て、クラスの児童をまとめるためのリーダーシップ力を身に着けたいと思うようになった。また、困っている児童に積極的に声をかける意識がついたと考えられる。
- 小学生は意外と話しかけてくれることに気づくことが出来た。そのため以前よりアルバイト先の子供と自信を持って話せるようになった。

5. 今年度、上記の学校での経験は、あなたにとってどのような意味や意義があったと考えますか？
- 質的および量的分析の結果、「A.教師になりたい思いやモチベーションが高まる機会や自身の将来の目標・キャリアを見つめ直す契機となっていること」、「B.授業やゼミの活動の一環という動機の出発点であったとしても、自分の学びたいことと参加している活動や現実とのギャップがあること」「D.活動参加が主体的な理由でない学生の自由記述は、表面的な記述にとどまること」も明らかになったため、そういった学生については、事前のニーズを把握した上で活動をマッチングすることやそういったギャップなどに対応するための事前学習および事後のフィードバックなどが必要であろう。
- 以下は、各項目の具体例である。

#### 5—A

- 教育実習では小学校に行ったので、この活動を通して中学校の様子を知ることができてよかったです。進路選択するときの材料になりました。

#### 5—B

- 特別支援学校に通う子どもたちと実際に関わった事で、子どもたちの特性や関わり方などをもっと学び、一人ひとりに合った支援の仕方などを深く考えていきたいと改めて感じることが出来た。

#### 5—C

- 自分自身のためになるような授業が多くなかった。正直、授業と言えないような授業もあった。故に、そこから私が現場に立った時は子どもたちのためになる授業を展開しようという強い気持ちを持つてた。

#### 5—D

- これからの実習の練習。また、学びの機会。
- 生徒との接し方を学ぶことができた

6. 来年度以降、連携活動に参加する機会があれば、どのような活動だったら参加したい・してみたい(卒業年次生については、参加したかった・してみたい)ですか？

質的および量的分析の結果、「自身の専門性をより拡張するような活動」「児童生徒と実際に交流できるような活動」「自身の活動への貢献・参加度が高い活動」「実際の教師の授業や学習支援の様子を知ることができている活動」など、様々な次元の活動を期待していることが明らかになった。よって、学生の参加度の段階や教育内容の幅を考慮し、学生のニーズを汲み取りながらそれらを意図的に配置するようカリキュラムの整理が必要であることが示唆された。

#### 定性的分析結果

1. 学年および所属コースについて教えてください。
- 内訳は、4年生 35 件、3年生 27 件、2年 14 件、1年 10 件、不明 5 件であった。
2. 今年度参加した連携先の学校について、1つ教えてください。
- 内訳は、一身由小および中 27 件、橋北中 2 件、栗真小 8 件、西が丘小 4 件、東橋内中 1 件、南立誠幼および小 20 件、白塚小 2 件、北立誠小 4 件、附属幼および特支 25 件であった。
3. 今年度、上記の学校での連携活動に参加しようと思っただけや動機について教えてください。
- 最も多い回答は、大学の授業やゼミ活動の一環であったが、それ以外の回答としては、「児童生徒、教師、授業などの実態を知りたい」「自身の資質・能力を向上したい」というような回答があった。
4. 今年度、上記の学校での連携活動に参加する前と参加した後で、自身について変化したことがあるらば、教えてください。
- 質的および量的分析の結果、「A.児童生徒に関する理解の深まり」、「B.教育文化内容に関する理解の深まり」、「C.教育実践を行う上での基本的な知識や技能などの獲得」、「D.将来の自身のキャリアに関する意識の高まり」、および「E.自身に関するメタ認知や協調性といった非認知能力に関する変化」が生じられたことが明らかとなった。
- 以下は、各項目の具体例である。
- 4—A
- 実際の小学生は思ったよりも人権っこいことが分かった。
  - 特別支援が必要な児童への配慮についても考えなければいけないと思うようになった。
- 4—B
- 小学生が地質のどのようなことに興味を持つのか疑問だったが、実際の児童たちの化石や地層の働きなど、地学の地質分野に関して興味関心の向き方やどのようなことに疑問を持つのかなどを実際に授業を行いながら児童に接することで知ることができた。
  - ミシンは触れやすいこと、人手の必要性、自分が何を学ばせたいかを軸にもっていないと子どもの学びを奪ってしまうことがわかるようになった。
- 4—C
- 児童相手に行う ALL ENGLISH の活動を行ったことで、児童にとっても分りにくいことを暗示的に伝える力が身に付いた。
  - ただ水泳の泳法を教えるのではなく、子どもが水泳に夢中になれるように、内容を工夫しなければならぬことを学びました。
- 4—D
- 小学校教師も魅力的だと感じた。子供に対する好感が大きくなったと思う。
  - 保母者になりたいという思いが高まった

令和4年度 地域連携活動 担当メンバー

三重大学教育学部地域連携推進委員会  
 栗原行人 (理科教育講座) 委員長  
 金子 淳 (英語教育講座) 副委員長  
 守田庸一 (国語教育講座) 運営委員  
 杉澤 学 (理科教育講座)  
 前原裕樹 (教職実践高度化専攻)  
 笹山健作 (保健体育講座)  
 水藤弘史 (保健体育講座)  
 中西正治 (数学教育講座) 陪席  
 山田志穂 (連携事務)

一身田・橋北校区連携校園  
 楠見 萌 (一身田中学校)  
 伊藤 浩 (一身田小学校)  
 小田恵理子 (栗真小学校)  
 菅原充裕 (白塚小学校)  
 岡野裕花 (橋北中学校)  
 福永美奈子 (南立誠小学校)  
 山村亮太 (北立誠小学校)  
 仲 仁司 (西が丘小学校)  
 池田雅子 (南立誠幼稚園)

附属校園  
 湯田綾乃 (附属幼稚園)  
 前田昌志 (附属小学校)  
 矢戸幹也 (附属小学校)  
 竹内慎一郎 (附属中学校)  
 中村幸友子 (附属中学校)  
 辻 義典 (附属特別支援学校)  
 三浦晶子 (附属特別支援学校)

以下は、各項目の具体例である。

- ・ 分かりやすい授業を展開することに繋がる活動
- ・ 運動会などの行事のサポート
- ・ 放課後や長期休暇中の学習支援を試みたかった
- ・ 他教科、他校種、さらに部活動などの実態や授業を広く経験できる機会があれば参加したい、
- ・ 生徒に指導だけではなく、生徒と話をする時間もあれば参加してみたい
- ・ 発達障害などをもち子どもたちと定期的に関わる機会
- ・ 子どもたちと野菜を取巻く学生側もあまり経験したことがないことを子どもたちと体験する活動があると思いたいと思う。
- ・ 今回は参観する立場であったため、自分で紙芝居を作ってそれを読み聞かせることができる機会があったら参加したいと思った。

令和4年度 三重大学教育学部地域連携活動報告書

2023年3月発行  
 編集：三重大学教育学部 地域連携推進委員会  
 発行：三重大学教育学部  
 〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

3.0.1 栗 地域連携センターのしくみ

### 地域連携校での教育実習

一 栗 栗真小学校 校長 松本 裕子

1

### 連携校での教育実習

- ・教育実習
  - 令和3年 …… 21名
  - 令和4年 …… 22名
- ・教職大学院連携校実習
  - 令和3年 …… 10名
  - 令和4年 …… 5名
- ・教職大学院在籍
  - 令和3年 …… 2名
  - 令和4年 …… 2名
- ・教育実習研究協議 教育実習研究
  - 数学教育 家政教育 柔道教育 幼児教育等での実施

2

### 連携校の教育実習で思うこと

- ・実習生には、使命感と情熱をもって、子どもに対してほしい。
- ・学校目標など実習校がそれぞれ大切にしている教育活動について理解し、意識して実習に臨んでほしい。(3つの異なる ICT 課題解決学習→)
- ・学校と学生が、お互いの様子を理解し合っておくことは、とても大切。
- ・教育実習に向けての活動(子どもも理解などの経験)をしてほしい。

3

### どんな教師になりたいのか、めざす教師像を見つめる場にしてほしい！

4

### 連携校での学校支援の例

【講師】① 栗真小学校(栗真) …… 栗真小学校(栗真) 校長 松本裕子  
 ② 栗真小学校(栗真) …… 栗真小学校(栗真) 校長 松本裕子  
 ③ 栗真小学校(栗真) …… 栗真小学校(栗真) 校長 松本裕子

【講師】① 栗真小学校(栗真) …… 栗真小学校(栗真) 校長 松本裕子  
 ② 栗真小学校(栗真) …… 栗真小学校(栗真) 校長 松本裕子  
 ③ 栗真小学校(栗真) …… 栗真小学校(栗真) 校長 松本裕子

【講師】① 栗真小学校(栗真) …… 栗真小学校(栗真) 校長 松本裕子  
 ② 栗真小学校(栗真) …… 栗真小学校(栗真) 校長 松本裕子  
 ③ 栗真小学校(栗真) …… 栗真小学校(栗真) 校長 松本裕子

5

### 一人ひとりの子どもに寄り添った支援



6

## 第3部 地域連携シンポジウム



**三重大学に期待すること**

- ・今の時代は、企業側として、教育機関は期待していると思っ  
てほしい。
- ・強い教育者意識を持って、教育者にも連携活動にも参加できる学生  
人材を育ててほしい。連携校も、**両者ウィンウィン**の関係で関わら  
ない。

13

**一人ひとりの課題への支援**

7

**支援が必要な子どもへの関わり**

8

**出前授業**

9

**連携協力17年間の実績**

【教育委員】  
 ①4.巡回実習…2010年上りの～4校 全24名  
 ②2.巡回実習…2014年上りの～5校 全21名  
 【学校支援活動】  
 ①参加校数…全151 ②参加学生…全834名  
 ③参加大学教員…全48名 ④参加コース等…200 ⑤活動数…1028  
三重大学の教育活動は、出前授業の延長上で行っています

10

**連携活動の目的と現状**

**目的**は…  
 「大学教育と連携校教育/学生育成と学校支援で、**ウィンウィン**に！」  
**現状**は…  
 「学生育成(教育委員)と学校支援」が、**ギブ&テイク?**  
 大学と連携校が、互いにおまかせに?  
 内容部の検討・協議・改善等の話し合いは?

11

**ウィンウィンになるために**

**教育委員と学校支援活動とが、連鎖した活動になれば…**

例えば…連携校で実習する学生は、3年生までは、連携校で連携活動の一環として、学校支援活動(ボランティア活動)を経験する。  
 例えば…実習の後、4年生では、原則した連携校でボランティア活動を引継ぎ、教員としての質の向上を図る。

12

146

18

145

17

# 「新たな教師の学び」を支える研修体制の構築

令和5年度予算額 13億円  
 (前年度予算額 14億円)  
 令和4年度第2次補正予算額 27億円



## 背景・課題

- 令和4年の教育公務員特例法の改正により、令和5年4月から、各教師の研修履歴を記録するとともに、この記録に基づき、教師の資質向上に関する指導助言等を行う仕組みが制度化された。
- この新たな研修制度の下で、教師の個別最適な学び、協働的な学びを実現するためには、デジタル技術を活用し、効果的な記録作成・閲覧を可能とするとともに、豊富な研修コンテンツの中から、いつでも、どこからでも必要な研修を受講できるプラットフォームを整備する必要がある。その際、学校DXの一環として、マイナンバーの活用も見据えつつ、別途構築する教員免許管理システム等との連携を可能とする必要がある。
- 同時に、喫緊の教育課題や、大学等が免許更新講習として作成してきたコンテンツを発展させるなどオンライン研修コンテンツを抜本的に拡充する必要がある。
- また、**教員研修の高度化**を進め、研修をより効果的に進めるためのモデルを開発することで、全国的な**研修観の転換・定着**を図る必要がある。
- このような新たな教師の学びを支える全国的な研修として、(独)教職員支援機構の機能強化を図り、次世代の教師の学びを実現していく。

## 事業内容

### (1) 教員研修の高度化支援

#### ① 研修受講履歴記録システムおよび研修プラットフォームの構築

##### ○ 研修受講履歴記録システムの構築

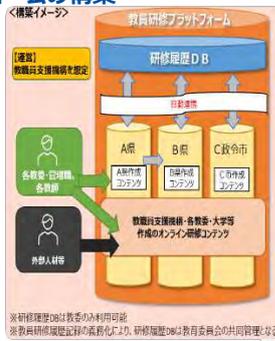
91百万円(93百万円)【令和4年度第2次補正予算】

- ・教師の研修受講履歴を記録する新たなシステムを国が主導して開発し、効率的な記録作成、管理、閲覧を可能にする。

##### ○ 教員研修プラットフォームの構築

184百万円【令和4年度第2次補正予算】

- ・教職員支援機構、教育委員会、大学、民間等が提供する研修コンテンツを一元的に収集・整理・提供するプラットフォームを構築し、いつでも、どこからでも必要な研修を受講できる環境を整備する。
- ・研修受講履歴記録システムと自動連携し、教員育成指標との関連の「見える化」や必要な研修を検索する機能等を整備する。



### ② 教員研修高度化推進支援事業

#### ○ オンライン研修コンテンツの開発

1,220百万円【令和4年度第2次補正予算】

- ・ICT活用、特別支援、外国語教育など喫緊の教育課題や、教師のキャリアステージ・校務分掌に応じて、成果確認も併せたオンライン研修コンテンツを重点的に開発。
- ・大学等が持つ専門性やリソースを活かし、個々の教師の強みや専門性、興味関心に応じた多様な研修コンテンツを開発。
- ・外部人材等の入職を支援するため、基礎的な知識等を身に付けることができる学習コンテンツを開発。

#### ○ 教員研修の高度化モデル開発

1,031百万円【令和4年度第2次補正予算】

- ・教育委員会・学校法人と大学等が協働して、教員研修の高度化のためのモデル開発を行い、全国的な研修観の転換・定着を図る。
- 【調査研究のテーマ例】
- ・教員研修の成果確認と評価モデルの確立に関すること
  - ・校内研修や授業研究の高度化に関すること
  - ・教師と管理職等の「対話と奨励」プロセスの最適化に関すること
  - ・教育委員会による学校へのサポート機能の充実に関すること

### (2) (独)教職員支援機構の機能強化

#### ○ 運営費交付金 1,263百万円(1,223百万円)の内数

- ・オンライン研修の開発・充実や、新たな指導法や研修手法の開発・普及等を基幹的に担う「次世代型教師研修開発センター(仮称)」を設置。
- 施設整備費補助金 186百万円【新規】【令和4年度第2次補正予算】
- ・研修受講者が安全・安心に研修に専念できる研修・宿泊環境の形成及び災害時の一時避難所としての環境整備を図るため、老朽化している施設について必要な改修・修繕を実施。

### (3) 新任校長オンライン集合ハイブリッド研修

#### ○ 新任校長研修事業 200百万円(19百万円)

- ・新任校長に対して、学校運営や人材育成に係るマネジメント力向上に向けた研修を実施するとともに、校長同士のネットワーク構築を図る。

# 教員研修高度化推進支援事業

令和4年度第2次補正予算額(案) 23億円



## 背景・課題

- 「新たな教師の学び」を実現し、教師が合理的かつ効率的に研修を受講できるようにするため、オンライン研修コンテンツを開発・充実させる。
- ・教師が教員育成指標に沿った学びをより充実したものとするため、多様な主体がオンライン研修コンテンツを開発する取組を支援し、より合理的かつ効果的な研修実施を推進することが必要。
- ・教師不足の解消等に資するため、外部人材等(教員免許状を保有するものの教職には就いていない者も含む)の採用前後に活用できるよう、教壇に立つ上で必要な知識技能を習得できる、オンライン研修コンテンツの開発が必要。
- ⇒ 開発した研修コンテンツは、文科省が構築する「教員研修プラットフォーム」に掲載。
- 教育委員会と大学等が協働して研修高度化を進める取組をモデル開発し、成果の横展開を図ることで、全国的な研修観の転換・定着を図る。
- ・研修の合理化・効率化に資する研修高度化への教育委員会・学校での取組を推進するため、教育委員会と大学等の協働により、各地域における実情に合わせた研修高度化の取り組みをモデル開発し、成果を横展開することが必要。

## 事業内容

### 1. 「新たな教師の学び」に対応したオンライン研修コンテンツ開発【1,220百万円】

#### (1) 組織的な学びのための研修コンテンツ開発

##### ① 喫緊の教育課題に対応する研修コンテンツ開発

ICT活用、特別支援、外国語教育、幼児教育、わいせつ事案対応等の喫緊の課題に対して、基礎編から応用編までの段階別の研修コンテンツ開発  
 【<6百万円×84コンテンツ>×2/3=336百万円】

##### ② キャリアステージ・校務分掌に対応する研修コンテンツ開発

研修主事、生徒指導主事、進路指導主事、道徳教育推進教師など、キャリアステージに応じて校務分掌を担う教師に対して、その職務を行うために必要な研修コンテンツ開発  
 【<6百万円×36コンテンツ>×2/3=144百万円】

#### (2) 教師の多様な研修ニーズに対応する研修コンテンツ開発

大学等が持つ専門性やリソースを活かし、様々な個々の教師の強みや専門性、興味関心など多様なニーズに対応する研修コンテンツ開発  
 【<6百万円×150コンテンツ>×2/3=600百万円】

#### (3) 外部人材等に対応する研修コンテンツ開発

最新の知識や現場の状況等を学び直す体系的かつ実際的な研修コンテンツ開発  
 ・特別免許状や特別非常勤講師制度を活用して教壇に立つ外部人材が、専門性に係る指導を充実するための研修コンテンツを開発  
 【<6百万円×35コンテンツ>×2/3=140百万円】

※補助率3分の2

※修了時に成果確認を行い、履修証明を与えるなど、学びの成果を可視化する取組を推進

### 2. 教員研修の高度化モデル開発【1,031百万円】

#### ○ 教育委員会と大学等が連携した教員研修の高度化モデル開発

【29百万円×全国9ブロック×4テーマ】

- ・各地域の実情に合わせた研修高度化の取組をモデル化
- ・成果を共有することで全国的な研修観の転換・定着を図る
- ※委託先：大学及び教育委員会

#### 【調査研究のテーマ例】

- ・教員研修の成果確認と評価モデルの確立に関すること
- ・校内研修や授業研究の高度化に関すること
- ・教師と管理職等の「対話と奨励」プロセスの最適化に関すること
- ・各学校の研修主事への支援など教育委員会による学校へのサポート機能の充実に関すること

#### アウトプット(活動目標)

- ・様々な分野のコンテンツの開発
- ・教師や任命権者等の負担軽減
- ・外部人材等が学校現場へのセカンドキャリアとして入るサポート
- ・研修高度化の取組の進展

#### アウトカム(成果目標)

- ・教師の資質向上の促進
- ・外部人材等の採用者数の増加
- ・研修観の転換・定着の進展

教員研修の高度化に資するモデル開発事業 事業計画書

1) 実施体制		
所属部署・職名	氏名	役割分担
三重大学・学長	伊藤 正明	三重大学における事業実施の総括
三重大学教育学部・学部長	伊藤 信成	三重大学教育学部における事業実施の総括
三重大学教育学部・学部長補佐 (地域連携担当)	守田 庸一	三重大学教育学部と津市教育委員会との連絡・調整及び授業研究観の転換に関する調査・研究
三重大学教育学部・附属教職支援センター長	岡野 昇	教職員の研修高度化に関する調査・研究
津市教育委員会事務局・教育研究支援課 教育研究・情報教育担当副参事	堀内 晋三	津市教育委員会における事業実施の総括
津市教育委員会事務局・教育研究支援課 教育研究・情報教育担当副参事	伊藤 信介	津市教育委員会と三重大学教育学部との連絡・調整
津市教育委員会事務局・教育研究支援課 教育支援担当主幹	本多 雅子	教職員の研修（各学校における校内研修）に関する調査・研究
三重大学教育学部・事務長	河村 俊男	企画実施に関わる事務連絡

2) 課題認識	<p>教職は誰もがができるイージー・ワークでもなければ、決まったことさえ行なっていればよいルーティン・ワークでもない。知識基盤社会と生涯学習社会が到来した今日において、教職とはより高度で複合的な専門的知識が要求される専門職である。故に、21世紀の社会の変化に伴って、教師は生涯学び続けることなしには職務を遂行できなくなり、教師は生涯にわたって研修を続ける「学びの専門家」としての成長が求められる。</p> <p>そのためには、校内研修における教職員が持つ授業研究観の転換が急務である。効果的な授業の実践や有能な教師の育成を目的とする従来の授業研究観から離脱し、子どもや学ばせの権利の実現と質の高い学びの創造を目指し、思慮深い教師を育て、同僚性を構築しながら、誰もが主人公となる民主的な学校と教室をつくるという授業研究観への転換である。</p> <p>個々の教職員の授業研究観を変えてゆくとともに、学校内あるいは学校間における新たな授業研究の方法を明らかにすることは、今日における教職員の個別最適な学びと協働的な学びの両方をもたらすであろう。デジタル技術による授業記録等のアーカイブ化が可能になった現在、そうしたデジタル技術の活用を前提とした教員研修の高度化が求められている。デジタル技術によってもたらされるべきは、教育実践の共有だけでなく、理論（研究）と実践の融合の高度化である。そうした高度化に際しては、教職員やその指導を担う者の深く広い専門的知見が必要となる。</p> <p>本事業は、上述の課題認識に基づき、教職員の授業研究観の転換を促進させるとともに、教員研修高度化モデルを開発するものである。</p>
---------	---

実施テーマ	三重大学と津市教育委員会との連携による教員の授業研究観の転換の促進及び教員研修高度化モデルの開発
-------	--

選択テーマ	テーマ2：教員研修や授業研究等の高度化に関すること
企画の概要① (200字以内)	三重大学と津市教育委員会は、平成16年締結の協定に基づき、教職員の研修や教育活動の支援等に関する強固な連携を継続してきた。本企画では、その実績に基づき、教職員が持つ従来の授業研究観を転換させる校内研修のあり方を提案する。デジタル技術による授業記録等のアーカイブも活用して、各教職員の個別最適な学びと各学校・学校間での協働的な学びを両立し、理論と実践を融合させた教員研修高度化モデルを開発する。
企画の概要②	別紙様式2のとおり。

事業実施機関・団体名	国立大学法人三重大学
代表者	名 三重大学長 (ふりがな) いとう まさあき 氏 伊藤 正明
契約者	名 三重大学長 (ふりがな) いとう まさあき 氏 伊藤 正明
事業実施責任者	所属部署・職名 三重大学教育学部・学部長 (ふりがな) いとう のぶなり 氏 伊藤 信成 電話番号 059-231-9206
事務連絡担当者	所属部署・職名 三重大学教育学部チーム・事務長 (ふりがな) かむから としお 氏 河村 俊男 住 所 〒514-8507 三重大津市栗真町屋町 1577 電話番号 059-231-9345 E-mailアドレス edu-ml@ab.mie-u.ac.jp

## 【テーマ2:教員研修や授業研究等の高度化に関すること】

## 【三重大学】

## 3) 事業の目的

本事業の目的は以下の通りである。

- ① 個々の教職員が持つ従来の授業研究観を転換させる授業研究の方法を明らかにすること。
- ② ①に基づき、理論と実践を融合させた教員研修高度化モデルを開発すること。

## 目的・概要等

教員研修や授業研究を高度化するにあたり、まずは従来の授業研究観の転換が必要である。本企画では、そのための校内研修のあり方を提案する。デジタル技術による授業記録等のアーカイブも活用して、教職員の個別最適な学びと協働的な学びを両立し、理論と実践を融合させた教員研修高度化モデルを開発する。

## 実施方法等

- (1)パイロット・スクールの授業研究等に、大学教員、津市教育委員会指導主事・学校アドバイザーがチームとして継続的に関与する。
- (2)パイロット・スクールにおいて、タブレット等を用いた研修の日常化をはかり、専門的知見の深化・拡充を促す。
- (3)パイロット・スクールにおいて、三重県教育委員会「校長及び教員としての資質の向上に関する指標」に基づいたヒアリング調査を行なう。
- (4)①～③に基づき、教職員が持つ授業研究観を転換させる授業研究の方法を考案する。
- (5)パイロット・スクールにおいて、④で考案した授業研究を実施し、アーカイブする。
- (6)⑤をふまえて、教員研修高度化モデルを開発する。
- (7)パイロット・スクール以外の学校に、④で考案した授業研究の方法と、⑥で開発した教員研修高度化モデルを公表する。

## 成果目標等

- ① 個々の教職員の授業研究観を転換させる授業研究の方法を、具体的かつ一般化しうるものとして考案し、公表する。
- ② ①に基づき、理論と実践を融合させた教員研修高度化モデルを開発し、公表する。

## 2023・2024年度 教育研究プロジェクト

三重大学教育学部附属教職支援センター  
研修開発支援部門

### 2023・2024年度の教育研究プロジェクト

三重大学教育学部附属教職支援センター  
2023・2024年度 教育研究プロジェクト

教職支援センターでは、2023・2024年度に次の2プロジェクトを展開する。

Project  
1

#### 教育の情報化に関する教育研究プロジェクト（第2期）

三重県の「教育の情報化」に関わる教育研究を通じて、児童・生徒の情報活用能力の育成と、これに必要なICT活用能力を有する教師の養成・育成に取り組み、教育の情報化の充実を図る。

Project  
2

#### 教師教育研究プロジェクト

教師の養成、現職教師を育成する教師教育の実践・研究機関としてのグランドデザインを構想する。

# 教育の情報化に関する教育研究プロジェクト

## (第2期)

27

2

Project  
1

教育の情報化に関する教育研究プロジェクト（第2期）

## Vision と Mission

三重大学教育学部附属教職支援センター  
2023・2024年度 教育研究プロジェクト



### Vision

地域の教育機関との協働により、教育の情報化に取り組む教師の養成・育成拠点を構築し、情報社会を創造する児童・生徒を育成する。



### Mission

三重県の「教育の情報化」に関わる教育研究を通じて、児童・生徒の情報活用能力の育成と、これに必要なICT活用能力を有する教師の養成・育成に取り組み、教育の情報化の充実を図る。

## セミナーの開催

## 評価方法の開発

## 養成・育成プログラムの開発

## 情報発信と共有を通じ学びの場を構築

- 教育の情報化に関する有識者や先駆的に取り組む自治体・学校などから学ぶ体制の構築。
- 三重県内の教育関係者（小中学校、教育委員会、大学等）の学びあう場の構築。

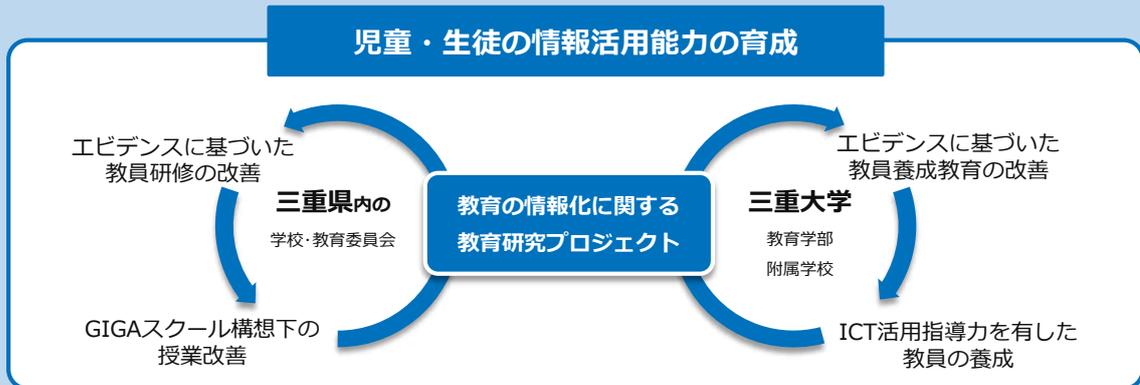
## 情報活用能力の評価方法の開発

- 情報活用能力の育成指標やその到達度の評価方法を開発し、児童生徒の情報活用能力の育成と、この能力を育成するための学校や授業のあり方について研究する。

## 地域と協創する教育機関へ

- 地域の学校、教育委員会との対話を通じた教育研究プロジェクトと位置付け、児童生徒の能力育成と、これを実現できる教師の養成・育成研修プログラムを開発する。

## 児童・生徒の情報活用能力の育成



## 成果・課題

- 第1期では、小学生を対象とした情報活用能力の調査方法を開発した。具体的には、小学校6年生を対象とし、国語、算数に関する情報活用能力と、質問調査による情報活用に関する実態調査を実施し、評価することができた。
- 一方、中学生を対象とした調査方法を開発するに至らなかった。
- また、問題解決や探究活動場面でのデジタル機器の活用などについても調査が必要である。

## 取組案

- 第1期で取り組んだ小学校の調査研究を継続し、児童の能力の変容を調査する。
- 中学生を対象とした評価問題・質問項目を開発し、調査を実施する。
- 問題解決・探究における情報活用能力について調査する。

担当	メンバー
全体	◎中西康雅、岡野 昇、田中伸明、石谷禎孝、 安藤明伸
セミナー	◎中西康雅、菊池紀彦、宮岡邦任
国語	◎守田庸一、和田 崇、楠本涼子、東川健太
算数・数学	◎田中伸明
質問紙調査	◎中西良文、前原裕樹
授業づくり	◎岡野 昇、山守一徳、長井直己、田中克幸、 橋本有弥、藤永敬介、前田昌志、若林徳亮、 吉水慶太、立岡一宏、脇 清人、市野 嘉也、 飯田智也

◎：代表

## 教師教育研究プロジェクト



## Vision

地域から求められる教師教育の実践・研究拠点を構築する。



## Mission

本学の教師教育の実態調査や、教師教育者の理論や実践に学ぶことを通じ、教員養成機関及び現職教員の教育機関としてのグランドデザインを作成する。

Hargreavesは、教職には個人主義、現在主義、保守主義が内在することを指摘しているが、教師教育者である私たち自身がこのような課題を抱えていないでしょうか。

教職に対し厳しい状況が続き、十分に改善することができてこなかった現状を鑑み、私たちは協働して相互に学び、教師教育の未来をデザインすることこそが求められているのではないのでしょうか。

### 理解する



### 学びあう



### 創造する

#### 本学部の教師教育の実態は？

- 私たちは教師教育の実践者であり、研究者です。  
教員養成課程が厳しい現状にある今こそ、本学部の教員養成課程の現状を調査・分析して理解することが必要ではないでしょうか。
- 具体的な取組案
  - ✓ 本学学生対象の調査研究
  - ✓ カリキュラム研究 など

#### 教師教育者として学び、語り合う

- 教職の魅力が問われる一方、私たち教師教育者の専門性も厳しく問われています。  
文献や実践、そして教師教育の研究者から学び、教師教育について語り合いませんか。
- 具体的な取組案 **学びカフェの発展**
  - ✓ 読書会
  - ✓ 幼小連携
  - ✓ 学校現場での研修

#### 三重大大学が取り組む

##### 教師教育のグランドデザイン

- 本学部の取組は遅れているとの指摘もありますが、他大学の取組をそのまま導入すれば問題は解決するのでしょうか。  
教師教育者である私たち自身が本学部の現状を理解し、教員養成機関また現職教員の教育機関としての未来を切り拓く必要があるのではないのでしょうか。

取組案

- 教育学部生、現職教員を対象とした実態調査
- 文献や授業実践をもとに学びあう「学びカフェ」の実施
- 教員養成課程、教員研修機関としての在り方を検討するグランドデザインの作成

担当	メンバー
全体	◎岡野 昇、中西康雅、石川照子、飯田幸雄、 佐藤 学、秋田喜代美、鈴木悠太
調査	◎園部友里恵、田中里佳
読書カフェ	◎前原裕樹、大日方真史、中西良文
幼小連携	◎早川ひろみ、◎長井直己、富田昌平、 杉澤久美子、稲垣万優子、小川陽平、 谷 知泰、辻本顕二郎、若林徳亮、松谷富美子
学校現場での研修	◎加納岳拓、守田庸一、田中克幸、橋本有弥、 藤永敬介、前田昌志、西橋美帆、川岸 譲
グランドデザイン	◎岡野 昇、加納岳拓、菊池紀彦、宮岡邦任、 石川照子

津市立橋北中学校（岡野先生）  
津市立西が丘小学校（守田）

◎：代表

三重大教育学部附属教職支援センター  
教育の情報化に関する教育研究プロジェクト(第2期) メンバー一覧

担当	代表	氏名	所属	職名
全体	◎	中西康雅	三重大教育学部附属教職支援センター 三重大教育学部	研修開発支援部門長 教授
		岡野 昇	三重大教育学部附属教職支援センター 三重大教育学部	センター長 教授
		田中伸明	附属学校企画経営室 三重大教育学部	副室長 教授
		石谷積孝	三重大教育学部附属教職支援センター 附属学校企画経営室	兼任講師 兼務教員
		安藤明伸	三重大教育学部附属教職支援センター 広島工業大学	教授
	◎	中西康雅	三重大教育学部附属教職支援センター 三重大教育学部	研修開発支援部門長 教授
		菊池紀彦	三重大教育学部附属教職支援センター 三重大教育学部	副センター長 教授
		宮岡邦任	三重大教育学部附属教職支援センター 三重大教育学部	教員養成支援部門長 教授
		守田庸一	三重大教育学部附属教職支援センター 三重大教育学部	学校連携支援部門長 教授
	国語		和田 崇	三重大教育学部
楠本涼子			三重大教育学部附属中学校	教諭
		東川健太	三重大教育学部附属中学校	教諭
◎		田中伸明	附属学校企画経営室 三重大教育学部	副室長 教授
		須藤淳	三重大教育学部附属教職支援センター 三重大教育学部附属中学校	兼務教員 教諭
		林大輔	三重大教育学部附属中学校	教諭
		山田昌孝	三重大教育学部附属中学校	教諭
◎		中西良文	三重大教育学部	教授
			三重大教育学部附属教職支援センター	兼務教員

授業づくり	前原裕樹	三重大教育学部附属教職支援センター 三重大大学院院教職実践高度化専攻	研修開発支援部門 准教授	
	◎ 岡野 昇	三重大教育学部附属教職支援センター 三重大教育学部	センター長 教授	
		山守一徳	三重大教育学部	教授
		長井直己	三重大教育学部附属小学校	指導教諭
		田中克幸	三重大教育学部附属小学校	教諭
		橋本有弥	三重大教育学部附属小学校	教諭
		藤永敬介	三重大教育学部附属小学校	教諭
		前田昌志	三重大教育学部附属小学校	教諭
		若林徳亮	三重大教育学部附属小学校	教諭
		吉水慶太	三重大教育学部附属中学校	教諭
		立岡一宏	三重大教育学部附属特別支援学校	教諭
		脇 清人	松阪市教育委員会事務局 子ども支援研究センター	指導主事
		市野嘉也	津市教育委員会事務局	指導主事兼副主幹
		飯田智也	四日市市教育委員会教育支援課	指導主事

三重大学教育学部附属教職支援センター  
教師教育に関する教育研究プロジェクト メンバー一覧

担当	代表	氏名	所属	職名		
全体	◎	岡野 昇	三重大学教育学部附属教職支援センター 三重大学教育学部	センター長 教授		
		中西康雅	三重大学教育学部附属教職支援センター 三重大学教育学部	研修開発支援部門長 教授		
		石川照子	附属学校企画経営室 三重大学教育学部	副室長 教授		
		飯田幸雄	附属学校企画経営室	特任教授		
		佐藤 学	東京大学	名誉教授		
		秋田喜代美	学習院大学	教授		
		鈴木悠太	東京工業大学	准教授		
		調査	◎	園部友里恵	三重大学大学院教職実践高度化専攻 三重大学教育学部附属教職支援センター	准教授 兼務教員
				田中里佳	三重大学大学院教職実践高度化専攻 三重大学教育学部附属教職支援センター	教授 兼務教員
				前原裕樹	三重大学教育学部附属教職支援センター 三重大学大学院教職実践高度化専攻	准教授
				中西良文	三重大学教育学部 三重大学教育学部附属教職支援センター	教授 兼務教員
				大日方真史	三重大学教育学部	准教授
		幼小連携	◎	早川ひろみ	三重大学教育学部附属幼稚園	教頭
長井直己	三重大学教育学部附属小学校			指導教諭		
富田昌平	三重大学教育学部			教授		
杉澤久美子	三重大学教育学部附属幼稚園			園長		
小川陽平	三重大学教育学部附属小学校			教諭		
稲垣万優子	三重大学教育学部附属小学校			教諭		
谷 知泰	三重大学教育学部附属小学校			教諭		
辻本顕二郎	三重大学教育学部附属小学校			教諭		

学校現場での 研修	若林徳亮	三重大学教育学部附属小学校	教諭
	松谷寛美子	津市教育委員会事務局	幼児教育アドバイザー
	◎ 加納岳拓	三重大学教育学部	准教授
	守田庸一	三重大学教育学部附属教職支援センター 三重大学教育学部	学校連携支援部門長 教授
	田中克幸	三重大学教育学部附属小学校	教諭
	橋本有弥	三重大学教育学部附属小学校	教諭
	藤永敬介	三重大学教育学部附属小学校	教諭
	前田昌志	三重大学教育学部附属小学校	教諭
	西橋美帆	津市教育委員会事務局	指導主事兼副主幹
	川岸 謙	津市教育委員会事務局	指導主事兼副主幹
	◎ 岡野 昇	三重大学教育学部附属教職支援センター 三重大学教育学部	センター長 教授
	石川照子	附属学校企画経営室 三重大学教育学部	副室長 教授
	菊池紀彦	三重大学教育学部附属教職支援センター 三重大学教育学部	副センター長 教授
	宮岡邦任	三重大学教育学部附属教職支援センター 三重大学教育学部	教員養成支援部門長 教授
	加納岳拓	三重大学教育学部	准教授

三重大学教育学部附属教職支援センター  
教師教育研究プロジェクト

創造  
協働  
理解

# 第1回 夏のセミナー

開催日 2023年8月23日(水)

会場 三重大学教育学部専門校舎1号館4階大会議室

■開会の辞: 鶴原清志 (三重大学理事・副学長)

🗨️ 特別講演 13:30-15:30  
「教師教育のグランドデザイン」  
佐藤 学 先生 (東京大学名誉教授)

📖 読書会 15:30-17:30  
佐藤先生と『新版・学校を改革するー学びの共同体の構想と実践』  
(岩波ブックレット: 佐藤 学著)を読む  
\*読書会に参加される方は、当日までに文献を読んできてください。

■閉会の辞: 岡野 昇 (三重大学教育学部附属教職支援センター長)

【参加申込】  
定員に達しましたので申込受付を終了しました。多数のご応募ありがとうございました。

お問い合わせ:  
三重大学教育学部附属教職支援センター  
cftss@edu.mie-u.ac.jp

国立大学法人 三重大学



2023.11.17 西が丘小学校  
中学年部提案授業 (国語)



小学校国語科における  
ICT活用について

連携校実習報告  
～ 津市立西が丘小学校 ～



43

教科教育高度化分野（国語）  
223P009



安達加弥乃

報告の流れ



01  
実習の目的

02  
実習校について

03  
実習校での取組

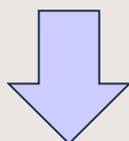
04  
全体の考察・課題



44

## ①実習の目的

- ・ICT活用が国語科で育成を目指す資質・能力のために有効な手立てとなっているか考察する。
- ・シンキングツールを活用することで子どもたちの思考スキルにどのような影響をもたらすか、自分の考えをもつための効果的な支援となっているか考察する。



そのために

国語科の授業におけるICT活用場面を観察する

45

## ③実習校での取組

### 授業観察（表は国語科のみ）

学年	教材名（○は観察時間、領域）	時間
1年	うみのかくれんぼ①①（読） くじらぐも③（読） かん字のはなし① のはらうた①	16時間
2年	お手紙④（読）	4時間
3年	はんで意見をまとめよう①（話・聞） 秋のくらし① 修飾語①	3時間
4年	クラスみんなで決めるには②（話・聞） 世界にほこる和紙①（読）	3時間
5年	よりよい学校生活のために②（話・聞） 固有種が教えてくれること①（読）	3時間
6年	みんなで楽しく過ごすために②（話・聞） メディアと人間社会・大切な人と深くつながるために①（読）	3時間
特別支援	言葉の変化①（6年）	1時間

計33時間

46

### ③実習校での取組

01

話し合い活動  
における  
ICT活用



02

1年生の  
「書く」力を育てる  
日常的な取り組み



03

1年生  
『うみのかくれんぼ』  
におけるシンキング  
ツール活用



47

### 話し合い活動におけるICT活用

話し合いでタブレットを  
使うと全然顔  
を見ないなあ・・・



- ・机を使わないことでお互いの顔が見やすくなり、目を合わせることが増える。
- ・話し合う場の配置を工夫することで相手の顔や目を見なくなる課題は解消されるのではないか。

机を使わず膝にタブレット  
を乗せて話し合い活動に  
取り組んでいる。



48

### ③実習校での取組

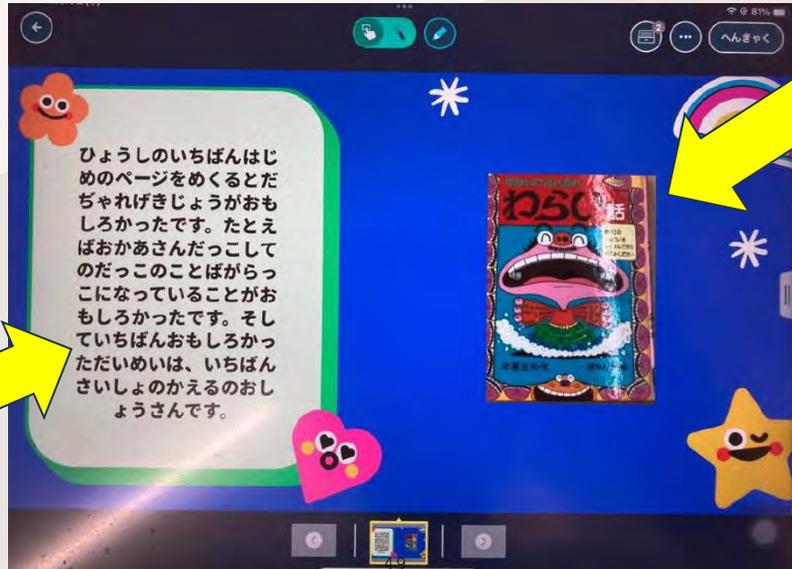
#### 1年生の「書く」力を育てる日常的な取り組み

##### ①読書カードに本の写真と読んだ感想を書く。

週に一度の  
図書の日

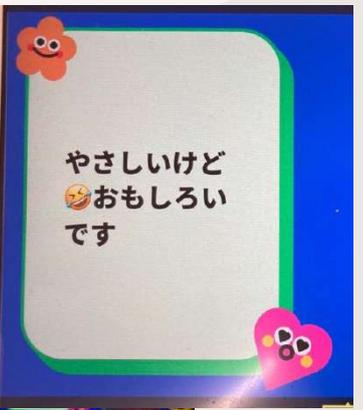
表紙を端末  
で撮影する

感想



#### 1年生の「書く」力を育てる日常的な取り組み

##### ①読書カードに本の写真と読んだ感想を書く。



取組みを始めて間もない頃

## 1年生の「書く」力を育てる日常的な取り組み

### ①読書カードに本の写真と読んだ感想を書く。



ひょうしのいちばんはじめのページをめくるとだ  
 ちゃれげじょうがおもしろ  
 かったです。たとえ  
 ばおかあさんだっこして  
 のだっこことばがらっ  
 こになっていることがお  
 ももしろかったです。そし  
 ていちばんおもしろかつ  
 ださいよのかえるのおし  
 ょうさんです。



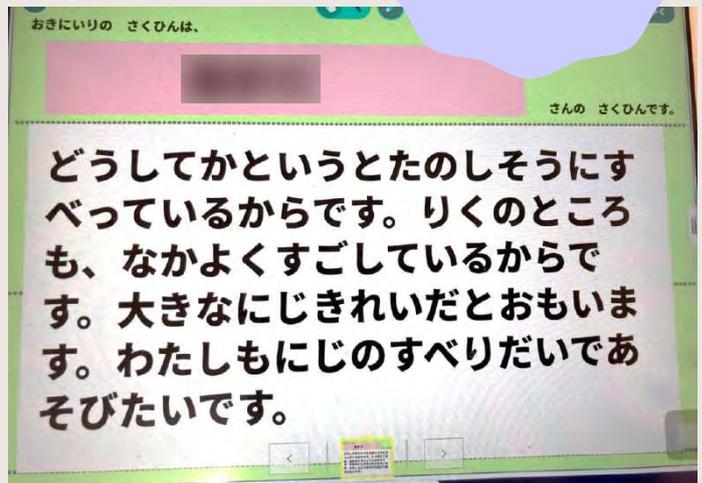
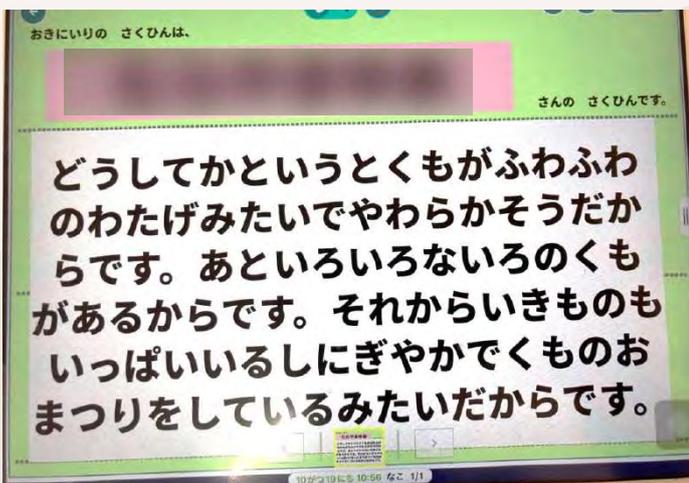
画面の全体共有を繰り返すことで先生から  
 「詳しく書いて」と言わなくても自然に文の量が増える。

**取り組みを始めて二週間後**

## 1年生の「書く」力を育てる日常的な取り組み

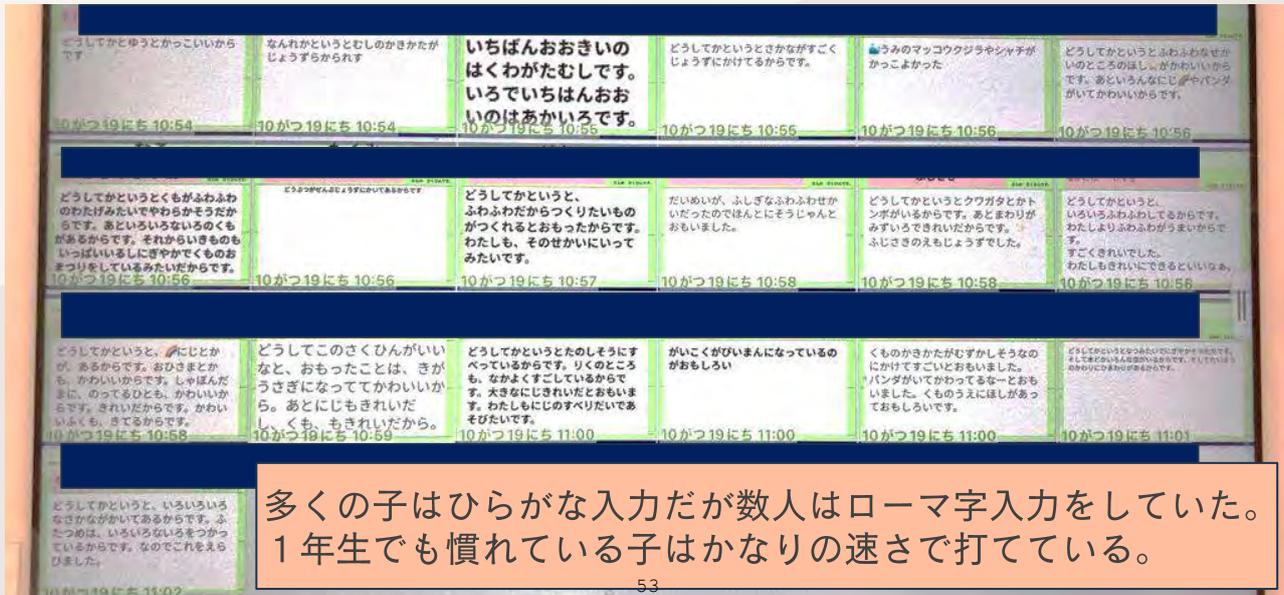
### ②図工の鑑賞カードに友だちの作品の感想を書く。

おきにいりの  
 作品を友だちの  
 絵から一枚選ぶ



## 1年生の「書く」力を育てる日常的な取り組み

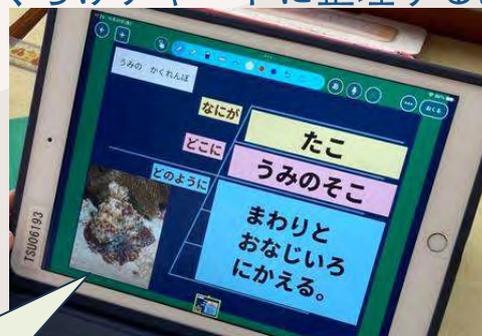
### ②図工の鑑賞カードに友だちの作品の感想を書く。



## 1年生『うみのかくれんぼ』におけるICT・シンキングツール活用

### (2)問いと答えを全体で確認し、個人でくらげチャートに整理する。

- ・「なにが」「どこに」「どのように」に当てはまる言葉、文章を入力する。
- ・本文の3種類、任意の2種類を合わせた計5種類の生き物をくらげチャートにまとめた。



先生から写真が3枚送られ、「その生き物の隠れ方がより伝わるような写真を1枚選ぼう」

相手意識をもって情報を選択する

全体共有



## 1年生『うみのかくれんぼ』におけるICT・シンキングツール活用

(3)5つの生き物の中で一番隠れ名人だと思う生き物を選んで理由を書く。

### よく行われる活動

- ①生き物を一つ選ぶ。
- ②選んだ理由を書く。



例) わたしがえらんだいきものはもくずしよいです。どうしてかというとはさみでかいそうをきってかいそうにへんしんするからです。

本文の書きぬき

### レベルアップした活動

- ①生き物を一つ選ぶ。
- ②選んだ理由を書く際に選ばなかった生き物と比較する。



例) わたしがえらんだいきものはヤッコエイです。どうしてかというとはまぐりはかくれるのにじかんがかかるけどヤッコエイはいつしゅんだからです。たこはすがたが見えているけれどヤッコエイはすなの中にはいつて見えなくなるからです。

自分の考え

55

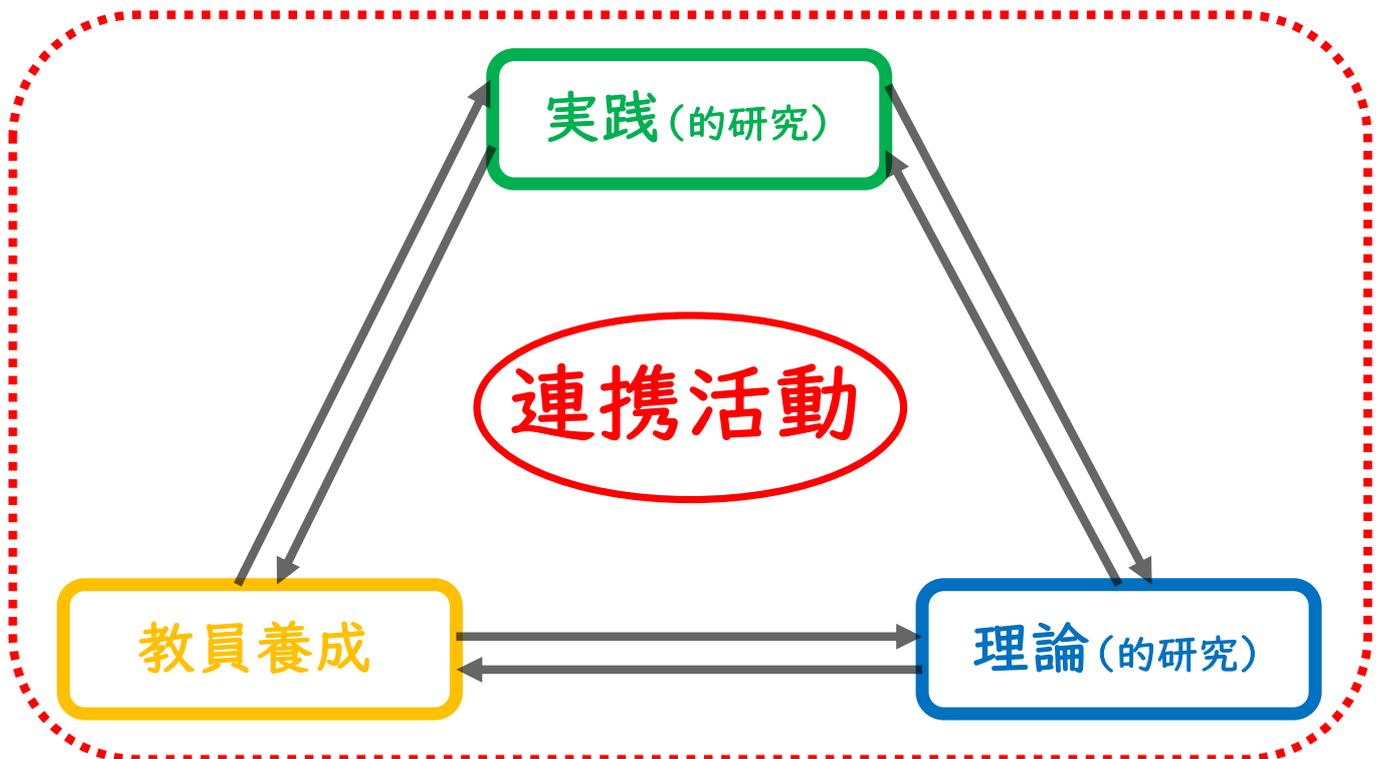
2023.11.30  
教職大学院 実習成果報告会





エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと一緒に付けて具体的に想像すること。

57



58

# 第4部

## 学生アンケート



# 学校連携委員会

## 取り組みの 成果と検証

### 教員採用率向上 の観点から

1

## I. 結果の概要

2

## I. 結果の概要

# 成果

連携活動に参加した後、ほとんどの学生は子どもたちへの接し方が変わり、教職への意欲が強くなった。

そして実際に現場の先生や子どもたちに関わることで、教職に興味・関心を持つようになり、教職を考える上で、意味があったと感じていた。

3

## I. 結果の概要

# 課題

1. 連携活動の際には、時間に関することについて何らかの意識付けを行うことが課題となります。

2. アンケートの実施方法を改善する必要があると考えられる。

回答率は6割程度と推定されるが、全体的な回答傾向にほとんど差がないように推定される。

もしかしたら、回答していない学生の方に何らかの重要な情報が眠っている可能性がある。それをマイニングすることが次回以降の課題となる。

4

## II. 結果の詳細

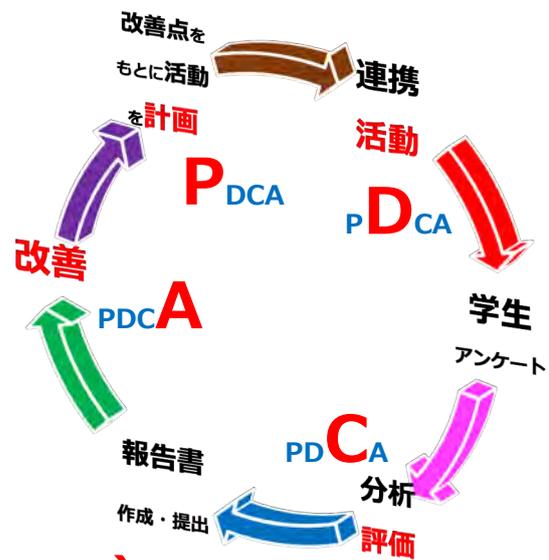
5

### II-1. 検証方法

6

**実施後**に  
学生アンケートを  
実施、

今年度の  
**成果の検証**を  
**定量的**  
**(数値・データに基づいて)**  
に行いました。



7

## II-2. 結果と分析

8

## 回収数

**83件**の有効回答を得た。

内訳は、  
**総回収数84件**  
(**欠損値を含む**  
**データ1件**)  
である。

**欠損値を含むデータ**は  
リストワイズした。

9

2023年度の  
参加延べ人数は、  
**197名**であった。

実際は学生が  
複数の連携活動に  
参加しているため、

連携活動に関わった  
実際の参加者数は  
わからない。

10

それを踏まえた上で、  
回答率の推定を  
試みるなら

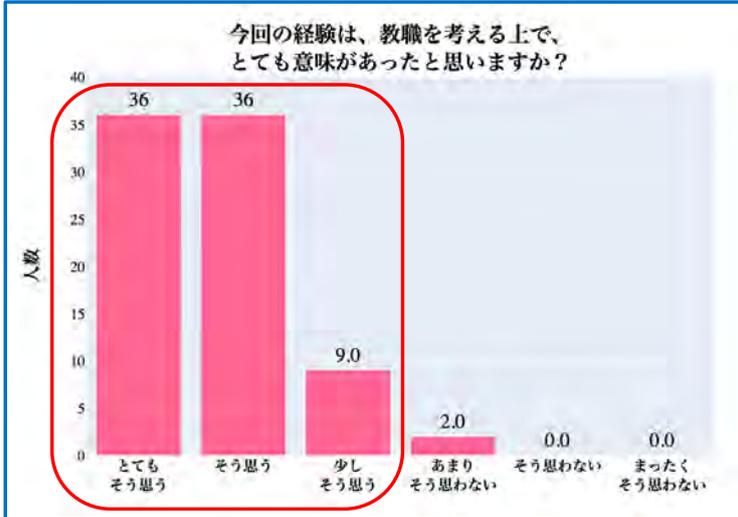
参加延べ人数を  
考慮した  
有効回答数は、  
**121**件相当と  
推定され

それに基づいた  
回答率を  
算出するとすれば  
**61.4%**相当と  
推定される。

11

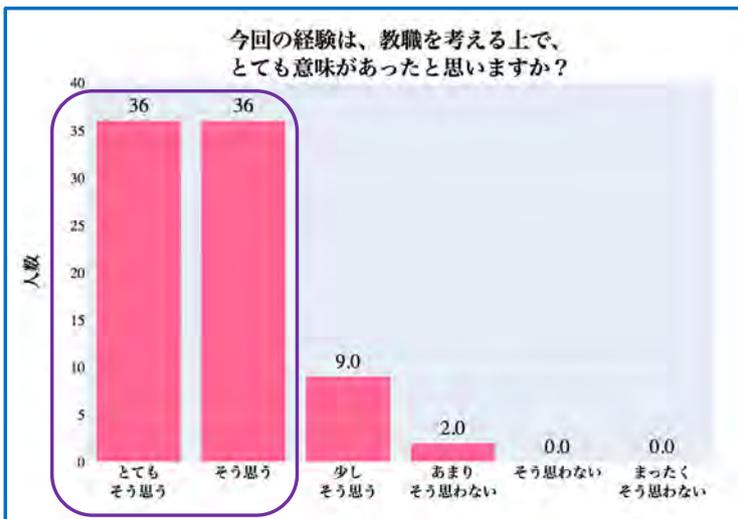
## Ⅱ-3. 良かったこと

12



**97.6%**の  
学生が  
**今回の経験**  
(連携活動)は、  
**教職を考える上で、**  
**意味があったと**  
**感じていた！**

13



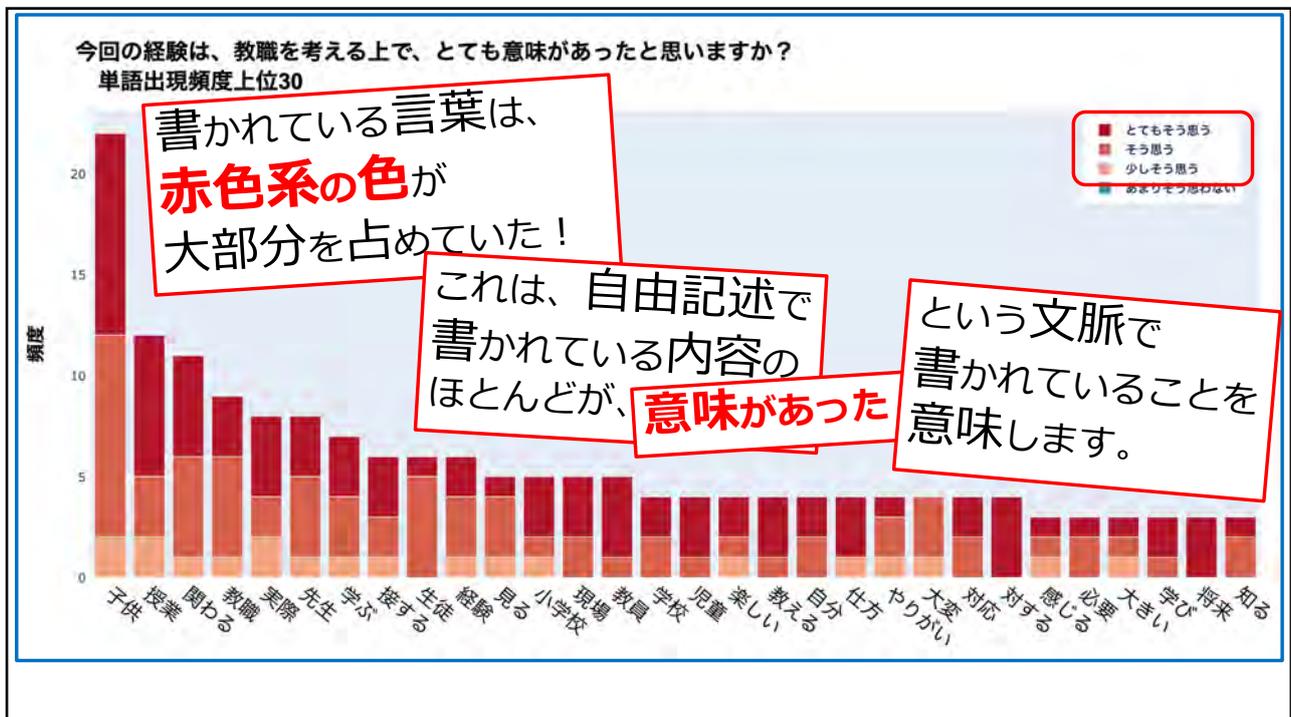
特に  
**86.7%**の  
学生が  
比較的強く  
**今回の経験は、**  
**教職を考える上で、**  
**とても意味があった**  
**と感じていた！**

14

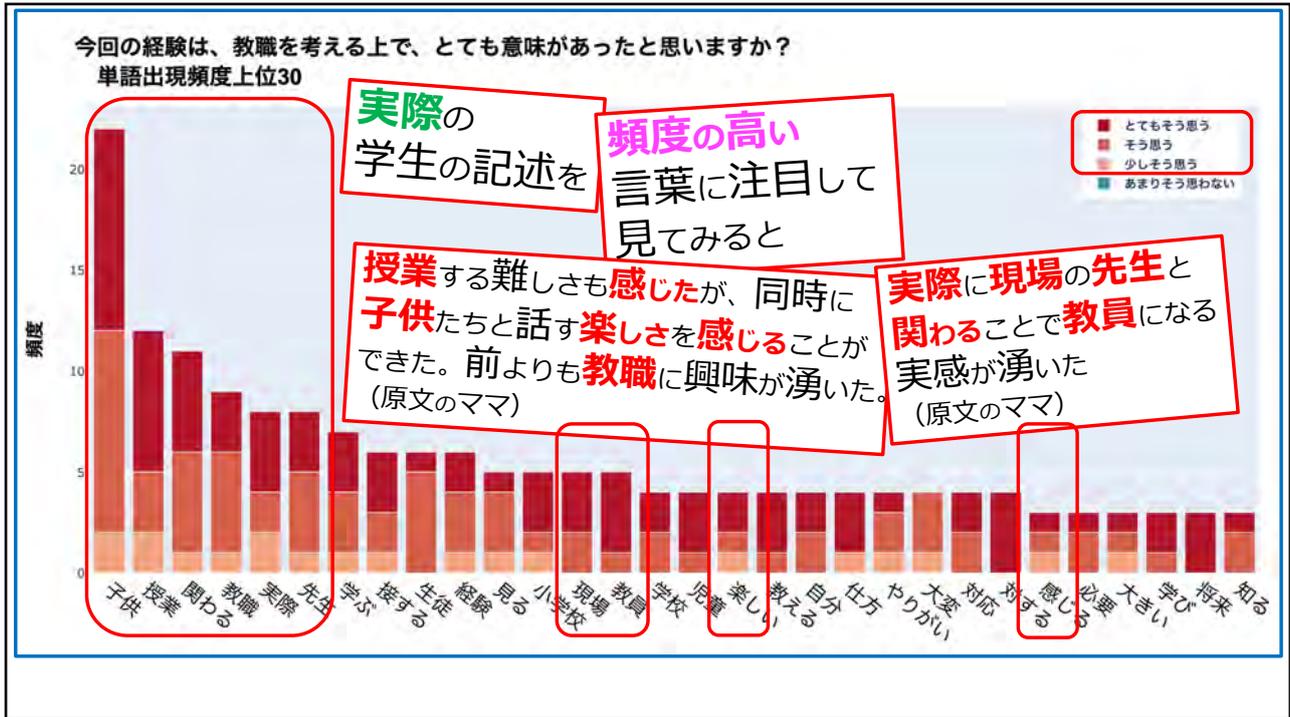
それを踏まえ、学生は  
 教職を考える上で  
 どのような  
**意味**を感じているか

について  
 書いてもらったところ

15



16



17

ほとんどの学生は  
**今回の経験**  
(連携活動)は、  
**教職を考える上で、**  
比較的強く  
**意味があったと**  
感じていて

**実際に現場の先生や**  
**子どもたちに関わることで、**  
**教職に興味・関心を**  
**持つようになった**

と実感していることが  
わかった！

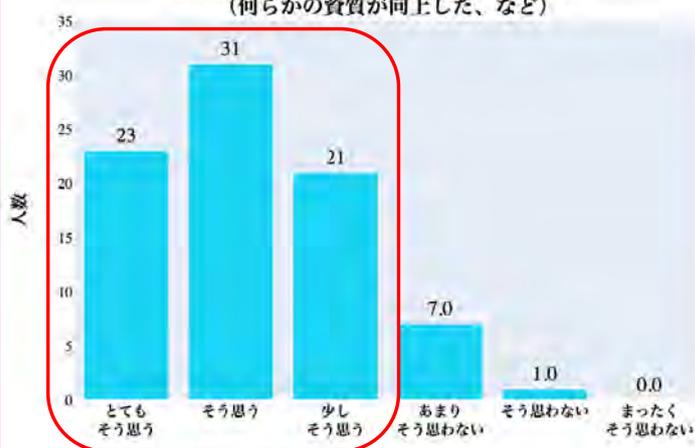
18

次に、  
**連携活動を  
行う前と後で、  
教職に対する考えが  
変わったか**

については

19

連携活動を行う前と後で、  
教職に対する考えが変わったと思いますか？  
(何らかの資質が向上した、など)



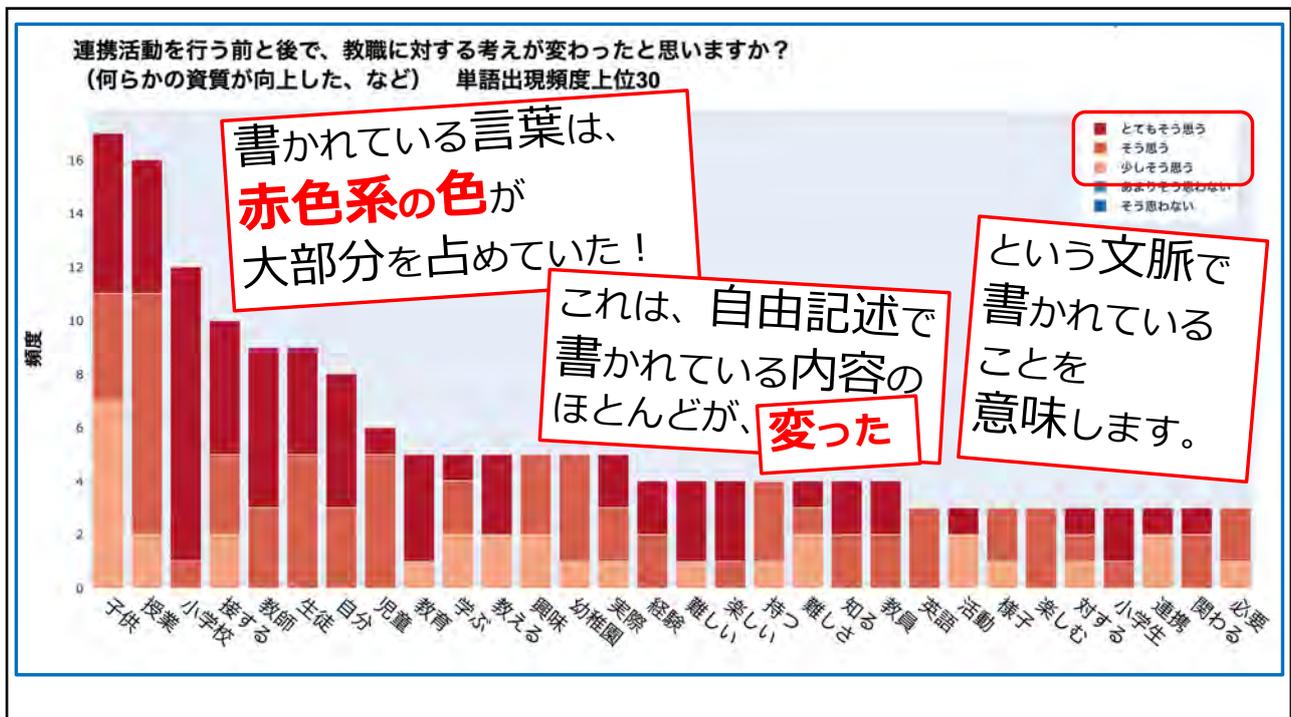
**90.4%**の  
学生が  
**連携活動を  
行う前と後で、  
教職に対する考えが  
変わった  
と感じていた！**

20

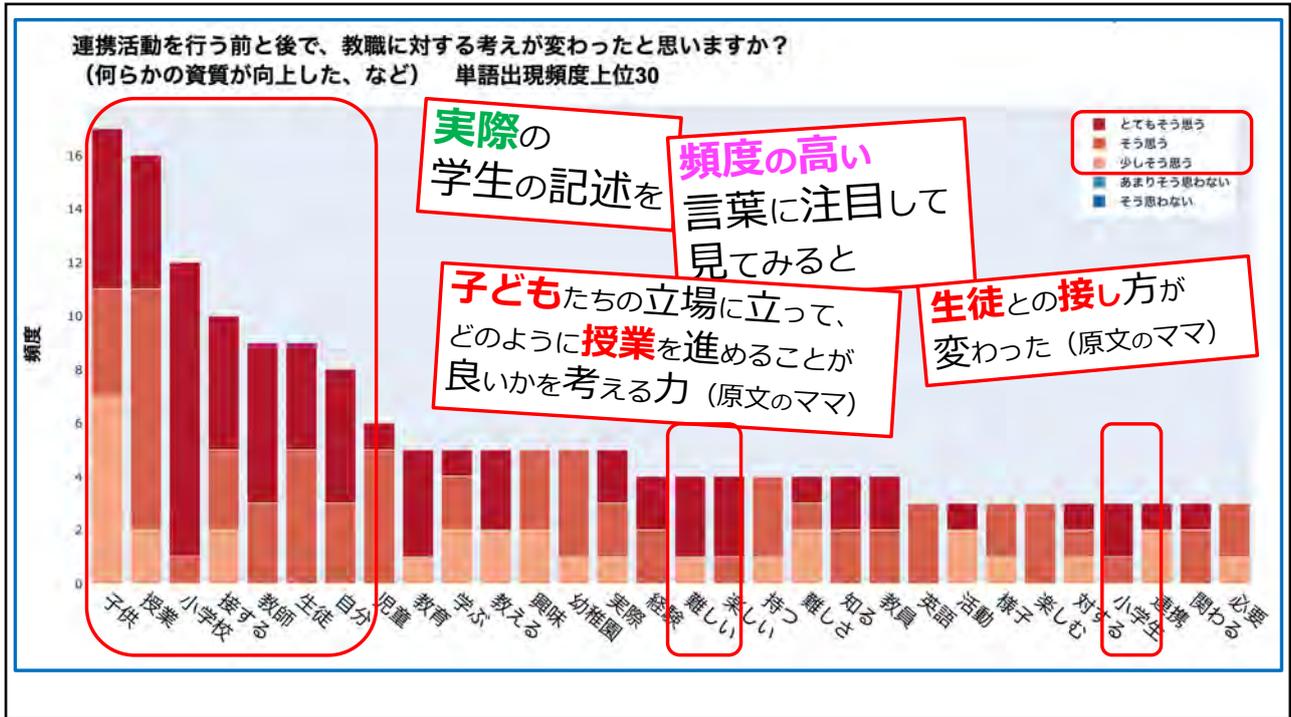
具体的に、  
教職に対する考えが  
どのように  
変化したか

について  
書いてもらったところ

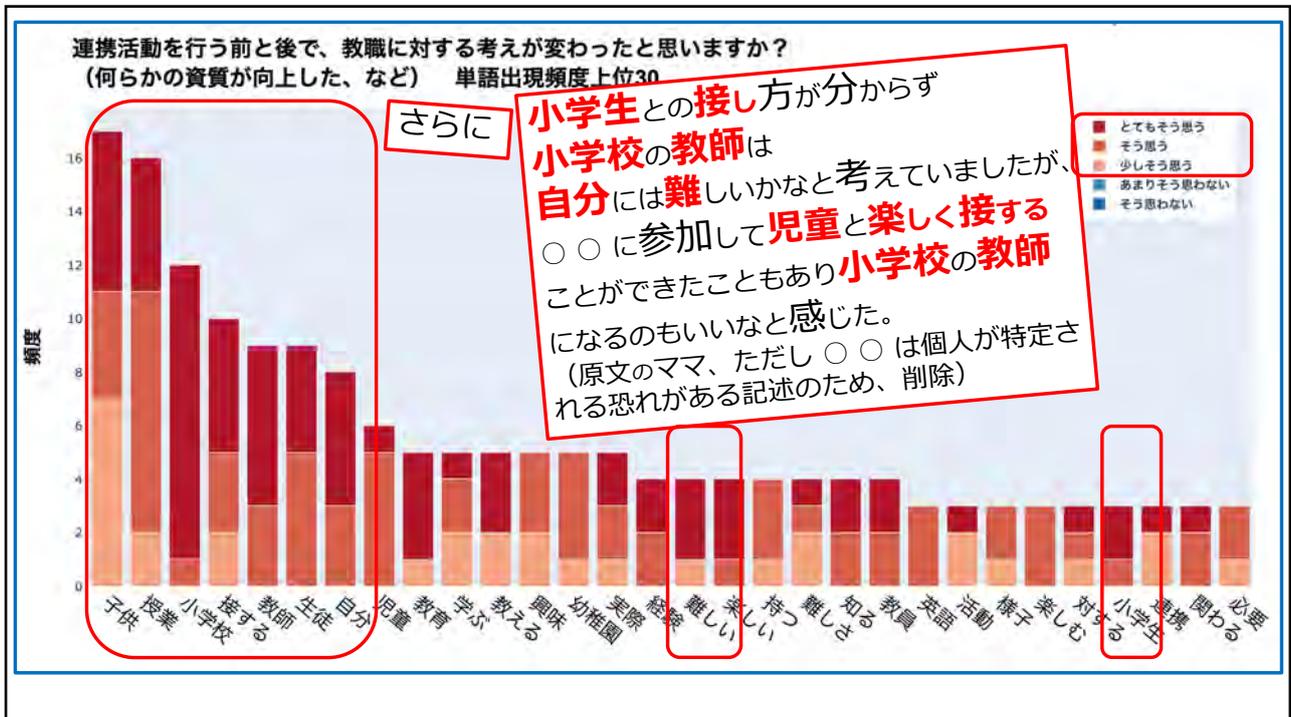
21



22



23



24

ほとんどの学生は  
**連携活動を行う**  
前と後で、  
**教職に対する考えが**  
変わったと  
感じていて

**子どもたちへの接し方が**  
変わり、それによって  
**教職への意欲が**  
強くなった

と実感していることが  
わかった！

25

さらに、  
**来年度も連携活動に**  
**参加して**  
**みたいですか？**

について  
答えてもらおうと

26



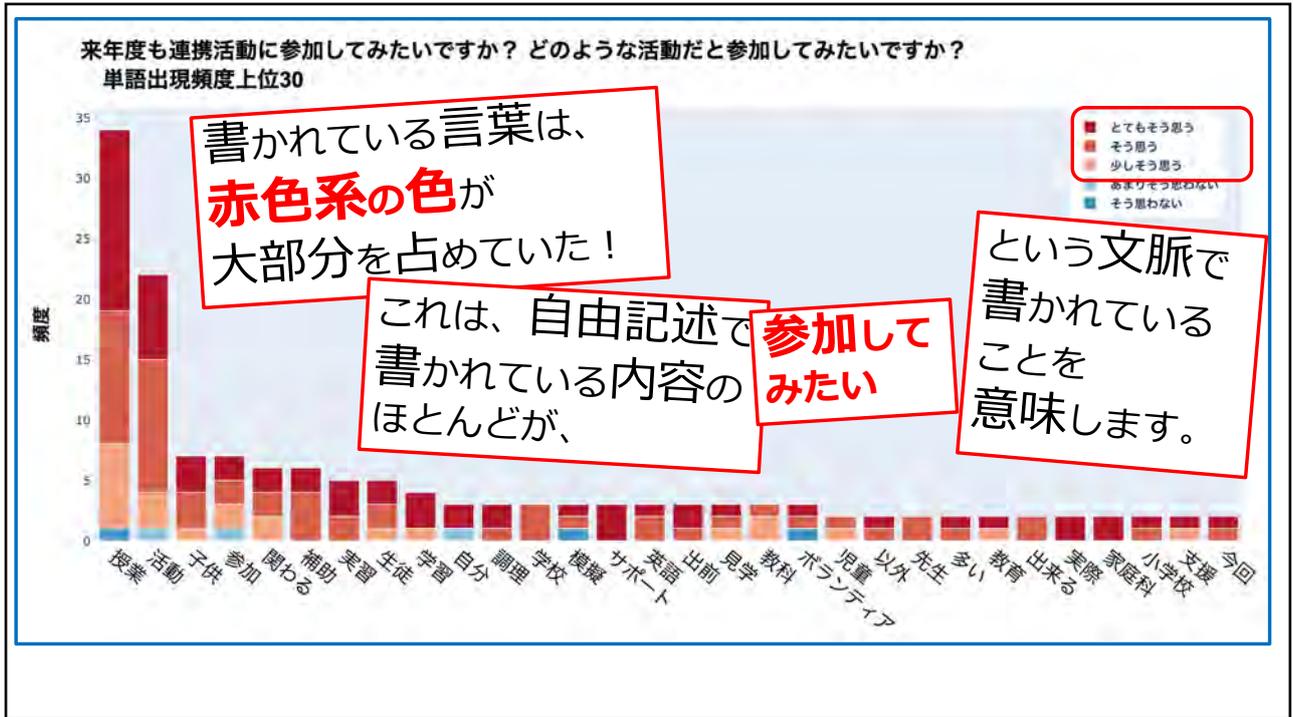
**92.8%**の  
学生が  
来年度も  
連携活動に  
参加してみたい  
と**感じていた！**

27

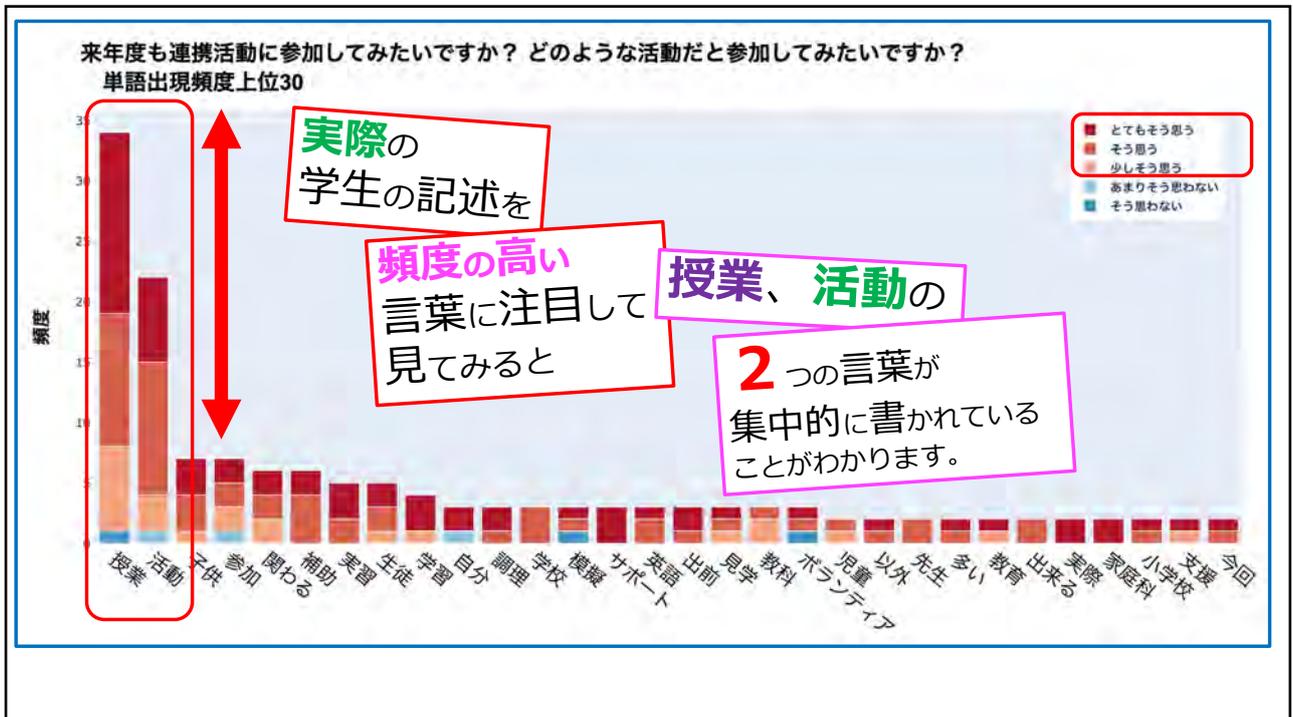
具体的に、  
どのような活動だと  
参加してみたいか

について  
書いてもらったところ

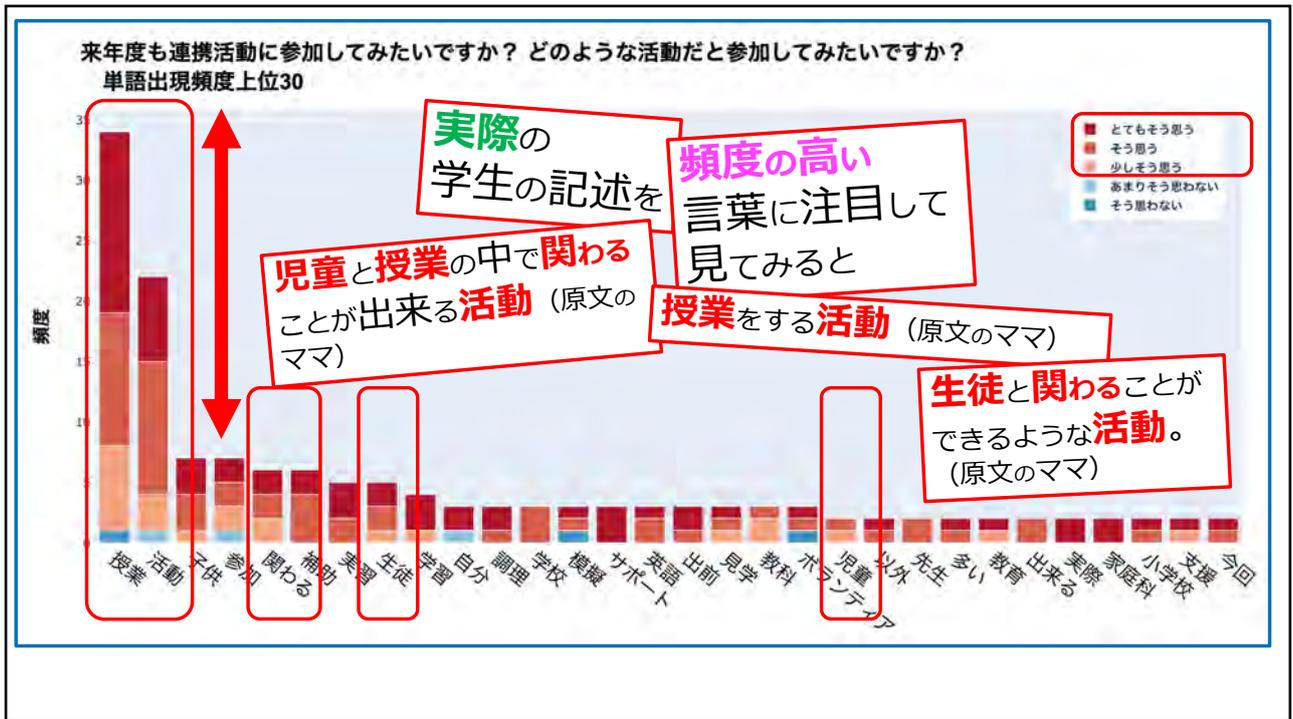
28



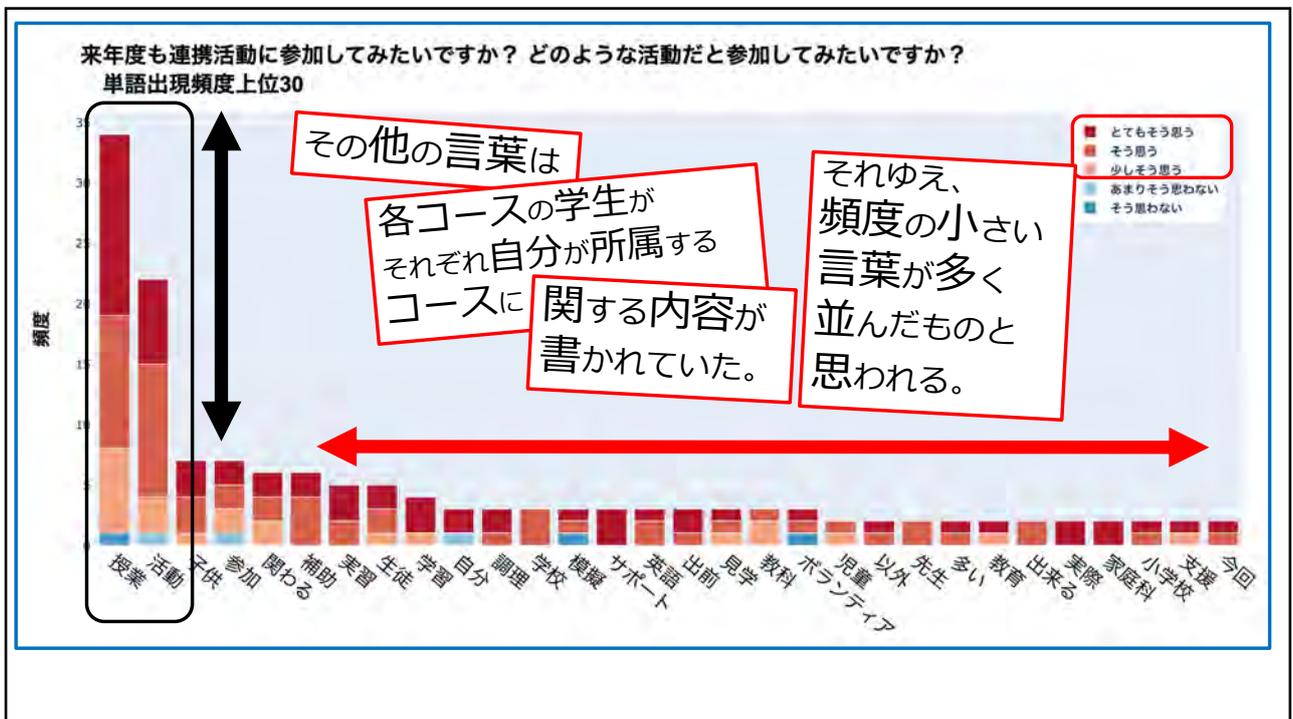
29



30



31



32

ほとんどの学生は  
来年度も  
連携活動に  
参加してみたいと  
感じていて

児童や生徒と  
授業などで  
関わる活動

を希望していることが  
わかった！

33

## Ⅱ-4. 良くなかった こと

34

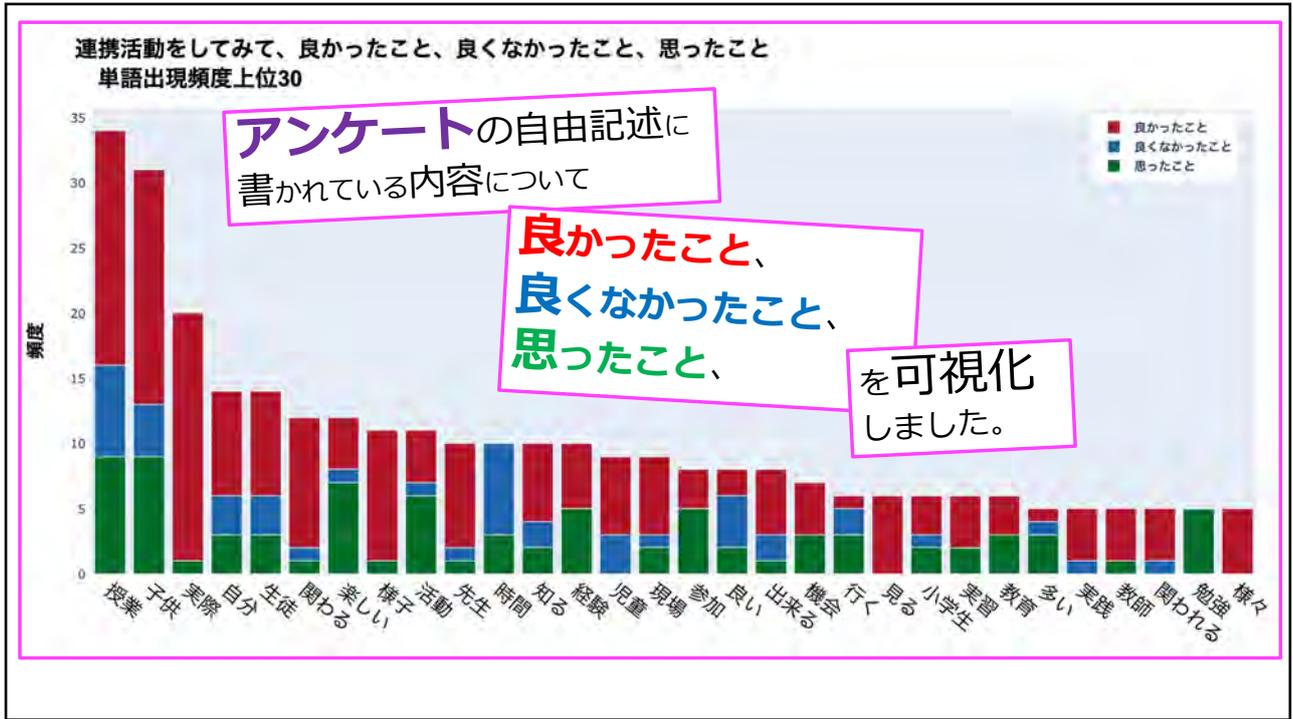
次に、  
今回の取り組みの  
**課題**について  
見ていきます。

35

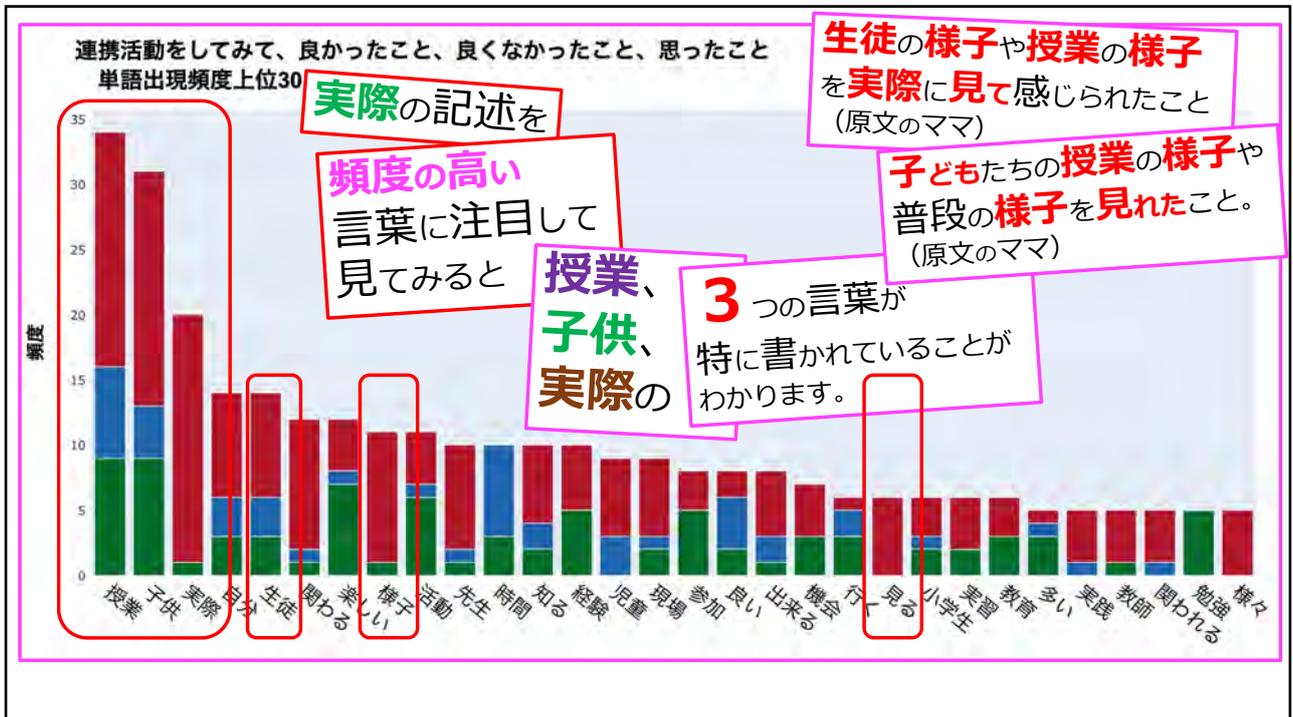
連携活動をしてみて、  
**良かったこと**、  
良くなかったこと、  
**思ったこと**、

について  
書いてもらい

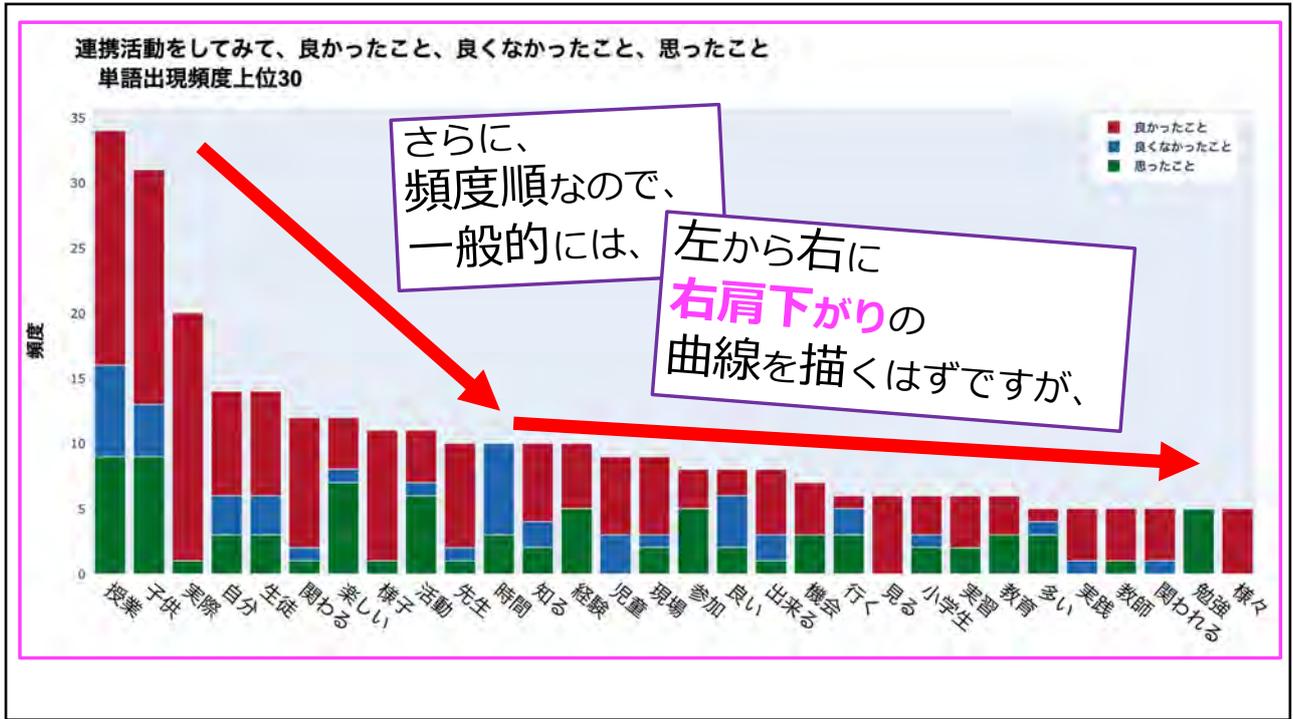
36



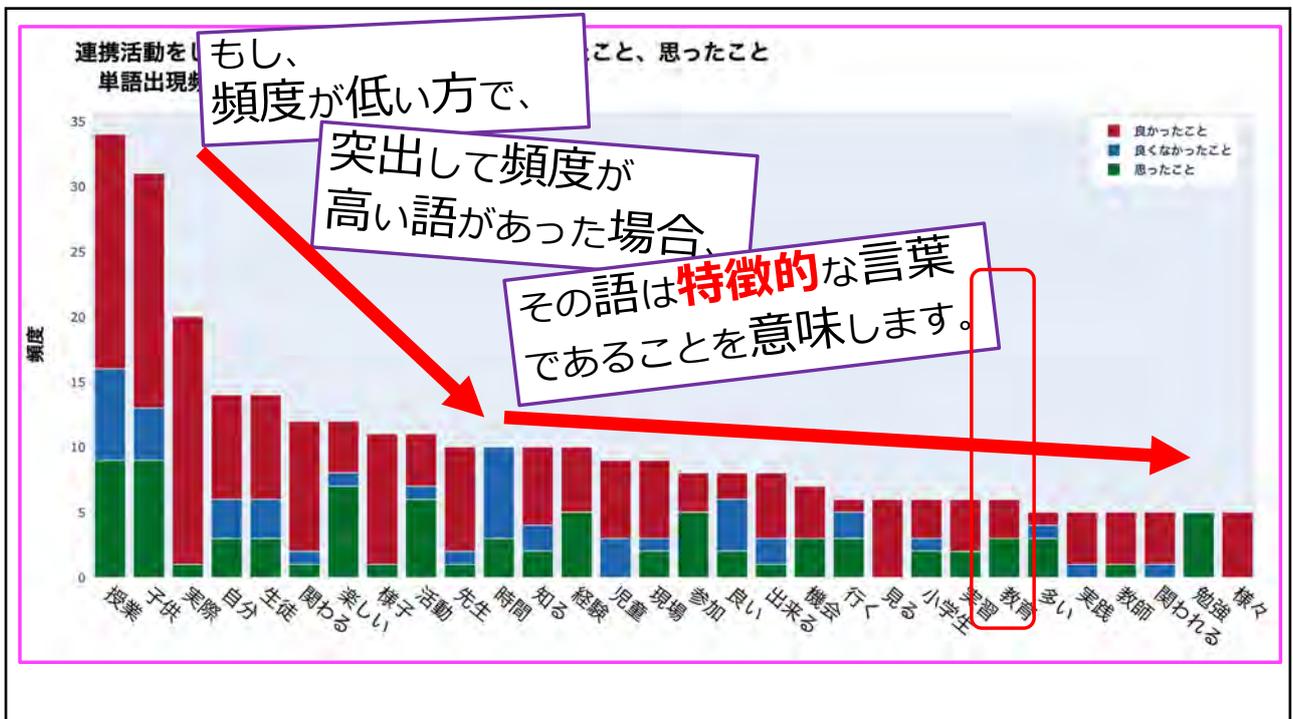
37



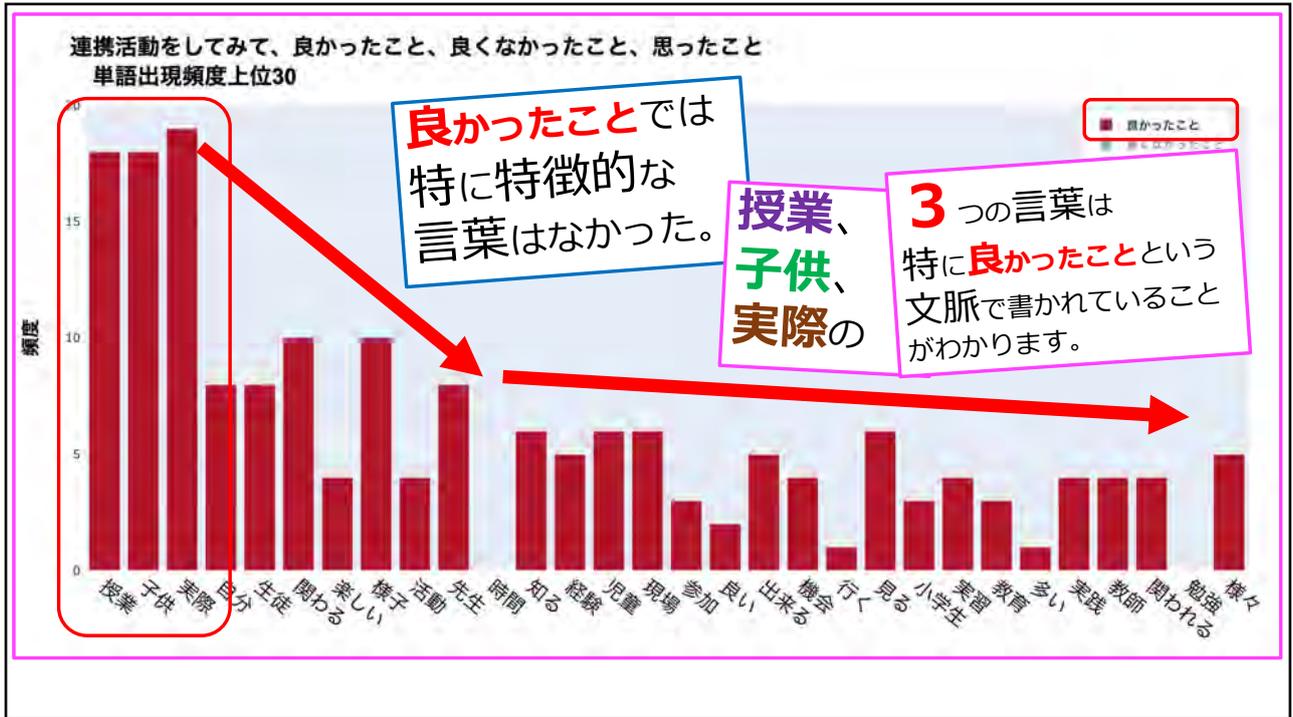
38



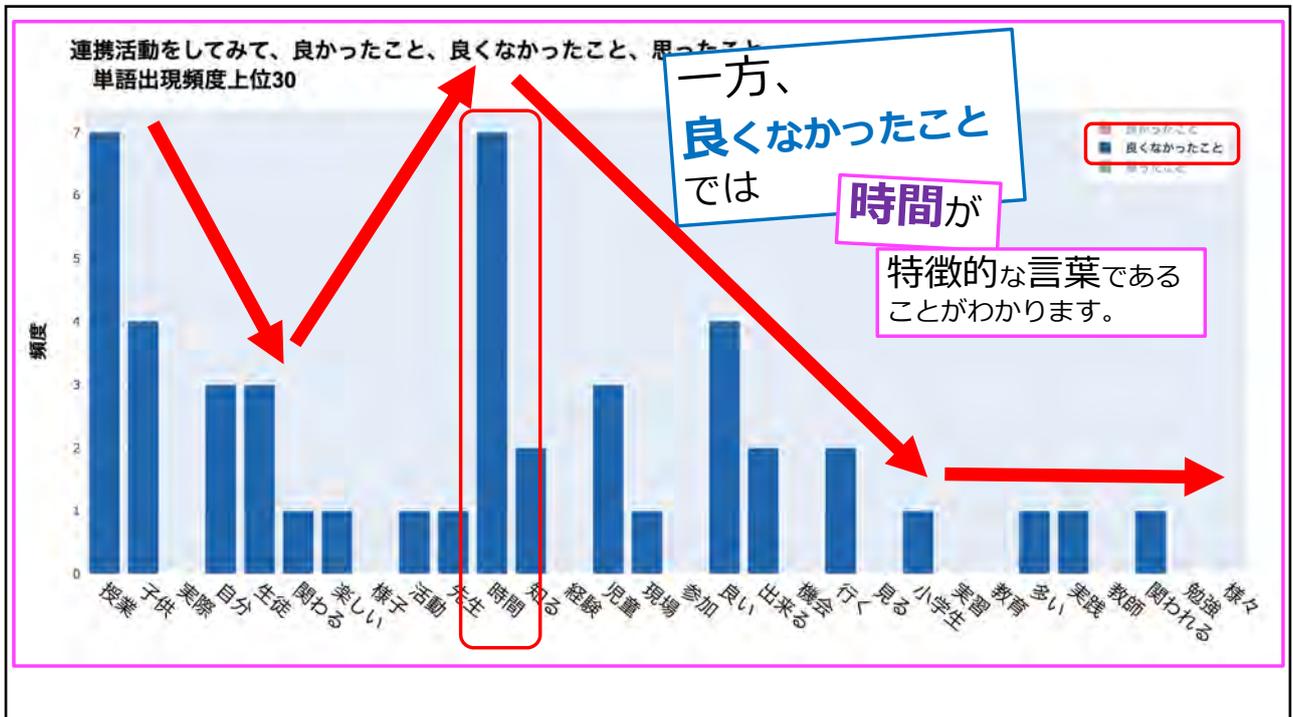
39



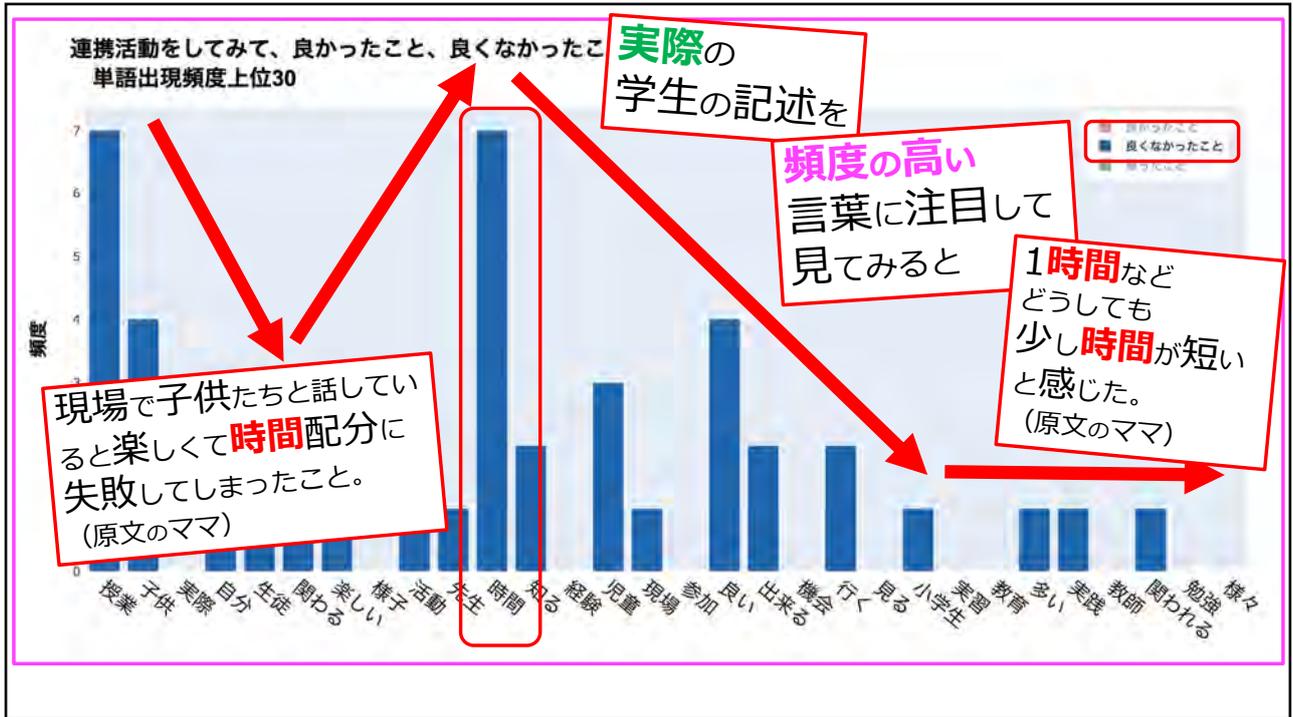
40



41



42



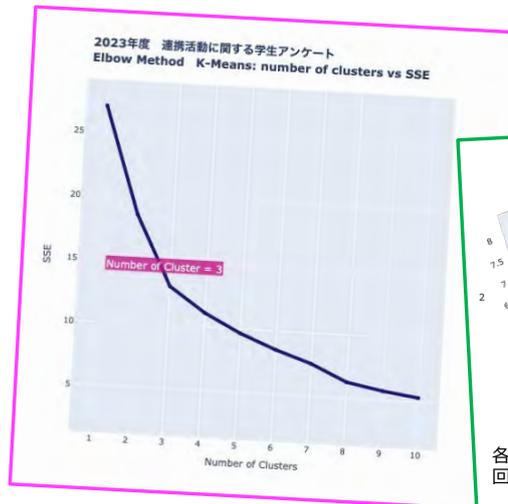
43

時間が足りないなど  
時間にまつわるものが  
良くなかったこととして  
挙げられていた。

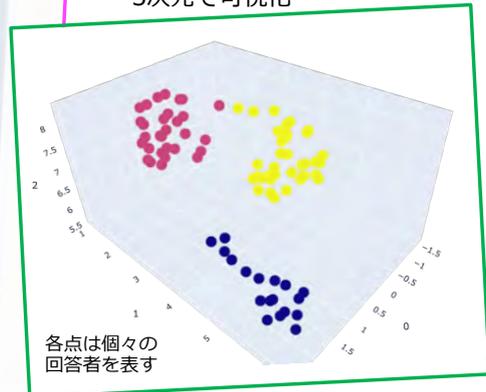
44

また 回答者の**回答内容**を  
**数値化**し  
 その**傾向**を見てみると

3つのグループに  
 分かれることが  
 わかった。



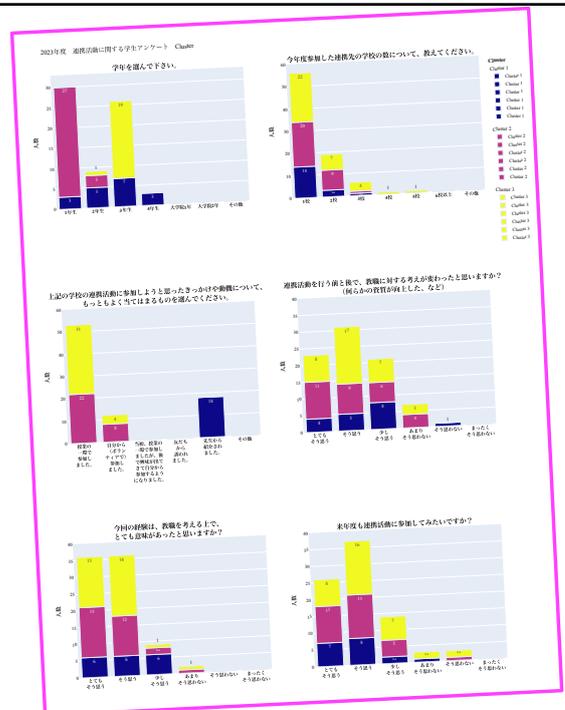
回答者の回答傾向を  
 3次元で可視化



45

その3つのグループが  
 どのような性質の  
 グループなのか  
 確認するため

積み上げバーチャート  
 で可視化した。

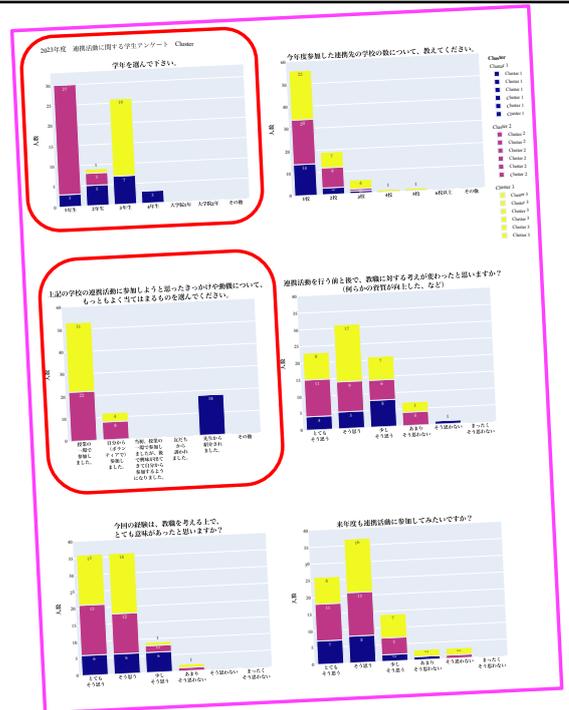


46

このうち  
何らかの特徴が  
確認できたのは

「**学年を選んで下さい**」  
「**上記の学校の連携活動に参加しようと思ったきっかけや動機について、もっともよく当てはまるものを選んでください**」

だけであった。

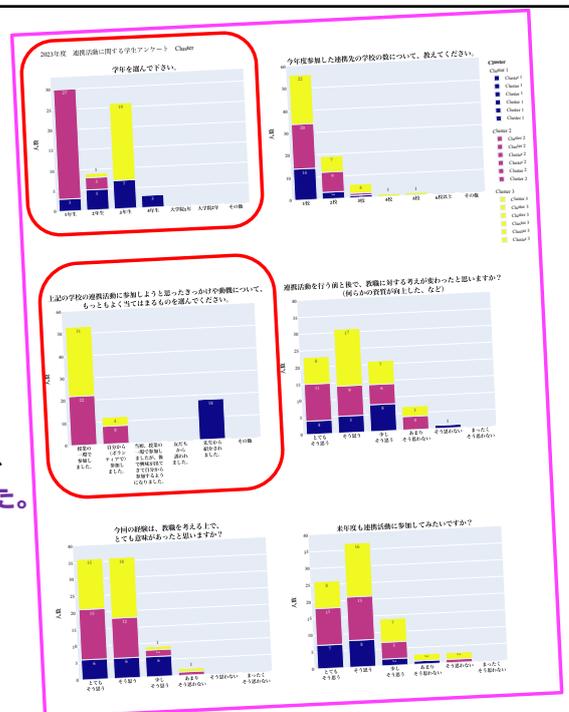


47

これを踏まえ、  
**学年による違いや**  
**きっかけや動機について、**  
確認をしたが、  
特に大きな知見は  
得られなかった。

さらに、それ以外のどの質問にも  
**それぞれのグループに属する学生が存在するため、**  
その他の**際立った特徴を見つけることができなかった。**

ここから、そもそも**回答者全員が**  
**ほぼ似たような**  
**回答をしているのではないが、**  
という**可能性が浮上してくる。**



48

したがって

回答率は**6割**程度と推定されるが、  
全体的な**回答傾向**に  
ほとんど**差がない**ように推定されるが、

これは**極めて特異**なことであり、もしかしたら、

**回答していない学生の方に**  
**何らかの重要な情報が眠っている**  
**可能性がある**と推測される。

それを**マイニング**することが  
次回以降の課題となるだろう。

ゆえに  
**アンケートの実施方法を**  
**改善する必要がある**  
と考えられる。

49

## II-5. 次年度以降の 取り組みに 向けて

50

連携活動は **教員志望の意識づけ・  
動機づけ**の観点から

**成果があったことが  
確認できた。**

**ゆえに、  
このまま継続して  
行っていく** ことが重要であると思われ  
ます。

51

加えて

連携活動の際には、  
**時間に関する**ことについて  
**何らかの意識付けを行う**ことが課題となります。

また、  
**検証の精度**を  
**上げる**ため

**アンケートの実施方法を  
改善する必要がある**  
と考えられます。

52

## Ⅱ-6. 補遺

53



54

<p>1. 学年を選んで下さい。 <input type="checkbox"/></p> <p><input type="radio"/> 1年生</p> <p><input type="radio"/> 2年生</p> <p><input type="radio"/> 3年生</p> <p><input type="radio"/> 4年生</p> <p><input type="radio"/> 大学院1年</p> <p><input type="radio"/> 大学院2年</p> <p><input type="radio"/> その他 <input type="text"/></p>	<p>2. 所属するコースを選んで下さい。 <input type="checkbox"/></p> <p><input type="radio"/> 国語教育コース</p> <p><input type="radio"/> 社会科教育コース</p> <p><input type="radio"/> 数学教育コース</p> <p><input type="radio"/> 理科教育コース</p> <p><input type="radio"/> 音楽教育コース</p> <p><input type="radio"/> 美術教育コース</p> <p><input type="radio"/> 保健体育コース</p> <p><input type="radio"/> 技術・ものづくり教育コース</p> <p><input type="radio"/> 情報教育コース</p> <p><input type="radio"/> 家政教育コース</p> <p><input type="radio"/> 英語教育コース</p> <p><input type="radio"/> 特別支援教育コース</p> <p><input type="radio"/> 幼児教育コース</p> <p><input type="radio"/> 学校教育コース</p> <p><input type="radio"/> 教職実践高度化（教職大学院）</p> <p><input type="radio"/> その他 <input type="text"/></p>	<p>3. 今年度参加した連携先の学校の数について、教えてください。 <input type="checkbox"/></p> <p><input type="radio"/> 1</p> <p><input type="radio"/> 2</p> <p><input type="radio"/> 3</p> <p><input type="radio"/> 4</p> <p><input type="radio"/> 5</p> <p><input type="radio"/> 6以上</p> <p><input type="radio"/> その他 <input type="text"/></p>
---	---	---

55

<p>4. 今年度参加した連携先の学校について、もっともよく参加した学校を、1つ教えてください。 <input type="checkbox"/></p> <p><input type="radio"/> 附属小学校</p> <p><input type="radio"/> 附属中学校</p> <p><input type="radio"/> 附属幼稚園</p> <p><input type="radio"/> 附属特別支援学校</p> <p><input type="radio"/> 南立誠幼稚園</p> <p><input type="radio"/> 栗真小学校</p> <p><input type="radio"/> 白塚小学校</p> <p><input type="radio"/> 一身田小学校</p> <p><input type="radio"/> 北立誠小学校</p> <p><input type="radio"/> 南立誠小学校</p> <p><input type="radio"/> 西が丘小学校</p> <p><input type="radio"/> 一身田中学校</p> <p><input type="radio"/> 樺北中学校</p> <p><input type="radio"/> その他 <input type="text"/></p>	<p>5. 上記の学校の連携活動に参加しようと思ったきっかけや動機について、もっともよく当てはまるものを選んでください。 <input type="checkbox"/></p> <p><input type="radio"/> 授業の一環で参加しました。</p> <p><input type="radio"/> 自分から（ボランティアで）参加しました。</p> <p><input type="radio"/> 当初、授業の一環で参加しましたが、後で興味が出てきて、自分から参加するようになりました。</p> <p><input type="radio"/> 友だちから誘われました。</p> <p><input type="radio"/> 先生から紹介されました。</p> <p><input type="radio"/> その他 <input type="text"/></p>
	<p>6. 連携活動を行う前と後で、教職に対する考えが変わったと思いますか？（何らかの資質が向上した、など） <input type="checkbox"/></p> <p><input type="radio"/> とても思う</p> <p><input type="radio"/> そう思う</p> <p><input type="radio"/> 少し思う</p> <p><input type="radio"/> あまりそう思わない</p> <p><input type="radio"/> そう思わない</p> <p><input type="radio"/> まったくそう思わない</p>
	<p>7. 具体的にそれは何ですか。 <input type="checkbox"/></p> <p><input type="text"/></p>

56

8. 今回の経験は、教職を考える上で、とても意味があったと思いますか？

とてもそう思う

そう思う

少しそう思う

あまりそう思わない

そう思わない

まったくそう思わない

9. 具体的にそれは何ですか？

回答を入力してください

10. 来年度も連携活動に参加してみたいですか？  
(卒業年次生の場合、自分が1～3年生だと仮定して「参加してみたいと思いますか？」)

とてもそう思う

そう思う

少しそう思う

あまりそう思わない

そう思わない

まったくそう思わない

11. どのような活動だと参加してみたいですか？

回答を入力してください

12. 連携活動をしてみて、良かったことを書いて下さい。

回答を入力してください

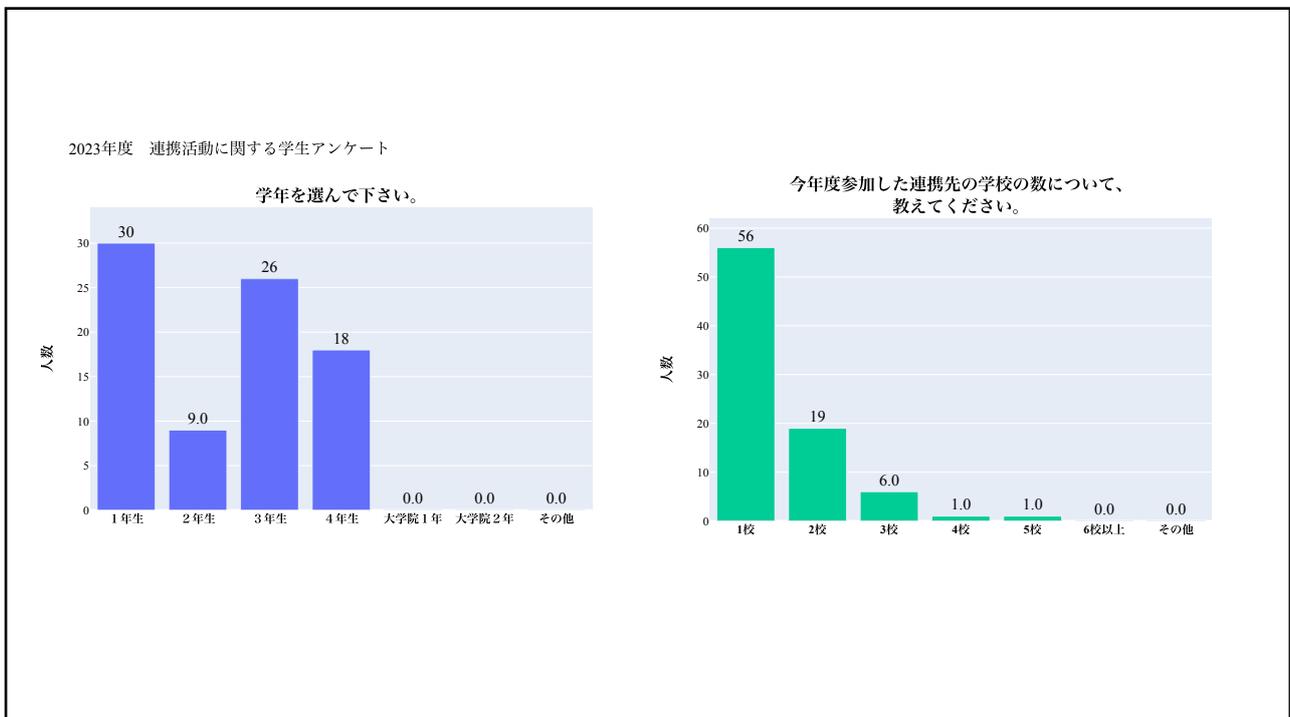
13. 連携活動をしてみて、良くなかったことを書いて下さい。

回答を入力してください

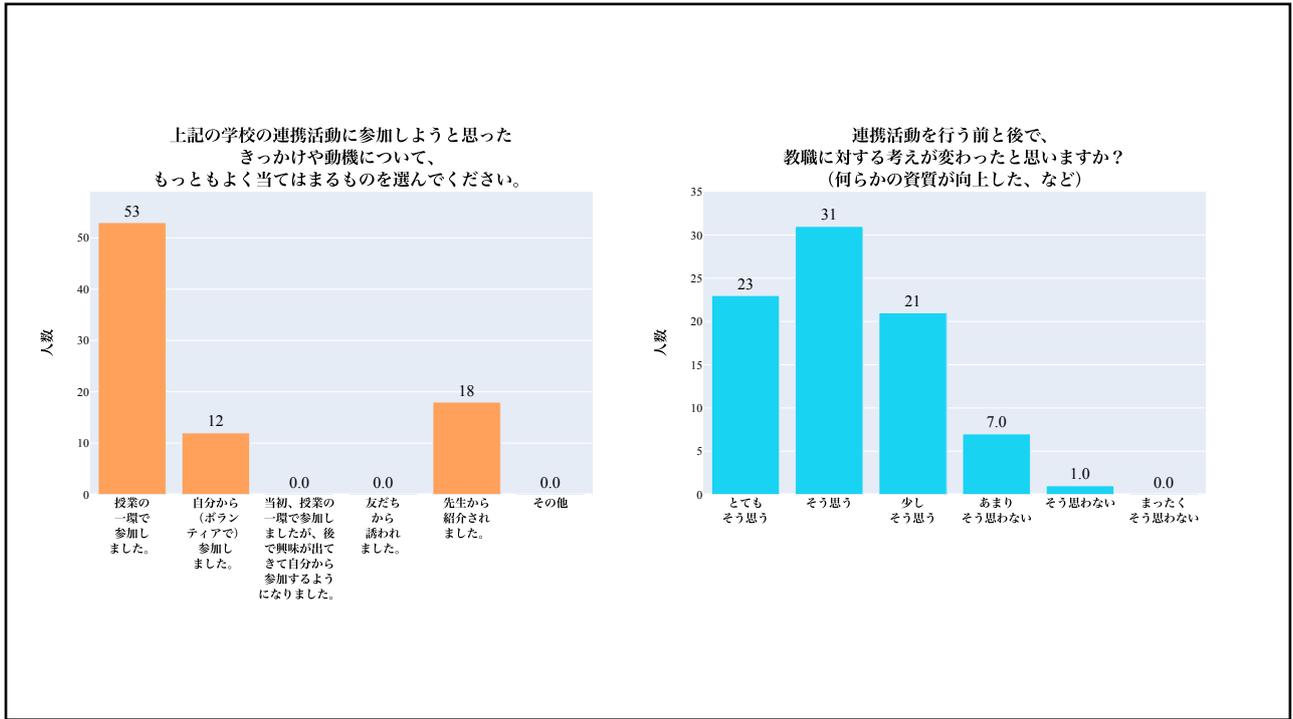
14. 思ったことを自由に書いて下さい。

回答を入力してください

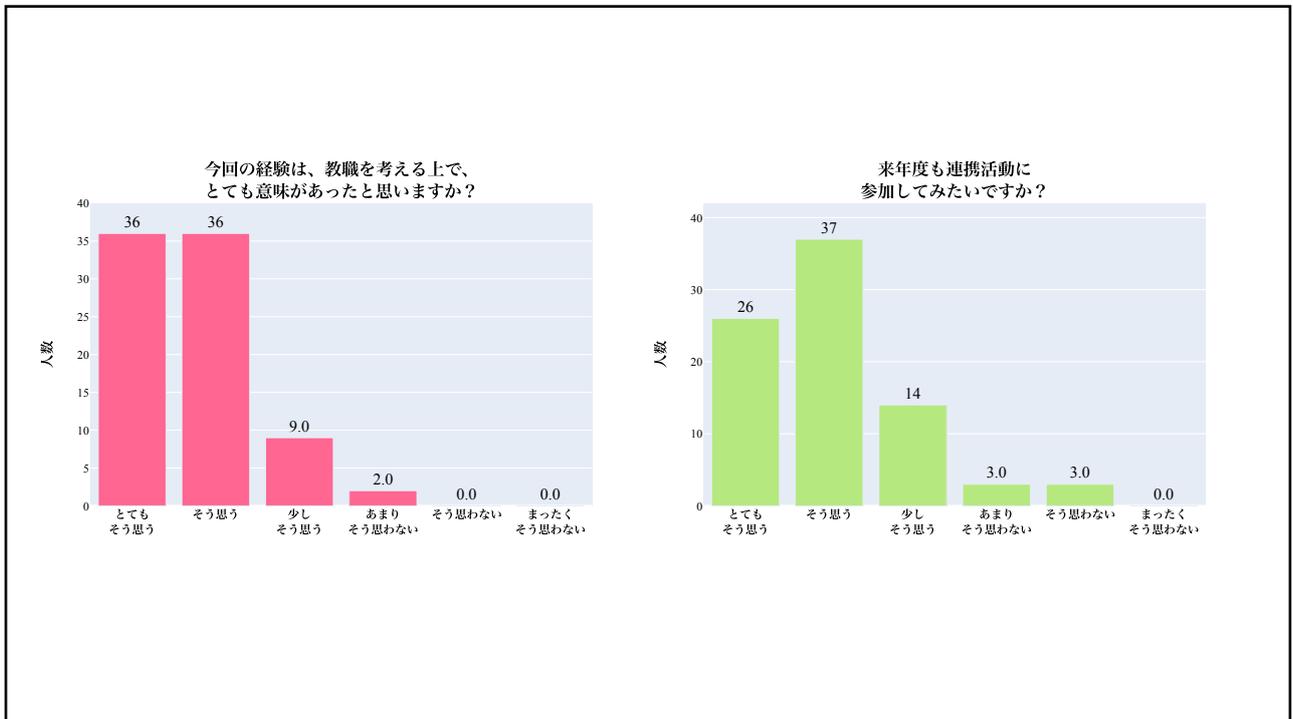
57



58



59



60

## 連携活動用 備品リスト

学校連携活動にて貸出可能となっている備品を掲載いたします。

いずれも数に限りがございますので、ご使用の際には

総合支援室分室の担当者（[gakushu-support@edu.mie-u.ac.jp](mailto:gakushu-support@edu.mie-u.ac.jp)）まで

事前にご連絡いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

また、年数が経過しているものもあり、事前の動作確認も必要なため  
お早めの申し出をよろしくお願い致します。

備品	保有台数
プロジェクター	3台
単焦点プロジェクター	1台
デジタルカメラ	14台
デジタルビデオ	9台
三脚	6台
マイクスピーカー	1式
拡張マイク	2台
ボイスレコーダー	4台
Webカメラ	4台
ポケットWi-Fi	1台
ヘッドセット	3個

## 令和5年度 学校連携活動 担当メンバー

### 三重大学教育学部学校連携推進委員会

金子 淳 (英語教育講座) 委員長  
瀬戸 美奈子 (学校教育講座) 副委員長  
守田 庸一 (国語教育講座) 運営委員  
栗原 行人 (理科教育講座)  
小畑 真梨子 (音楽教育講座)  
山田 志穂 (連携事務)

### 一身田・橋北校区連携校園

山田 奈実 (一身田中学校)  
伊藤 浩 (一身田小学校)  
高橋 春佳 (栗真小学校)  
林 裕子 (栗真小学校)  
菅原 充裕 (白塚小学校)  
岡野 裕花 (橋北中学校)  
田中 憲希 (南立誠小学校)  
須田 順也 (北立誠小学校)  
谷中 愛梨 (北立誠小学校)  
仲 仁司 (西が丘小学校)  
前川 佳織 (南立誠幼稚園)

### 附属学校園

湯田 綾乃 (附属幼稚園)  
前田 昌志 (附属小学校)  
高橋 宜記 (附属小学校)  
竹内 慎一郎 (附属中学校)  
中村 幸友子 (附属中学校)  
西川 一樹 (附属特別支援学校)  
三浦 晶子 (附属特別支援学校)

令和5年度 三重大学教育学部学校連携活動報告書

2024年3月発行

編集：三重大学教育学部 学校連携推進委員会

発行：三重大学教育学部

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577